静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第13集

大谷川 III

(遺物編)

巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡)3

本文編

1988

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第13集

大　谷　川　III

（遺物編）

巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書（神明原・元宮川遺跡）3

本文編

1988

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

神明原・元宮川遺跡は、弥生時代から奈良時代にかけての低湿地における集落遺跡として知られ、周辺には登呂遺跡・有東遺跡・汐入遺跡などの著名な集落遺跡のほか、宮川古墳群・伊庄谷横穴群、上の山遺跡などの古墳群もみられ、この地の中心的な遺跡の一つと考えられていた。昭和55・56年度には、静岡市教育委員会による大谷川河川改修事業関連の調査が実施されて遺跡の性格の一端が明らかにされたのであった。

この遺跡の成果をうけて、昭和58年度～60年度の３ケ年をかけて現地調査を実施し、昭和61年度より資料整理作業を継続している。その調査の成果はめざましく古代の大谷川の流路から人形・馬形木製品・斎串・ト骨やおびただしい数の土器など祭祀遺物が出土し、神明原・元宮川遺跡を流れる大谷川が古代の大規模な「水辺の祭」の場であったことが解明された。この事実は、今までの静岡平野における歴史認識に大きな変更を迫るものであり、今後静岡平野の歴史を構成する上で貴重な手がかりとなるであろう。そしてまた、日本の古代祭祀形態を考える上にも重要な資料をもたらすものであろう。

本報告書は、大谷川―神明原・元宮川遺跡の調査報告の「Ⅲ」であり、昭和58年度に刊行した「大谷川Ⅰ」・昭和61年度に刊行した「大谷川Ⅱ」に続くものである。主として、遺物のあり方に焦点をあて資料を紹介する。現地調査・資料整理の期間を通じて様々な問題が提起され、その解明のため努力をつづけてきた。本報告においてはまだまだ未解決の問題が多い。さらに努力していきたい。

なお、この調査に深い理解と協力をいただいた静岡県静岡土木事務所の方々に深い感謝の言葉をささげるものである。あわせて静岡県教育委員会の配慮に対して心から謝意を表するとともに、静岡県教育委員会の指導・助言に感謝するものである。終わりに本調査に従事し、その整理や報告書の執筆に力をあわせた所員の労苦に感謝したい。

昭和63年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

所　長　　斎　藤　　忠

例　　言

1. 本書は静岡市大谷地先に所在する神明原・元宮川遺跡の発掘調査報告書の第三分冊である。
2. 調査は「巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査業務」として静岡県静岡土木事務所の委託をうけて、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。なお、昭和58年度は財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所が実施し、昭和59年５月１日から財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が承継したものである。
3. 発掘調査体制は次の通りである。

昭和59年度　所長斎藤忠　常務理事（調査研究部長）池谷和三　調査研究１課長植松章八　主席調査研究員栗野克己　調査研究員成島仁　小嶋日出一

昭和60年度　所長斎藤忠　常務理事八代龍一　調査研究部長岡田恭順　調査研究１課長植松章八　主席調査研究員栗野克己　調査研究員森下春美　足立順司　矢田勝　鈴木基之　寺田甲子郎　成島仁　小嶋日出一

昭和61年度　所長斎藤忠　常務理事八代龍一　調査研究部長岡田恭順　調査研究１課長植松章八　調査研究員成島仁　矢田勝　寺田甲子郎

昭和62年度　所長斎藤忠　常務理事大石保夫　調査研究部長山下晃　主席調査研究員佐藤達雄　調査研究員森下春美　寺田甲子郎

4. 昭和62年度の資料整理は、佐藤達雄　森下春美　寺田甲子郎が中心となって実施し、調査研究員中山正典が協力した。
5. 本書は静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して執筆した。

佐藤　達雄　第Ⅰ章　第Ⅱ章第１節２　第２節　第Ⅲ章第１節１～６　第２節２　第４節　第Ⅳ章第２節３

森下　春美　第Ⅲ章第２節１　第４節　第Ⅳ章第１節　第Ⅴ章第１節

寺田甲子郎　第Ⅱ章第１節１　第３節　第Ⅲ章第１節７・８　第３節　第Ⅳ章第２節１・２　第Ⅴ章第２節

6. 遺物の写真は、中山が主として撮影した。木簡・墨書土器の赤外線カメラ撮影については森下が撮影し中山が補助した。なおカラー図版２葉は現地調査時に栗野克己が撮影したものである。
7. 木製品の樹種鑑定については山内文氏（元東京科学博物館）に依嘱している。また、動物遺存体については金子浩昌氏（早稲田大学）に依嘱している。詳細な報告は『大谷川Ⅳ』でまとめていただく予定であるが、その成果については一部本報告書に利用させていただいた。
8. 放射性炭素による年代測定については学習院大学に、花粉分析については㈱パリノ・サーヴェイに依頼した。その報告を付載１、付載２として本報告書に収録した。
9. 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たった。

目　　次

例言・凡例

序

第 Ⅰ 章　調査の方法 …… 1

第 Ⅱ 章　出土遺物の概要 …… 3

第1節　土器 …… 3

1　古墳時代前期 …… 3

2　古墳時代後期 …… 9

第2節　木製品 …… 16

第3節　土製品 …… 16

第 Ⅲ 章　各遺構出土の遺物 …… 17

第1節　宮川3区　ＳＸ 477～ＳＸ 484 …… 17

1　ＳＸ 477 …… 17

2　ＳＸ 478 …… 23

3　ＳＸ 479 …… 28

4　ＳＸ 480 …… 34

5　ＳＸ 481 …… 36

6　ＳＸ 482 …… 43

7　ＳＸ 483 …… 45

8　ＳＸ 484 …… 48

第2節　宮川4区　ＳＲ55・ＳＲ56 …… 49

1　ＳＲ55 …… 49

2　ＳＲ56 …… 54

第3節　宮川6区　ＳＲ 312・ＳＲ 313 …… 73

1　ＳＲ 312 …… 73

2　ＳＲ 313 …… 89

第4節　水上7区　ＳＲ 810・ＳＲ 811・ＳＲ 812 …… 115

1　ＳＲ 810 …… 115

2　ＳＲ 811 …… 120

3　ＳＲ 812 …… 121

第 IV 章　主要遺物 …… 127
第 1 節　文字資料 …… 127
1　木簡・絵馬 …… 127
2　墨書土器ほか …… 140
第 2 節　祭祀関係遺物 …… 155
1　人形土製品 …… 155
2　馬形土製品 …… 166
3　馬形木製品 …… 185

第 V 章　考　察 …… 192
第 1 節　神明原元宮川遺跡出土の文字資料 …… 192
第 2 節　人形土製品について …… 204

付載 1　炭化物のＣ14年代測定について …… 210
付載 2　花粉分析について …… 212

お わ り に …… 224

挿 図 目 次

第 1 図　古墳時代土器編年図 1 …… 6
第 2 図　古墳時代土器編年図 2 …… 7
第 3 図　須恵器編年図 …… 11
第 4 図　古墳時代土器編年図 3 …… 14
第 5 図　宮川 3 区ＳＸ 477 出土土器実測図 1 …… 19
第 6 図　宮川 3 区ＳＸ 477 出土土器実測図 2 …… 20
第 7 図　宮川 3 区ＳＸ 477 出土土器実測図 3 …… 21
第 8 図　宮川 3 区ＳＸ 477 出土土器実測図 4 …… 22
第 9 図　宮川 3 区ＳＸ 478 出土土器実測図 1 …… 24
第 10 図　宮川 3 区ＳＸ 478 出土土器実測図 2 …… 25
第 11 図　宮川 3 区ＳＸ 478 出土土器実測図 3 …… 26
第 12 図　宮川 3 区ＳＸ 478 出土土器実測図 4 …… 27
第 13 図　宮川 3 区ＳＸ 479 出土土器実測図 1 …… 30
第 14 図　宮川 3 区ＳＸ 479 出土土器実測図 2 …… 31
第 15 図　宮川 3 区ＳＸ 479 出土土器実測図 3 …… 32
第 16 図　宮川 3 区ＳＸ 479 出土土製品実測図 …… 33
第 17 図　宮川 3 区ＳＸ 480 出土土器実測図 …… 35
第 18 図　宮川 3 区ＳＸ 481 出土土器実測図 1 …… 37
第 19 図　宮川 3 区ＳＸ 481 出土土器実測図 2 …… 38
第 20 図　宮川 3 区ＳＸ 481 出土土器実測図 3 …… 39
第 21 図　宮川 3 区ＳＸ 481 出土土器実測図 4 …… 40
第 22 図　宮川 3 区ＳＸ 481 出土土器実測図 5 …… 41
第 23 図　宮川 3 区ＳＸ 481 出土土器実測図 6 …… 42
第 24 図　宮川 3 区ＳＸ 482 出土土器実測図 …… 44
第 25 図　宮川 3 区ＳＸ 483 出土土器実測図 1 …… 46
第 26 図　宮川 3 区ＳＸ 483 出土土器実測図 2 …… 47
第 27 図　宮川 3 区ＳＸ 484 出土土器実測図 …… 48
第 28 図　宮川 4 区ＳＲ 55 出土土器実測図 1 …… 51
第 29 図　宮川 4 区ＳＲ 55 出土土器実測図 2 …… 52
第 30 図　宮川 4 区ＳＲ 55 出土土器実測図 3 …… 53
第 31 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土土器実測図 1（須恵器編年図）…… 56
第 32 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土土器実測図 2 …… 57

第 33 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土土器実測図 3 …… 58
第 34 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土土器実測図 4 …… 59
第 35 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土土器実測図 5 …… 60
第 36 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土土器実測図 6 …… 61
第 37 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土土器実測図 7 …… 62
第 38 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土木製品実測図 1 …… 64
第 39 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土木製品実測図 2 …… 65
第 40 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土木製品実測図 3 …… 66
第 41 図　宮川 4 区ＳＲ 56 出土土製品実測図 …… 71
第 42 図　宮川 6 区ＳＲ 312 出土土器実測図 1 …… 75
第 43 図　宮川 6 区ＳＲ 312 出土土器実測図 2 …… 76
第 44 図　宮川 6 区ＳＲ 312 出土土器実測図 3 …… 77
第 45 図　宮川 6 区ＳＲ 312 出土木製品実測図 …… 79
第 46 図　宮川 6 区ＳＲ 312 出土土製品実測図 1　人形土製品 …… 82
第 47 図　宮川 6 区ＳＲ 312 出土土製品実測図 2　人形土製品 …… 83
第 48 図　宮川 6 区ＳＲ 312 出土土製品実測図 3　動物形土製品 …… 86
第 49 図　宮川 6 区ＳＲ 312 出土土製品実測図 4　動物形土製品・手捏土器 …… 87
第 50 図　宮川 6 区ＳＲ 313 上層出土土器実測図 1 …… 93
第 51 図　宮川 6 区ＳＲ 313 上層出土土器実測図 2 …… 94
第 52 図　宮川 6 区ＳＲ 313 下層出土土器実測図 …… 95
第 53 図　宮川 6 区ＳＲ 313 下層（河床面）出土土器実測図 1 …… 96
第 54 図　宮川 6 区ＳＲ 313 下層（河床面）出土土器実測図 2 …… 97
第 55 図　宮川 6 区ＳＲ 313 下層（河床面）出土土器実測図 3 …… 98
第 56 図　宮川 6 区ＳＲ 313 下層（河床面）出土土器実測図 4 …… 99
第 57 図　宮川 6 区ＳＲ 313 下層（河床面）出土土器実測図 5 …… 100
第 58 図　宮川 6 区ＳＲ 313 下層（河床面）出土土器実測図 6 …… 101
第 59 図　宮川 6 区ＳＲ 313 下層（河床面）出土土器実測図 7 …… 102
第 60 図　宮川 6 区ＳＲ 313 出土木製品実測図 1 …… 104
第 61 図　宮川 6 区ＳＲ 313 出土木製品実測図 2 …… 105
第 62 図　宮川 6 区ＳＲ 313 出土木製品実測図 3 …… 106
第 63 図　宮川 6 区ＳＲ 313 出土木製品実測図 4 …… 107
第 64 図　宮川 6 区ＳＲ 313 出土木製品実測図 5 …… 108
第 65 図　宮川 6 区ＳＲ 313 出土木製品実測図 6 …… 109
第 66 図　水上 7 区ＳＲ 810 出土土器実測図 1 …… 117
第 67 図　水上 7 区ＳＲ 810 出土土器実測図 2 …… 118

第 68 図　水上 7 区 S R 810 出土土器実測図 3 …… 119
第 69 図　水上 7 区 S R 811 出土土器実測図 1 …… 122
第 70 図　水上 7 区 S R 811 出土土器実測図 2 …… 123
第 71 図　水上 7 区 S R 811 出土土器実測図 3 …… 124
第 72 図　水上 7 区 S R 812 出土土器実測図 1 …… 125
第 73 図　水上 7 区 S R 812 出土土器実測図 2 …… 126
第 74 図　木簡実測図 1 …… 133
第 75 図　木簡実測図 2 …… 134
第 76 図　木簡実測図 3 …… 135
第 77 図　木簡実測図 4 …… 136
第 78 図　木簡実測図 5 …… 137
第 79 図　木簡実測図 6 …… 138
第 80 図　絵馬実測図 …… 139
第 81 図　墨書土器実測図 1 …… 146
第 82 図　墨書土器実測図 2 …… 147
第 83 図　墨書土器実測図 3 …… 148
第 84 図　墨書土器実測図 4 …… 149
第 85 図　墨書土器実測図 5 …… 150
第 86 図　墨書土器実測図 6 …… 151
第 87 図　墨書土器実測図 7 …… 152
第 88 図　墨書土器実測図 8 …… 153
第 89 図　墨書土器実測図 9 …… 154
第 90 図　人形土製品実測図 1　宮川 5 ・ 6 区 …… 158
第 91 図　人形土製品実測図 2　水上 7 区 …… 159
第 92 図　人形土製品実測図 3　西大谷 1 ・ 2 区 …… 161
第 93 図　動物形土製品実測図 1　宮川 6 区 …… 168
第 94 図　動物形土製品実測図 2　宮川 3 ～ 6 区 …… 169
第 95 図　動物形土製品実測図 3　宮川 2 区・水上 9 ・10区 …… 172
第 96 図　動物形土製品実測図 4　水上 7 区 …… 173
第 97 図　動物形土製品実測図 5　西大谷 1 ・ 2 ・ 4 区 …… 177
第 98 図　馬形木製品実測図 1 …… 190
第 99 図　馬形木製品実測図 2 …… 191

図　版　目　次

カラー図版１　木簡
　　２　絵馬

図版１　宮川３区　ＳＸ 477 出土土器
図版２　宮川３区　ＳＸ 478 出土土器１
図版３　宮川３区　ＳＸ 478 出土土器２
図版４　宮川３区　ＳＸ 479 出土土器１
図版５　宮川３区　ＳＸ 479 出土土器２・ＳＸ 480 出土土器
図版６　宮川３区　ＳＸ 481 出土土器１
図版７　宮川３区　ＳＸ 481 出土土器２・ＳＸ 482 出土土器
図版８　宮川３区　ＳＸ 483 出土土器
図版９　宮川４区　ＳＲ 55 出土土器
図版10　宮川４区　ＳＲ 56 出土土器１
図版11　宮川４区　ＳＲ 56 出土土器２
図版12　宮川４区　ＳＲ 56 出土土器３
図版13　宮川４区　ＳＲ 56 出土土器４
図版14　宮川４区　ＳＲ 56 出土木製品１
図版15　宮川４区　ＳＲ 56 出土木製品２
図版16　宮川４区　ＳＲ 56 出土木製品３
図版17　宮川３区　ＳＸ 479 出土土製品・宮川４区　ＳＲ 56 出土土製品
図版18　宮川６区　ＳＲ 312 出土土器
図版19　宮川６区　ＳＲ 312 出土木製品
図版20　宮川６区　ＳＲ 312 出土土製品１　人形土製品
図版21　宮川６区　ＳＲ 312 出土土製品２　人形土製品
図版22　宮川６区　ＳＲ 312 出土土製品３　動物形土製品
図版23　宮川６区　ＳＲ 312 出土土製品４　動物形土製品
図版24　宮川６区　ＳＲ 312 出土土製品５　動物形土製品
図版25　宮川６区　ＳＲ 312 出土土製品６　動物形土製品
図版26　宮川６区　ＳＲ 313 出土土器１
図版27　宮川６区　ＳＲ 313 出土土器２
図版28　宮川６区　ＳＲ 313 出土土器３
図版29　宮川６区　ＳＲ 313 出土木製品１
図版30　宮川６区　ＳＲ 313 出土木製品２
図版31　宮川６区　ＳＲ 313 出土木製品３
図版32　宮川６区　ＳＲ 313 出土木製品４
図版33　宮川６区　ＳＲ 313 出土木製品５

図版34　宮川6区　SR 313出土木製品6
図版35　水上7区　SR 810出土土器1
図版36　水上7区　SR 810出土土器2・SR 812出土土器
図版37　水上7区　SR 811出土土器
図版38　木簡1
図版39　木簡2
図版40　木簡3
図版41　木簡4
図版42　木簡5
図版43　木簡6
図版44　墨書土器文字集成1
図版45　墨書土器文字集成2
図版46　墨書土器文字集成3
図版47　墨書土器文字集成4
図版48　墨書土器文字集成5
図版49　墨書土器文字集成6
図版50　墨書土器文字集成7
図版51　墨書土器文字集成8
図版52　墨書土器文字集成9
図版53　人形土製品1
図版54　人形土製品2
図版55　人形土製品3
図版56　動物形土製品1
図版57　動物形土製品2
図版58　動物形土製品3
図版59　動物形土製品4
図版60　動物形土製品5
図版61　動物形土製品6
図版62　動物形土製品7
図版63　動物形土製品8
図版64　動物形土製品9
図版65　馬形木製品1
図版66　馬形木製品2

第Ⅰ章　調査の方法

第1節　資料整理計画

資料整理は、現地調査終了後の昭和61年度～昭和63年度の3ケ年で計画された。昭和61年度は昭和59・60年度に現地調査を実施した地区の遺構を中心に整理し、報告書『大谷川Ⅱ（遺構編）』を刊行した。資料整理の全体計画は次の通りである。

昭和61年度・・・昭和59・60年度に現地調査を実施した地区の遺構を中心に整理。報告書『大谷川Ⅱ（遺構編）』を刊行。

昭和62年度・・・遺物を中心に整理し報告書『大谷川Ⅲ（遺物編）』を刊行する。

昭和63年度・・・遺物を中心に整理するとともに、遺構・遺物のあり方について検討し総合的に考察を加え、報告書『大谷川Ⅳ（遺物・考察編）』を刊行する。

第2節　基本方針

膨大な遺物の量であり、これらのすべてを取り扱うことは、我々に与えられた時間の中では、不可能である。そこで我々は、この限られた時間の中で、最もこの遺跡の資料を生かすにはどのようにしたら良いかを討議した。そして、神明原・元宮川遺跡の主体は古墳時代～奈良時代の祭祀に関係した遺物であるとの共通認識にたち、次のような方針で臨んだ。

1）遺構・流路等の一括遺物あるいは一群の遺物を抽出し紹介する。

具体的には、遺構認定・群認定を厳密に検討し、確実に伴う遺物を抽出し、各遺構ごとに全ての遺物を提示する。ここでは二つの点に着目して検討した。1は本遺跡の主体となる祭祀関係遺物の時期を明確に与えられる資料があるかどうか、2は駿河西部においてその様相がいまひとつはっきりしない古墳時代の土師器の様相を知る良好な資料があるか、である。

2）遺跡の性格等を論ずるにあたり必要な遺物は出土状況の如何にかかわらずとりあげ紹介する。

河の中からの出土という性格上、時期等の認定を明確にしがたい資料がほとんどである。一括あるいは一群の遺物を取り上げると、祭祀関係遺物をはじめ主要なものがとりあげられないまま埋もれてしまうこととなってしまう。これらの遺物を出来るだけひろい集成することで全体像を考える。

第3節　作業手順

現地調査の状況を知らないものが頼るのは、現地での実測図面・写真・遺物に付されたラベル等である。当遺跡の場合、いままで主要遺物という取り上げられかたで様々な遺物が独り歩きしてきた。このような場合どうしても恣意的な解釈となる危険性を常にはらんでいる。本格的な遺物整理に着手するにあたり、我々はこれを避け出来るだけ資料の厳密性を保つため、資料操作の原点に立ち返って作業を進めた。すなわち、実測図面・遺物に付されたラベルを頼りに我々の解釈を加えないで資料に当たること

とした。しかしこれは逆に当遺跡資料の持つ限界をも明らかにすることとなった。我々はこの両者を明確にすることが、神明原・元宮川遺跡の資料整理のなかで重要な意味を持つと考える。

1）実測図（遺物分布図）の検討

厳密に遺構に伴う遺物を選び出すため、現地で作成された図面を第一に考えた。まず遺物分布図に記載されている遺物を抽出する。分布図にはないが当該遺構出土とラベルに明記されているものについては、日誌等により遺構認定の時期を確認し現地調査段階のものであれば二次資料として組み入れる。

遺構の認定および作業の優先順位については、調査関係者に集っていただき検討した。

2）復元・統計処理

注記・復元をし、必要なものについては類型別の統計処理等を行う。

3）実測・写真撮影

全ての遺物の実測をすることは、限られた時間の中では不可能なので、とりあえず必要な最低限のものに絞って実測および写真撮影を行った。しかし、編年資料となるものについては、すべての遺物を実測し紹介することを原則とした。

4）検討

個々の遺物の形態分類をするとともに、遺物の組み合わせに着目し検討を加える。他遺跡の遺物のあり方と比較検討しながら、本遺跡の遺物の様相と遺跡の位置付けを考える。

第4節　報告書の作成

以上のような検討を加えたもののなかで、今回報告する遺構は次にあげるものである。

1. 多量の木製模造品・土製模造品を出土しその時期を考える資料となるもの
……宮川6区ＳＲ312・ＳＲ313
2. 木簡・鍬などを検出し、川の流路の変遷を考える資料となるもの
……宮川3区ＳＲ55～ＳＲ56
3. 土師器の集中して出土した部分で古墳時代中期から後期の土器の様相を知る上で良好な資料となるもの
……宮川3区ＳＸ477～ＳＸ484

また個々の遺物では木簡・墨書土器などの文字資料、および祭祀関係遺物のなかから人形・馬形土製品と馬形木製品を報告する。

いずれにせよ、今回の報告では資料の紹介に重点をおいた。我々の前に積み上げられた資料のなかから当遺跡の性格を示すとおもわれる資料のまとまりを出来るだけありのままに紹介することに努めた。その組み合わせ等について問題を投げ掛けるものも多い。これらの詳細な検討と考察については、資料の増加を待って周辺遺跡の資料との比較検討を行い、63年度以降報告出来るよう努力したい。

第II章　出土遺物の概要

第1節　土　　器

当遺跡の土器は縄文時代から近世にまで及んでおり、膨大な量である。コンテナで5000箱以上のそのすべてを、整理し系統だってまとめることは、わずかの期間では不可能である。そこでまず、本遺跡の主体をなす、古墳時代から奈良時代ごろまでの土器の概観と見通しを示すこととした。遺構そして様々な祭祀遺物を理解するうえで共伴する土器の年代観は不可欠のものである。我々の共通の編年を確立すべくつとめたがまだ不十分である。検討を加えなければならない遺物は山積みされている。

1.　古墳時代前期・中期

本遺跡出土の遺物は旧大谷川から出土した古墳時代後期以降のものが圧倒的多数を占めるが、低地縁辺の包含層および遺構内において古墳時代前期・中期の一括遺物も数カ所で検出されている。すでにそのほとんどが『大谷川Ⅰ』および『大谷川Ⅱ』において紹介されているが、ここではこれらを集成しそれぞれの資料を相互に比較検討することを試みた。溝・自然流路・包含層・祭祀的な一括遺物等様々であり、切り合い関係や層位より編年することは不可能であるため一括遺物の中で特徴的な形態を指標とし、一括遺物ごとならべることを原則とした。周辺地域の資料を参考にしたがこの時期における静岡県中部地方の資料は乏しく問題点も多い。

1は水上10区ＳＤ634出土の壷である。折り返し口縁を有し胴部は無花果形を呈する。本遺跡の遺構出土の土器としては最も古い要素を有し弥生後期の特徴が強い。2は西大谷8区ＳＰ354から出土し、この土坑が大型の柱穴を切っていることからこの柱穴群の年代的根拠とされる土器である。口縁部には棒状貼付文、肩部にはボタン状の貼付文をもつ。弥生土器の特徴を強く残す土器といえる(1)。3・4はそれぞれ水上10区ＳＰ727・ＳＤ634出土の資料である。いずれも壷の口縁部に棒状浮文と刺突文が施されている。全体の形状はわからないが弥生後期の特徴を残している。

5～12は古墳時代初頭と考えられる土器である。ここの中心は西大谷1区ＳＤ15出土の資料（6～13・15～20）である。弥生から系譜を引く伝統的な土器と外来系の新しい要素が混同している。復合口縁壷では浮文ではなく棒状の沈線が口縁部に施されている(5・6)。折り返し口縁壷は口縁部の外反がかなり緩やかで(8・9)、口縁端部に沈線を有するものも存在する(9)。これら弥生時代から系譜を引く土器に新たに有段口縁壷（10）や折り返し口縁が退化したもの（11）が加わるようである。甕では口縁端部に刻み目をもつもの（14）や単純口縁もの（15）は在地系とみられ、これにＳ字状口縁甕が加わるようである。Ｓ字甕は肩部に平行線文がみられず、大参分類のｂ類(2)・安達分類のⅢ類(3)以降と考えられ、小型精製土器もみられる。

静岡県中部地方においては静岡県考古学会シンポジウムにおいて古式土師器の編年が試みられている。それによるとＳＤ15の資料はⅡ期に比定され、下清水小池遺跡(4)・寺崎Ⅰ遺跡(5)・天神山下Ⅱ遺跡(6)などがその類例となるが、複合口縁壷に古い様相を残し、小型丸底土器・小型器台等が伴わないところから(7)Ⅱ段

階の中でもより古い時期と考えられる。なおＳＤ15一括土器については整理続行中であり『大谷川Ｉ』で示したものはその一部である。今後『大谷川Ⅳ』において追加資料も含めて報告する予定である。

22～39の土器は古墳時代前期後半～中期初頭と考えられる一群である。このうち22～34は西大谷７区の包含層８・９層出土の資料であり、35～39は西大谷７区７層出土の土器である。８・９層の土器は混在しており時間差を認め難いが、７層にくらべて層位的には先行する。前段階でみられた複合口縁壷はなくなり折り返し口縁壷（22）も胴部が球形に近く、斜縄文と竹管文が施されている。台付甕（28）はＳ字状口縁が退化しわずかにそのなごりをとどめている。その他では小型丸底土器・小型高坏が注目される。また平底で口縁をわずかに外反させた坏形土器も出土している。高坏は脚部が長く裾部がラッパ状に開くもの（32・33）がみられる。７層では単純口縁の壷（35・36）、小型の平底甕（37）が出土している。静岡県中部地方においては小深田遺跡３地点南地区ＳＥ－02・上藪田川の丁遺跡旧河道下層に類例が認められる。先述のシンポジウム[8]に従えばいずれもⅡ期にあたるが、小型丸底土器・小型高坏[9]の盛行、Ｓ字甕の退化など新しい様相を含んだ土器群といえる。また脚部の長い高坏（33）は静岡県東部の富士市三新田遺跡Ａ－24号住居跡出土の和泉式に比定されている高坏に通じると考えられ、次段階への過渡的な要素も含んでいるといえよう[10]。

40～66の土器は水上10区ＳＸ624出土の資料である。この資料はａ～ｄの４群に分かれるがここでは他の群からの散布資料と考えられるｃ群を除き、ａ群（40～50）、ｂ群（51～56）、ｄ群（57～66）の順に示した。ａ群は大型の壷（40・41）にその特徴がみられる。40は西大谷１区ＳＤ15でみられた複合口縁が退化したものと考えられ、41の折り返し口縁壷は厚手で胴部が球形に近い。壷では他に有段口縁の退化したもの（42）や、単純口縁のもの（43）がある。甕では台付甕が若干みられ、平底の甕は出土していない。坩形土器（44・45）は胴部中央に最大径をもち器高が胴部径より大きいものがほとんどである。高坏は坏部が皿状にゆるやかに開くもの（48）や坏部外面底部に稜をもつもの（49・50）がある。いずれも脚部は「ハ」の字状に開き裾部で屈曲している。数量的には高坏と坩形土器で全体の70％を占め、壷に複合口縁、折り返し口縁、有段口縁など古い要素が残るものの主体が坩・高坏に移行していることをあらわしている。これらを考えあわせると水上10区ＳＸ624ａ群の土器はいわゆる五領式から和泉式への過渡期ととらえることが可能であり、古墳時代前期末～中期前半の時期をあてておきたい。先に述べた西大谷７区７層出土の土器とはそれほどの差はないと思われる。

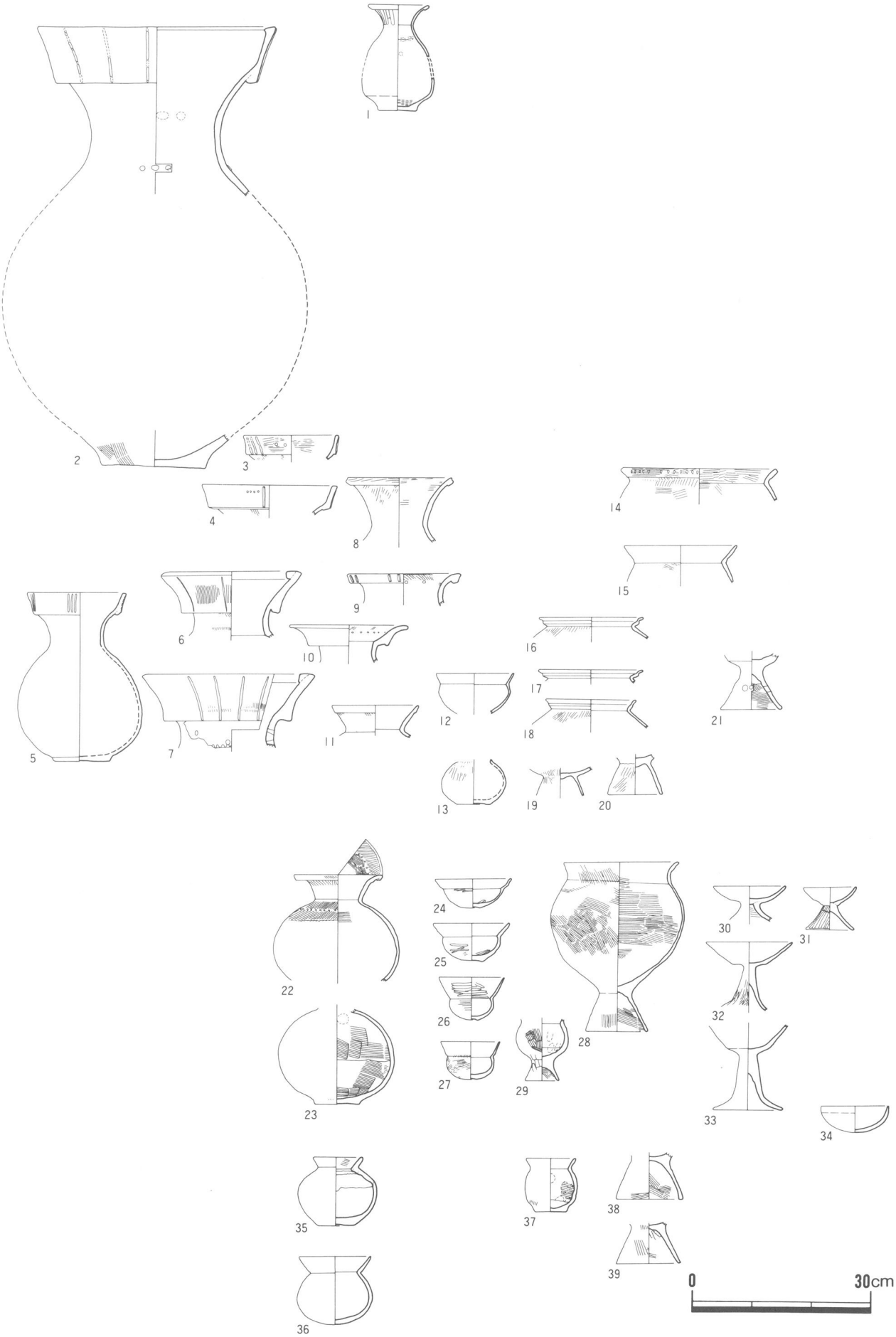
水上10区ＳＸ624ｂ群の土器（51～56）はａ群でみられた大型壷はなく短頸の広口壷（51）がみられる。坩形土器（52）は胴部球形で口縁部はわずかに外反しながら開く安定した形状となっている。高坏（56）はａ群とほぼ同じであるが脚部の開く角度がゆるやかになりやや中脹みの和泉式高坏に近い形状となっている。また台付の鉢形土器（53）も出土している。高坏・坩形土器・台付鉢形土器のセットとしては清水市石川遺跡出土例があり、先述のシンポジウムではⅢ期の時期が与えられている。台付鉢形土器は沼津市広池遺跡[11]でも出土しており５世紀中頃の時期と考えられている。ｄ群出土の土器は単純口縁で胴部球形の壷[12]（57）小型の広口壷（58）、坩形土器（59・60）、平底の甕（62）、台付甕（64）、高坏（65・66）などで構成されている。小型広口壷・坩形土器等ｂ群との共通点もみられるが、高坏はａ群・ｂ群にくらべ坏部が深く坏部底径が小さくなっている。また坩形土器（59）は底径が大きい。これらの特徴

からｂ群より新しい要素と考えたが、甕は脚台付と平底が共存しておりｄ群→ｂ群への流れを想定してもよいのかもしれない。いずれにしてもｂ群・ｄ群とも複合口縁・折り返し口縁等を有する壷が存在せず、甕が長胴化していることから、水上10区ＳＸ624 ａ群より新しい段階と解することができる。先にあげた周辺の類例をも考え合わせ古墳時代中期中葉と考えてよいかもしれない。

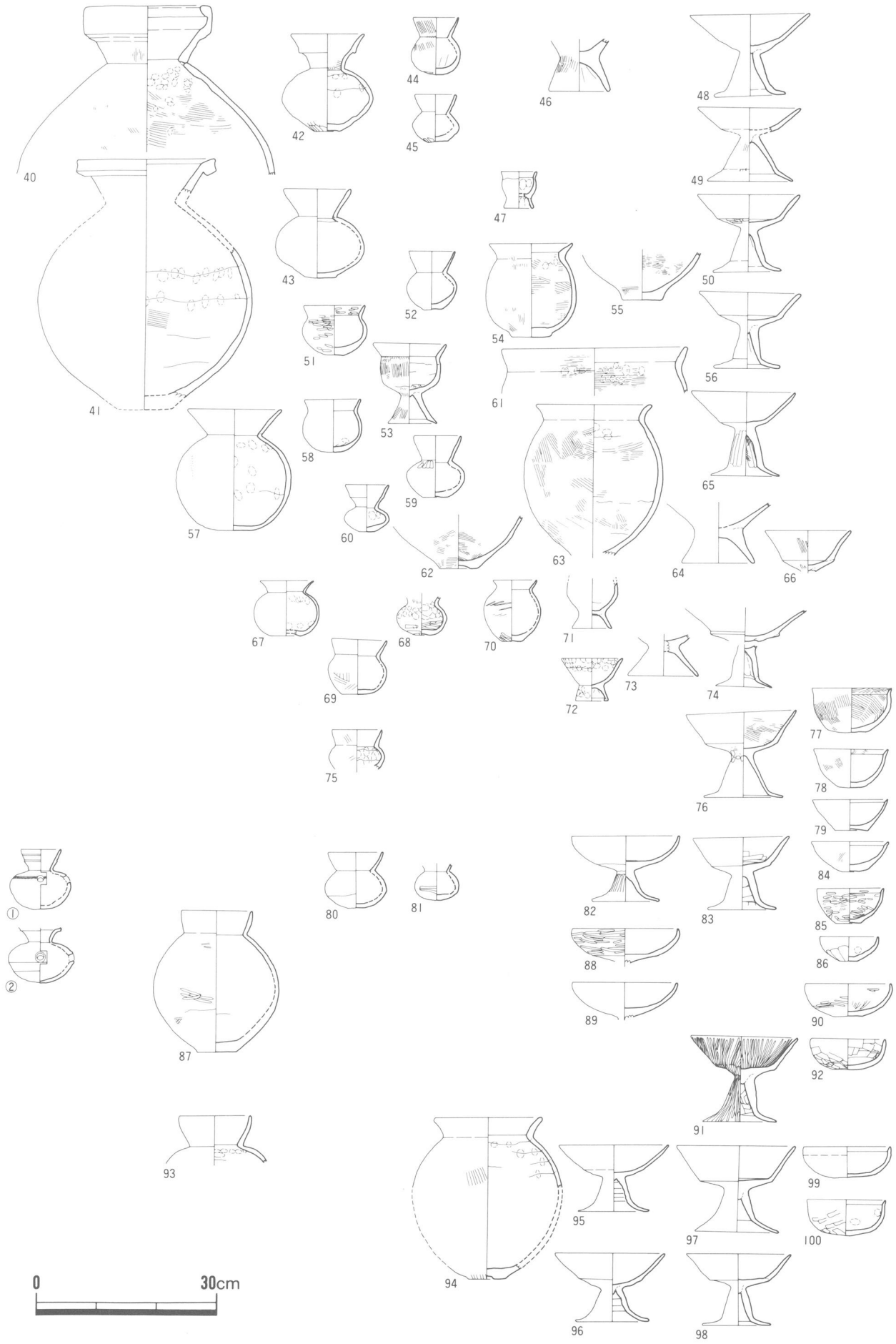
67～74は水上１区ＳＸ323の小型土器を中心とした一括土器である。小型壷（67）、坩形土器（68）、甕（70）、台付甕（73）、高坏（74）があり、水上10区ＳＸ624 ｄ群（57～66）と大差ないが、高坏は脚部がエンタシス状で坏部底部外面に粘土ひもを貼付し稜をつくっている。和泉式の特徴が強いものといえよう。

75～79は水上１区の包含層紫茶粘土層出土の土器である。坩形土器（75）、高坏（76）もみられるが、鉢形土器（77～79）にその最大の特徴がある。鉢形土器には平底に近く体部は丸味を帯び口縁をやや外方につまみ出すもの（77・78）と、上げ底で体部が直線的に開くもの（79）があり前者はやや深い。80～86は同一の自然流路と考えられる水上10区ＳＲ673と水上７区ＳＲ807出土の土器である。坩形土器・小型壷は前述の水上1区ＳＸ323と大差ないが高坏に坏部が半球形を呈するもの（82）が新たに加わる。鉢形土器は体部が直線的なものがなくなり、器高が低いもの（84）が多くなる。86のように口縁をつまみ出さずそのまま内湾する「坏」と呼称した方がよいものもみられる。なおこの土器群には須恵器蓋（①）が共伴している。87～90は宮川３区ＳＤ181出土の資料である。高坏はやはり坏部が半球形を呈するタイプで坏部に稜をもつものはみられない。坏（90）は口径が大きく底部は上げ底気味で口縁部は内湾している。図には示してないが鉢形土器もみられる。また胴部中央に最大径をもち口縁部がやや内湾しながら直立気味に立ち上がる壷形土器（87）も出土している。この土器群には坩形土器がみられない。なお須恵器蓋（②）も共伴している。水上１区紫茶粘土層、水上10区ＳＲ673・水上７区807、宮川３区ＳＤ181の土器群（75～90）は新しく鉢形土器・坏形土器が加わり、高坏では坏部球形を呈するものが登場し、須恵器が共伴するという前段階とはかなり異なった傾向がみられ、それとともに坩形土器は消滅傾向にある。須恵器蓋のみで年代を考える能力はないので高坏・鉢形土器・坏形土器の形状と器種構成から広い意味での宮之腰期をあてておきたい。

91・92の土器は水上７区ＳＲ806出土のもので高坏と坏のみである。高坏は坏部の底部外面に稜をもち内外面にヘラミガキが施されている。前段階からの系譜を引くものと思われる。坏は平底となり、内外面にヘラケズリが施されている。93～100は水上８区ＳＸ775の一括土器である。ここでは高坏に坏部の稜が不明瞭なもの（95・96）が加わり、坏（99・100）は口縁部に若干の外反がみられ口唇部内面に稜をもつのが特徴である。他に胴部が球形に近い甕（94）と口縁が直立気味にやや内湾しながら開く壷（93）がみられる。この時期には坩形土器は消失しているようで、高坏の坏部が球形のタイプもみられない。またいわゆる模倣坏もまだみられないようである。これらのことから宮之腰期の次段階で模倣坏以前の時期ととらえることができ、６世紀前半の年代を与えておきたい。



第1図　古墳時代土器編年図1



第 2 図　古墳時代土器編年図 2

以上本遺跡出土の古墳時代前期・中期と考えられる土器を遺構出土の一括土器を中心に比較・検討してきたが要約すると次のようになろう。

第1段階は弥生時代後期的特徴が色濃い段階で、本遺跡の遺構出土の土器としては4例（1～4）を数えるにすぎない。

第2段階（5～21）は弥生時代後期の系譜を引く在地系の土器にS字口縁甕・有段口縁壷など外来系土器が加わる時期で小型土器もふくまれる。

第3段階（22～39）はS字口縁甕が姿を消し小型丸底坩・小型高坏が登場する時期で、壷は胴部球形となる。

第4段階（40～74）は折り返し口縁壷・有段口縁壷が消滅傾向にあるなかで、坩形土器と高坏が盛行する時期で台付甕は遺存し、甕は長胴化する。

第5段階（75～90）は坩形土器が消滅傾向にあるなかで鉢形土器・坏形土器が一般化し、高坏に坏部球形のものがあらわれる。この段階の終わりから須恵器が伴出する。

第6段階（93～100）は坏が定型化する傾向にあり高坏はまだ盛行している。模倣坏はまだみられない。

(1) 静岡県埋蔵文化財調査研究所『大谷川Ⅱ』 1987

(2) 大参義一「弥生式土器から土師器へ―東海地方西部の場合―」名古屋大学文学部研究論文XL Ⅶ 1968

(3) 安達厚三・木下正史「飛鳥地方の古式土師器」考古学雑誌60－2　1974

(4) 池田将男「中部地域の古式土師器」静岡県考古学会シンポジウム6　1985

(5) 望月清仁「下清水小池」『鐙』創刊号　1977

(6) 清水市教育委員会『清水市尾羽廃寺・寺崎Ⅰ山の鼻遺跡発掘調査概報』 1971

(7) 〃　『天神山下Ⅱ遺跡他』清水市埋蔵文化財調査報告書第1集　1979

(8) 焼津市教育委員会『小川地区遺跡埋蔵文化財発掘調査概報』 1981

(9) 藤枝市教育委員会『上藪田モミダ遺跡・上藪田遺跡・鳥内遺跡』 1981

(10) 富士市教育委員会『三新田遺跡発掘調査報告書』 1983

(11) 望月董弘『清水市石川遺跡発掘調査概報』埋蔵文化財発掘調査報告書　1968

(12) 北川恵一「静岡県東部地方の和泉式期の土師器について」静岡県考古学研究21　1988

2. 古墳時代後期

1）須恵器

この時期は、須恵器を指標としてこまかな編年体系が組み立てられている。本遺跡においては、独自の編年を考えることのできるようなまとまった資料は検出されていない。ところで、静岡県では、1960年以来遠江考古学研究会が須恵器の編年を検討し編年体系を組み立ててきた。いわゆる遠考研編年である。(1) 本遺跡ではこの編年体系を援用する。この編年も各氏により若干の考え方の相違はあるが、基本的には静岡県考古学会シンポジウムにおいて示されたものに従う。(2) 以下『須恵器―古代陶質土器―の編年』に基きその概要を整理してみると次の様である。

Ⅰ期前半

底部の大半を手持ちヘラケズリで整形、端部は全体に丸みを帯び、口縁部をかるく内側に斜めに整形している。田辺編年とＴＫ216～ＴＫ208に対比されるものである。

Ⅰ期後半

湖西市明通り窯跡出土品を指標とする。坏身はたちあがりをほぼ直立させ口縁部の内側を斜めにヘラ整形した後かるく沈線を施している。ＴＫ23に比定でき、焼津市宮ノ腰遺跡出土資料が標式となろう。

Ⅱ期

有玉古窯跡・衛門坂古窯跡の資料で代表されている。古墳では沼津市長塚古墳の資料等がある。この時期は、長脚一段透かし高坏の出現・坏の大型化である。坏では、端部は比較的丸く、前段階に比べてシャープさに欠けている。たちあがりと底部の比率がほぼ１：２となっている。坏の蓋では稜が不明瞭になってくる。

Ⅲ期前葉

有玉古窯跡・衛門坂古窯跡の資料で代表されている。古墳では袋井市大門大塚古墳の資料で代表される。坏の径は前型式とほぼ同じであるが、たちあがりは短くなって内傾するものもめだつ。口唇部の整形も顕著なものはなくわずかに指先等で軽く押えた程度のものが多い様である。高坏では、長脚二段透かし高坏が出現する。

本遺跡の須恵器はほぼこの段階のものから量が多くなる。前段階の特徴を残したものもおおく、大門大塚古墳の資料を標式としてⅡ期後半を設定するとすれば、Ⅱ期後半に逆のぼる可能性があるものも多い。

Ⅲ期中葉

有玉窯の盛行期である。古墳では静岡市賤機山古墳の資料が挙げられる。坏身の径は15㎝前後あり、最も大型化する。この時期を境に小型化する傾向にある。

Ⅲ期後葉

坏は小型化し、坏身のたちあがりは短く内傾する。

最近は、この後にⅢ期末葉を設けている。

Ⅳ期前半

蓋坏が、径で11㎝前後と最も小型化する。本遺跡においては９㎝台の小型のものもわずかではあるが認められる。また、平底気味の底部から直線的にのびる体部を持つタイプがあり、時期差と考えられないか検討を要する。

後半になると、坏の蓋の内面にかえりがつき、乳頭状のつまみが表れてくる。径は10㎝程度の小型のものである。つまみは宝珠状の扁平化したものも認められ、若干後出する要素とかんがえられよう。

Ⅳ期後半

坏は徐々に大型化し、宝珠状つまみも扁平化する。一部には高台付きの坏が出現するようになる。本遺跡においては、この時期は非常に希薄である。

Ⅴ期前葉

宝珠状つまみ付き蓋の内面のかえりが消失する。高台を持つ坏では、丸底の底部が高台からはみ出し高台の役を為さないものが認められる。

Ⅴ期中葉

宝珠状つまみ付き蓋の内面の端部がくの字状に折り曲げるものから、若干肥厚させる程度のものへと変化していく。高台を持つ坏身が主体的である。

Ⅴ期後葉

坏の蓋では、宝珠状つまみが消失し、端部のかえりもくの字状に折り曲げるものから、若干肥厚させる程度のものへと変化していく。

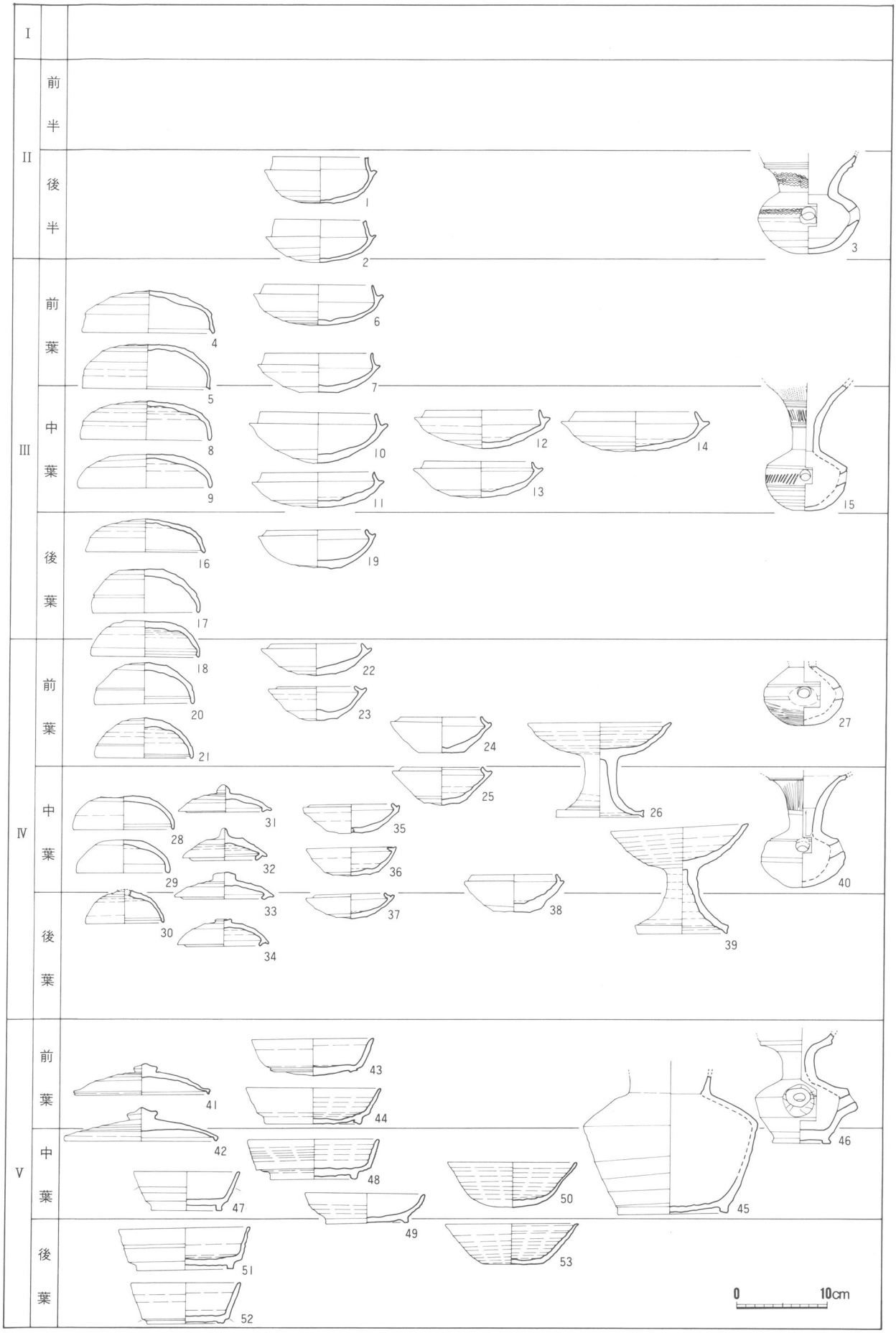
須恵器の編年についてはまだまだ検討を要する点が多い。本遺跡の調査員の中でも微妙に見解の相違が見られる。ここでは、報告書の一貫性を考え、すでに刊行されている『大谷川Ⅰ』『大谷川Ⅱ』に基本的に従い若干の補正を加えておくこととする。すなわち　①Ⅱ期を前半と後半にわけ大門大塚古墳の資料をもってⅡ期後半とする。②Ⅳ期を前葉・中葉・後葉の３区分し、乳頭状つまみを持つ蓋の出現を中葉とする。の２点である。参考までに本遺跡の土器をその編年体系に当てはめたものを第３図に示した。(3)(4)

なお、これらの各期の年代の比定であるが、これについては我々は検討材料をもっていない。向坂鋼二氏が先のシンポジウムにおいてⅢ期を６世紀中葉～７世紀前葉とする考え方を示され、『大谷川Ⅰ』『大谷川Ⅱ』においては原則としてこれに従ってきた。すなわち大略として

Ⅱ期　　＝６Ｃ初頭
Ⅲ期前葉　＝６Ｃ中葉
Ⅲ期中葉　＝６Ｃ後半
Ⅲ期後葉　＝７Ｃ前葉
Ⅳ期　　＝７Ｃ中葉～７Ｃ後半
Ⅴ期　　＝８Ｃ

である。

最近の見解では、浜松市博物館『伊場遺跡遺物編４』において「厳密には出来ないが」とことわりな(5)


I
II
前半
後半
III
前葉
中葉
後葉
IV
前葉
中葉
後葉
V
前葉
中葉
後葉
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
0
10cm

第 3 図　須恵器編年図

がら次の様に示されている。

Ⅰ期前半　＝5世紀中～末にかけて
Ⅰ期後半　＝5世紀末～6世紀初頭
Ⅱ期　　＝6世紀前葉
Ⅲ期前葉　＝6世紀中葉
Ⅲ期中葉　＝6世紀後葉
Ⅲ期後葉　＝6世紀末
Ⅳ期前半　＝6世紀末～7世紀前葉

この設定の根拠については明確にされていないが、我々にとって問題となるのはⅢ期後葉とⅣ期前半の間である。神明原・元宮川遺跡の祭祀遺物の位置付けが、7世紀前半代あるいは6世紀に入るかという問題をはらんでいる。いま浜松市博物館の示した年代観について検討を加える時間と能力はないので、ここでは従来通りⅢ期後葉のある段階からを7世紀にあてておきたい。すなわちⅣ期前半を7世紀前半代と理解することとした。

また、Ⅳ期後半については7世紀後半としておくが当遺跡ではその量は非常に少ない。Ⅳ期前半の細分とあわせて検討を要するところである。

年代観は一応次の様にしておきたい。(6)

Ⅱ期　　＝6世紀前葉
Ⅲ期前葉　＝6世紀中葉
Ⅲ期中葉　＝6世紀後葉
Ⅲ期後葉　＝6世紀末葉～7世紀前葉
Ⅳ期前葉　＝7世紀中葉
Ⅳ期中葉　＝7世紀後葉
Ⅳ期後葉　＝7世紀末葉
Ⅴ期　　＝8世紀

見解の異なる点や指摘される様々な問題についてはさらに検討を加えたうえで、機会を改めて編年を整理し年代観を考えてみたい。

2）土師器

膨大な量の土師器が出土しているが、ほとんどが川の中からであり、須恵器等を見るとかなりの時期巾があり、編年のための資料としてはあまり良好とはいえない。そのなかで注目されるのは、宮川3区の旧河道跡ＳＲ485下の遺物である。宮川3区の北部に弧状に広がる低湿地地形であり、粘土層の静穏な堆積により埋没していく過程で大量に投棄された。この中で、一括性が認められる遺物集中部が8ヶ所確認されている。ＳＸ477～ＳＸ484である（ＳＲ485はこの堆積の上に形成された新しい河道である）。この資料を中心に検討を加え古墳時代後期の土師器の様相をみてみたい。（第Ⅲ章第1節でＳＸ477～ＳＸ482の出土土器の中の実測可能なものはほとんど全て図に示したので参照されたい）

当地方における6～7世紀の土師器の編年については、ようやくその緒についたばかりである。おお

きな成果としては県考古学会シンポジューム『古墳時代の土師器』において大塚淑夫氏がしめされたものがあるが、本遺跡においては若干その様相をことにするようである。(7)

さて前にも述べたように、本遺跡においては、独自な編年体系を組む程資料に恵まれてはいない。良好といわれたＳＸ477～ＳＸ482の資料もかなりの巾をもったものであることが明らかにされた。静清平野における古墳時代後期の土師器の編年については、周辺の資料との比較検討を加えた上で機会を改めて考えたい。とりあえずは須恵器の編年にあわせてその様相を概観しておくにとどめたい。

Ⅲ期前葉

まだ伝統的な形態の坏が主体を占める。口唇部をわずかに内湾させ、内面に縦のヘラミガキが施され外面体部は横位のヘラケズリがなされている。あげ底風の平底のもの（Ａ類）と丸底のものがある（Ｂ類）。Ａ類も底径が最大径の⅓弱となっている。Ａ類はほぼこの段階までで消滅すると思われる。本遺跡において〝模倣坏〟は散見されるが初現については明確にしがたい。この段階から出現すると思われる。

Ⅲ期中葉

Ａ類のあげ底風の平底のものは消え、Ｂ類は丸底から平底へと変化する傾向をみせ、内面のヘラミガキも顕著でなくなってくる。口縁部を屈曲させたいわゆる〝鬼高期並行〟の坏をＣ類とした。Ｃ類では、丸底のもの・平底で木葉痕をもつもの等がある。後者が後出の要素(8)であろう。口径は13～14㎝を測り大型である（Ｃ－ａ類）。口縁部が直立するタイプは蓋の模倣であろうか（Ｃ－ｂ類）。また口径15㎝以上の椀と呼んでよい大型品も見られる（Ｃ－ｃ類）

Ⅲ期後葉

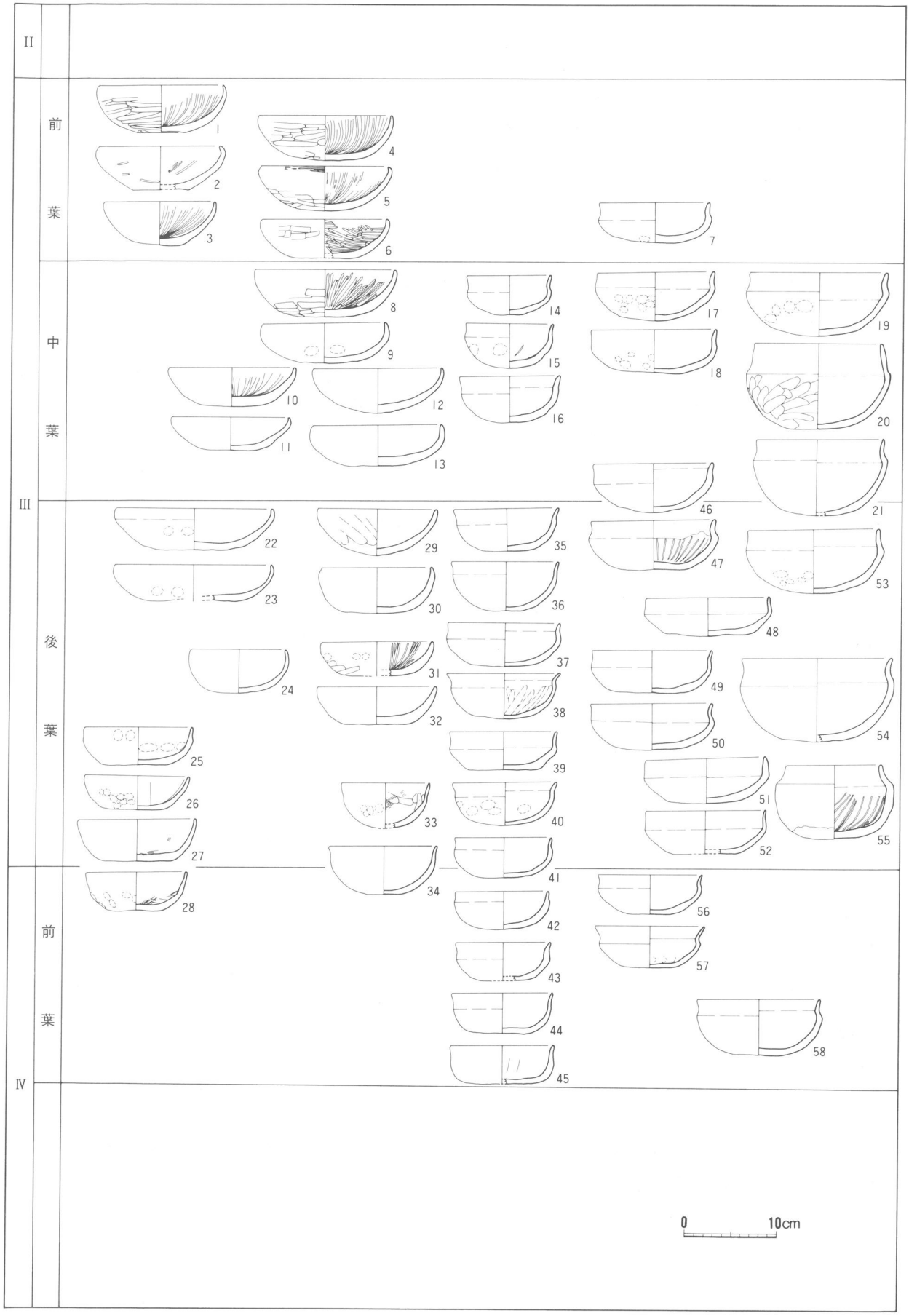
Ｂ類は丸底から平底へと変化し、内面のヘラミガキもほとんど見られなくなる。口縁部の内湾は弱くなり小型化したもののなかにはまっすぐに伸びるものも見られる（Ｂ－ｂ類）。一方器高は変わらずに口径が大きくなり扁平な皿状を呈するものも見られる（Ｂ－ｃ類）。

量的には圧倒的にＣ類が多くなる。Ｃ類は、大中小に法量が分化していくが、全体として小型化の傾向にある。

Ⅳ期前葉

Ｂ類は非常に少なくなりＣ類が主体を占める。口径は11～12㎝と小型化する。またＣ－ａ類では、口縁部の外反が著しくなるものと平底になるものとがある。椀形の深いものも口径13㎝程度と小型化する。

以上簡単にその変化を概観した。本遺跡の資料でいえるのは現段階ではこの程度である。膨大な資料の整理を継続しており様々な要素と系譜を持ったものが含まれている。周辺の遺跡の資料とあわせて検討し『大谷川Ⅳ』において整理してみたい。



第 4 図　古墳時代土器編年図

（1）山村宏ほか「遠江の須恵器生産」『古代学研究』50　1968

（2）1977年11月23日 静岡県考古学会は「須恵器－古代陶質土器－の編年」のテーマでシンポジウムを開催した。その発表と討論をまとめて『須恵器－古代陶質土器－の編年』が1979年3月に刊行されている。この中で川江秀孝氏は従来の編年にたいして修正案（川江試案）を提示している。佐藤は原則的に川江試案に賛成であるが、神明原・元宮川遺跡の調査員の間でも見解のちがいが見られる。ここでは、報告書の一貫性を重んじ従来の編年観に沿っておきたい。

（3）乳頭状つまみを持つ蓋は、明器としての坏の小型化とは別の意味を持つものであろう。このような形態の坏のセットの出現をひとつの画期ととらえたい。

（4）そのままあてはめると、神明原・元宮川遺跡においては第Ⅳ期後葉は非常に希薄なものとなってしまう。当遺跡のこの時期が欠落していたと理解するのか。編年に問題があるのか。この問題については別に考えたい。

（5）浜松市教育委員会『伊場遺跡　遺物編4』1987

（6）栗野・小嶋・成島・矢田ほかの年代観もそれぞれ微妙なところでの相違はあろうが『大谷川Ⅰ』『大谷川Ⅱ』をみるかぎりこの年代観から大きくは出ないであろう。しかし遺構の年代決定には土器以外の要素もおおきく、記述が必ずしも土器の年代観と一致しないこともあることはもちろんである。

（7）大塚淑夫「中部地方の6～7世紀の土師器」『古墳時代の土師器』静岡県考古学会　1985

（8）関東地方の緻密な胎土とていねいなヘラミガキが施された鬼高式とは全く様相を異にする。砂粒を多く含み、粗い胎土でナデ調整を主体としヘラミガキはほとんど見られない。口縁部の屈曲が共通点といえばいえるが、鬼高式のようにシャープなものではない。“鬼高期伴行”の坏と称しておく。

第２節　木製品

多量の木製品が出土している。総数約15000点、中でも際立って多いのは祭祀に係るものである。人形55点・馬形31点・斎串状木製品約1000点の他様々なミニチュア製品など1200点を数える。これらのなかで今回は、人形木製品・馬形木製品について報告する。その他の木製品としては、鍬およびその柄・鎌の柄などの農具26点、石斧の柄などの工具７点、片口・杓子・椀・曲げ物などの生活用具125点のほか、ほぞ穴や切り込みの入った建築部材や杭など様々な用途のものにおよんでいる。さらに用途を特定出来ないものがこれらに倍する量検出されている。

これらの大半は旧大谷川の流路の中からの出土であり、時期は縄文時代から近世にまで及ぶが、中でも主体となるのは古墳時代～奈良・平安時代である。また大谷地区では、縄文時代の低地を形成する泥炭・粘土層から丸木舟・かい、丸木弓・ヤスなどが検出されている。

現在整理を継続中であり、その用途の認定には、まだまだ検討を要するところも多く、上記の数量は必ずしも確定されたものではない。

第３節　土製品

本遺跡は旧大谷川から大量の祭祀遺物が出土しているが、そのうち土製品としては人形土製品107点、動物形(馬形)土製品209点が出土している。他に土製の模造鏡１点と土製丸玉29点、土製紡錘車12点が出土している。これらのうち祭祀具として代表的な人形・動物形土製品を今年度は取り上げ紹介することとする。

人形土製品はすべて旧大谷川から出土している。動物形(馬形)土製品や他の祭祀遺物にくらべ出土地が集中する傾向がみられ、宮川６区ＳＲ312で56点、宮川６区ＳＸ339で４点、宮川６区ＳＤ322で３点、宮川6区ＳＲ314で７点と宮川６区103列～104列の各遺構で70点と大半を占めている。さらには水上7区の旧河道で10点、西大谷川１・2区の旧河道で12点が集中している。この他では宮川４・５・６区包含層から13点が出土しているにすぎない。このうち集中出土した宮川６区の各遺構、水上７区、西大谷1・２区のものを取り上げて検討したい。特に出土数が多い宮川６区ＳＲ312と西大谷１・２区の資料は形態分類を試みたが伴出土土器に大きな年代幅があり個々の土製品はバラエティーに富むため問題点も多い。

動物形土製品は人形土製品にくらべ全地域を通して出土している。人形同様旧大谷川からの出土がほとんどであるが、微高地の溝や土坑などからの出土もあり土器を伴なった比較的小さなまとまりのものもみられる。集中出土した地点は宮川６区ＳＲ312で66点、宮川４区ＳＲ56で７点、水上７区旧大谷川で20点、西大谷１・２区で18点等であるが、このうち宮川６区ＳＲ312、水上７区、西大谷１・２区で形態分類を試みた。前述の土器を伴う比較的小さなまとまりの資料を参考にしながら年代を検討したが、人形同様にその編年はかなり困難であるといえる。

人形・馬形ともに完形品は少なく破損が激しい。一覧表に示したものはその形がある程度認識でき人形あるいは動物形と考えられる土製品である。この他に土製品の破片と思われるが形状がわからないものが多数あり、実際には数はもう少し増すと考えられる。

第Ⅲ章　各遺構出土の遺物

第１節　宮川３区ＳＸ 477 ～ＳＸ 484

宮川３区の北部に弧状に拡がる低湿地地形があり、粘土層の静穏な堆積により埋没していく過程で大量に遺物が投棄された。この中で、一括性が認められる遺物集中部が８ケ所確認された。ＳＸ 477 ～ＳＸ 484 である。これらの一群は、わずかではあるが須恵器をともなっており、古墳時代の中期～後期の土師器の様相を考えるには、本遺跡の中では比較的まとまった資料である。そこで実測可能な破片はすべて実測しほとんど全ての土器を図として紹介することとした。

1.　ＳＸ 477（第５図～第８図）

５ｍ×３ｍの範囲に広がる。土師器の坏を主体とし、わずかに甕・壺の破片が混じる。また20×40㎝程度の大きさの礫が土器とともに投棄されている。

須恵器

須恵器は全部で７点である。小破片ではあるがあえて図とした。坏蓋は１点のみで径 14.5㎝高さ 4.3㎝頂部は大きくヘラ削りされている。坏身は６点あり径14～ 13.5㎝で立ち上がりも低く内傾している。２は立ち上がりが若干高く器高も 4.1 ㎝を測り、ヘラ削りも上部まで及んでいるが、口径は 13.9㎝とほぼ同じである。３も小破片であるが立ち上がりが高くヘラ削りも上部まであり２と同様であろう。最大径 11.5 ㎝程度である。４・５・６・７は立ち上がりも低くヘラ削りの位置も低い。４は最大径 14.2㎝高さ 2.7 ㎝、５は最大径 13.8㎝高さ 3.5 ㎝である。このような違いはあるが大わくとしてこれらは須恵器編年の第Ⅲ期後葉に位置付けられよう。

土師器

多量の坏の他に椀あるいは鉢と呼んだ方が良いもの・甕・甑・小型壺が出土している。図化可能なものを殆ど全て示しているので、その比率を理解していただけると思う。

坏は大きく２類に分けられる。丸底でゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾するものと、くの字状に屈曲し外側に開くいわゆる“鬼高期併行”の坏といわれるものとである。

前者の典型的なものは８～19で、表面の摩耗が著しくほとんど観察出来ないが、13では外面下半に横位のヘラミガキが観察でき、９・10・11なども同様の調整がなされていたと想定される。口縁にゆるやかなカーブでわずかに内傾しており、全体に器壁が厚くぼってりとはしているものの伝統的な坏の系譜をひいていると考えられる。８は口径 12.1㎝高さ 4.5 ㎝、９は口径 13.2㎝高さ 5.0㎝を測る。17・18・

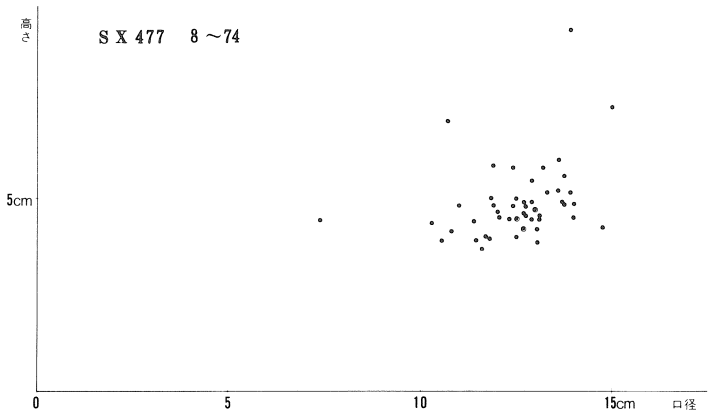
19では平底化の傾向が強く23では完全な平底となっている。肥厚化・平底化は後出の要素であろう。口径は12㎝～14㎝、高さ4㎝～5.5㎝が中心で大きなばらつきは無い。27・29等はその系譜は明瞭ではないが、とりあえずここにおいておく。

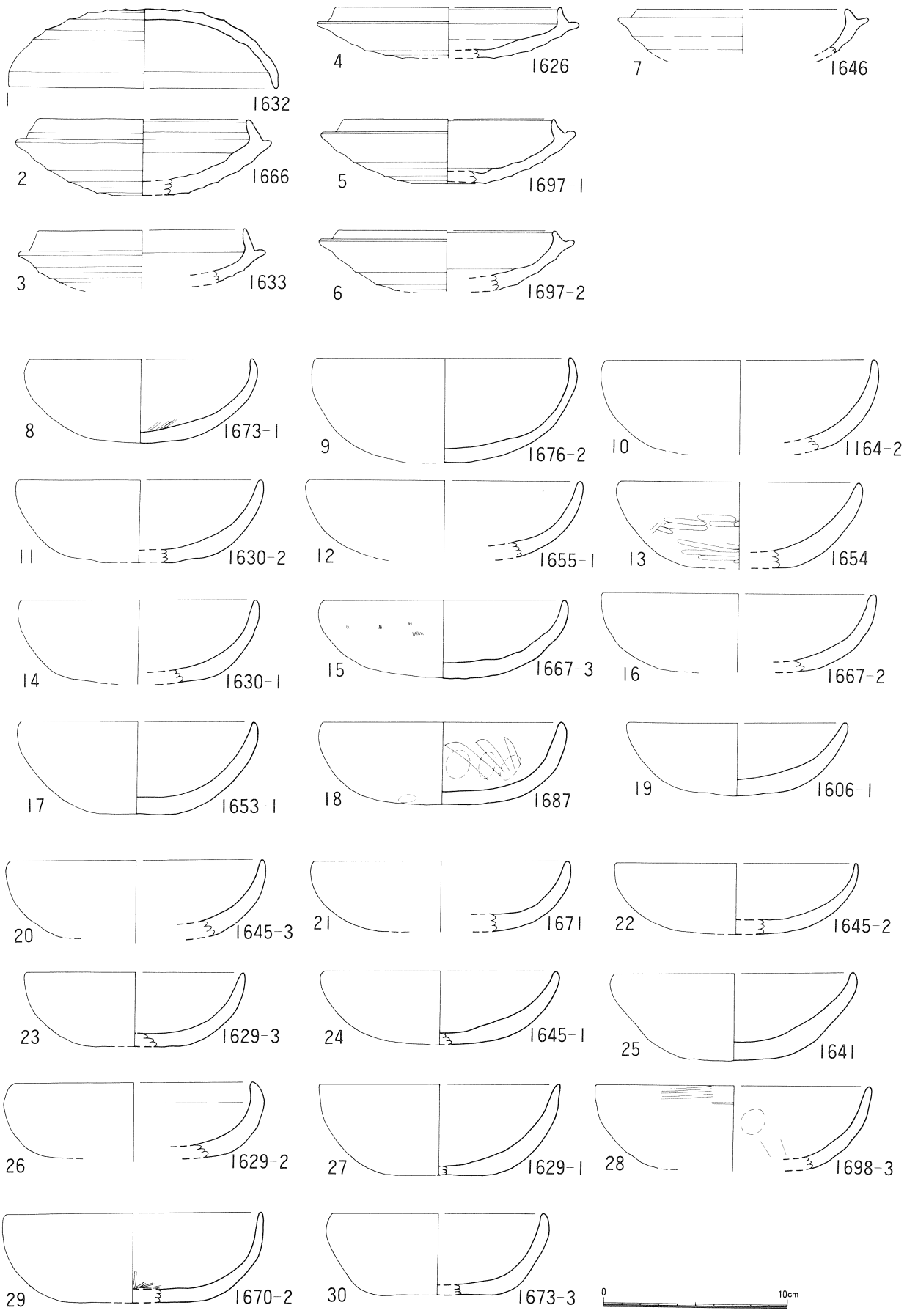
後者はいわゆる鬼高期並行の坏として、この地域の古墳時代後期に普遍的なものである。しかし関東の鬼高式とはその様相を異にし顕著なヘラミガキは認められず、胎土も粗く存地色の強いものである。口縁部は約⅔程度のところから大きく屈曲して外側に開く。調整はナデが基本で、口縁部はヨコナデ胴部下半および内面底部は不定方向のナデがほどこされている。内面底部にヘラミガキが施されているものもわずかではあるが認められるが、非常に稀で部分的である。口径は11㎝～14㎝、高さ4㎝～6㎝と若干巾が大きくなる。典型的な例として挙げられる40は口径14.1㎝高さ4.9㎝を測るものである。しかし31・32・33・43等の比較的小型のものは、器壁も薄く口縁部も鋭く外反しており、調整も丁寧である。細分される要素を持つものである。特に31・32は丸底の傾向が強くこれらの中では先行する要素を持つものと理解したい。31は口径10.6㎝高さ3.9㎝を測り内面にヘラミガキの痕跡が観察される。36・40等を典型的なタイプとし、底部が平底気味となるもの（51・55等）・口縁部の屈曲が弱く直立するようにみえるもの（56・59・60・62・65等）など変化に富む。

大型のものをここでは碗として別に分けた。69は坏のC類をそのまま大型化したと言ってもいいもので、口径22㎝を測る。高さは7.5㎝程度が推定出来よう。75・76も屈曲の度合いは弱いが同様のものである。68・70・71・72・73は口縁部が直立ないし内傾するものである。坏C類の変化の中で理解できそうであるが、71・73は屈曲部分が明瞭に付けられており特に71ではヘラケズリが丁寧に施されており注意を要する。

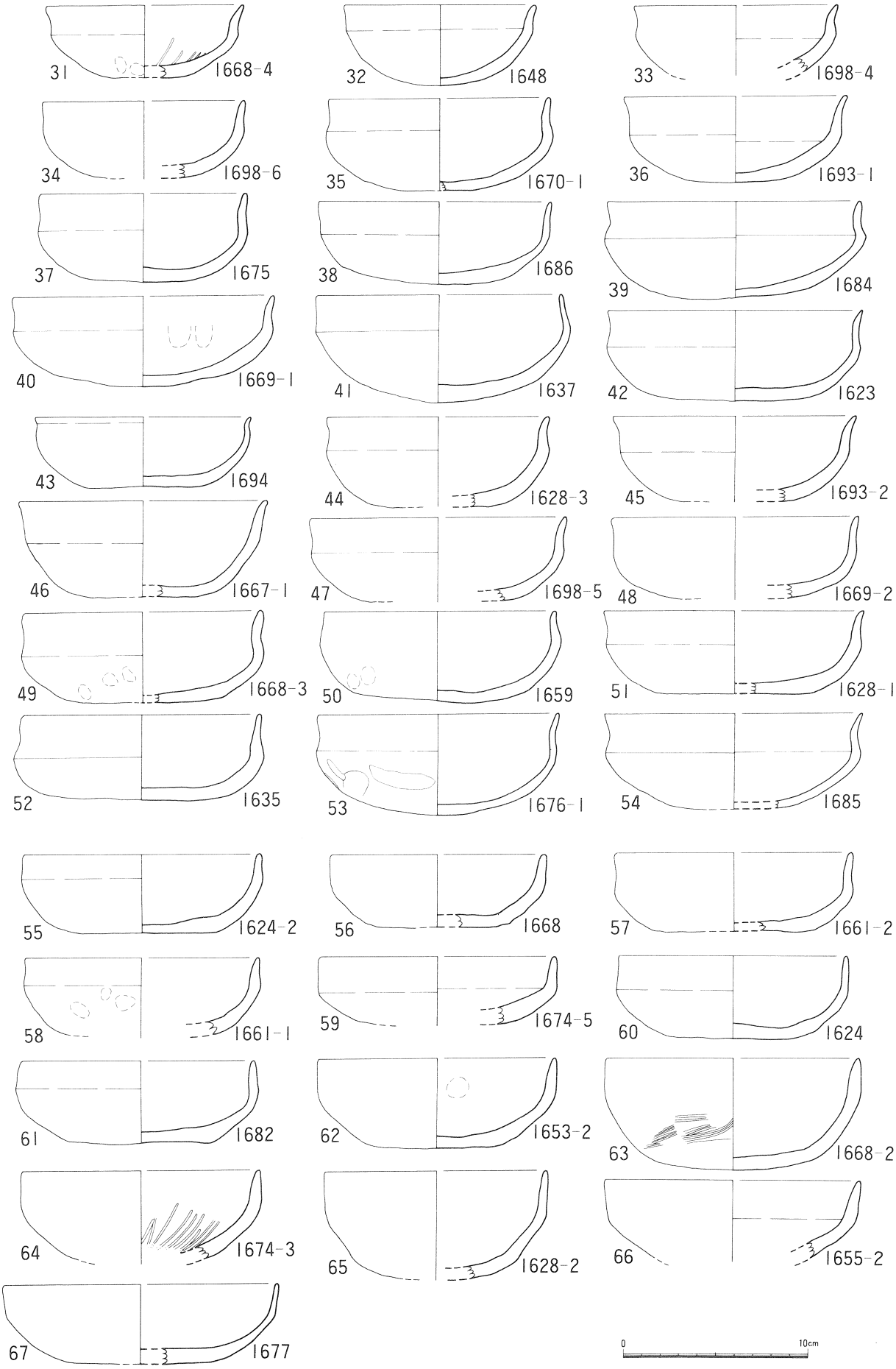
甕は全て破片で、全形を知りうるものは無い。頸部がくの字状に屈曲し、口縁内面を若干肥厚させるタイプのいわゆる駿東型の甕といわれるものが多い。86は例外的に緩やかなカーブを持って胴部に続くもので口径26.7㎝を測る。底部は平底となるものがほとんどと思われるが、台付となるものも検出されており混入の可能性がある。調整は口縁部が横ナデ・胴部がハケ目調整となるものが多い。

その他としては、甑が3個体分検出されている。しかし全形を復元しうるものではない。

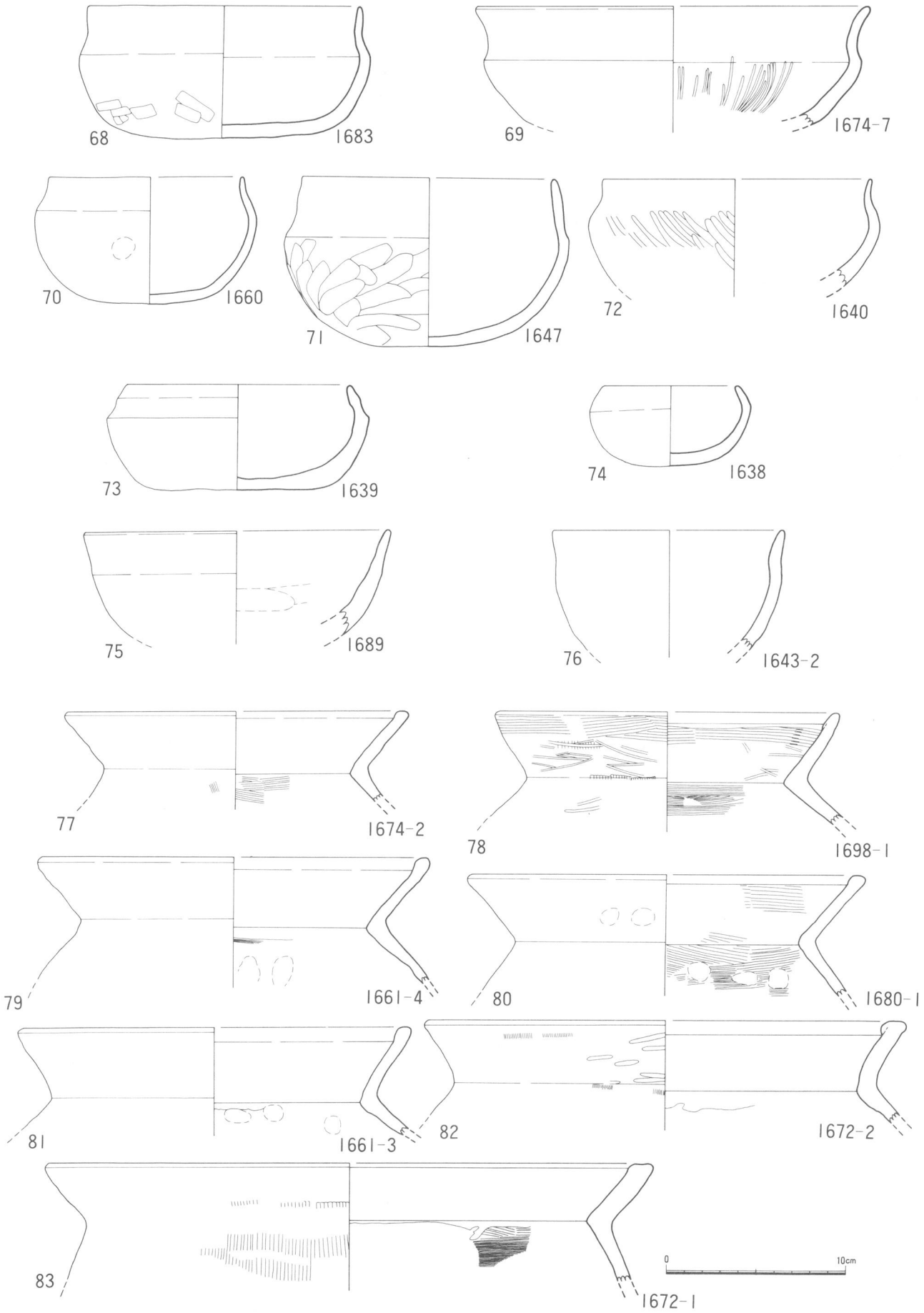




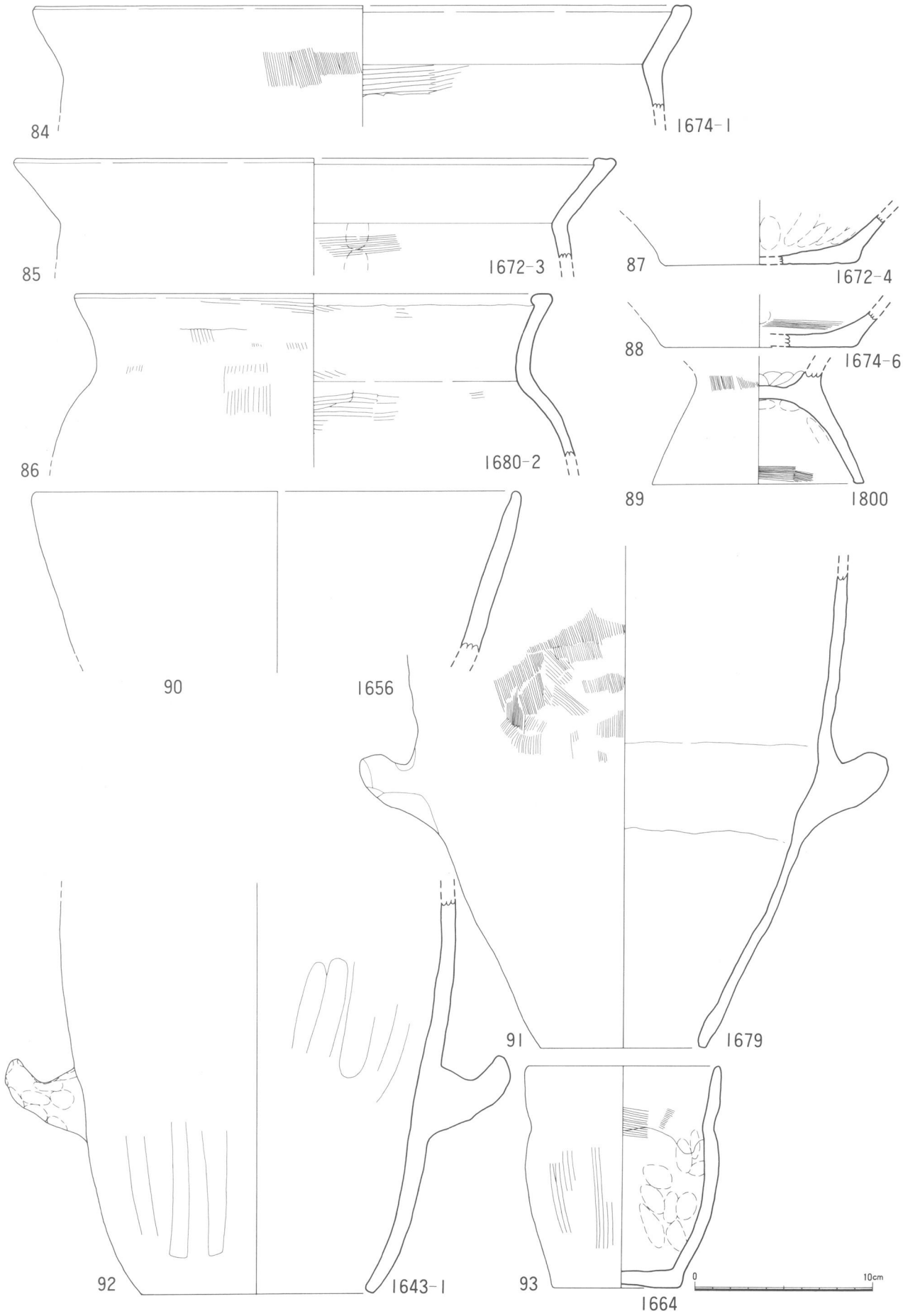
第5図　宮川3区SX477出土土器実測図1



第6図　宮川3区SX477出土土器実測図2



第 7 図　宮川 3 区 S X 477 出土土器実測図 3



第 8 図　宮川 3 区 S X 477 出土土器実測図 4

2. ＳＸ 478 （第９図～第12図）

3.5ｍ×2.5ｍの範囲に広がる。中心部に甕・甑が集中し周辺部に礫及び坏が多く認められる。馬形土製品１点、手捏土器１点が検出されている。

須恵器

須恵器は全部で７点である。坏蓋３・坏身３のほか蹴1点がある。１は径13.4㎝高さ4.4㎝頂部は大きくヘラ削りされ平坦面が作り出されている。肩部には沈線がめぐらされている。２は口径12㎝高さ3.6㎝、３は口径12.2㎝で１にくらべて後出の要素を持つものであろう。坏身はいずれもほぼ同じで最大径14㎝前後である。４は最大径14.2㎝高さ3.7㎝をはかる。立ち上がりも低く内傾しており口径12㎝である。３は最大径13.5㎝であるが焼け歪みがあり正確な計測は出来ない。坏蓋には若干の時期差があるが、身は須恵器編年の第Ⅲ期後葉に位置付けられよう。

土師器

多量の坏の他に椀あるいは鉢と呼んだ方が良いもの・甕・甑が出土している。

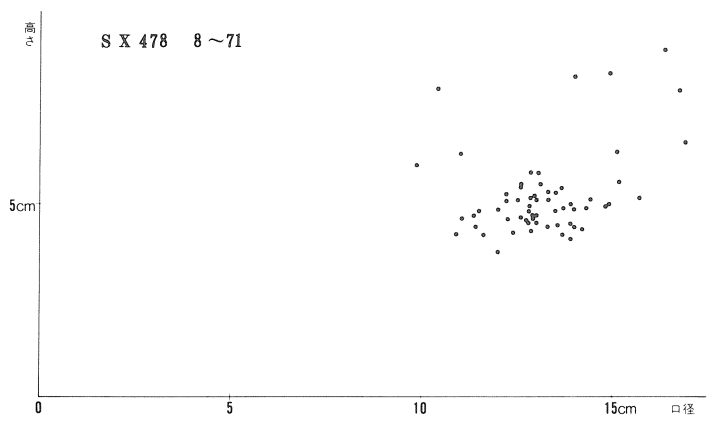
坏は大きく２類に分けられる。丸底でゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾するものと、くの字状に屈曲し外側に開くものとである。

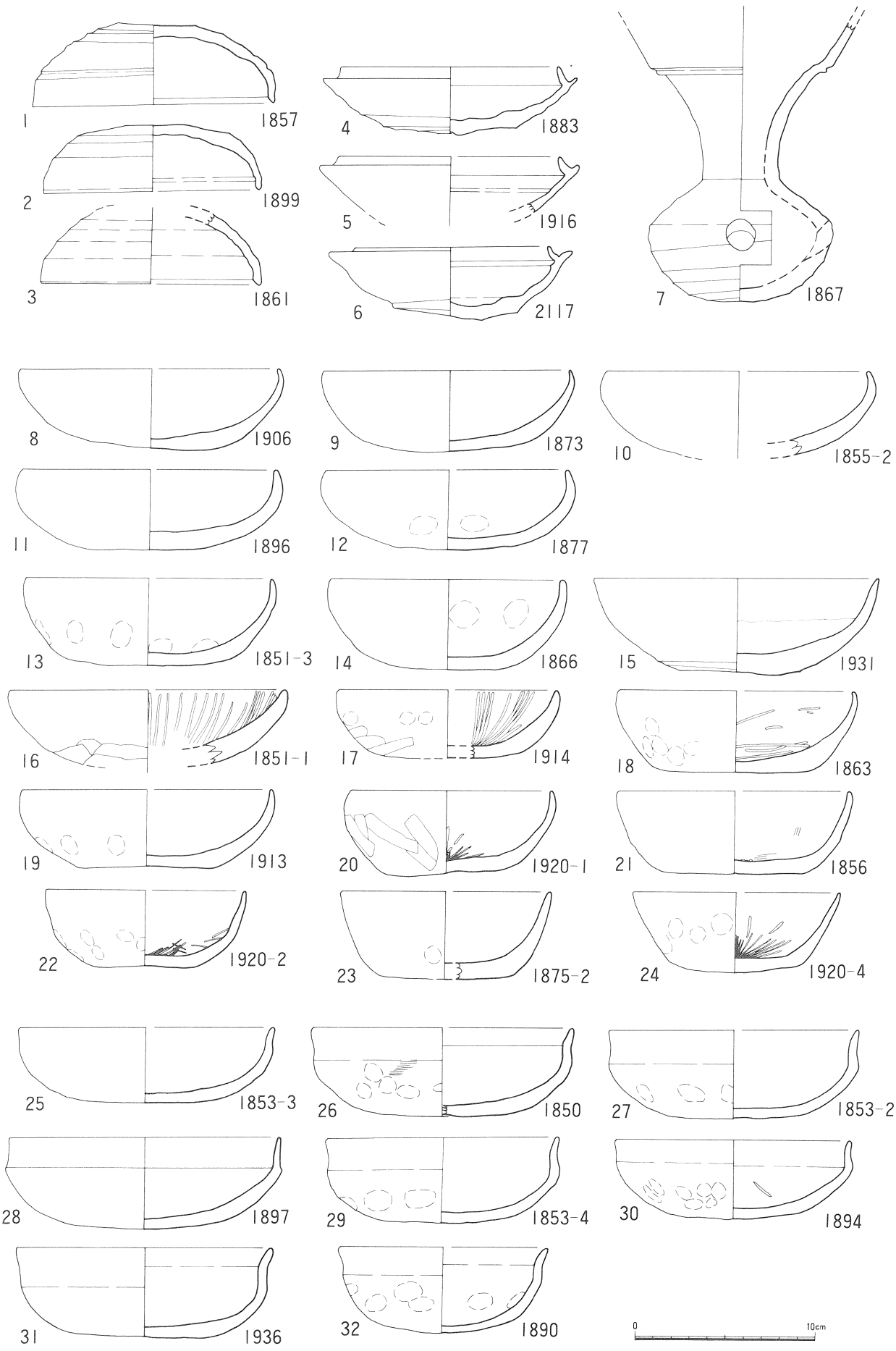
前者の典型的なものは８～12で、口唇部は鋭く内傾する。表面の摩耗が著しくほとんど観察出来ないが、９では内面にヘラミガキによる調整痕わずかではあるが観察できる。11・12は器壁が厚く口縁部も厚く造られているが、８・９では薄く鋭く内傾している。伝統的な坏の系譜をひいていると考えられる。

13～24は平底で口縁が内傾もしくは内傾気味に立ち上がるものをまとめた。しかし22～24はむしろ後出するいわゆる箱形坏と形態的に類似し、その系譜を考える上では注意を要する。

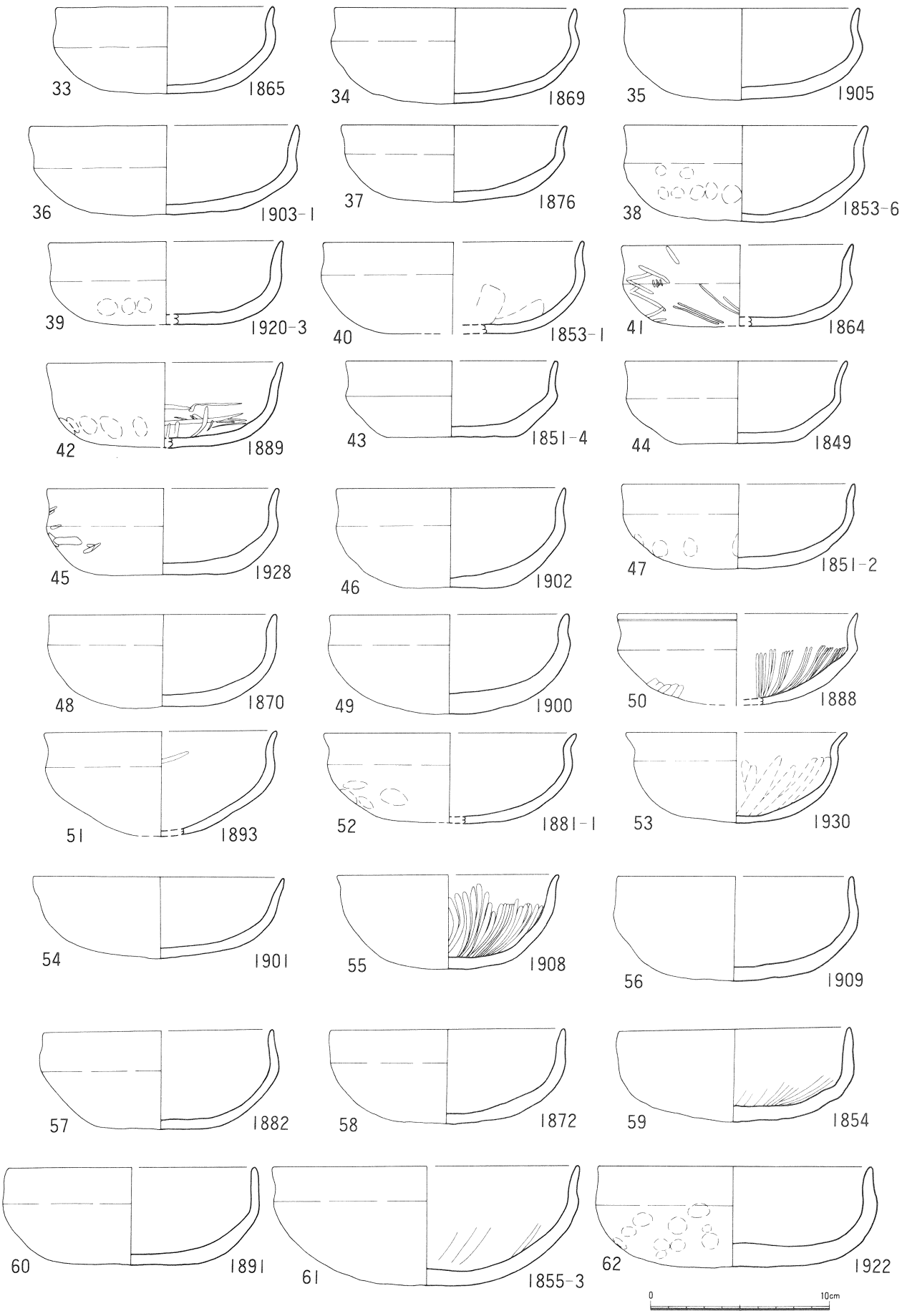
後者はいわゆる鬼高期並行の坏として、この地域の古墳時代後期に普遍的なものである。口縁部は器高の⅔程度のところから大きく屈曲して外側に開く。調整はナデが基本で、口縁部はヨコナデ胴部下半および内面底部は不定方向のナデがほどこされている。内面底部にヘラミガキが施されているものもわずかではあるが認められるが、非常に稀で部分的である。口径は12㎝～15㎝、高さ4.5㎝～6㎝と若干大きくなる。また61の様に口径17㎝高さ6.5㎝を測る大型のものもある。底部が平底気味となるもの(43・44・45等）・口縁部の屈曲が弱く直立するようにみえるもの（58・59・60等）など変化に富む。

大型のものをここでは碗として別に分けた。大・中・小の３にわけられそうで、法量の分化の傾向を指摘出来そうである。66が最も大きく口径16.5㎝高さ９㎝を測る。71が最も小さく口径10㎝高さ６㎝である。甕は全て頸部がくの字状に屈曲するものである。73は胴部の一部を欠くが球形の胴部をもつものである。74も同類として良いであろう。他の一つは81のように胴部上半に最大径を持つもので79はこれと同類であろう。その他としては、甑がある。84も甑の破片とかんがえておきたい。

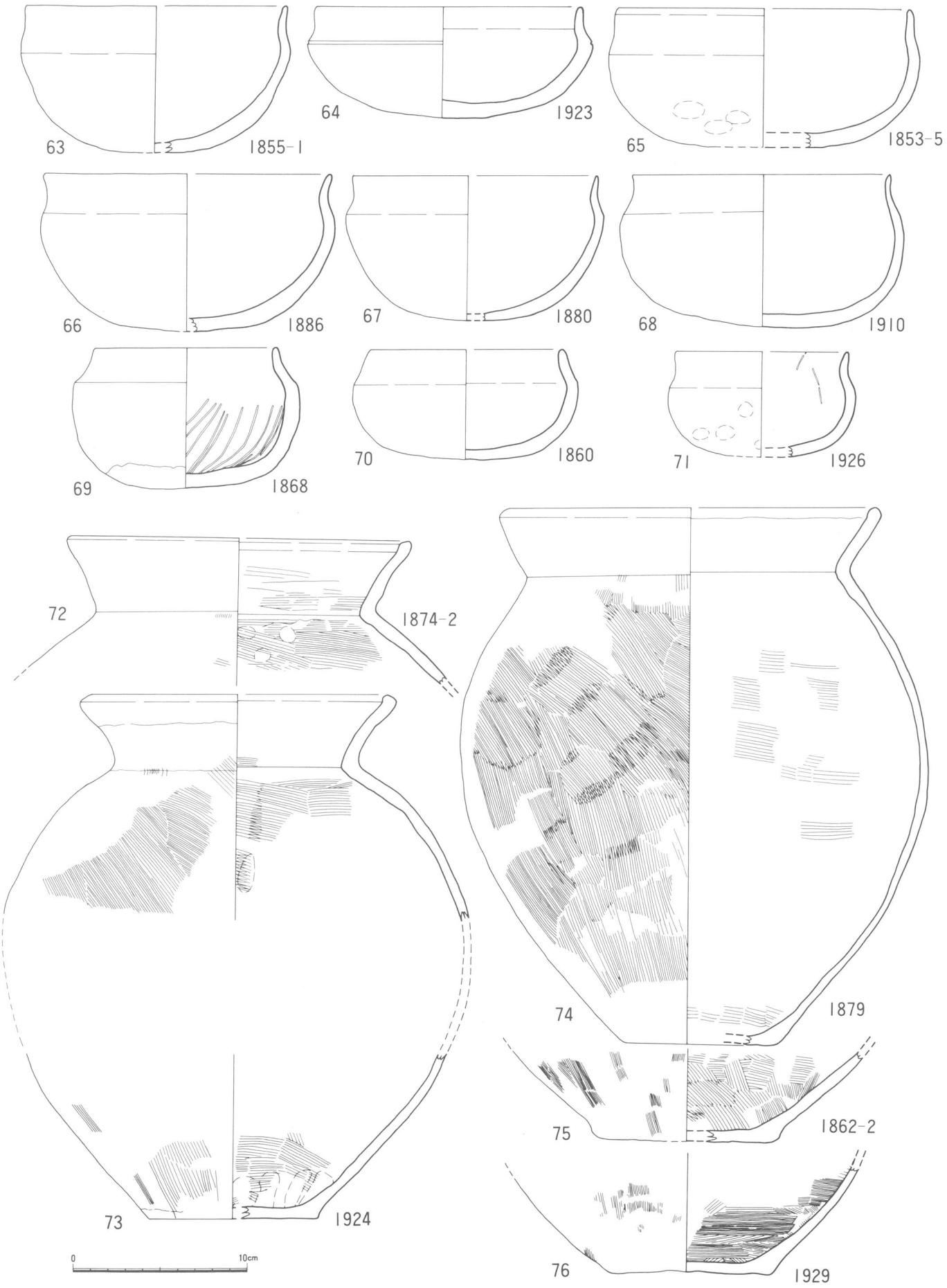




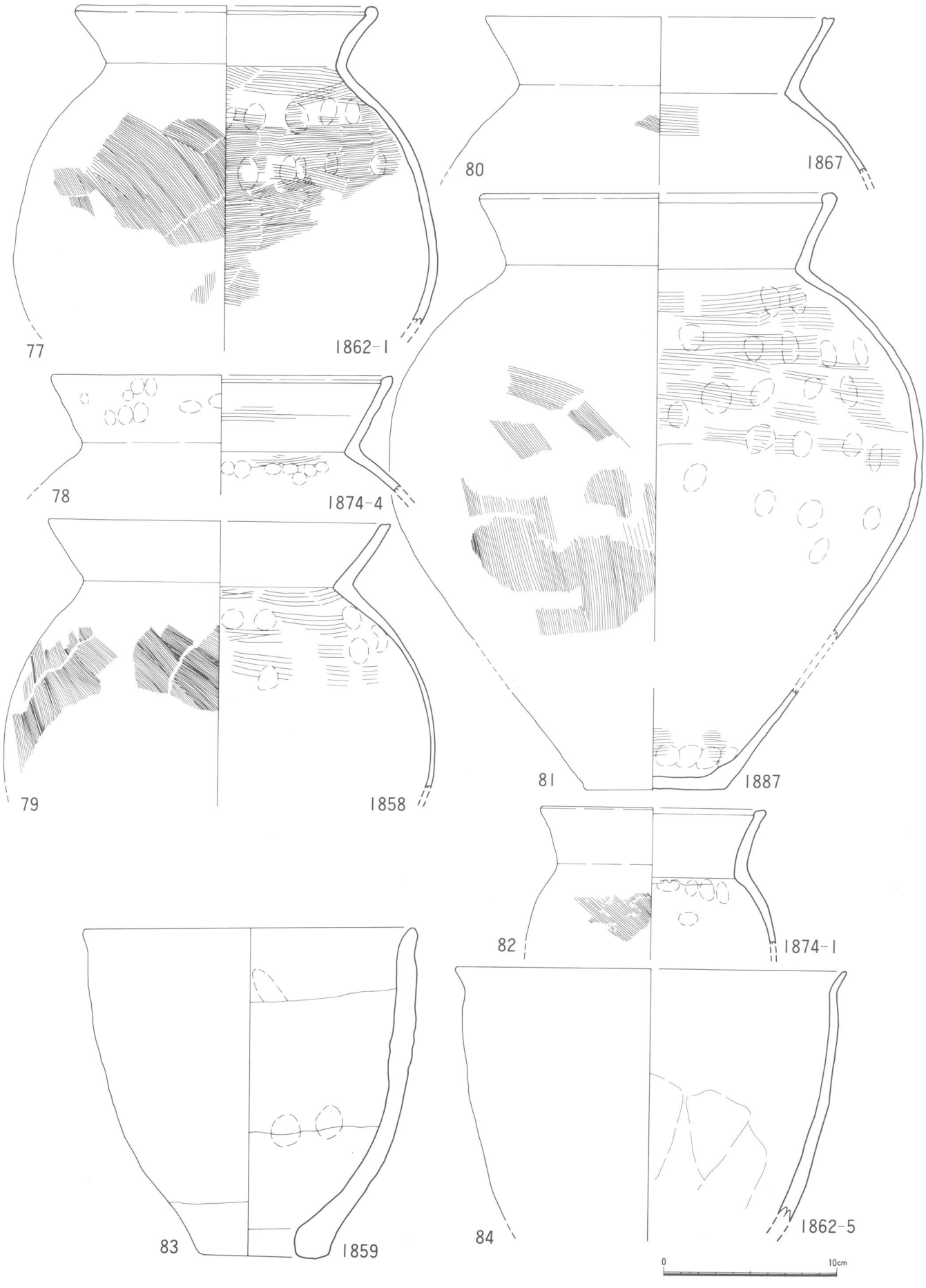
第 9 図　宮川 3 区 S X 478 出土土器実測図 1



第10図　宮川3区SX478出土土器実測図2



第11図　宮川3区SX478出土土器実測図3



第12図　宮川3区SX478出土土器実測図4

2. ＳＸ479　（第13図～第16図）

宮川３区Ｈ96・196グリッドで検出された遺物集中部で、4.5ｍ×2.5ｍほどの範囲に拡がる。特に中央部には顕著な集中部分が認められた。中央の集中部分は土師器の坏が多く、完形品の口径の異なるものが２点あるいは３点重なって検出されている。そのほかに馬型土製品６点、石製丸玉が検出されている。馬形土製品のうち１点（第16図１）は、中央の集中部分のほぼ中央に位置し土器の上に乗ったような状態で検出されており、注目される。

須恵器

須恵器は全部で13点である。坏蓋３・坏身９のほか小型の椀形土器が１点ある。坏蓋は口径11.5～9.4㎝の巾があり身との組み合わせにより３に細分した。２は最大径12.2㎝口径10.1㎝高さ4.0㎝蓋受けの立ち上がりが鋭く高さ0.7㎝あまりと比較的高い。底部は回転ヘラケズリされているがその範囲は狭い。２も最大径12.1㎝高さ4.3㎝を測り蓋受けの立ち上がりも比較的高い。５は最大径10.8㎝高さ3.6㎝蓋受けの立ち上がりは低くなっている。６も最大径11.0㎝蓋受けもずんぐりとして低く内傾している。７・８も同様である。10は最大径10.9㎝高さ3.3㎝を測り蓋受けも低くずんぐりとしている。11は径10.5㎝高さ3.5㎝、12は径10.0㎝高さ3.9㎝を測り最も小型化した一群であろう。

蓋と身を口径により組み合わせると、１～３、４～８、９～12の３グループに分けることが出来よう。現在の須恵器編年でいえば１・２・３は第Ⅲ期後葉に、９・10・11・12は第Ⅳ期前葉に位置付けられるものである。

土師器

多量の坏の他にわずかではあるが甕・高坏・小型壷が出土している。

坏はいわゆる鬼高期並行のものが圧倒的であるがわずかの例外として14・15・16がある。14は口径11.7㎝高さ4.9㎝、15は口径10.2㎝高さ4.7㎝を測り、いずれも平底気味の底部からゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内湾する。表面の摩耗が著しく調整痕はほとんど観察出来ないがナデが主体と思われる。Ｂ類とした伝統的な坏の系譜をひいているものの流れを汲んでいると考えられる。16は口径12.7㎝高さ5.0㎝、球を半裁したような丸底で器壁も厚く大きな変化はなく口縁部のみ丸くまとめられている。ナデ調整で外面はナデの痕が明瞭に残る。底部は木葉痕である。他のものとは系譜を異にすると考えられる。

他はいわゆる鬼高期並行の坏として、この地域の古墳時代後期に普遍的なものである。口縁部は器高の⅔程度のところから大きく屈曲して外側に開く。調整はナデが基本で、口縁部はヨコナデ胴部下半および内面底部は不定方向のナデが施されている。調整は荒く18・33・36などのように指頭圧痕の残るものも比較的多く認められる。内面底部にヘラミガキが施されているものもわずかではあるが認められるが、非常に稀で部分的である。19は口径11.6㎝高さ5.1㎝を測るものでこの類の平均的なものであろう。全体に小型化を指適することができる。法量では17～28の大型のものと29～68の小型のものとに分けることができ、量的には口径は10㎝～12㎝、高さ４㎝～5.5㎝のものが主体となりＳＸ477・ＳＸ478に

比べると若干小型化している。全体に平底の傾向は強く丸底のものは19・29・34・36・49・53ときわめて少ない。

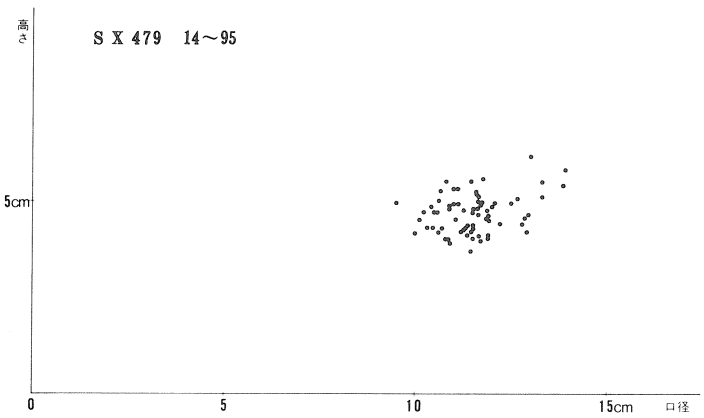
形態的には、口縁により3に細分しておく。37～68のように口縁が大きく外に開くもの、69～79のように口縁が直立するものである。

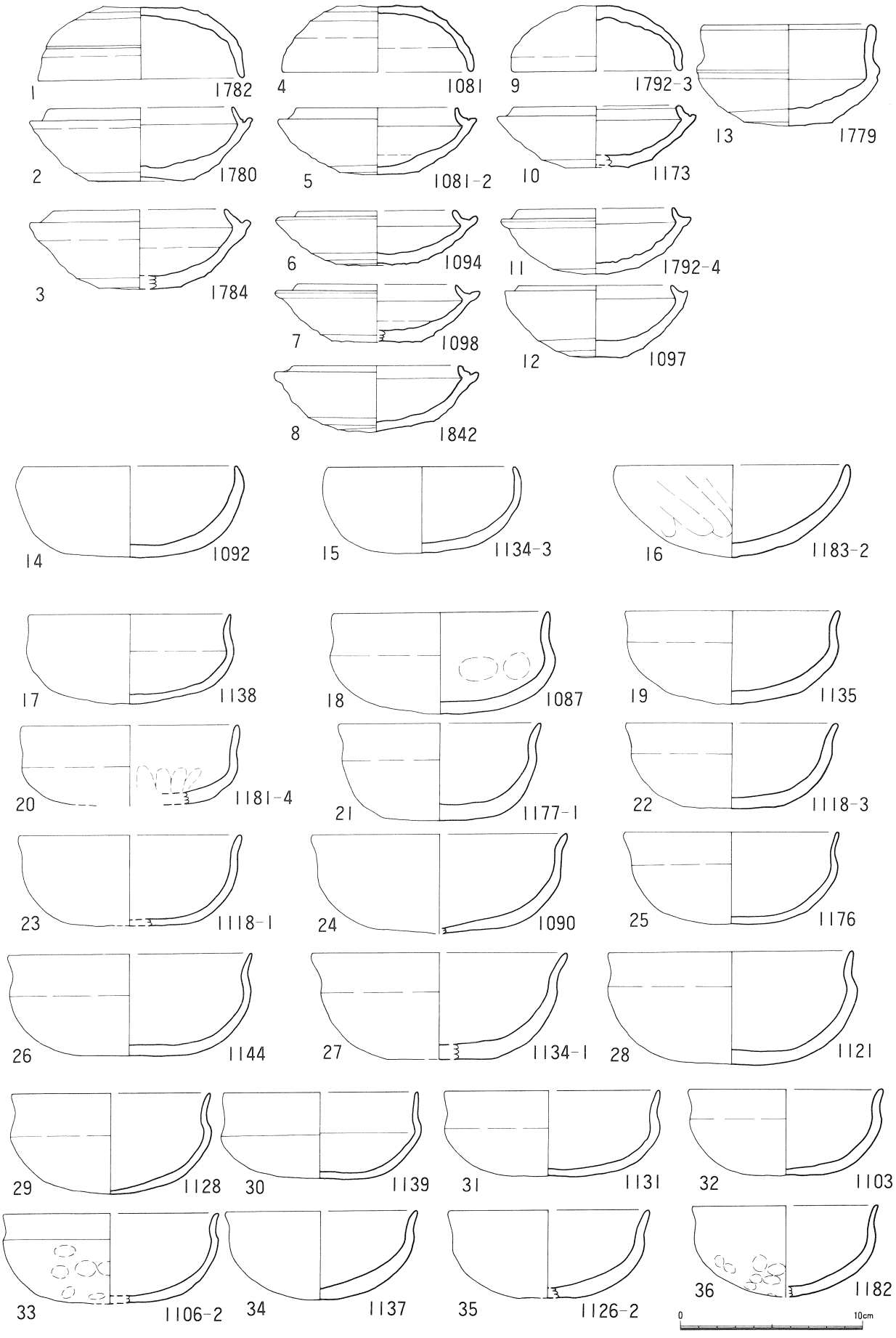
80～86・89は平底化の顕著なもので、89は口径12.2㎝高さ5.1㎝箱形と呼んでもよいほどの断面形を持つ。しかし口縁の形態は明らかに坏C類の特徴を残している。90もこのような変化の中での一形態であろう。

また91～95の様に、口径に比して高さのあるものを椀として別にした。91は口径13.2㎝高さ6.2㎝と高さがほぼ口径の½あまりと深いものである。92は口径9.6㎝高さ4.9㎝と小型品である。93・94・95は中型品で、94で口径11.5㎝高さ5.2㎝を測る。技法的には坏C類と全く同様である。

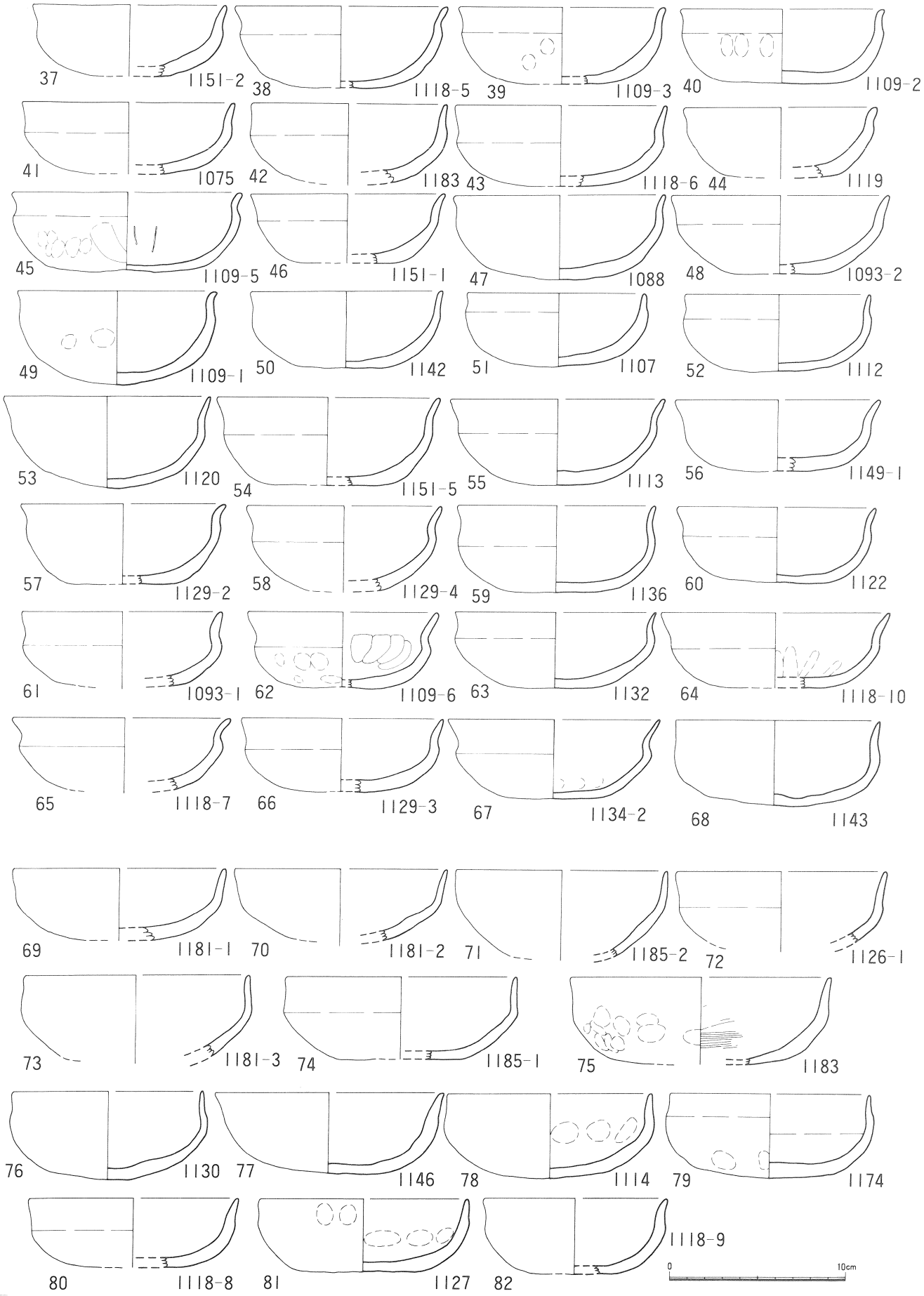
甕は大型2点小型のもの2点を図化することが出来た。大型の2点は頸部がくの字状に屈曲するもので、102は胴部の一部を欠くが比較的長い胴部をもつものである。96は口径16.3㎝と小型であるが、それよりも球形に近いと推定されよう。口唇の内面を若干肥厚させ、頸部から胴部へ大きくくの字状に屈曲させる。調整は内外面ともハケ調整で内面には指頭圧痕が観察できる。いわゆる駿東型の甕といわれるものの祖型であろう。97は口径10.8㎝、98は口径12.8㎝で胴部から底部にかけては不明であるが小型の甕ないしは鉢と考えられよう。101は頸部から上を欠くが小型の壺である。

100は高坏の脚部で中空の脚部に坏部を挿し込んだ状況を観察することができる。

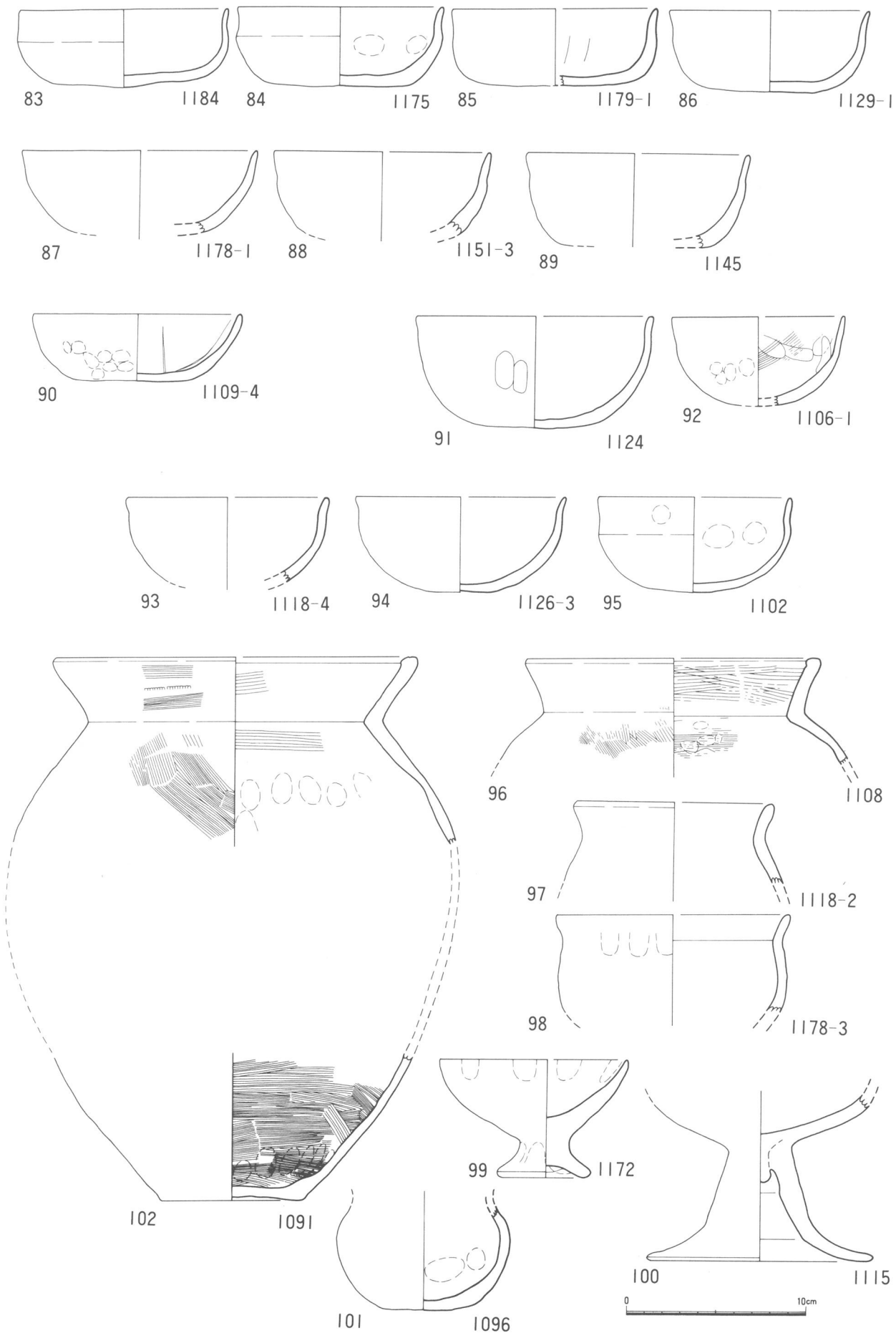




第13図　宮川3区SX479出土土器実測図1



第14図　宮川3区SX479出土土器実測図2

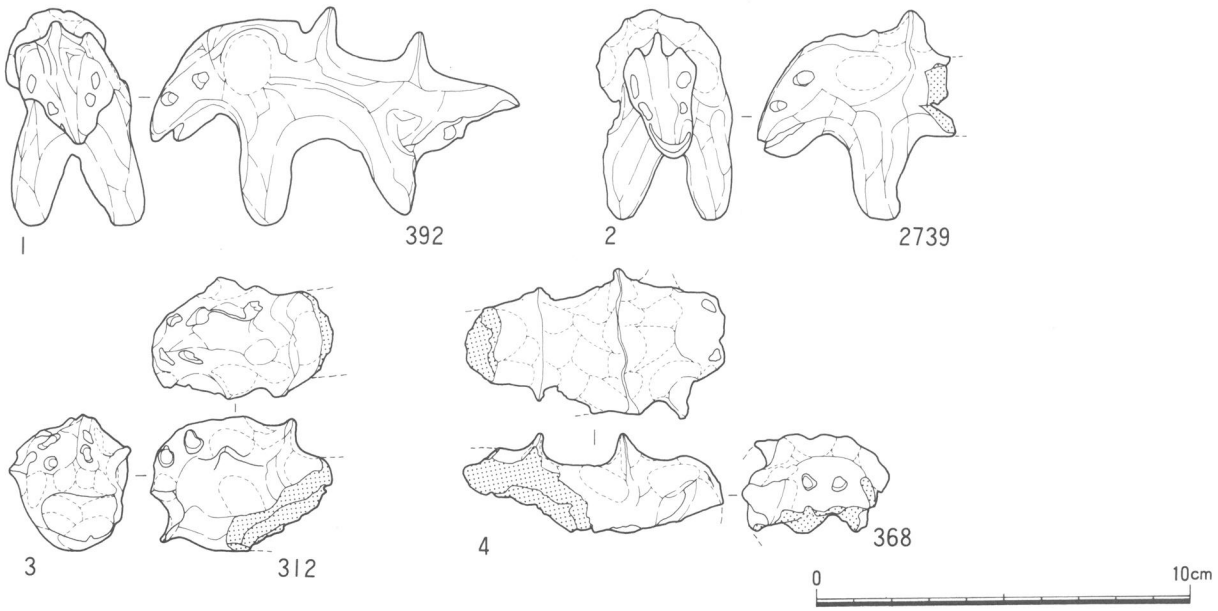


第15図　宮川3区SX479出土土器実測図3

馬形土製品　ＳＸ479は馬形土製品6点が出土している。これらは形態上二分される。ひとつは埴輪馬を彷彿とさせるような形状で、他のひとつは子どもの粘土細工のような粗製のものである。図示した1・2は前者にあたり、3・4は後者である。

1は左後脚の一部を欠損するがほぼ完形である。長さ9.75㎝、高さ5.75㎝、幅3.65㎝を測る。胴部断面は蒲鉾形を呈し、背に幅1㎝ほどの帯状粘土を2列貼付し鞍としている。頭部・尾部はそれぞれ別につくり貼付しているようである。尾の長さ2.2㎝ほどで先細となり、頭部は長さ2.4㎝ほどで胴部の方向軸に対し下方に50°ほどの角度で貼付されている。胴部前半身から頭部にかけての背面にはたてがみおよび耳の表現がみられる。これは胴部の粘土をヘラ状器具で縦に2本溝状に削り取り、中央に残した帯状部分をたてがみに両側を耳とし、最後に耳の外側から2本の指ではさんで押圧し整形している。顔は先端をヘラ状器具で深さ0.7㎝ほどの切り込み口をあらわし、両側面に上下2対の径0.3㎝ほどの棒状器具による刺突孔があり目と鼻を表現している。刺突孔はいずれも0.5㎝ほどと比較的深い。尾の直下には径0.4㎝、深さ1.4㎝ほどの棒状器具による刺突孔がある。尻穴の表現であろう。脚は径0.8㎝、長さ2.1㎝ほどで別につくり貼付している。2は1と同形態であるが後半身を欠損する。形状・顔面の表現など1とほぼ同じであるが、たてがみが1は長さ3㎝におよんでいるのに対し、2は2㎝ほどで溝状の削り込みも浅い。1・2と同形感と考えられる破片は他に2点ある。

3は頭部のみ残存していた。頭部断面はたて長の長円形を呈し、両側面に粘土をつまみ出してつくった耳があり、口は正面の粘土を上下2列にわたり帯状につまみ出して表現している。頭部上方には径0.3㎝ほどの棒状器具による刺突孔が4孔あり目と鼻を表現している。背面には帯状粘土が横方向に貼付され鞍の表現と考えられる。4は下部半分を欠損する。背に鞍が貼付され、胴と方向を同じくして頭部が連続している。頭部側面には耳が貼付され、正面には径0.3㎝ほどの棒状器具による刺突孔が2孔みられる。この孔の下の欠損端部には刺突孔と考えられる痕跡があり、上段2孔が目、下段が鼻であろう。3・4は外見上は馬とは思えないが、背に鞍が貼付されていることから馬形土製品と考えたい。



第16図　宮川3区ＳＸ479出土土製品実測図

4. ＳＸ480（第17図）

２ｍ×２ｍほどの範囲に拡がる。土師器の坏を主体とするが、他に手捏土器１・石製丸玉１が共伴している。

須恵器

須恵器は全部で坏蓋１・坏身１の２点のみである。１は坏の蓋で口径12.0㎝高さ4.8㎝である。肩部にわずか段を有する。２は坏の身で最大径12.2㎝高さ3.6㎝蓋受けは厚く立ち上がりは低い。全体的に厚くぼってりしたつくりである。現在の須恵器編年でいえば第Ⅲ期後葉のなかでも比較的あとの段階に位置付けられるであろう。

土師器

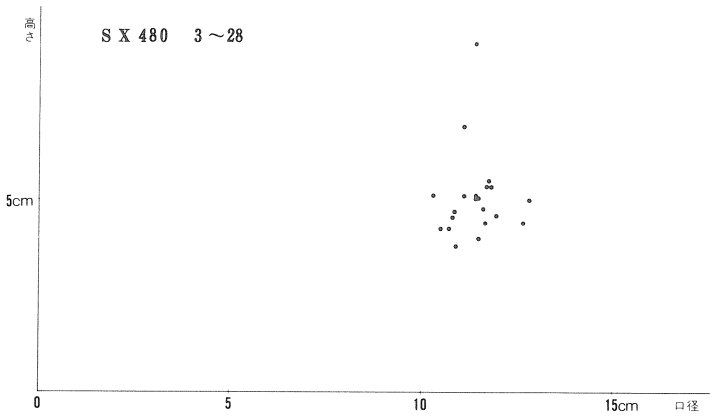
遺物の量は他のＳＸを冠したものに比べると非常に少ない。坏22点・椀４点・小型壷？１点・甕１点が図化出来たのみである。

坏はいわゆる鬼高期並行のものが圧倒的であるが例外として３がある。口径15.8㎝をはかるが小破片からの復元でありもうすこし小さくなるかも知れない。平底気味の底部からゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾する形態をとるであろう。表面の摩耗が著しく調整痕はほとんど観察出来ないが外面下半にヘラケズリ様の調整がわずかに観察出来る。Ｂ類とした伝統的な坏の系譜をひいているものの流れを汲んでいると考えられる。

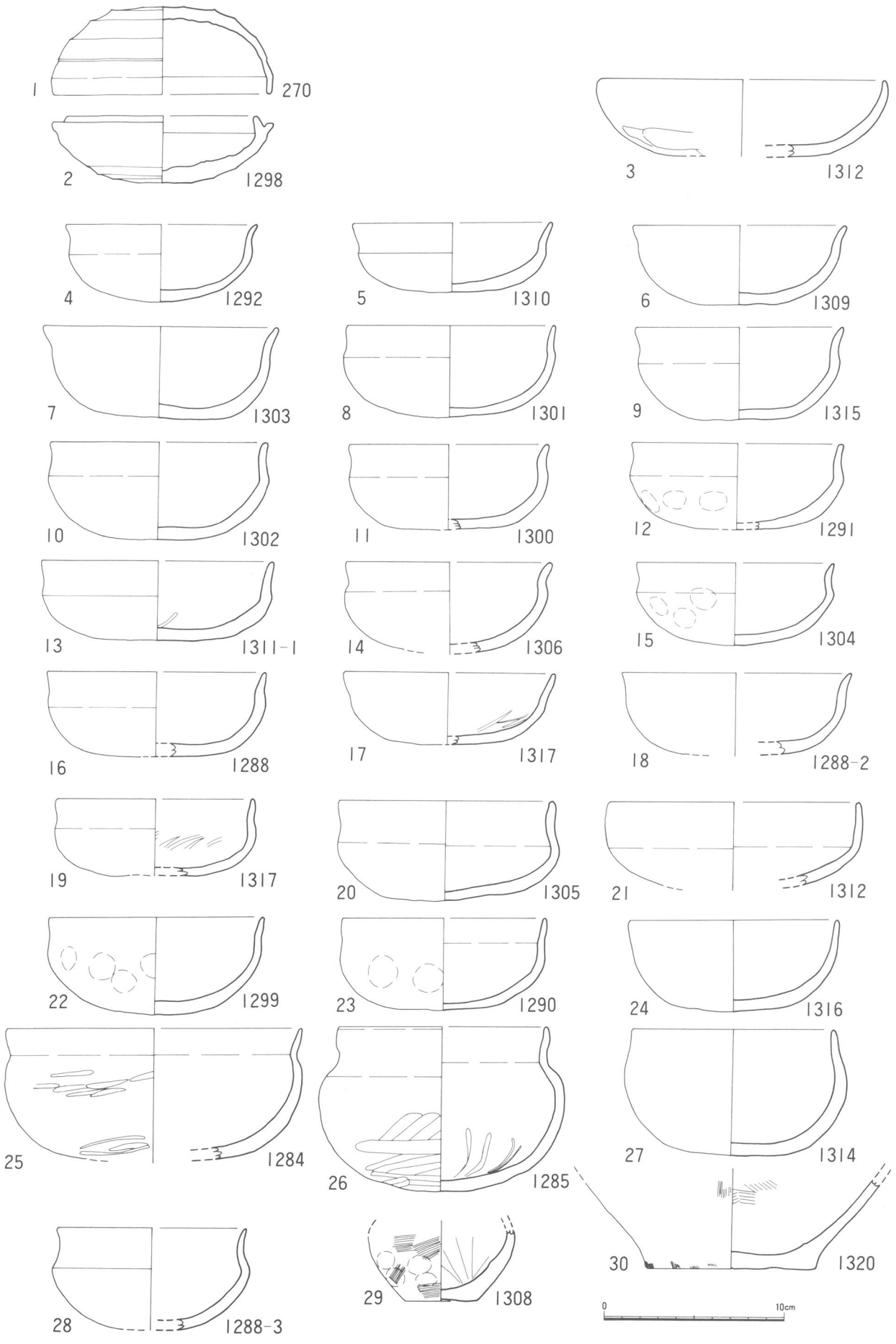
他はいわゆる鬼高期並行の坏として、この地域の古墳時代後期に普遍的なものである。口縁部は器高の⅔程度のところから大きく屈曲して外側に開く。調整はナデが基本で、口縁部はヨコナデ胴部下半および内面底部は不定方向のナデがほどこされている。

形態にはいくつかの細かい変化があり、４・５の様に大きく外に開くもの、21の様に口縁が真直ぐたちあがるもの、22・23・24の様におおきな屈曲もなくのびるものなどのバラエティがある。口径は10㎝～12㎝で高さ4.0㎝～5.5㎝と比較的小型のものでまとまっている。

25～28の４点を椀形のものとして一括したが、26は口径11.5㎝高さ9.0㎝でむしろ壷と表現しても良いくらいのものである。しかし技法的には大きな違いはない。大・中・小のバラエティがあり、25は口径16.2㎝高さ7.3㎝と大きくヘラケズリが観察される。27は口径11.2㎝最大径12.3㎝高さ6.9㎝、28は口径10.3㎝高さ5.6㎝と小型である。



29は底部のみであるが、小型の壷となるであろうか。そのほかに甕の破片が若干あるが図化できたのは30の底部のみである。



第17図　宮川3区SX480出土土器実測図

5. ＳＸ 481（第18図～第23図）

巾１ｍ長さ６ｍあまりと南北に長く拡がり、低湿地埋没段階での岸線に沿って投棄されたものと推定される。北半は大型の礫が多く土師器の甕・甑がみられ、南半は土師器の坏が主体である。

須恵器

須恵器は全部で６点ある。坏蓋１・坏身３・高坏１・横瓶１が数えられる。１は坏の身で口径12.2㎝最大径14.3㎝高さ推定約4.5㎝である。蓋受けはまっすぐに立ち上がりその高さは1.8㎝を測る。２は坏の蓋で口径13.0㎝高さ4.1㎝である。頂部にはヘラケズリの跡が大きく残る。３は坏の身で最大径13.2㎝高さは歪みはあるが3.0㎝あり蓋受けは低く内傾している。４は少し小さく最大径12.8㎝高さ2.8㎝を測る。５は高坏の脚部で小破片のため詳細はつかめないが長脚二段透かしであろう。６はいわゆる俵壷で長さ26.1㎝高さ21.9㎝を測る。現在の須恵器編年でいえば１は第Ⅱ期後葉ないし第Ⅲ期前葉の段階に位置付けられるであろう。

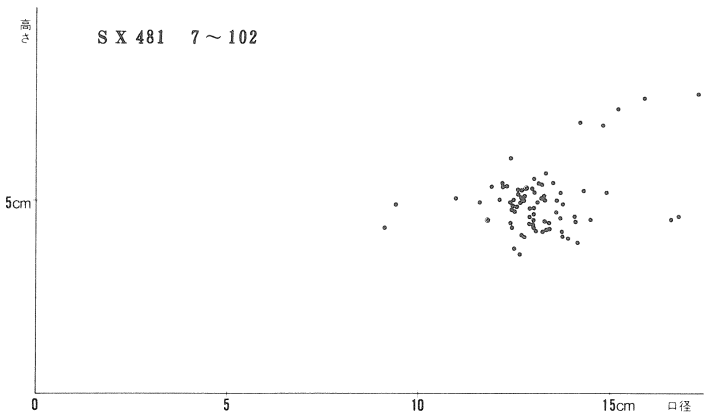
土師器

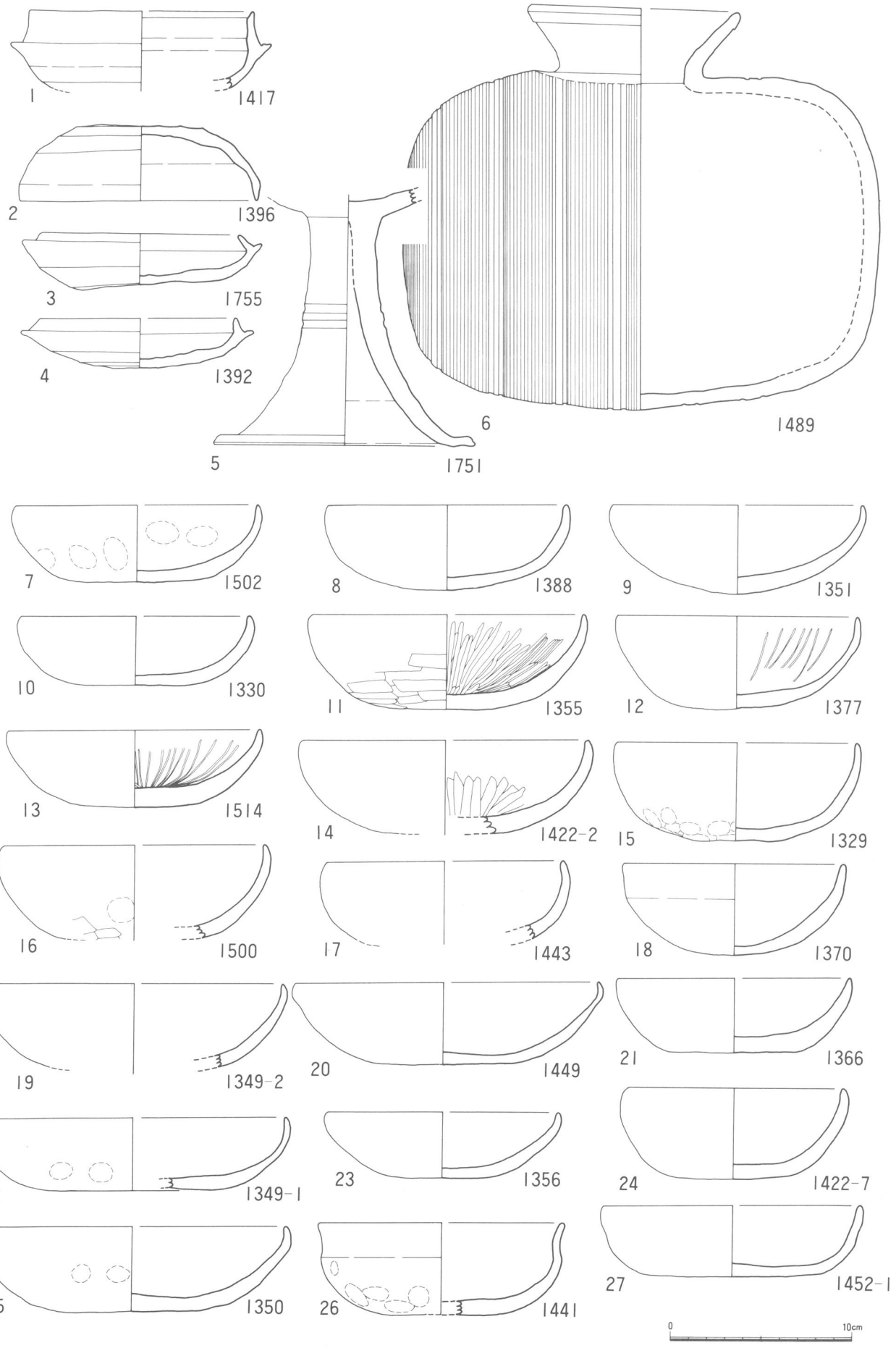
圧倒的に坏が多く、そのほかには高坏・甑・甕などがある。

坏はいわゆる鬼高期並行のものが圧倒的である。７～18は、丸底ないし平底の底部からゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾する形態をとるものである。口径13㎝～15㎝高さ４㎝～５㎝あまり、表面の摩耗が著しく調整痕はほとんど観察出来ないものが多いが、11・12・13では内面に放射状のヘラミガキが、また11の外面下半に横位のヘラケズリ調整がわずかに観察出来る。11のように内面の放射状のヘラミガキが丁寧なものは外面のヘラケズリ調整も丁寧に施されている。Ｂ類とした伝統的な坏の系譜をひいているものの流れを汲んでいると考えられる。19・20・22・25は皿状を呈するもので、いずれも口径17㎝前後高さ4.5㎝程度である。

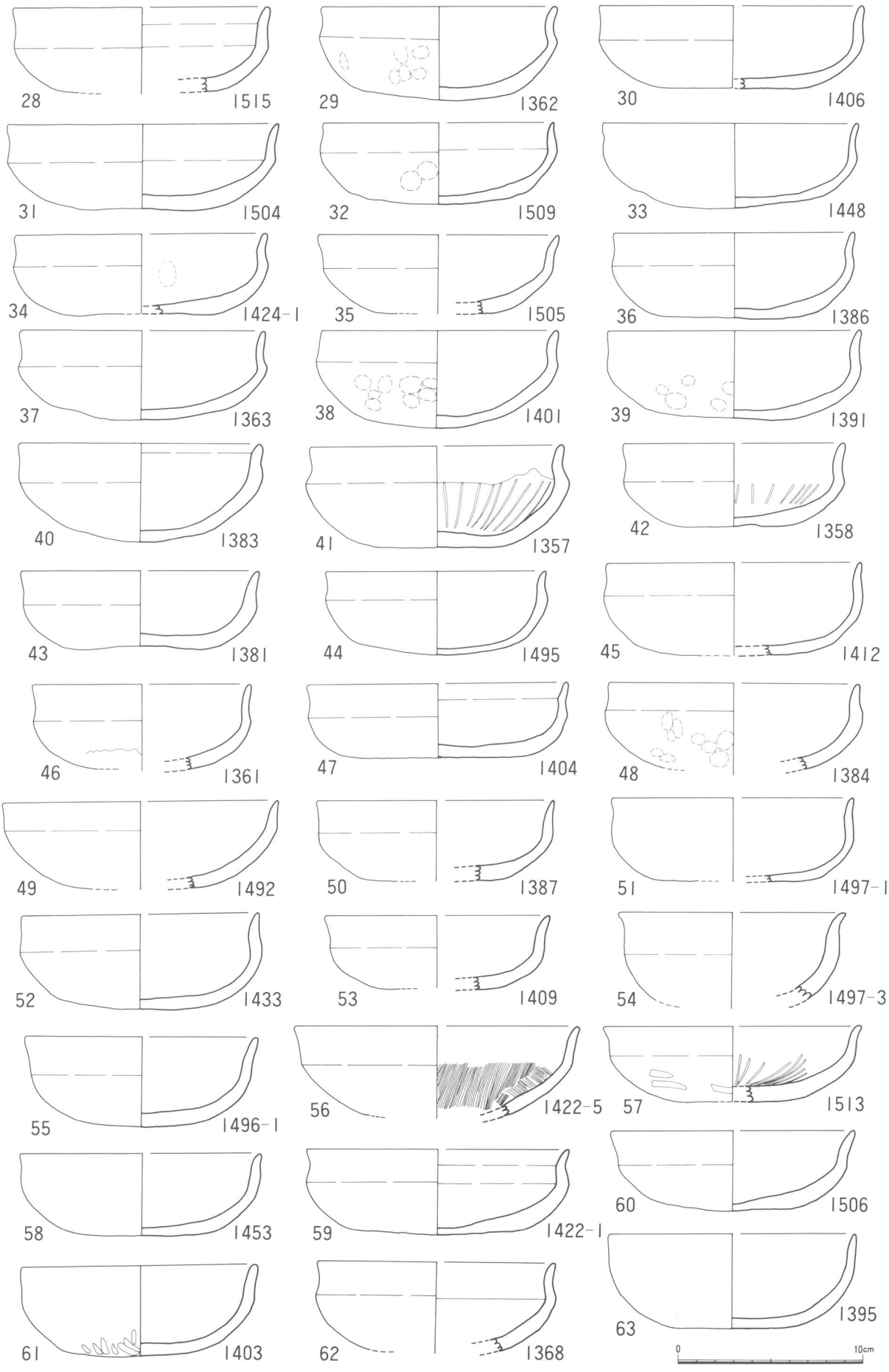
他はいわゆる鬼高期並行の坏として、この地域の古墳時代後期に普遍的なものである。口縁部は器高の⅔程度のところから大きく屈曲して外側に開く。調整はナデが基本で、口縁部はヨコナデ胴部下半および内面底部は不定方向のナデが施されている。全体として器壁は厚く、指頭圧痕の残るものもみられる。

形態にはいくつかの細かい変化があり、大きく外に開くもの、口縁が真直ぐにたちあがるもの、おおきな屈曲もなくのびるものなどのバラエティがある。口径は12㎝～14㎝高さ4.0㎝～5.5㎝と比較的良くまとまっている。88・89・90は例外的に小型のもので、89は口径9.1㎝高さ4.3㎝である。

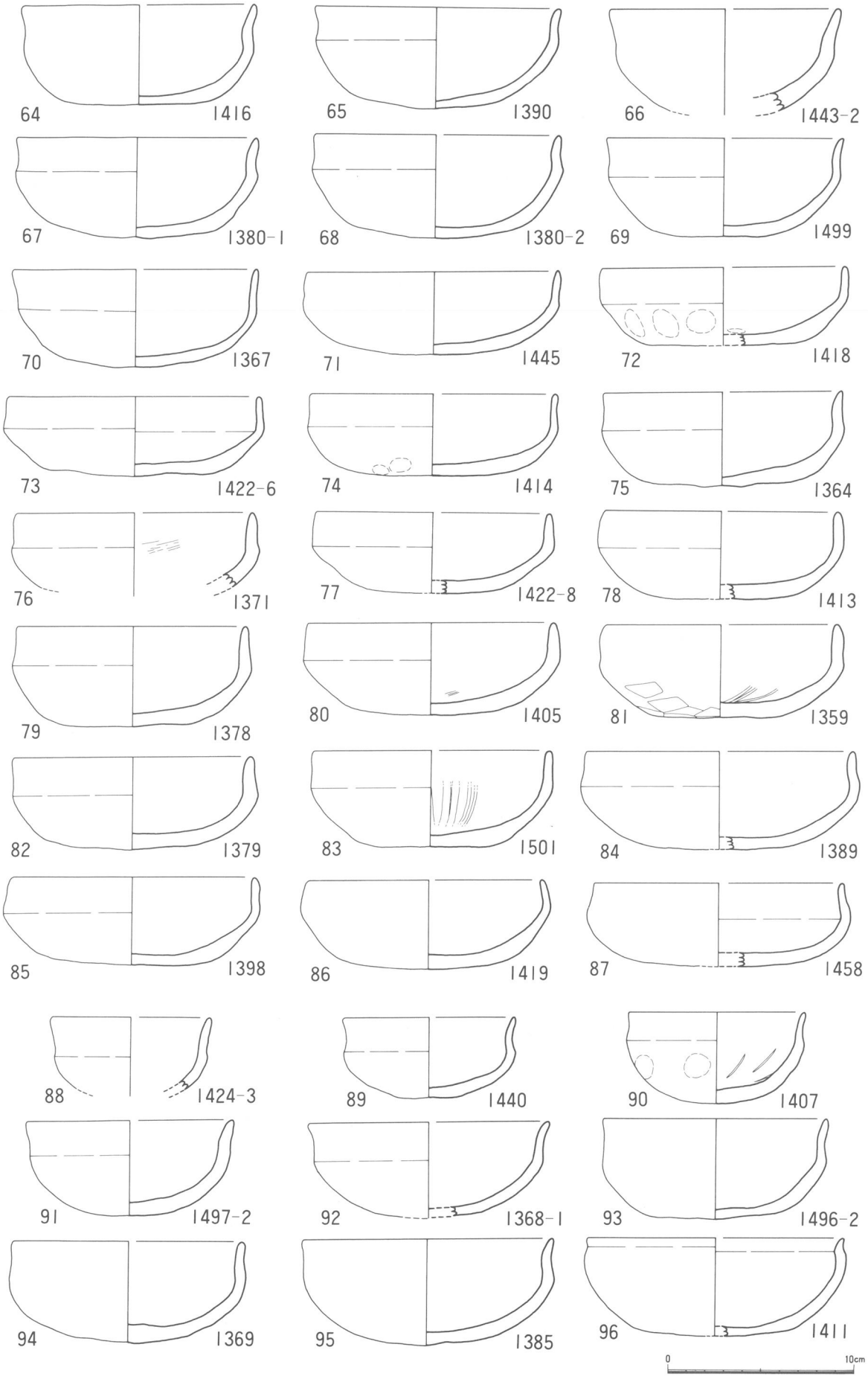




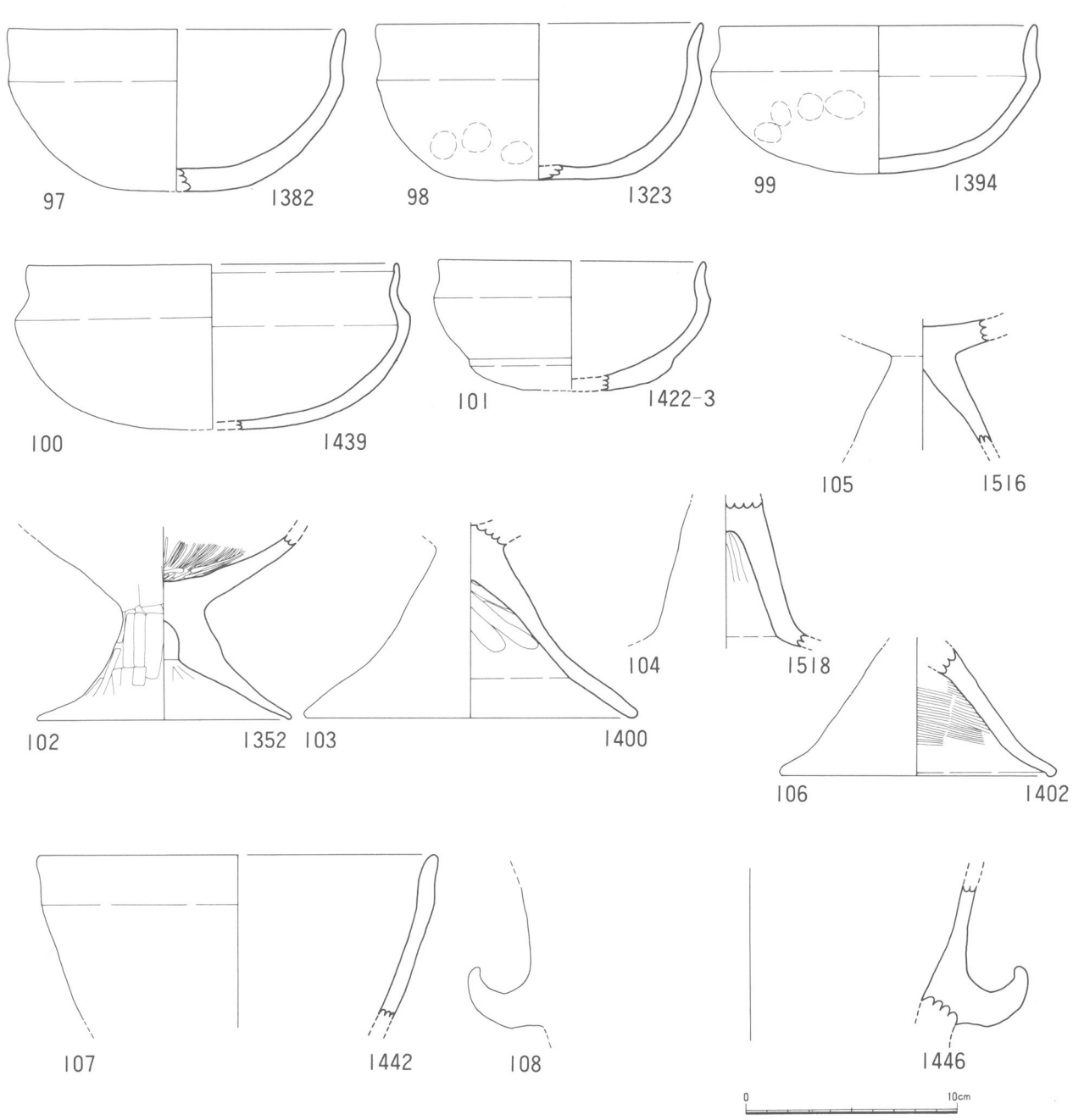
第18図　宮川3区SX481出土土器実測図1



第19図　宮川3区SX481出土土器実測図2



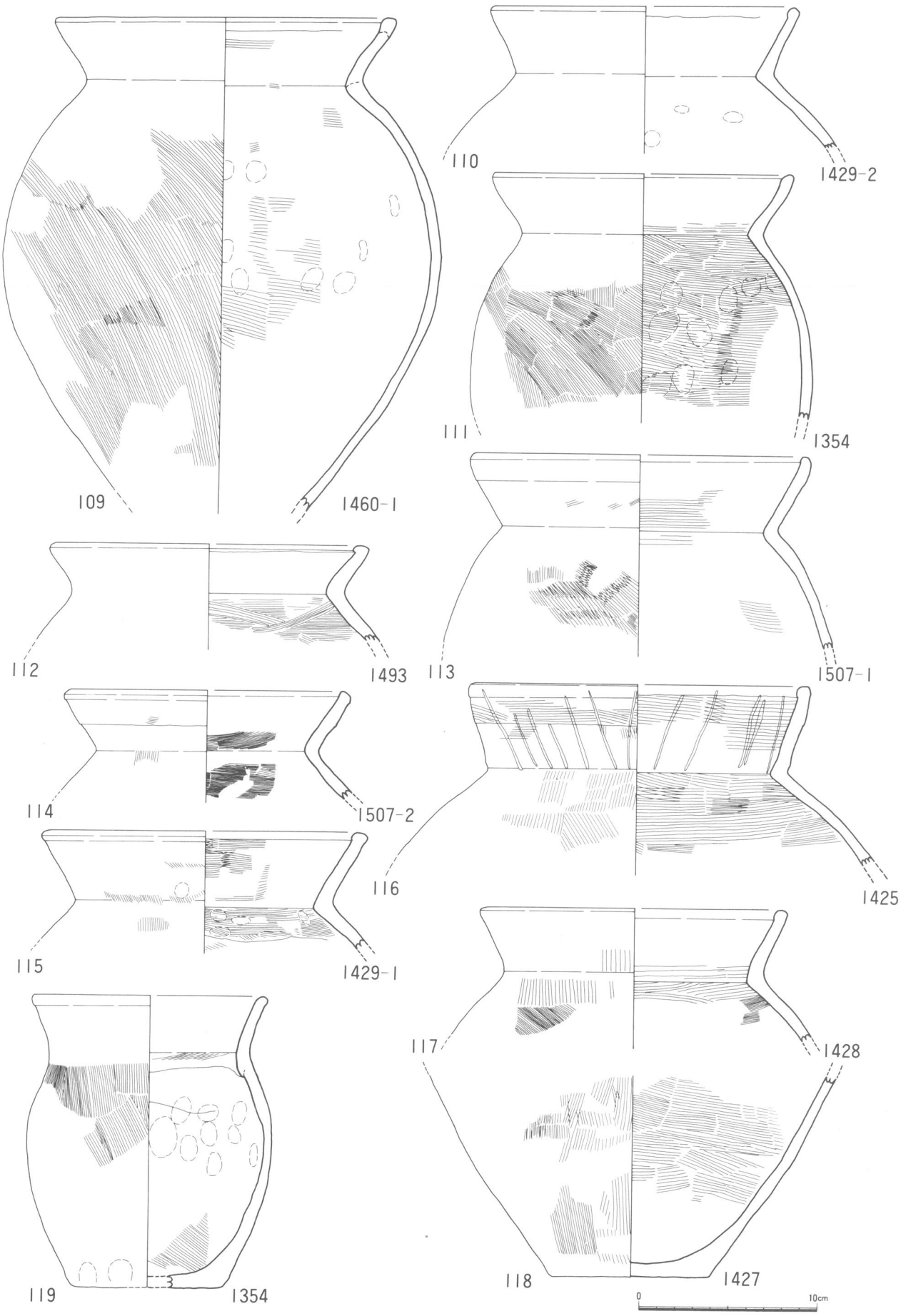
第20図　宮川3区SX481出土土器実測図3



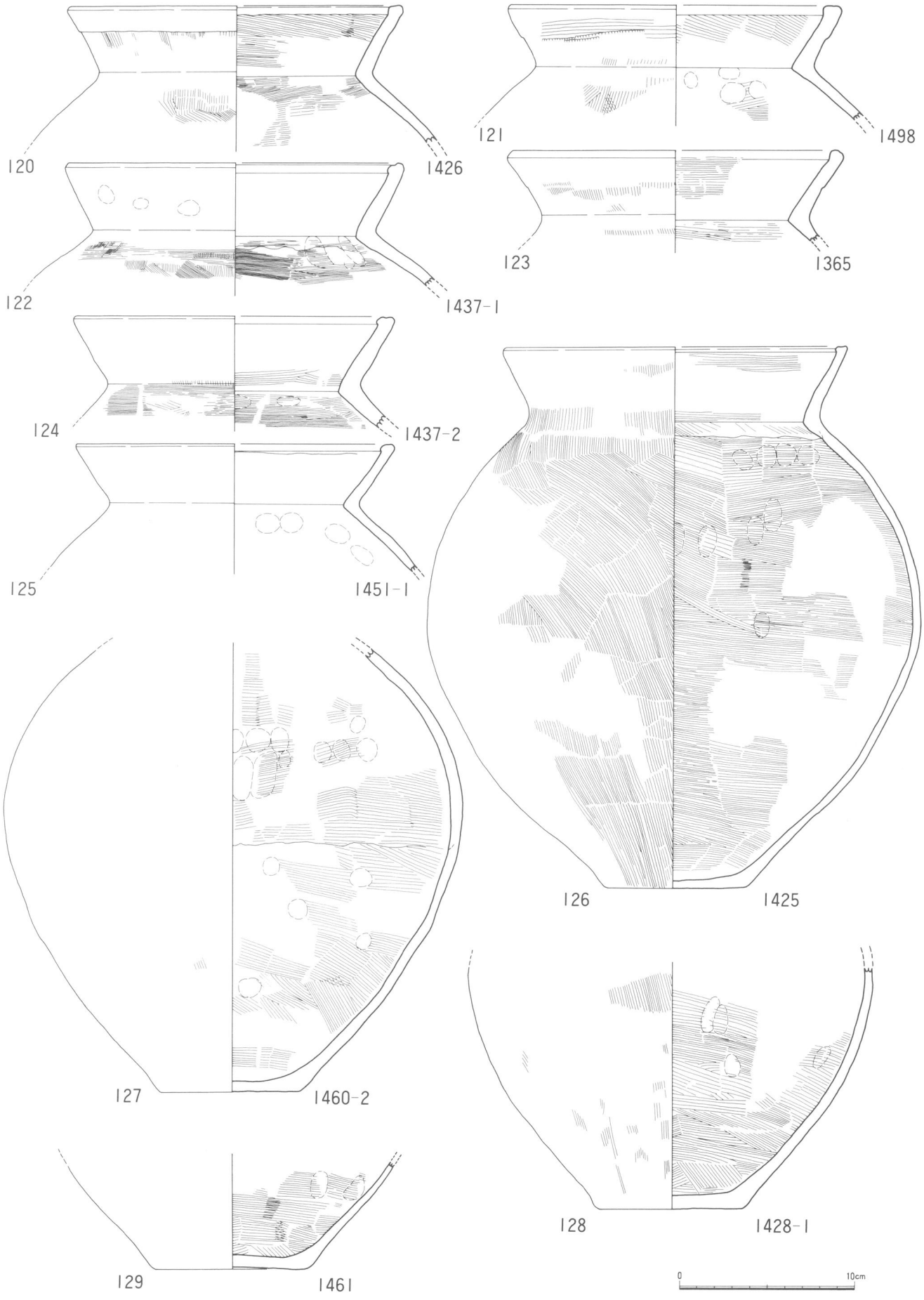
第21図　宮川３区ＳＸ481出土土器実測図４

97～100は椀と呼ぶべきタイプのもので、いずれも大型である。97は口径15.7㎝高さ7.6㎝で口縁部の屈曲は緩やかでほぼ真っ直ぐに立ち上がる。98もほぼ同様である。100は口径17.3㎝最大径18.5㎝高さ7.7㎝で最大径が胴部下半にあり、口縁が少し狭くなっている。

ＳＸ481においては、他のＳＸを付したところと比べて甕の量の多いことは注目される。110から130まで20点を図示した。しかし126を除いてはいずれも破片で、全形を知りうるものは少ない。口縁内面を若干肥厚させ大きくくの字状に胴部に続く。内外面ともハケ調整で指頭圧痕が認められる。いわゆる駿東型の甕といわれているものである。



第22図　宮川3区SX481出土土器実測図5



第23図　宮川3区SX481出土土器実測図

6. ＳＸ 482（第24図）

1.5 m × 1 m ほどの範囲に土師器の坏が集中している。須恵器はわずかに坏身が１点検出されたのみである。

須恵器

須恵器は１点のみである。坏の身で口径 12.1 ㎝最大径 15.1 ㎝高さ 5.4 ㎝である。蓋受け内傾しその高さは 1.5 ㎝であるがつくりはしっかりしており、口唇部はヘラで押えられている。底部にヘラケズリの跡が残るがその高さは体部の１／３程度である。現在の須恵器編年でいえば第Ⅱ期後葉ないし第Ⅲ期前葉の段階に位置付けられるであろう。

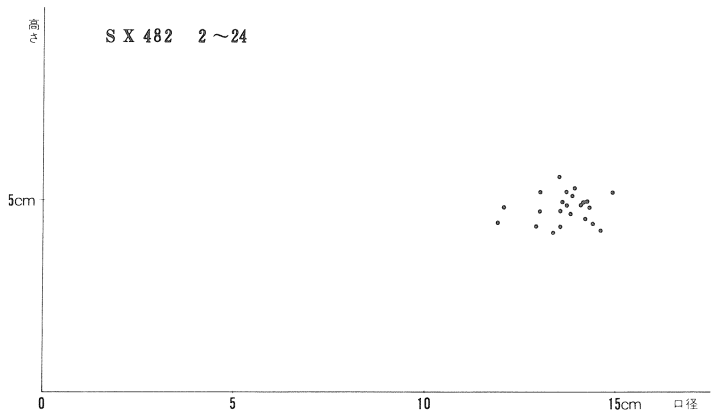
土師器

圧倒的に坏が多く、そのほかに甕の破片が確認されている程度である。

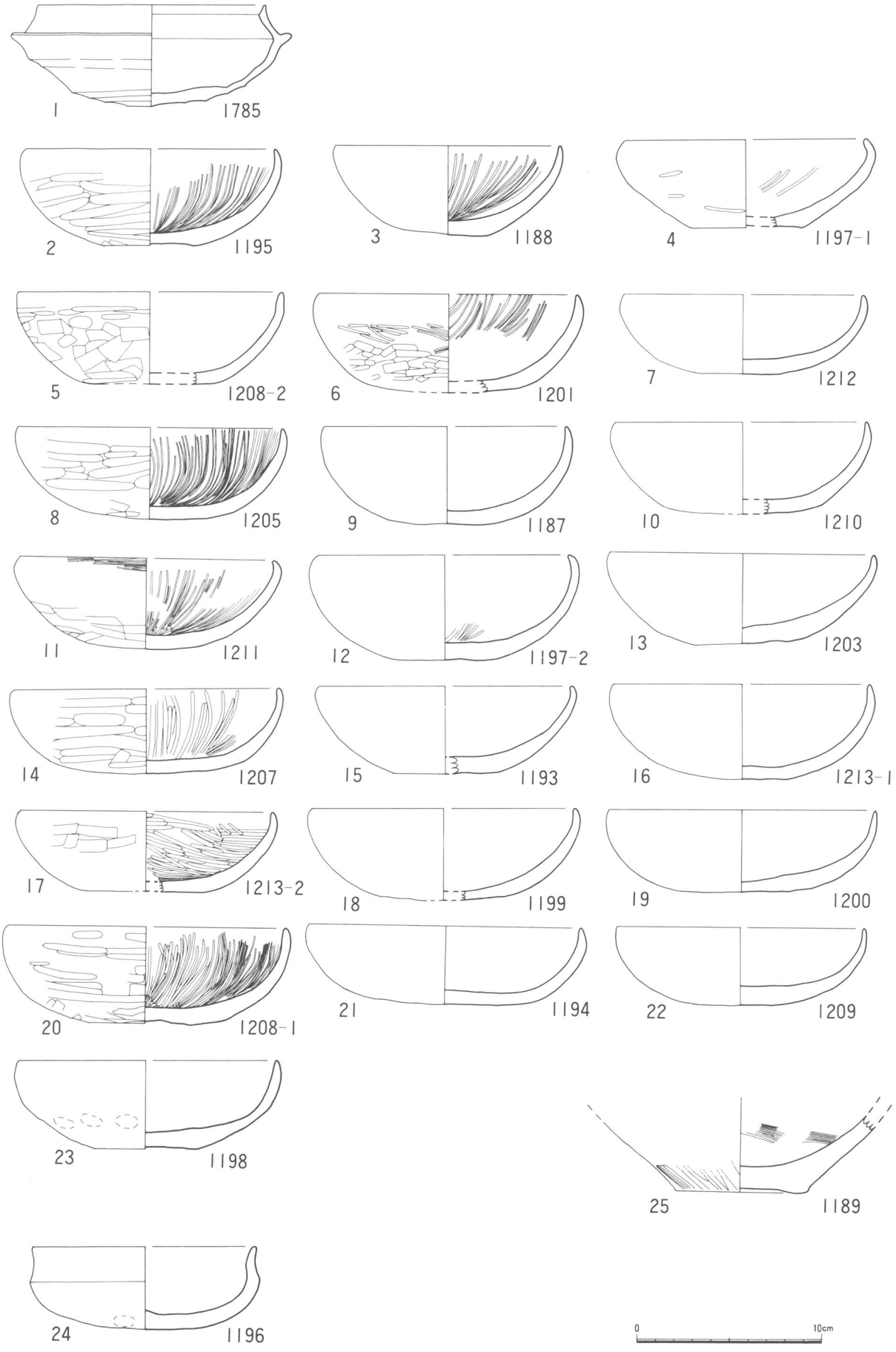
２は上げ底気味の底部からゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾する形態をとるものである。口径 13.3 ㎝高さ 5.2 ㎝底径 4.9 ㎝を測る。体部は横位のヘラケズリ調整が認められ、内面には放射状のヘラミガキが観察出来る。底径は口径の１／３よりおおきいが伝統的な坏の系譜を引いているものである。３は平底ではあるがこの流れを汲んでいると考えられる。また４は口縁部が厚くなっているが、上げ底気味であり、表面が摩耗で観察不能な中でわずかではあるが外面のヘラケズリおよび内面の放射状ヘラミガキが観察出来る。23も調整は摩耗で観察不能であるが、上げ底気味でありこの流れを汲んでいると考えられる。

５～22は、丸底ないし平底で底部からゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾する形態をとるものである。調整は同様で、体部は横位のヘラケズリ調整・内面には放射状のヘラミガキが観察出来る。８は口径 14.1 ㎝高さ 4.9 ㎝を測る。口唇部を除く体部外面に横位のヘラケズリ調整が施され、内面には放射状のヘラミガキが観察出来る。11などとともにこのグループを代表するものであろう。口径 13 ㎝～14 ㎝高さ４㎝～5.5 ㎝程度で比較的そろっている。

24はいわゆる鬼高期並行の坏として、この地域の古墳時代後期に普遍的なものである。口縁部は器高の２／３程度のところから大きく屈曲して外側に開く。口径 11.9 ㎝高さ 4.4 ㎝ である。調整は観察不能であるがナデが主体のものであろう。指頭圧痕も観察される。１点のみの出土であるので断定出来ないが、１の須恵器と伴うとすれば、このグループのなかでは最も早い時期に位置付けられるもので、編年を考える上で重要である。



そのほかの遺物としては甕が検出されている。図化出来たのは底部のみである。

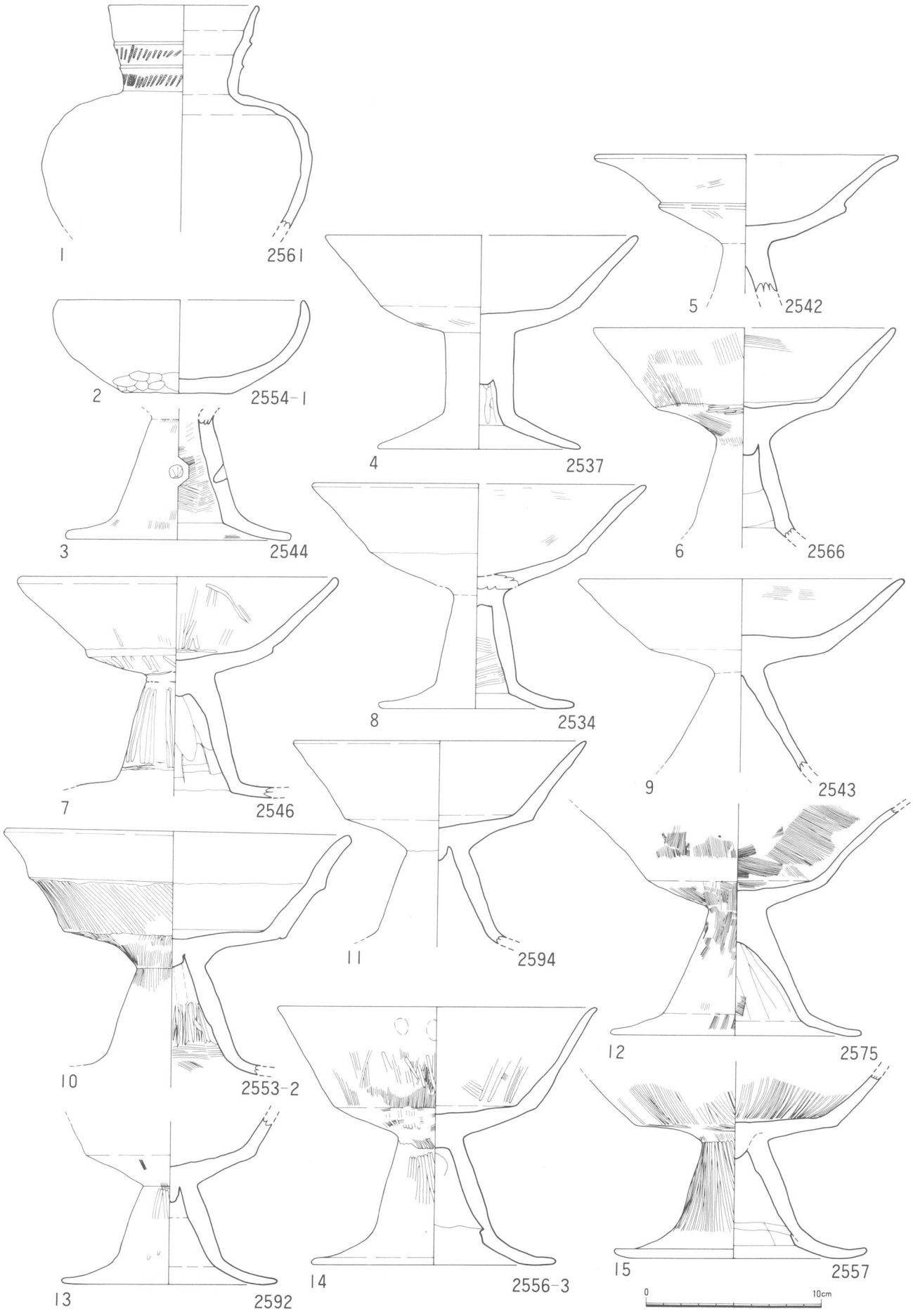


第24図　宮川3区SX482出土土器実測図

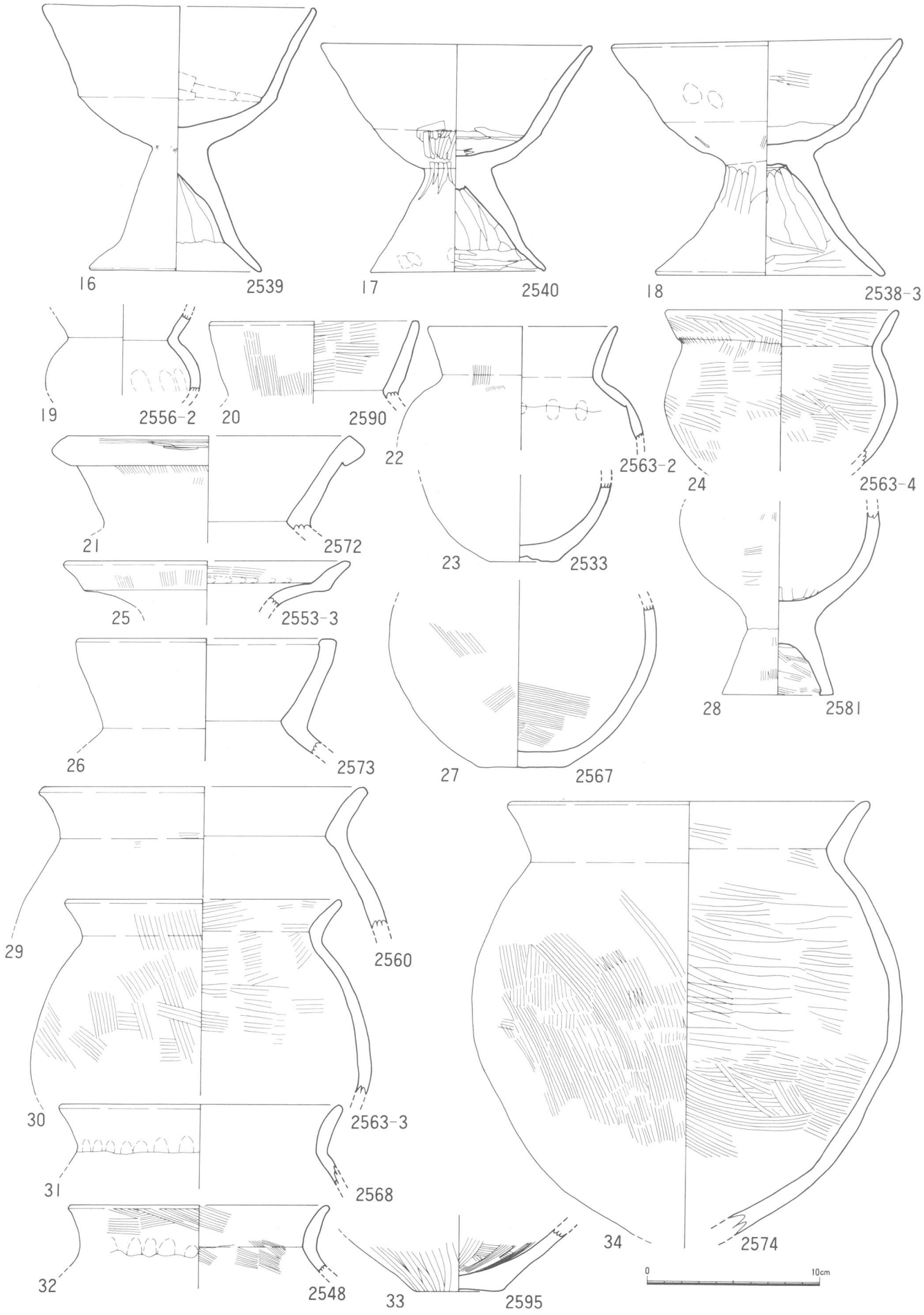
7. **ＳＸ 483**（第25図・第26図）

低湿地の岸部近くの斜面上の３ｍ×２ｍほどの範囲で検出された。須恵器壷１点（１）と土師器坏・高坏・壷・甕が出土した。その大半は高坏である。坏（２）は１点のみで口径13.9㎝、最大径14.6㎝、器高5.2㎝、底径6.1㎝を測る。体部下半にはヘラケズリ調整がみられ直線的な輪郭を示し、口縁部はゆるやかに内湾し口唇部よりやや下方に最大径を有する。これらの特徴は宮之腰期の坏の特徴を示しているが口唇部の調整はややあまい。高坏は比較的坏部が浅いタイプ（４～９）と深いタイプ（11・12）があり、前者は坏部の底部外面の稜が比較的あまいものが多い。これらのうちには坏部の底部外面に突帯状の段を有するもの（５・８）がある。これは底部と体部を接合する際体部の端を底部の内側に入れたため底部の端が突帯状に残ったものである。坏部が深いものは坏部の底部内外面にはっきりした稜を有し、坏部底面は平面に近くなっている。脚部は「ハ」の字状に開き裾部で大きく屈曲するものが多いが、坏部が浅いものには直立するもの（４）や開きの小さいもの（６・７）などがある。また脚部片だけであるが孔が貫通しない円窓を有するもの（３）もみられる。表面調整では坏部内外面および脚部上部外面にハケ目調整を施したもの（７・11・13）と、坏部内外面と脚部外面にヘラミガキを施したもの（8・15）がある。これら伝統的な高坏とは別に坏部が鉢状を呈する高坏（16～18）もみられる。坏部は口径に対してかなり深く底部から体部にゆるやかにたちあがり口縁部でわずかに外傾している。脚部は裾までそのまま「ハ」の字状に開き、裾部での屈曲はほとんどみられない。17は坏部外面の下部と脚部外面の上部・脚部内面の下部にヘラケズリ調整がみられ、16は坏部内面にヘラケズリ、18は脚部内外面にヘラケズリ調整がみられる。また16は脚の裾部がやや屈曲して外に開き内面にあまい稜を有する。これら坏部が鉢状を呈する高坏は伝統的な高坏にくらべ新しい要素とみるべきであろう。

その他の器種では壷・甕・坩形土器・台付鉢状の土器などがあるが、口縁部・底部などの破片が多く全体の形状が把握できないものが大半を占める。壷のうち22は折り返し状の口縁を有し、口縁上面と折り返し部の直下にハケ目状の細かい調整がみられやや古い様相を呈している。24は口縁部に稜を有し端部はやや内側に角度を変えている。26は「く」の字状の口縁であるが端部はやや内湾している。20・21は単純口縁である。27は広口で内外面にハケ目調整がみられる。甕と呼称した方がよいのかもしれない。19は胴部と口縁の一部しか残存していないが小型である。28は台付の鉢形土器であるが胴部最大型11.6㎝と小型である。摩滅のためはっきりしないが胴部内外面にヘラミガキ調整があるようでつくりは丁寧である。いわゆるワイングラス風の形状になると考えられ祭祀用の土器であろう。23・25は底部から胴部にかけての破片であるが、25は底径4.8㎝で胴部球形に近い。29～33は甕である。このうち29～32は口縁部と胴部の一部のみが残存していた。口縁部は「く」の字状を呈し、口径はそれぞれ18.6㎝、15.8㎝、16.2㎝、14.9㎝である。29は口縁屈曲部の内部に比較的明瞭な稜を有するが、他の３点はあまい。31・32は口縁の屈曲が29・30にくらべゆるやかである。30と32は内外面にハケ目調整がみられる。33は底部を欠損する。口径20.8㎝、残存する器高は24.8㎝をはかる。口縁は「く」の字状に屈曲し、胴部中央に最大径を有する。胴部内外面と口縁内部にハケ目調整がみられる。34は底部のみ残存していた。底径4.8㎝で外面に縦方向のヘラミガキ、内面にハケ目調整を有する。



第25図　宮川3区SX483出土土器実測図1



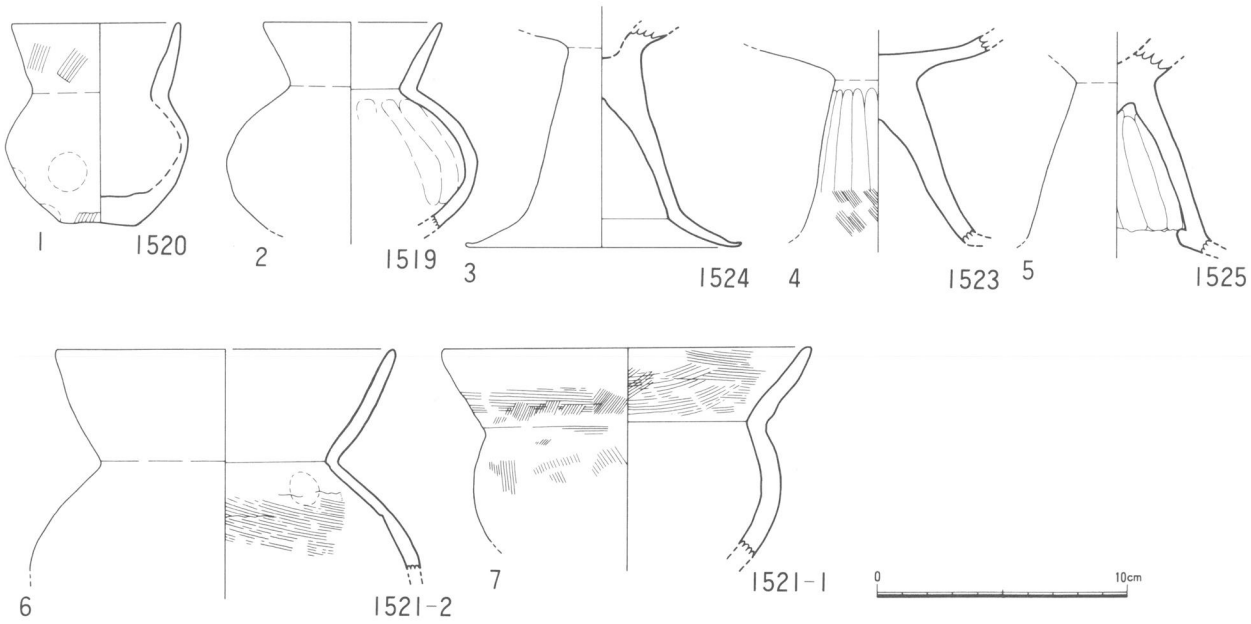
第26図　宮川3区SX483出土土器実測図2

なお、須恵器壷（１）は口径13.5㎝、胴部最大径15.1㎝で、底部を欠損する。口縁部外面は２段にわたり櫛描刺突文が施されている。

以上みてきたようにＳＸ483の土器は年代幅が認められるようである。高坏はいわゆる和泉式の伝統を引くものと坏部が鉢状を呈する新しい要素が存在する。また坩に近いような小型壷もみられる。これらのことから古墳時代中期～後期への過渡期と考えられる。器種構成の中で高坏が高い比率を占めていることもこのことに合致し、ＳＸ477～482で坏が圧倒的多数を占めるのとは対照的である。

8. ＳＸ484（第27図）

低湿地の岸部近くの斜面上1.5ｍ×１ｍほどの狭い範囲で検出された。坩形土器（１・２）、高坏（３～５）、壷（６・７）がみられ、滑石製勾玉・臼玉各１点も出土している。坩形土器は口径と胴部最大径がほぼ同じもの（１）と胴部が偏平でやや広いもの（２）がある。高坏は脚部のみでやや中脹らみで裾部で屈曲して開いている。裾部の屈曲部内面に稜をもち内外面にヘラミガキが施されているものもある。壷は２点とも単純口縁で「く」の字状に屈曲する口縁を有する。７は胴部径より口径の方が大きい。滑石製の勾玉は残存長1.5㎝で両端を若干欠く。断面は偏平な楕円形を呈している。臼玉は径0.6㎝で中央に0.2㎝の孔を有する。滑石製模造品は本遺跡の水上10区ＳＸ624でも出土しており、勾玉・臼玉とも酷似している。土器の特徴と水上10区ＳＸ624との比較によりＳＸ484は５世紀代としておきたい。



第27図　宮川３区ＳＸ484出土土器実測図

第２節　宮川４区ＳＲ55・ＳＲ56

宮川４区の南半部では旧大谷川が自由蛇行の過程でその河道を順次南側に移動した痕跡が７本の明瞭な旧河道跡（ＳＲ58・56・55・54・53・52・51）となって検出されている。古墳時代後期から現代まで時期を特定出来る流路が残在しているところとして注目され、また多量の祭祀遺物・木簡・着柄鍬など重要な遺物の時期を与えうるところとして注目されていた。ここではその基礎作業として恣意的な遺物の選別を避け全ての遺物を紹介することを旨とし、機械的な作業に徹した。今回はそのうちのＳＲ55とＳＲ56を紹介する。

1.　ＳＲ55（第28図～第30図）

確認面での幅は、西側（上流）で９ｍ、東側（下流）３ｍと先細りの状況である。約15ｍを確認、その中で河床最深部の比高差は約0.8ｍである。遺物は全体に少ないが、古墳時代の須恵器・土師器のほか奈良時代の土器も出土している。調査者は古墳時代の土器をＳＲ56からの流入と考えＳＲ55を奈良時代の河道跡としている。注目すべき遺物としてナスビ形着柄鍬がある。

須恵器

須恵器は甕なども含め全部で15点ある。１は坏蓋で径14.1㎝高さ3.6㎝頂部は大きくヘラ削りされている。肩の部分は大きく屈曲し稜を形成している。２は坏身で最大径14.7㎝で立ち上がりは低く内傾している。器高3.9㎝、口径12.5㎝を測り、１とほぼ組み合わせとなる大きさである。３は最大径14.1㎝をはかり、大きな径のグループである。

５は口径14.0㎝高さ4.5㎝で、全体的に厚くぼってりした造りである。６は最大径14.1㎝高さ3.8㎝で５よりもひとまわり小さい。７は最大径12.1㎝高さ4.4㎝を測りＳＲ55の中では最も小さくなる。

８は蓋で扁平なつまみをもつ。口径12.8㎝、口縁はくの字状に内側に強く折り返されている。

９は高台を持った坏で、口径15.6㎝、底部は丸く高台よりもはみ出している。10・11は糸切り底の高台を持った坏でヘラ削りの位置は低く底部近くのみである。ヘラ削りの位置も低い。

１・２は須恵器編年の第Ⅲ期中葉に位置付けられよう。実年代では６世紀後葉あたりと考えたい。６はこれより若干後に位置付けられるものであろう。７は第Ⅲ期後葉に位置付けられよう。９は第Ⅴ期前葉のもので８世紀初頭である。10・11は第Ⅴ期の後葉に位置付けられる。

以上のように、その時期巾は非常に大きく、古墳時代後期から奈良時代いっぱいに及ぶものであり、伴出する遺物の時期を決めるには慎重を要する。

土師器

多量の坏の他に椀あるいは鉢と呼んだ方が良いもの・甕・高坏・小型壺等が出土している。

坏は大きく２類に分けられる。丸底でゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾するものと、くの字状に屈曲し外側に開くものとである。

前者の典型的なものは17・22で、外面下半に横位のヘラ削りが観察でき、内面は放射状のヘラミガキ調整がなされている。口縁はゆるやかなカーブでわずかに内傾している。全体に器壁が厚くぼってりとはしているものの伝統的な坏の系譜をひいていると考えられる。19・25などでは平底化の傾向が強く28～30では完全な平底となっている。口径は13㎝～15㎝、高さ４㎝～５㎝が中心で大きなばらつきは無い。20・21は皿状を呈するもので後出るの要素であろう。

後者はいわゆる鬼高期並行の坏として、この地域の古墳時代後期に普遍的なものである。口縁部は器高の２／３程度のところから大きく屈曲して外側に開く。調整はナデが基本で、口縁部はヨコナデ胴部下半および内面底部は不定方向のナデがほどこされている。内面底部にヘラミガキが施されているものもわずかではあるが認められる。本遺跡全体としては非常に稀であるが、ＳＲ55においては多く観察できる。口径は11㎝～15㎝、高さ４㎝～5.5㎝と巾が大きくなる。31～40を中型とし41のような椀と呼んでも良いような大型のものと42～50のように小型のものとに細分出来る。

39は口径13.1㎝高さ5.0㎝で、内面には放射状のヘラミガキがＢ類ほど顕著ではないが観察出来る。外面はナデ調整であるが、わずかではあるが指頭圧痕が認められる。口縁部は内外面ともヨコナデである。放射状のヘラミガキが認められるのはこの中型のグループである。

41は口径16.4㎝高さは7.5㎝である。口径と器高の比は中型のものと変りなく、調整等も基本的には変化がない。42は口径11.7㎝高さ4.3㎝内外面ともナデ調整が施され口縁部はヨコナデである。底部には全て木葉痕がつけられている。

55は口縁を欠失しているが壺で、外面は丁寧なヘラケズリがほぼ全面に施されている。

甕は全て破片で、全形を知りうるものは無い。口縁部のわかる２点を図示した。頸部がくの字状に屈曲するもので、調整は口縁部が横ナデ・胴部がハケ目調整となる。63は口縁内面を若干肥厚させており、また口縁部と胴部の接合部に突出しが認められる。古墳時代後期の駿東型の甕の特徴と認めることができる。

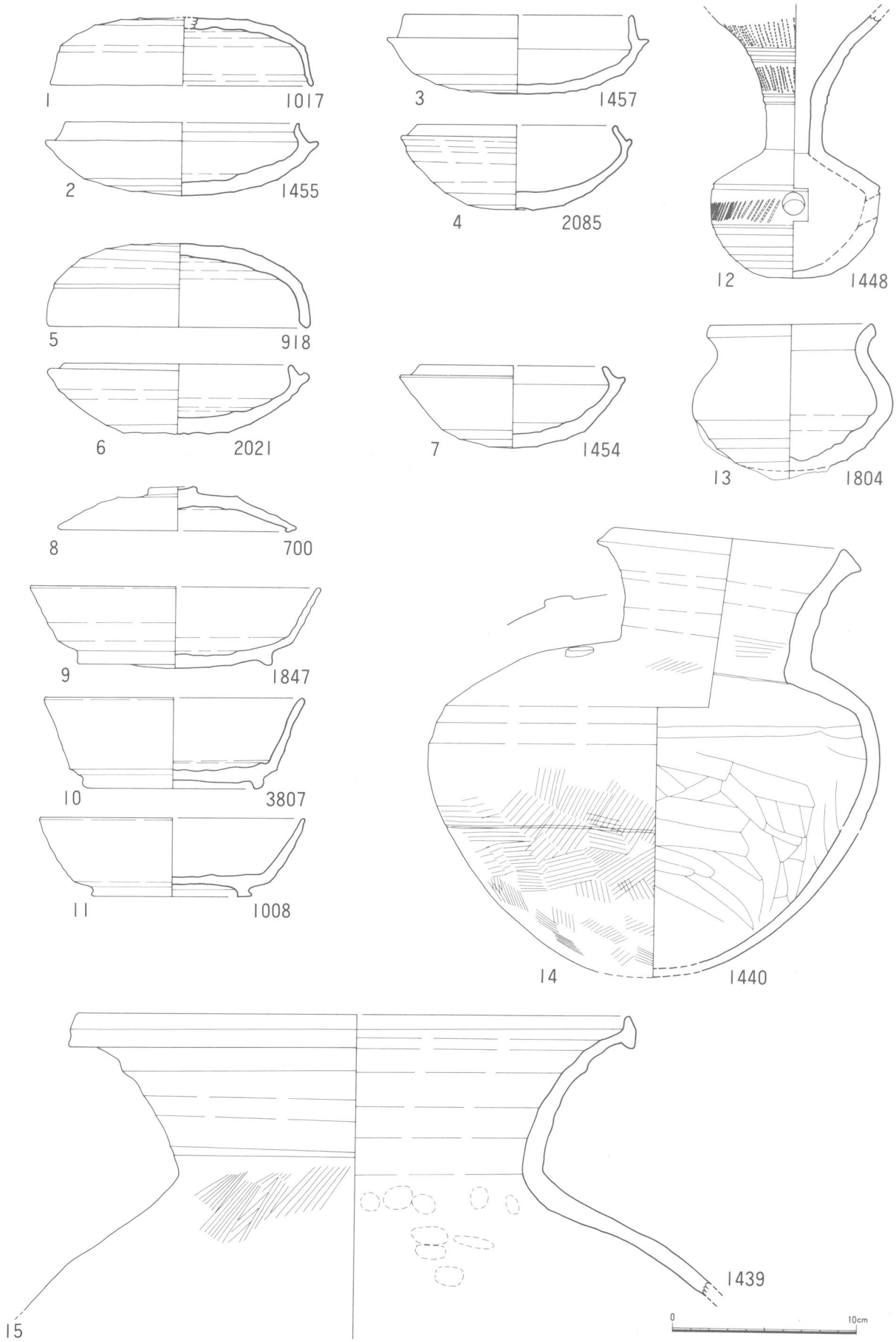
木製品

木製品の量は非常に少ない。人形３点・馬形４点（第98図12・13・15・16）のほか櫛１点、ナスビ形着柄鍬（『大谷川Ⅱ』第93図）などの農工具５点などがある。中でも注目すべき遺物として、ナスビ形着柄鍬がある。柄と身が蔓状植物により２ケ所で結束されて、検出されたものである。同形式の鍬の結束方法を考える貴重な資料となったものである。詳細は『大谷川Ⅱ』を参照されたい。

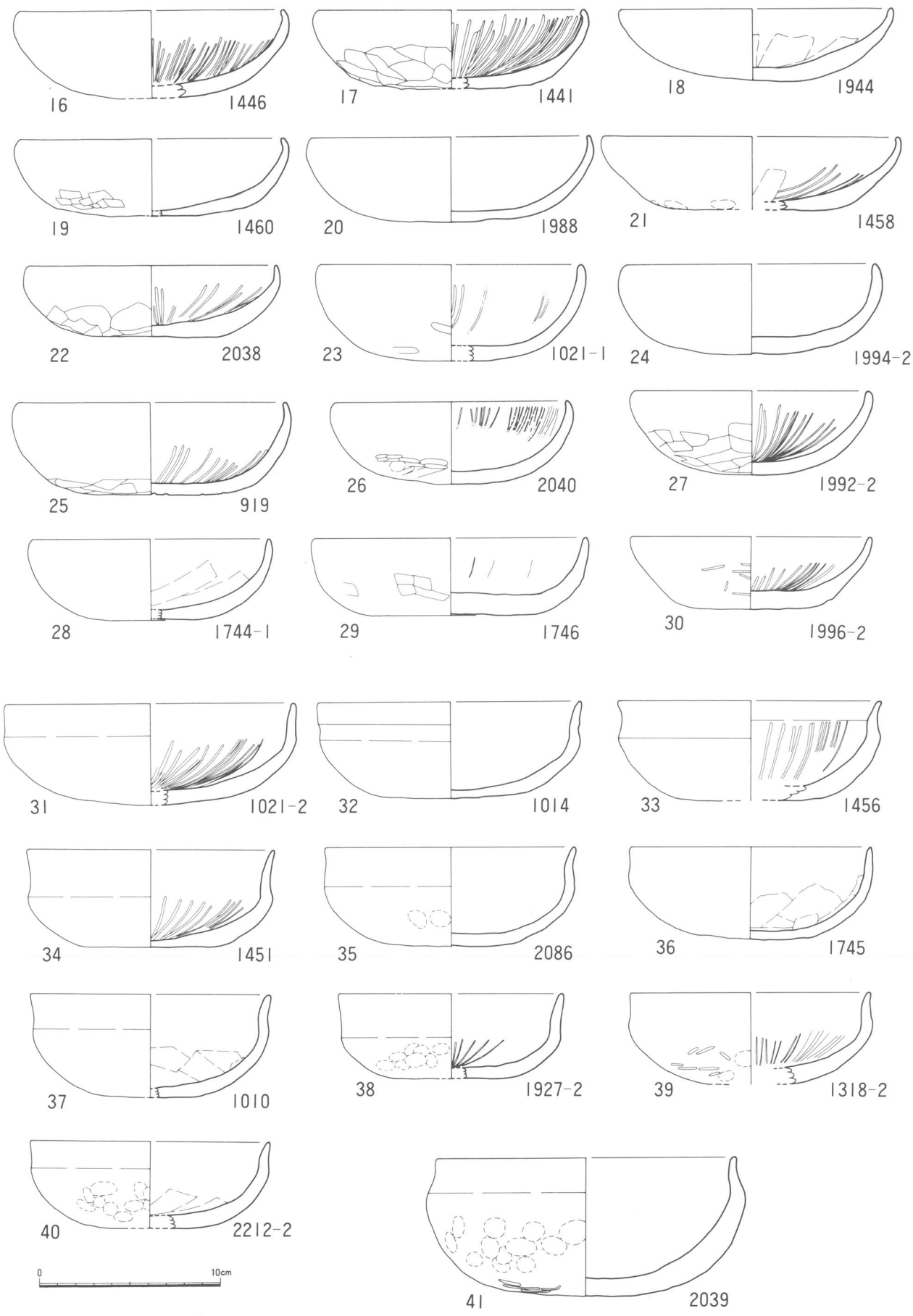
その他の遺物

動物型土製品１・耳輪１がある。

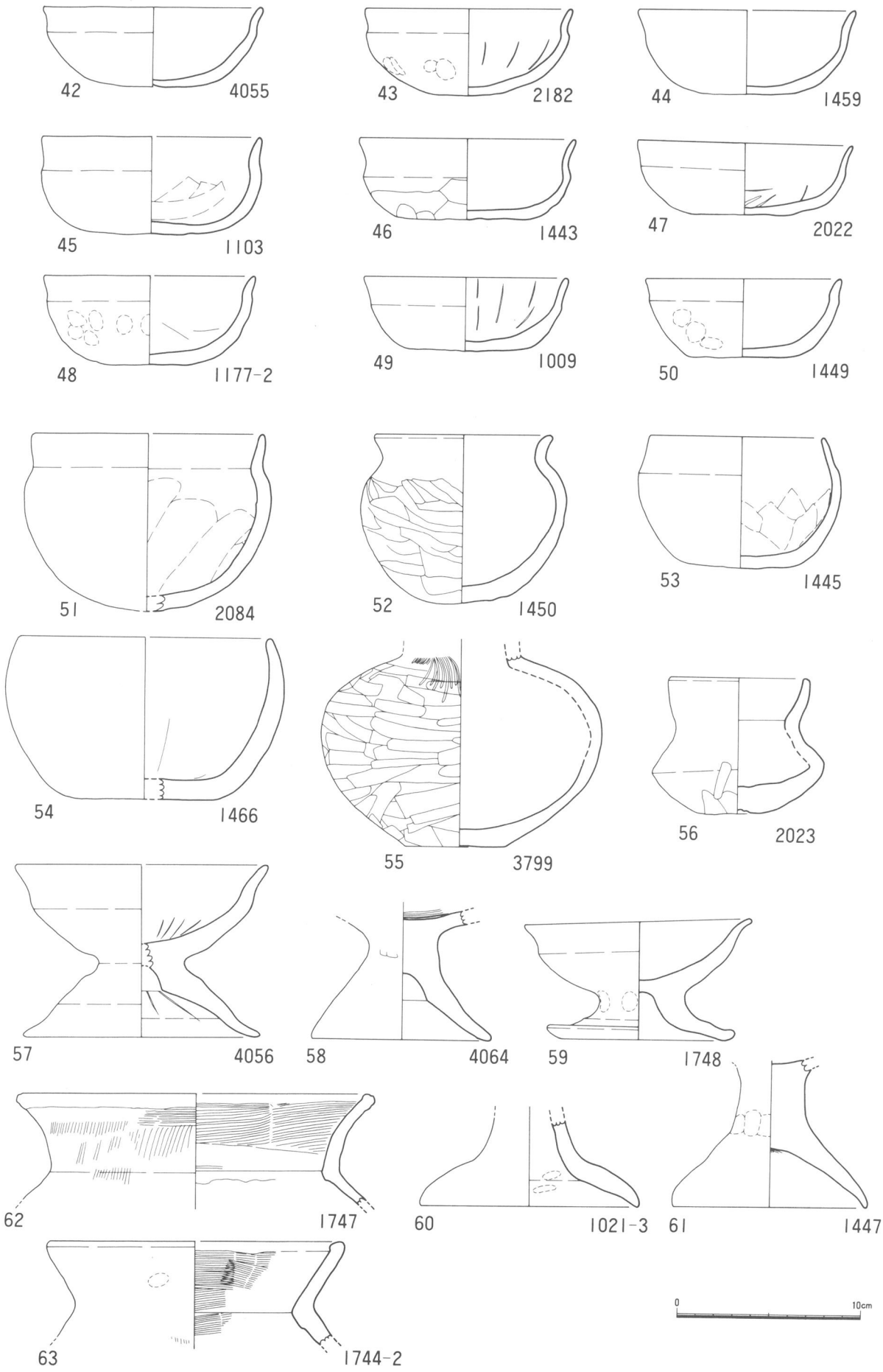
また牛の骨などの動物遺存体、桃の種などの植物遺存体が若干検出されている。



第28図　宮川4区SR55出土土器実測図1



第29図　宮川4区SR55出土土器実測図2



第30図　宮川4区SR55出土土器実測図3

2. ＳＲ 56（第31図～第41図）

確認面での巾は 5.3 ｍ、延長 23 ｍを確認している。河床は平坦で標高 4.7 ｍを測る。覆土は小豆大の小礫を主体とする粘土混りの砂礫層である。多量の祭祀関係の木製品が出土しており、その時期認定上重要な遺構である。

須恵器

須恵器は碗などを含め全部で28点以上ある。すでに『大谷川Ⅱ』において紹介しているので(『大谷川Ⅱ』Ｐ160第95図)、ここではその編年的位置付けのみに留めたい。

最も古く位置付けられるのは１・２で、破片のため不確かではあるが口径 10.1 ㎝最大径 13.9 ㎝をはかる。蓋受けの立ち上がりはたかく高さ 1.5 ㎝で真っ直ぐ立ち上がる。２は口径 11.9 ㎝最大径 14.7 ㎝高さ 4.4 ㎝である。底部のヘラケズリはさほど高くない。須恵器編年の第Ⅲ期前葉に位置付けられよう。

５は最大径 14.9 ㎝で高さ 4.2 ㎝である。立ち上がりは 0.8 ㎝でずっと低くなる。６は最大径14.4 ㎝高さ 4.0 ㎝と少し小振りとなるがほぼ同じタイプとみてよい。須恵器編年の第Ⅲ期中葉に位置付けられよう。４の蓋は口径 13.9 ㎝を測り若干小さいきらいはあるが、これらの身にかかるものであろう。

10は最大径 12.2 ㎝を測るもので、高さ 4.4 ㎝、11は最大径 12.8 ㎝高さ 4.0 ㎝である。いずれも立ち上がりは低く内傾している。須恵器編年の第Ⅲ期後葉に位置付けられよう。

16は口径 10.5 ㎝高さ 3.8 ㎝で立ち上がりは低く内傾する。底部は平底気味である。17 は 11.0 ㎝、18は 11.1 ㎝とほぼ同様の径で最も小型化したものである。第Ⅳ期前葉のものである。

以上のように、その時期巾は非常に大きく、第Ⅲ期前葉から第Ⅳ期前葉までの巾がある。すなわち須恵器でみるかぎり、６世紀中葉から７世紀中葉までで、７世紀後葉はともかく８世紀に入るものは検出されていない。

土師器

多量の坏の他に椀あるいは鉢と呼んだ方が良いもの・甕・高坏・小型壺・甑等が出土している。

坏は大きく２類に分けられる。丸底でゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾するもの（Ｂ類）と、くの字状に屈曲し外側に開くもの（Ｃ類）とである。

前者はＳＲ56では非常にすくない。20は口径 13.4 ㎝高さ 3.9 ㎝平底気味の丸底でゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁はそのままゆるやかに内傾する。外面下半にはヘラミガキが施され、口縁の内外面はヨコナデ、内面はナデ調整である。21は口径 15.4 ㎝高さ 4.5 ㎝全体に摩耗が著しいが内面にヘラミガキ調整の痕跡と思われるものが観察できる。22は平底ではあるが内面に放射状のヘラミガキ調整が観察できる。口径 14.6 ㎝高さ 6.1 ㎝底部には木葉痕が刻まれている。系譜は検討しなければならないがとりあえずここにおいておく。

23は須恵器を模倣したもので、口径 12.6 ㎝高さ 4.4 ㎝頂部は丁寧にヘラケズリされている。坏の蓋を模したものである。24も身として図示されているが蓋を模したものである可能性が高い。

25以降は、いわゆる鬼高期並行の坏として、この地域の古墳時代後期に普遍的なものである。ＳＲ 56

の坏の大部分を占めるものである。いくつかに細分されるが、典型的なものは口縁部が器高の２／３程度のところから大きく屈曲して外側に開き、調整はナデが基本で、口縁部はヨコナデ胴部下半および内面底部は不定方向のナデがほどこされている。内面底部にヘラミガキが施されているものもわずかではあるが認められる。

中型から小型のものが多く、25は最も大きいグループに属するが、口径は14.0㎝高さ4.9㎝であり際立って大きなものではない。57は口径10.1㎝高さ4.6㎝でこのクラスがＳＲ56では主体的といえそうである。最も小型のものとしては106・108などがある。106は口径8.3㎝高さ4.2㎝丸底である。108は口径8.9㎝高さ3.5㎝で底部には木葉痕が観察出来る。

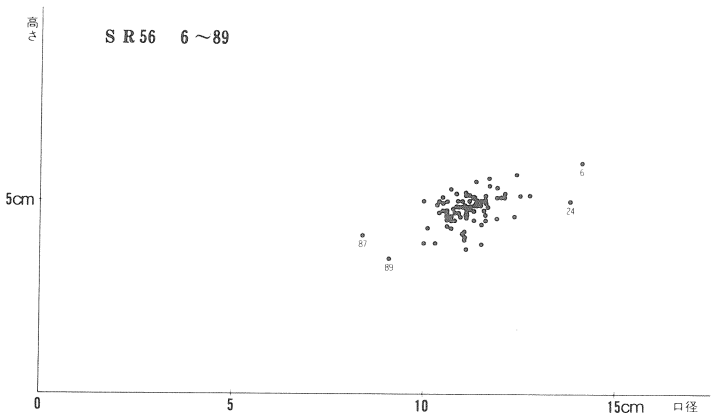
109～120は高さが口径の１／2以上あり、椀あるいは鉢と呼ぶべきものである。大小があり、109は口径14.5㎝高さ9.5㎝、114は口径13.5㎝高さ8.7㎝をはかる。また小型のものでは、118は口径9.3㎝高さは7.1㎝、119は口径9.2㎝高さは6.8㎝である。ナデを調整の基本とし底部に木葉痕を刻む点など基本的には変化はない。

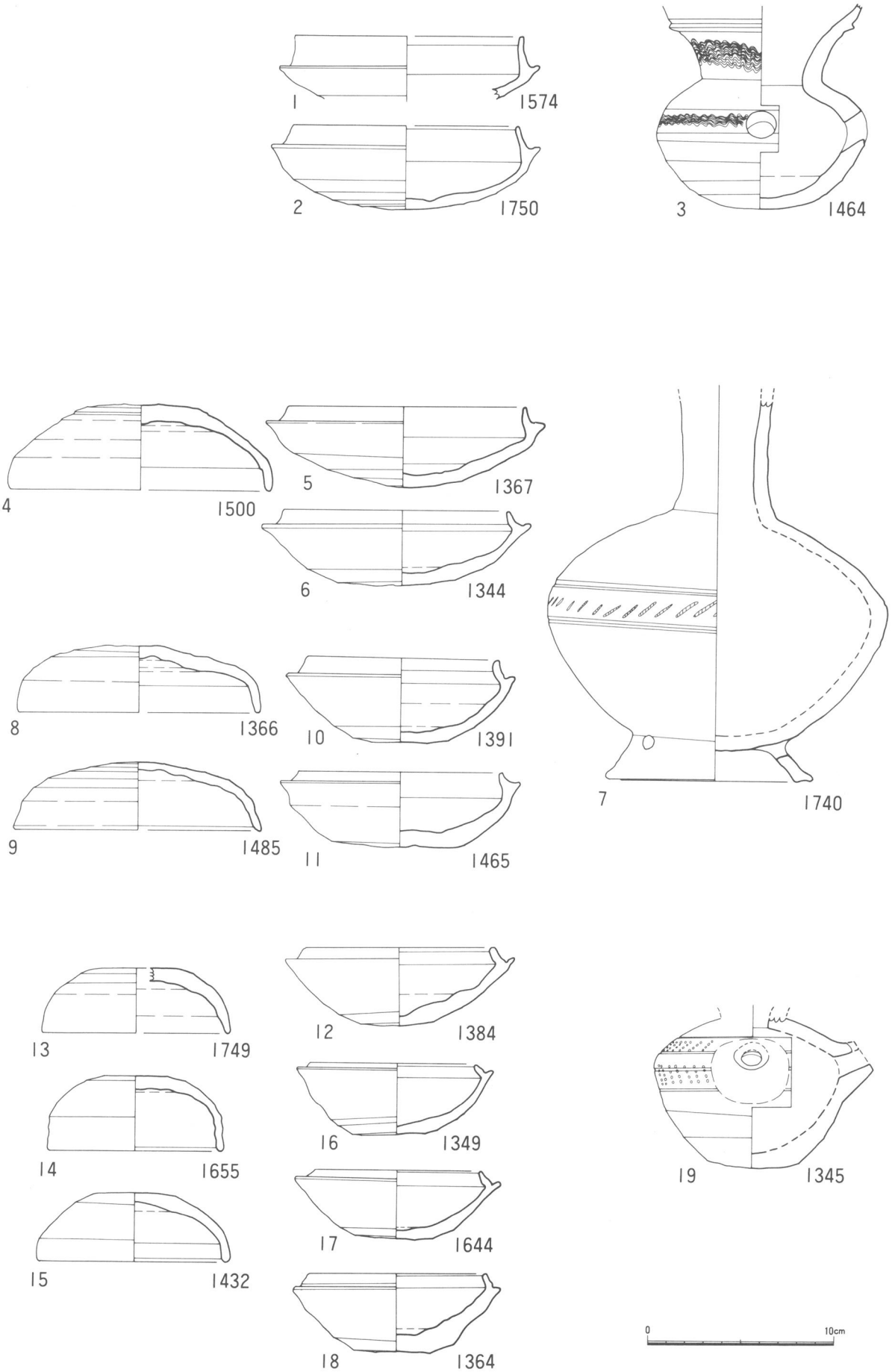
121～125は口縁が外反せず、そのまま内傾するもので、椀形として一括した。その位置付けは問題となろう。類例を待って検討したい。

126～152は口縁部が大きく屈曲せずそのままのカーブでのびて外に開くものである。底部には木葉痕を持つ。また143・147のように口縁部の屈曲の痕跡を残すものもありＣ類の変化と理解したい。

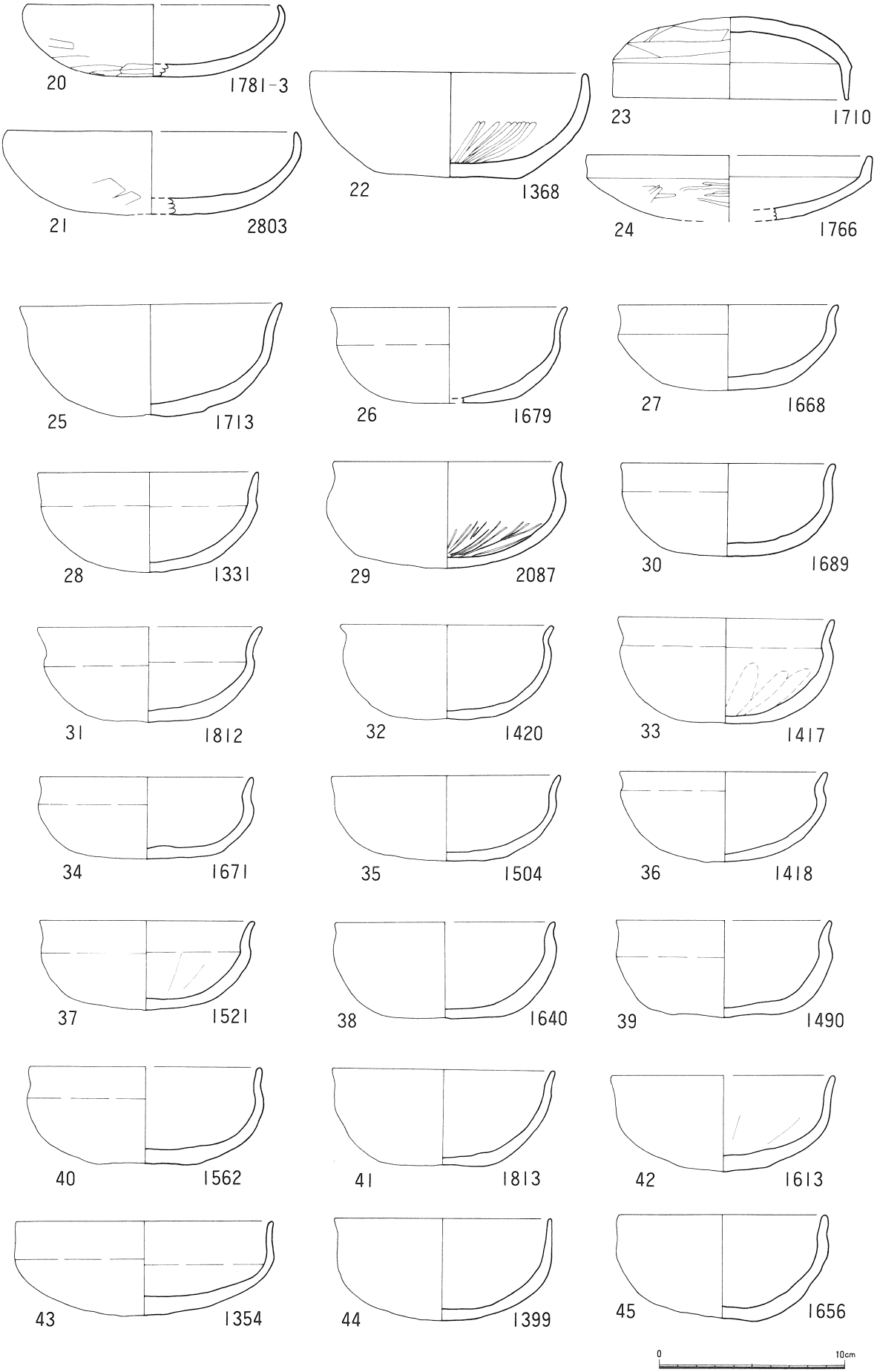
高坏は、153のように脚がハの字状に開くものと、156のように柱状の脚をなし裾部が大きく横に開くものとの２種のタイプがある。

甕は全体としては比率は少ない。163・164は口縁内側を肥厚させくの字状に胴部に続くいわゆる駿東型の甕である。

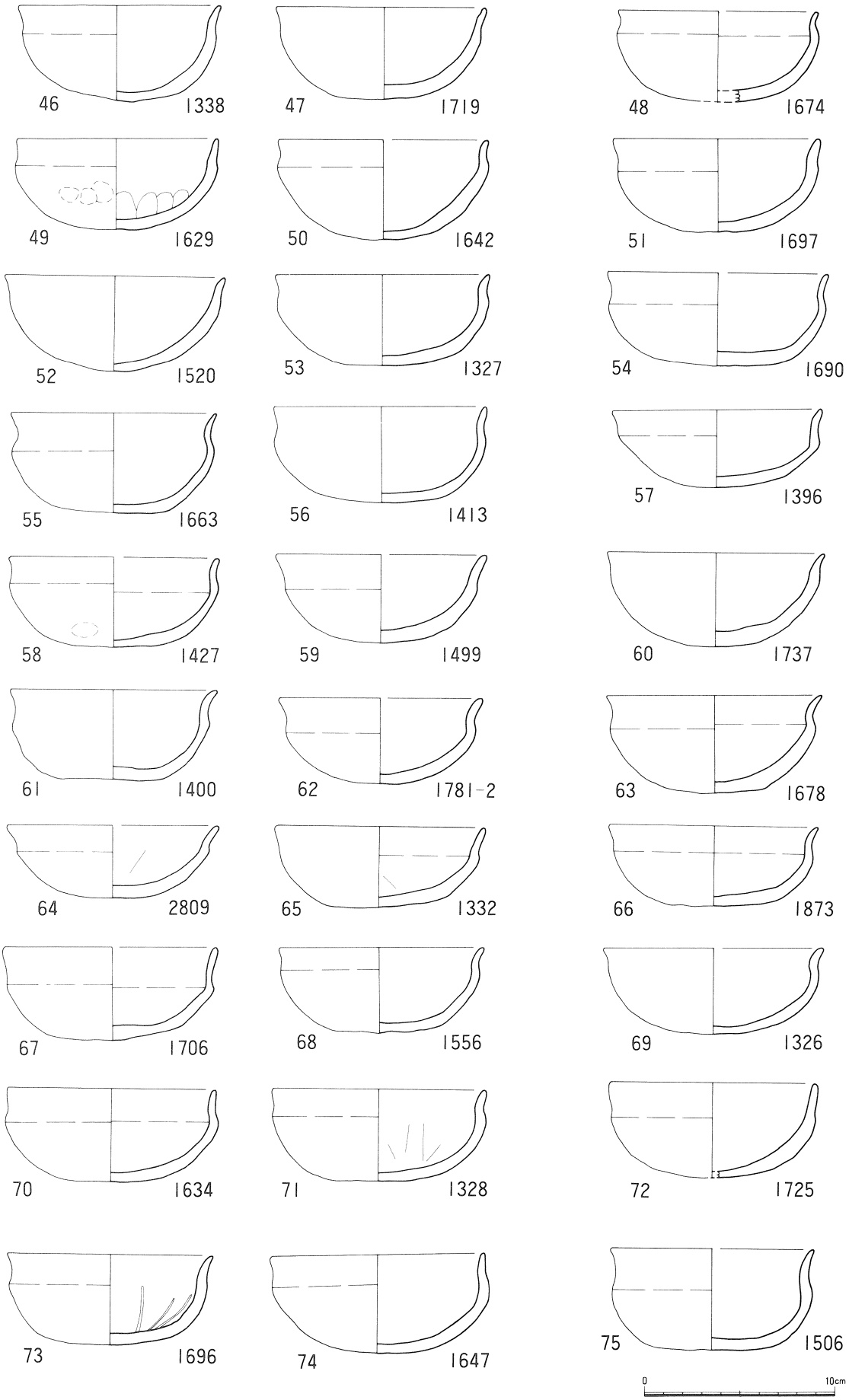




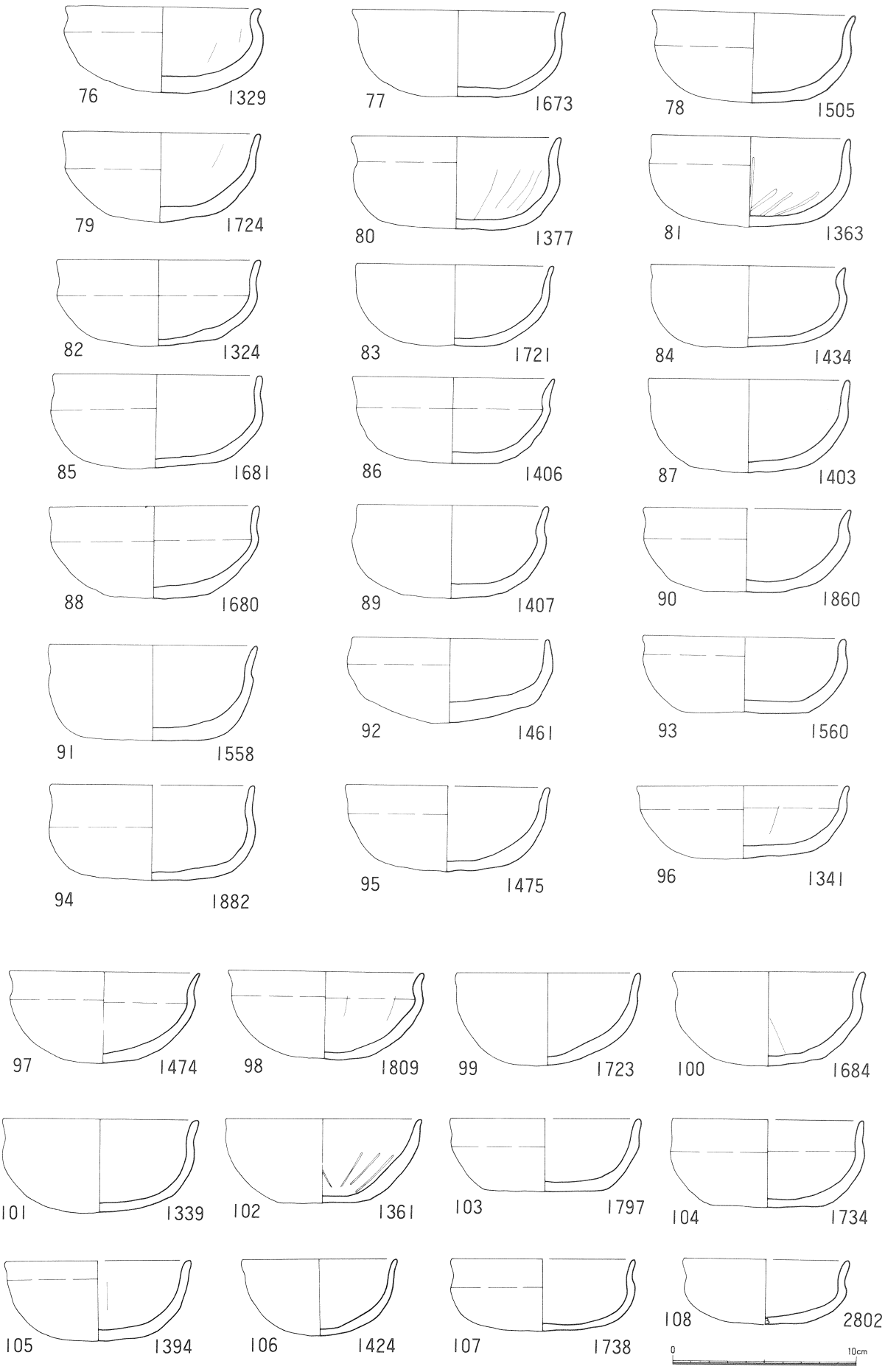
第31図　宮川4区SR56出土土器実測図1（須恵器編年図）



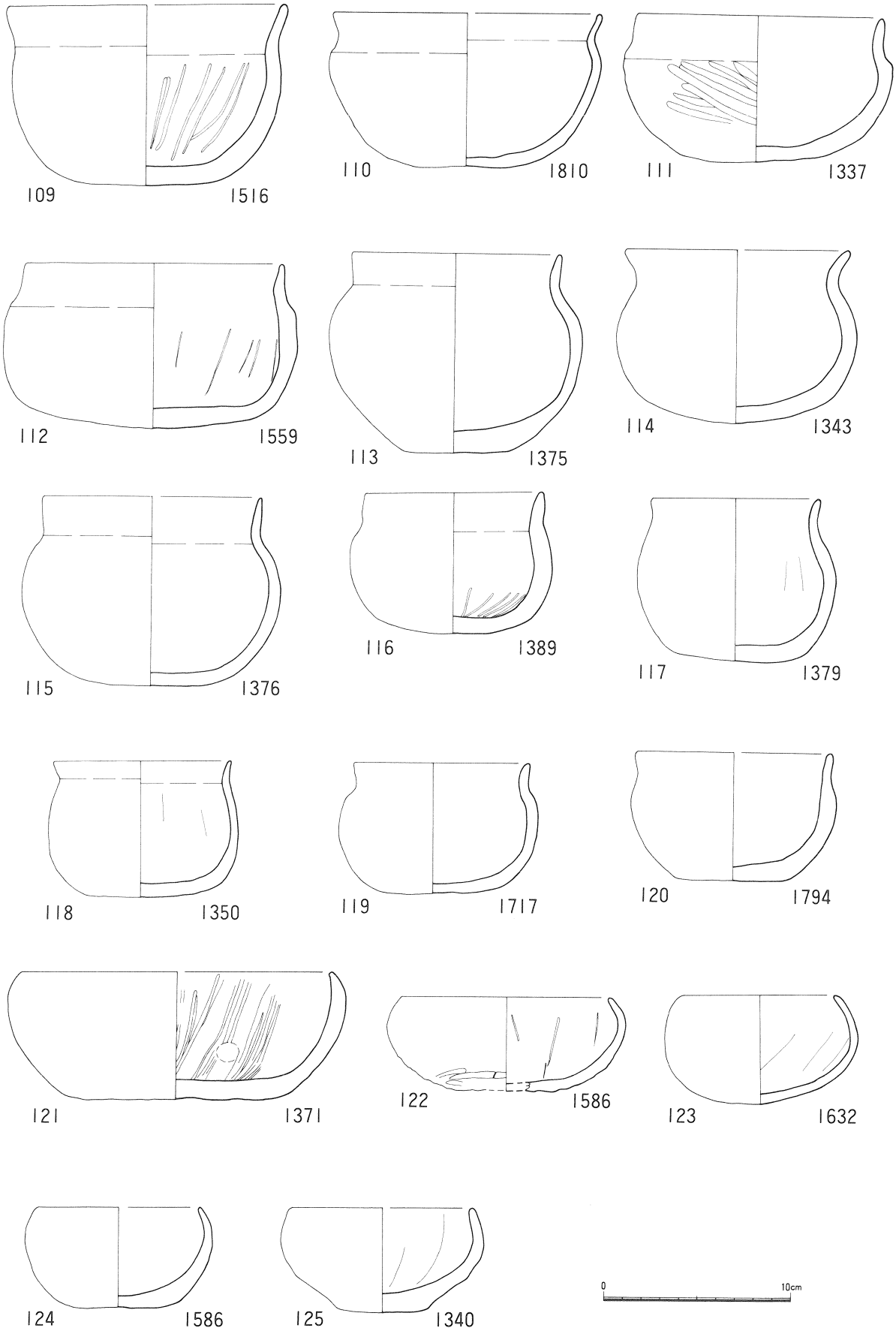
第32図　宮川4区SR56出土土器実測図



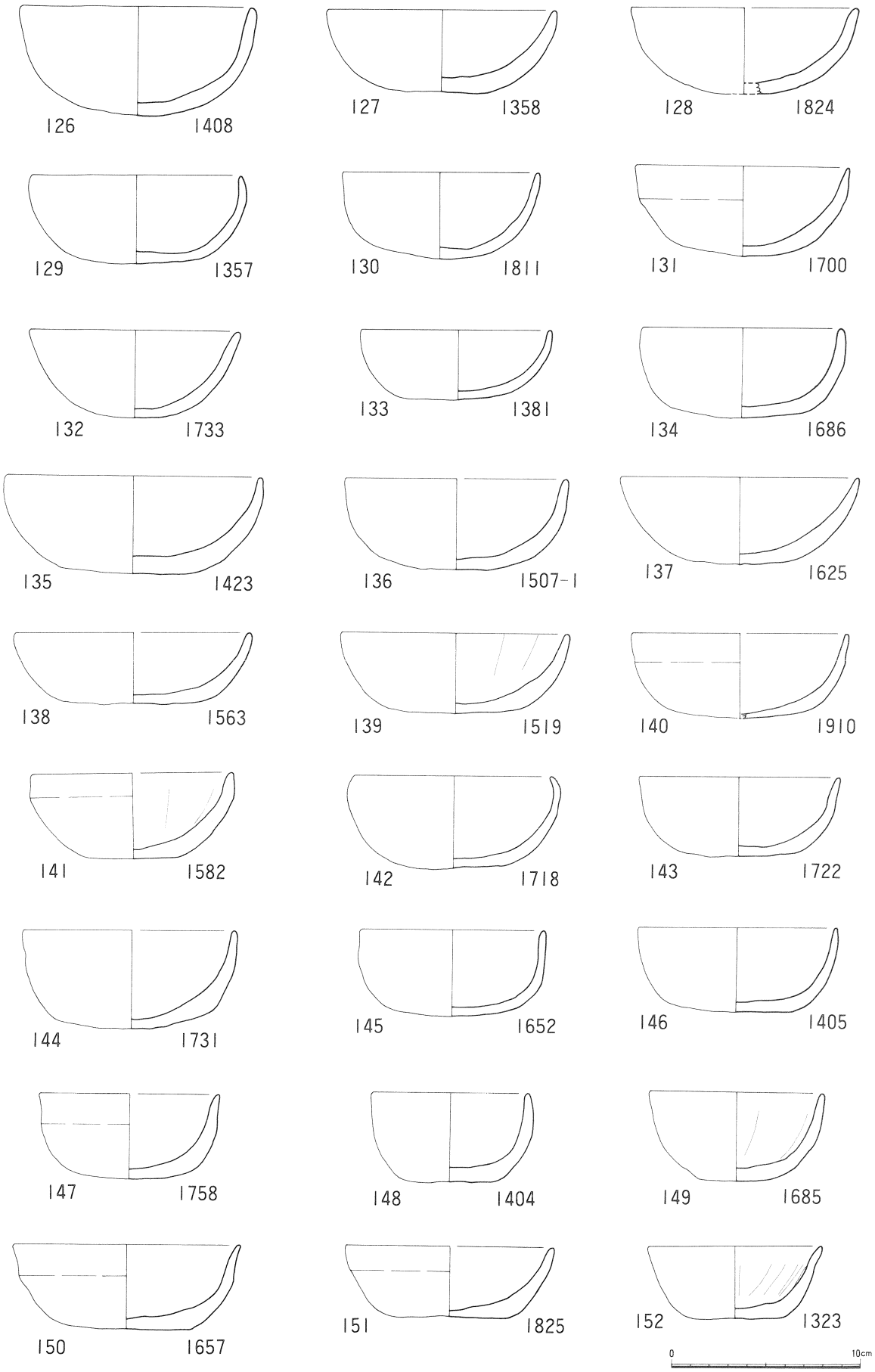
第33図　宮川4区SR56出土土器実測図3



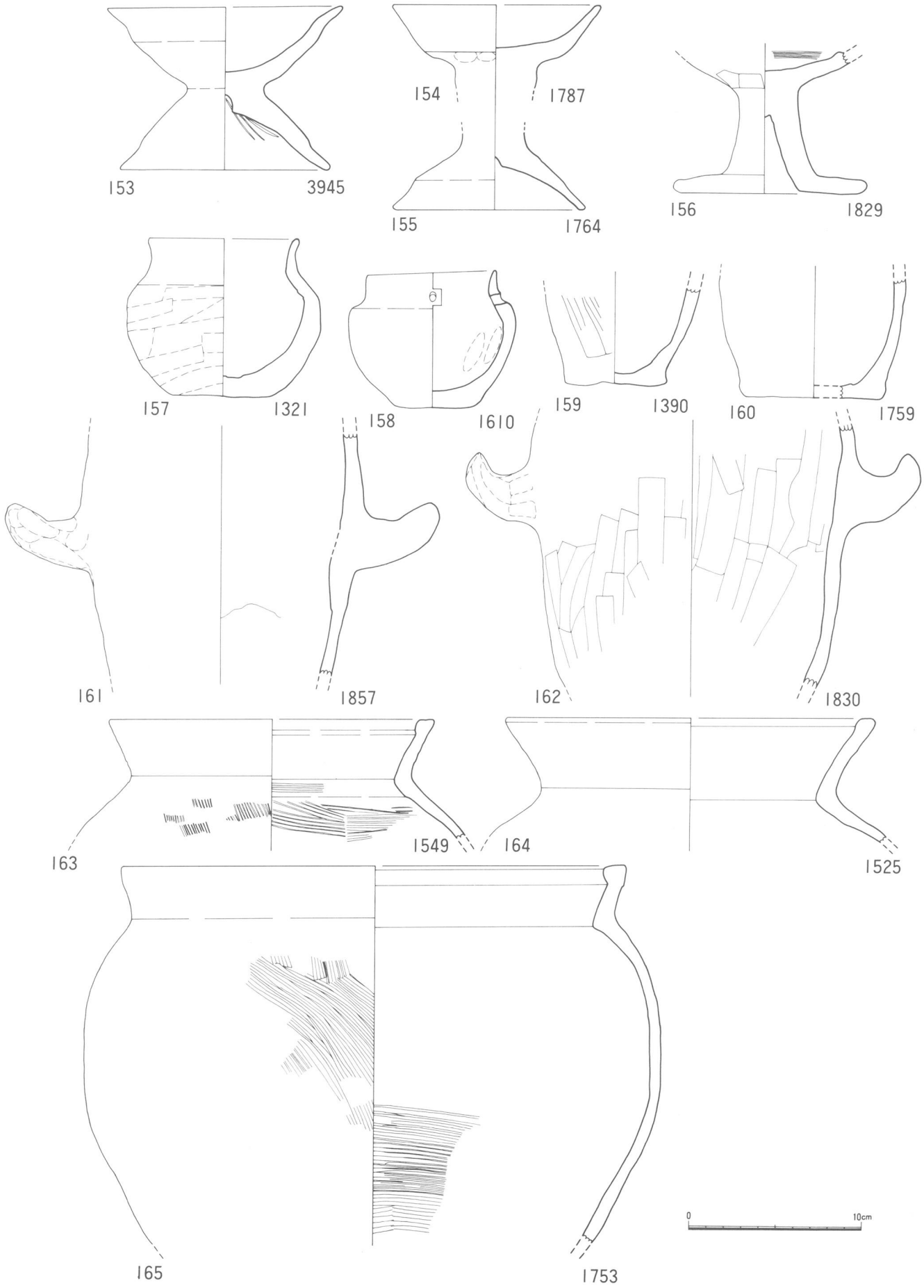
第34図　宮川４区ＳＲ56出土土器実測図４



第35図　宮川4区SR56出土土器実測図5



第36図　宮川4区SR56出土土器実測図6



第37図　宮川4区SR56出土土器実測図7

木製品

多量の木製品が出土している。中でも祭祀関係遺物が豊富である。人形10点・馬形６点・刀形３点・斎串状木製品14点以上が検出されている。またその他の遺物としては木札・曲物などがある。

人形木製品は10点を数えまとまった出土である。形態も変化に富んでいる。いずれも完形のものはなく、破損が著しい。脚部を欠失しているものが多い。比較的形態のはっきりしているものは１・２・３で、２と３は同じタイプとしてよい。いずれも脚の造りは三角に切り取る方式である。９は特異なもので頭頂部が平らで脚は一本である。厚さも1.3㎝と他に比較して厚いが、一応人形としておく。７および10は欠失部分が多く判断が困難であるが、頭部が圭頭であり、切り込みが左右対象であることから、人形と判断した。８は頭部の巾が狭く、頂部も尖り気味であり、また腰の切り込みも明瞭には確認できないが、他に比定できるものもないので人形としておく。６・７も同様で一応人形としておくが疑念の残るものである。また木取りでは、ほとんどのものが板目取りであるのに対し、１・５が柾目である。５は１と形態的に同じタイプと考えられるので、注目しておきたい。

馬形木製品は６点を数えこれもまとまった出土である。全体に馬の表現は簡略化されている。14・17は損耗が著しくいくつかの破片に分かれており、切り込みやえぐりが当初のものであるか否かの判断は非常に難しい。一応ここでは馬形からははずしておく。注目すべきものとして16がある。長さは推定で14.5㎝下辺に切り込みがあり棒が挿さるようになっている。馬とするより鳥としたほうが良いような形態をとるものである。

刀形木製品も簡略化された形態のものが多く、柄頭を表現したようなものはない。18は全長推定58.7㎝と長大なもので、柄頭は圭頭状になっている。21・22・23は左右のくり込みが非対象であるので、刀形の可能性ありとしておきたい。

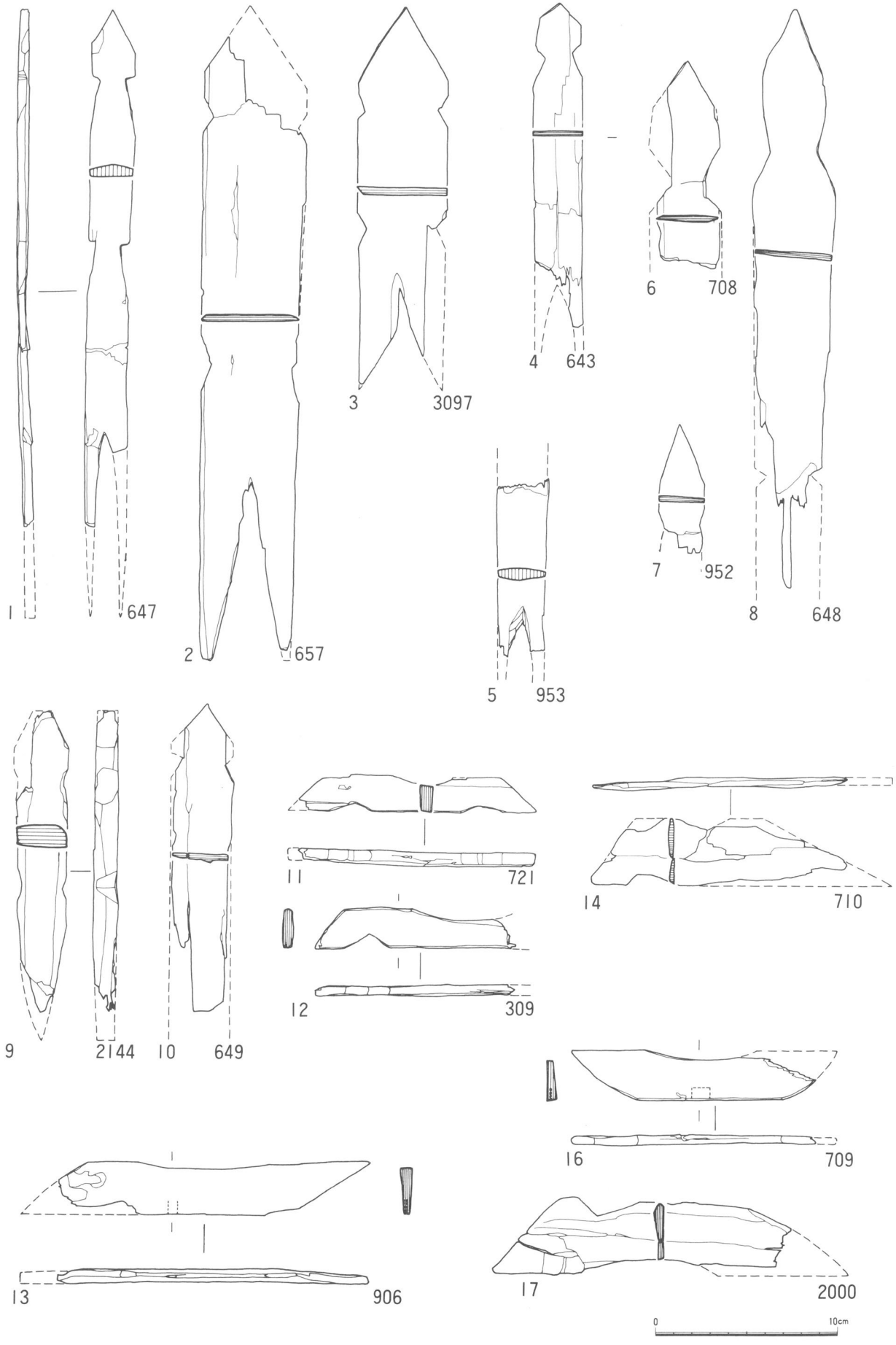
どこまでを斎串とするかは非常に判断に苦しむところである。詳細な検討は『大谷川Ⅳ』において行う予定であるが、大きく３類に細分出来よう。すなわち、24・26のように頭部を圭頭に造り端部を鋭く尖らせているもの。25・27はこの端部である可能性がある。29のように両端が圭頭状に造られているもの。上下の判定はつけ難い。３は36のように、両端とも斜めに切り落としてしまうものである。いずれも完形のものは少なく、破片が多く判断に苦しむ。38は断面が丸味を帯びており、斎串のほとんどが板目の杉板により作られているのに対し、大きな違いである。形態から斎串とされてきたが検討を要する。

54は下部に切り込みが、55は上部に大きなえぐり込みがあるもので、刀形あるいは馬形の可能性もあるものである。

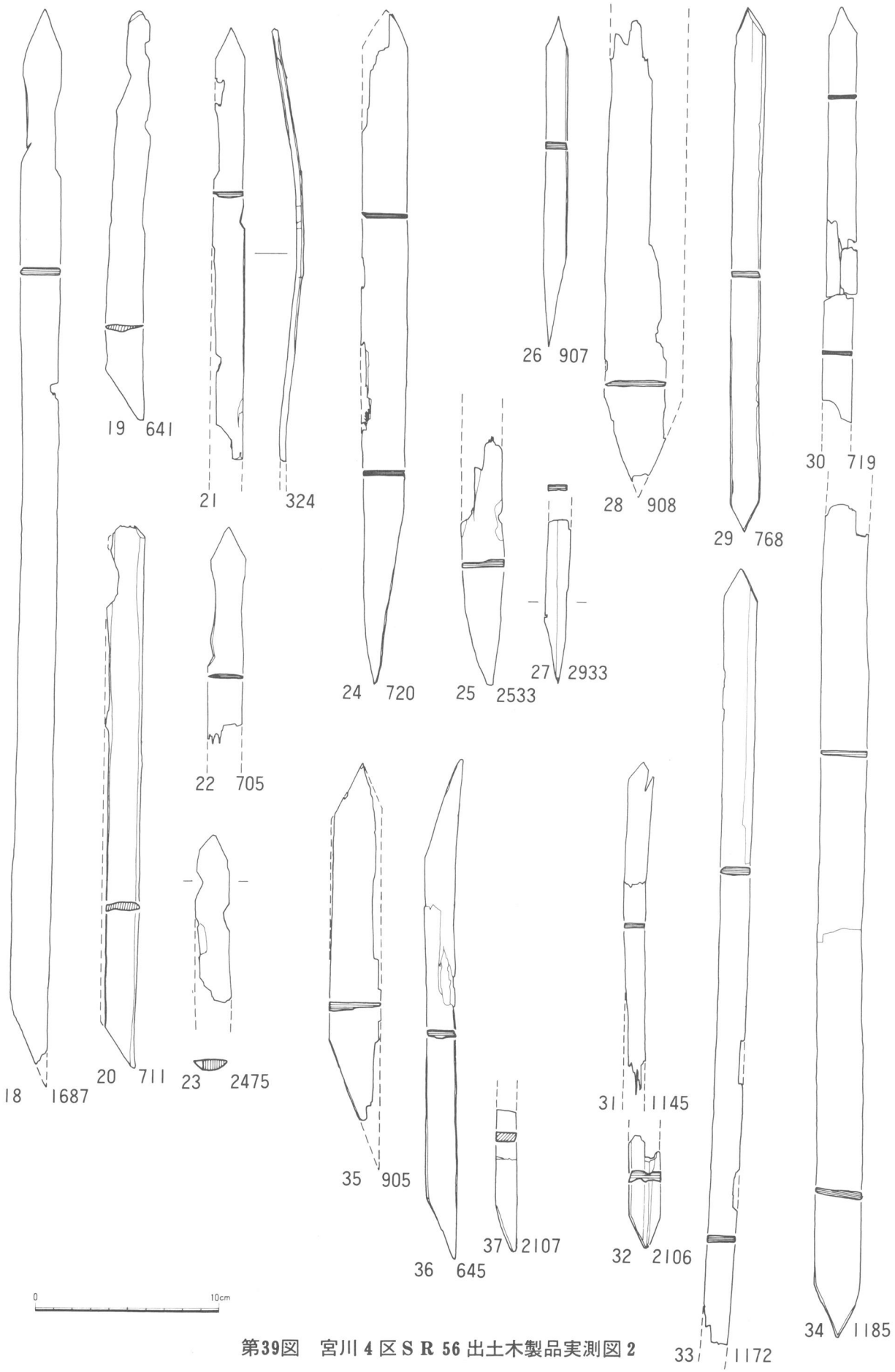
そのほかの遺物では、曲げ物の多いのが目立つ。56・59は底板であり、57も蓋等に用いられたものの可能性がある。58は側板で綴じ合わせるための桜？の皮の痕跡が認められる。

51は片側が欠失しているが、木札と考えられるものである。表面は非常に丁寧に削られており、長さ6.2㎝である。両端に刻みが入り縛り付けておくときに使用されたと考えられる。

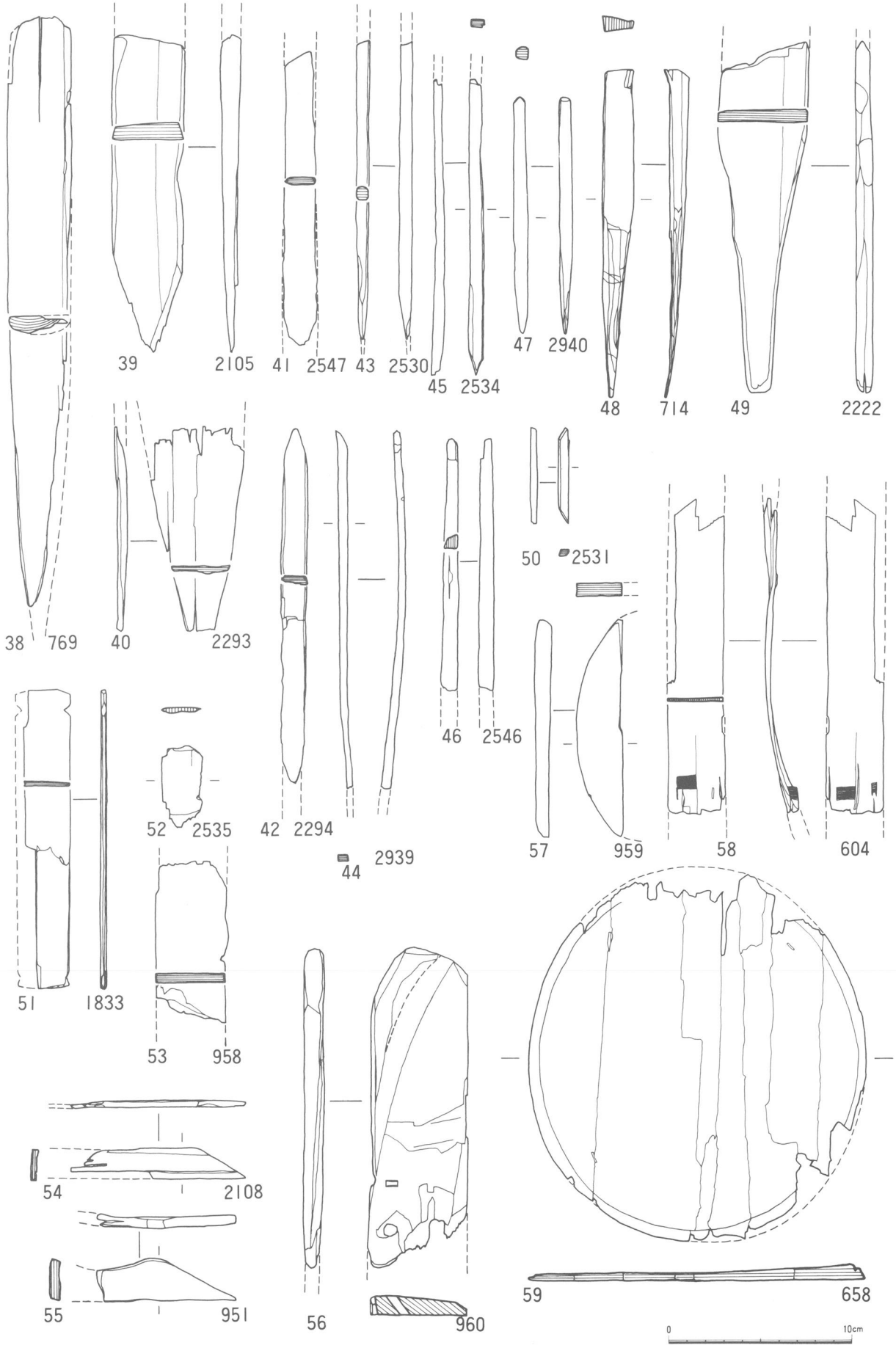
48は非常に鋭い先端を持ったもので、その用途は不明である。



第38図　宮川4区SR56出土木製品実測図1



第39図　宮川4区SR56出土木製品実測図2



第40図　宮川4区SR56出土木製品実測図3

宮川4区SR56出土木製品一覧表

番号	名称	遺物番号	出土地点	計測値(cm)			特徴	樹種	木取り	備考
				長さ	幅	厚さ				
1	人形	3-647	N94粘土混り黒色砂礫	(28.4)	2.5	0.6	圭頭。なで肩。脚部は三角形の切り込みにより造り出される。	スギ	柾目	脚部欠損
2	〃	3-695	M94粘土混り黒色砂礫	(34.2)	5.7	0.4	首及び腰を切り込みで表現。幅広でずんぐりしている。	〃	板目	頭部一部欠損
3	〃	3-3097	J99	20.6	4.8	0.4	頭部は鋭く尖る。首及び腰を切り込みにより表現。		〃	脚部一部欠損
4	〃	3-643	N94粘土混り黒色砂礫	(17.8)	2.7	0.3	頭部の幅は胴部よりせまい。なで肩、手及び腰の表現はなく、そのまま脚部に続く。	スギ	〃	脚部欠損
5	〃	3-953	N94	(9.8)	2.8	0.6	胴部分のみ。脚部は三角形の切り込みにより造り出されている。		柾目	胴部のみ
6	〃	3-708	M94粘土混り黒色砂礫	(11.4)	(3.4)	0.4	頭部から肩部の間が長く首を表現したものか。	スギ	板目	下部欠損
7	〃	3-952	N94	(7.0)	2.5	0.3	頭部は鋭く尖る。	〃	〃	頭部のみ
8	〃	3-648	N94	(31.5)	4.6	0.3	頭部は鋭く尖り、肩はナデ肩である。頭部の幅が身体より狭い。腰の切り込みあり。	〃	〃	脚部欠損
9	〃	3-2144	N94	(16.4)	2.8	1.3	脚部は1本で鋭く尖る首及び腰は、くり込みによる。	〃	〃	
10	〃	3-649	N94	(15.7)	3.2	0.5	頭部の左右は欠損。	〃	〃	摩耗著しい
11	馬形	3-721	M94粘土混り黒色砂礫	(13.0)	1.9	0.8	下部に割れ目あり。		〃	ほぼ完形
12	〃	3-309	N94 黒色砂礫	(10.9)	2.2	0.6	下部に棒をさしたと思われる穴あり。		〃	約½
13	〃	3-906	M94暗灰色粘土混砂礫	(17.0)	2.9	0.7	背を大きくえぐる。下部に穴あり、木質が差し込まれた形で残存。		〃	頭部欠損
14	〃	3-710	M94粘土混り黒色砂礫	(14.5)	3.5	0.3	下部のえぐりにより、明瞭に頭部が造り出されている。		柾目	尾部欠損
16	〃	3-709	N94粘土混り黒色砂礫	(13.4)	2.7	0.5	上部に大きなえぐり込みがあり、両端とも跳ね上がる。下部に穴あり。深さ0.7cm		板目	
17	馬形?	3-2000	M94	(16.3)	3.2	0.6	上部に一ケ所鋭い切り込みがあり、尾部は斜に切り落とされる。下部は大きなえぐり込みとなっている。		〃	馬形の可能性あり。摩耗著しい

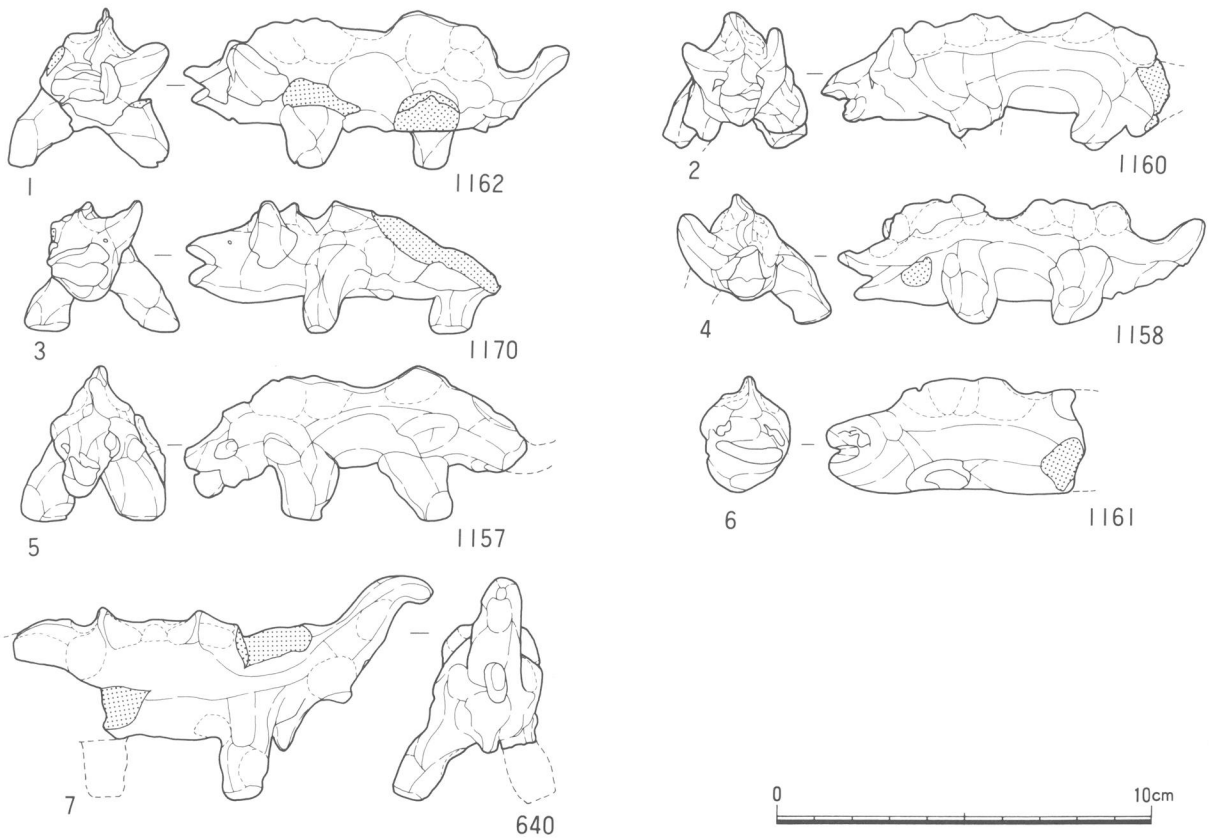
番号	名　称	遺物番号	出土地点	計　測　値（cm）			特　　徴	樹種	木取り	備　考
				長さ	幅	厚さ				
18	刀　形	3－1687	M94暗灰色砂混り粘土	（57.3）	2.2	0.5	圭頭。上下のえぐりが対照でない。	スギ	〃	
19	〃	3－641	N94粘土混り黒色砂礫	22.2	2.1	0.5	刀身に比して柄部が細い。		柾　目	
20	〃	3－711	N94粘土混り黒色砂礫	29.4	1.9	0.6	下部のえぐりで柄部を造り出す。柄部が非常に短い。		〃	
21	刀形？	3－324	N94暗灰色粘土混砂礫	（23.7）	1.2	0.4	圭頭で幅も変化がない。上下非対照のえぐりがある。		板　目	先端欠損
22	〃	3－705	M94粘土混り黒色砂礫	（11.7）	1.9	0.3	下部が大きくえぐられている		〃	柄部のみ
23	〃	3－2475	N94暗灰色砂混り粘土	（ 9.1）	1.8	0.6	先端部の破片。左右にえぐり込みが各１ケ所ずつあり。対象ではない。		柾　目	刀形の可能性あり
24	斎　串	3－720	M94粘土混り黒色砂礫	（36.5）	2.5	0.3	頭部は圭頭か。基部は鋭く尖る。	スギ	板　目	
25	斎串？	3－2533	N94暗灰色砂混り粘土	（13.5）	2.3	0.4	先端部が鋭く尖っている。		〃	
26	斎　串	3－907	M94粘土混り黒色砂礫	18.2	1.3	0.4	両端ともに尖くとがる。		〃	完形
27	斎　串	3－2933	N94暗灰色砂混り粘土	（ 9.0）	1.3	0.3	先端は尖くとがる。		〃	
28	斎串？	3－908	M94粘土混り黒色砂礫	（25.1）	（3.3）	0.3	腐食はげしく形態の復元困難端部は圭頭と推定できる。	スギ	〃	
29	斎　串	3－768	M94粘土混り黒色砂礫	28.6	1.7	0.4	両端ともほぼ同様。	〃	〃	
30	〃	3－719	M94粘土混り黒色砂礫	（22.7）	1.6	0.2	圭頭状。	〃	〃	
31	〃	3－1145	N94粘土混り黒色砂礫	（18.0）	1.4	0.3	先端部の切り込みは後世のものか。	〃	〃	
32	〃	3－2106	N94暗灰色砂混り粘土	（ 6.2）	1.7	0.5	端部は圭頭状。		〃	端部破片
33	〃	3－1172	M94暗灰色砂混り粘土	（42.3）	1.9	0.4	圭頭。	スギ	板　目	
34	〃	3－1185	N94暗灰色砂混り粘土	（45.3）	2.5	0.4	端部より22cmのところで折れの痕あり。	〃	〃	
35	〃	3－905	M94粘土混り黒色砂礫	（19.3）	2.8	0.4	頭部は圭頭か？		〃	

番号	名　称	遺物番号	出土地点	計測値（cm）			特　　徴	樹種	木取り	備　考
				長さ	幅	厚さ				
36	斎　串	3－645	N94粘土混り黒色砂礫	27.1	1.7	0.5	端部より8cmのところで折れている。	スギ	板　目	
37	〃	3－2107	N94暗灰色砂混り粘土	(7.7)	1.1	0.5	端部より5cmのところで折れている。		追　柾	
38	斎串？	3－706	M94粘土混り黒色砂礫	(32.0)	3.5	1.0	先端部が欠損している。辺材を使用。	スギ	板　目	
39		3－2105	N94暗灰色砂混り粘土	(17.1)	4.0	1.0			〃	先端部のみ
40		3－2293	O94暗灰色砂混り粘土	(11.0)	(4.9)	0.4	矢板状の先端。割れ著しい。		〃	先端部のみ
41		3－2547	M94暗灰色砂混り粘土	(15.9)	1.9	0.4	両端とも欠失。斎串の部分の可能性あり。		〃	
42	斎　串	3－2294	O94暗灰色砂混り粘土	(19.0)	1.4	0.5	先端より10cmのところで折れている。		〃	
43		3－2530	N94暗灰色砂混り粘土	(15.1)	0.7	0.7	棒状。先端は鋭く尖る。		—	
44		3－2939	N94暗灰色砂混り粘土	(19.4)	0.5	0.35	棒状であるが、曲がっており幅は一様ではない。		板　目	
45	斎　串	3－2534	N94暗灰色砂混り粘土	(16.0)	0.8	0.4	端部を尖らせる。		〃	
46		3－2546	M94暗灰色砂混り粘土	(13.6)	0.9	0.9	棒状を呈する。		—	
47		3－2940	N94暗灰色砂混り粘土	12.8	0.8	0.7	四角な棒状を呈し、先端を尖らせる。		—	完形か？
48		3－714	N94粘土混り黒色砂礫	17.8	1.7	0.9	先端が鋭く尖っている。		柾　目	
49		3－2222	O94暗灰色砂混り粘土	(19.0)	4.8	0.7	先端部に切り込みあり。		板　目	
50		3－2531	N94暗灰色砂混り粘土	5.2	0.4	0.3	両端が斜めに切り落とされている。		〃	
51	木　札	3－1833	O94暗灰色砂混り粘土	16.2	(2.6)	0.3	両端付近に切り込みあり。		〃	
52		3－2535	N94暗灰色砂混り粘土	(4.5)	2.2	0.3	小破片。形状不明。		柾　目	
53		3－958	N94	(8.8)	4.0	0.5	板状。両端とも欠失。		板　目	

番号	名　称	遺物番号	出土地点	計　測　値（cm）			特　　徴	樹種	木取り	備　考
				長さ	幅	厚さ				
54		3－2108	N94暗灰色砂混り粘土	（ 9.6）	1.6	0.3	端部は斜めに切り落とされている。斎串あるいは馬形の可能性あり。		板　目	
55		3－951	N94	（ 7.6）	2.3	0.6	端部は斜めに切り落とされている。片側にえぐりあり。		〃	馬形又は刀形の可能性あり。
56	底　板	3－960		（17.2）	（5.3）	1.0	方形と円形の穴あり。径25cm程度か？		追　柾	
57		3－959	N94	（11.8）	（2.4）	0.7	径13.5cm程度の円形となる。曲物・おけ等の底板か？		板　目	
58	曲　物	3－604	N94砂礫	（17.0）	3.1	0.2	曲物の側板。内側に切り目を入れる。桜の皮にてとじあわせる。		柾　目	
59	底　板	3－658	N94粘土混り黒色砂礫	径 18.3	中央 0.4 縁 0.8		曲物の底板。側板とをつなぐための穴4ケ所。		板　目	破損著しい
60	木　簡	3－1055		13.6	2.2	0.4	相星五十戸；□□	ヒノキ	〃	5号木簡
61	〃	3－262	N94	（22.3）	3.0	0.3	墨痕不鮮明。			11号木簡

◦計測値の（　）は、破片での現状の数値である。

動物形土製品　動物型土製品は7点出土している。このうち6点（1～6）は、M95グリッド杭から東へ5.5 m付近に集中して出土した。またこれら6点は形態がほぼ同じであった。1は長さ10.2cm、高さ4.2 cmを測る。断面円形に近い棒状の胴部の背に縦方向に帯状の粘土が前部と後部に貼付されている。前半身の背にたてがみが表現された例は多いが、同じように後半身にもみられるものは他の遺構・地区の土製品にはない。意識的に中央で切っているようでたてがみというより背ビレという印象である。この背ビレ状の突帯は2～5の土製品にも共通する。脚は胴下部を指で円形に押圧して窪めそこに埋め込むように貼付している。頭部は胴部端を先細にし、正面からヘラ状器具により0.7 cmほど切り込み上下に口を分けている。頭部側面には斜め上方に伸びる長さ1.6 cmほどの突起がある。右側は貼付痕のみを残し欠損している。耳あるいは角と考えられるが、形状と長さからは角とした方がよいようである。右側には角と口の間に径0.5 cmほどの浅い窪みがあるが、左側ははっきりしない。おそらく目の表現と考えられる。尾は胴の方向軸から約35°の角度ではね上がっている。尾の直下には径0.7 cmほどの浅い窪みがある。棒状器具でつついたような窪みで尻穴を表現したのかもしれない。2も1とほぼ同じ形態であるが前脚と尾部を欠損する。背ビレ状の突帯、角状の突起は1と同じであるが角状突起の直下に串状器具による明確な刺突孔が左右1対みられる。尾部直下には指頭で押圧したような窪みがある。3は後半身の一部を欠損する。背ビレ状の突起・角状の突起は1・2と同じであり、2と同様に目と考えられる径0.1 cm



第41図　宮川4区SR56出土土製品実測図

ほどの串状器具による刺突孔が1対ある。右側の角状突起を欠損する。4は右側2脚と左側角状突起を欠損する。形状は1とほぼ同様で目の表現はない。5は左右の角状突起と尾部を欠損する。顔面に目と考えられる串状器具による刺突孔があり、尾部直下にも同様の刺突孔がある。6は後半身と四脚を欠損する。背ビレ状の突起はほぼ同様であるが、頭端部は他のものにくらべ丸く、角状突起は貼付痕らしきものも認められるが断定はできない。口は先端部を正面からヘラ状器具で切り込んで表現しているが他のものにくらべ上下の開きはわずかである。これらの土製品は次の点で他の動物形土製品とは異なった特徴を示している。①胴部背面に、前後に分かれる背ビレ状の突起があり、これは他のものにはみられない。②頭部左右両側面に角状の突起がある。③上下に大きく割れる口を有する。④同形態のものが6点近接して出土した。その形状からは馬形とは考えにくいが、他の動物を考えても思い当たるものは存在しない。土馬に関しては土馬が土の神を重要な媒体として竜蛇信仰と結びつく土竜とする考え方が村上吉郎氏[(1)]によって示されているが、検証する能力はないのでここでは単に〝動物形土製品〟とするにとどめたい。

7は頭部を欠損する。断面円形の胴部の背に帯状粘土を2列横方向に配し鞍とし、鞍の前輪より前には縦方向に帯状粘土がありたてがみを表現している。四肢は棒状粘土を別につくり貼付している。尾は胴部の方向軸と約30°の角度で上方に伸び、端部を水平に屈曲させている。尾部直下には尻穴と考えられる棒状器具による刺突孔がみられる。後脚の間には0.6㎝ほどの突起があり、雄の性器と考えられる。7は鞍の表現より馬形としてよいであろう。

(1) 村上吉郎　「土馬祭祀と漢神信仰―北陸道出土の土馬から―」石川考古学研究会々誌　1982

第３節　宮川６区ＳＲ 312 ・ＳＲ 313

宮川６区南部にある旧河道跡である。宮川６区はその大半が旧河道跡であるが各時代の旧河道が複雑に切りあい、連続する一本の河道として認識されたものは少ない。その中で河床が窪地状を呈する部分を数カ所検出し遺構番号を付した。これらは旧河道の屈曲部と考えられ遺物は河道に沿うように分布しており、〝まとまり〟としてとらえることができた。ここにあげたＳＲ 312・ＳＲ 313 は特に祭祀関係遺物が大量に出土しており、ＳＲ 312 では人形・動物形土製品が、ＳＲ313では人形・馬形・刀形木製品・斎串等の木製品が他地域にくらべ圧倒的に多い。旧河道という性格上遺物の一括性ということについてはより慎重になるべきであるが、多量の祭祀遺物を含め窪地全体のすべての土器を〝まとまり〟としてとらえ紹介することとする。

1.　ＳＲ 312 （第42図～第49図）

Ｆ 103 グリッドを中心に浅い擂鉢状を呈している。河床最深部は標高 3.93m で最高部は 4.60m である。河道の屈曲部と考えられ南西部に遺物が集中していた。大部分が近世以降の河道により上層を破壊されており河床部分でのみ遺物包含層が残存していた。この中には人形土製品56点、動物形土製品66点が含まれ、他に勾玉７点、石製丸玉33点、土製丸玉５点、管玉２点の玉類、木製品では馬形木製品３点、舟形木製品１点、斎串状の木製品５点、刀形木製品かと考えられるもの３点が出土している。また耳環３点、石製紡錘車２点、鈴１点などもみられる。伴出土器は須恵器が比較的多く６世紀中葉～11世紀までの年代幅をもっている。以下にＳＲ 312 出土の実測可能な遺物すべてを図示し紹介する。

土器　須恵器は58点を図示した（第42・43図・第44図１～３）。１・２は川江試案のⅢ期前葉と考えられる。１は受部径 12.7cm、器高 4.2 cm、立ちあがり高 1.6 cmをはかる。口唇部はややあまい稜を有する。底部から体部中央付近までヘラケズリ調整がみられる。２は受部径15.2 cm、器高 3.9 cm、立ちあがり 1.6 cm をはかる。口唇部の調整は１よりさらにあまく軽く押さえた程度である。やはり体部中央付近にまでヘラケズリ調整がみられる。３～８はⅢ期中葉と考えられる。３は受部径 15.8cm、器高 3.1 cmで立ちあがり部が1.3 cmとやや高いが端部は丸くなっている。７は受部径 15.5cm、器高 3.6 cmで立ちあがりは３にくらべ低い。５は蓋である。口径 14.4cm、器高 3.7 cmで外面の稜はみられず、口唇部の段もなく丸く仕上げている。９～15はⅢ期後葉～末葉と考えられる蓋坏である。受部径で 12.0cm～ 10.9cmと小型化している。蓋（９）は口径 11.4cm、器高 3.6 cmで外面中央に２条のあまい沈線がみられる。10は９とほぼ同様の大きさであるが沈線は見られない。身では11のように受部径 11.6cm、口径 9.2 cm、器高 3.5 cmと受部が長く浅いものと、14のように受部径11.8cm、口径10.4cm、器高 4.7 cmと受部が短く深いものとがあるが、受部径はいずれも11cm前後である。立ちあがりは短く内傾しており端部は丸く仕上げられている。ヘラケズリは底部周辺にのみなされているものが多い。Ⅲ期後葉と考えられるものは他に口唇部が欠損し図示できないもの３点を含め10点を数えた。18・19・20～25は９～15より若干新しいと考えられる蓋坏である。立ち上がりはさらに短く内傾し、受部径11cm以下となっている。24は受部径 9.7 cm、器高 3.2 cm

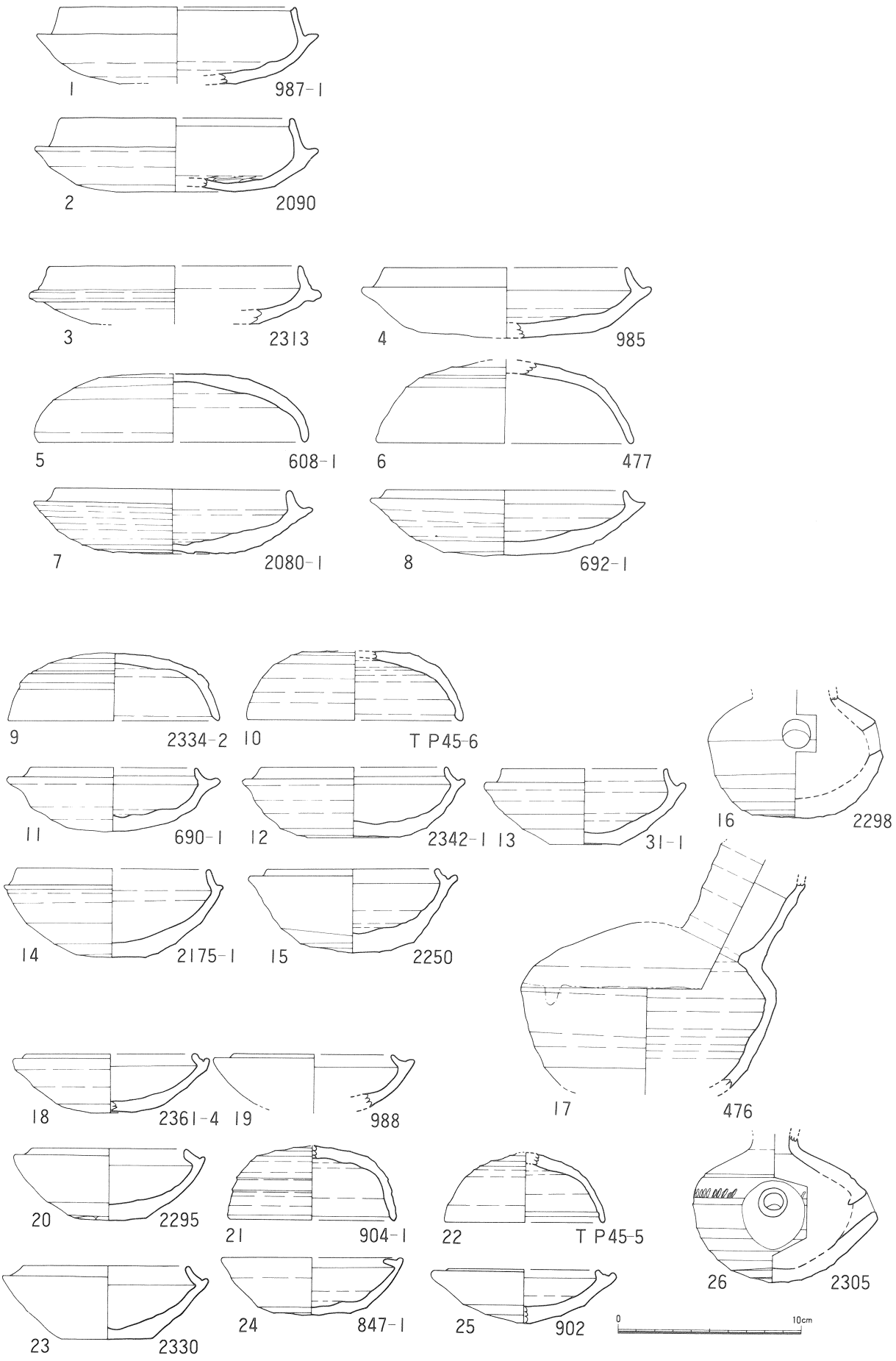
で立ち上がりは受部端部より下方となっている。23は受部径11.0cm、器高4.0cmで体部・底部とも直線的で、ヘラ調整は底部の切り離しのみ用いられている。蓋（21）は口径9.1cm、器高4.0cmで丸みを帯びている。22も口径8.7cmと小さい。27～30はつまみの付いた蓋である。身受部にかえりを有するもので、27・28はいわゆる乳頭状つまみであり受部径はそれぞれ9.4cm、9.5cm、器高は3.5cm、3.2cmである。30は直径1.8cmの偏平なつまみであり頂部は窪んでいる。受部径10.1cm、器高4.0cmである。蓋にかえりがつき宝珠形のつまみがつくのは前段階（18～25）より新しい要素であるが、前述した21・22の蓋としたものは口径・形状等から27～30の身としてもおかしくなく、これらを時間差と考えるべきかは慎重な検討が必要である。以上18～25・27～30の蓋坏は川江試案のⅣ期と考えられ、12点とかなり高い割合を示している。

32以降は高台付の坏が主体となるⅤ期と考えられる土器である。32は底部から体部にかけて斜めの鋭いヘラケズリがみられ、この斜面に高台を付している。したがって底部が高台からはみ出し高台の役をなしていない。これはⅤ期前葉の特徴であるが33～36も32ほど顕著ではないが同じような傾向が認められる。46・47は底部のみの破片であるが高台径が7.8cm、7.7cmと小さく、底部と体部の境の張りもほとんど認められない。Ⅴ期後葉の要素と考えてよいだろう。40は墨書土器「神」の坏蓋であるが（第81図1参照）43の坏身も同地点で出土しておりセットとなる可能性が高い。蓋は口径15.2cmでつまみ部分が欠損している。天井部はゆるやかなカーブを描き裾部で外反するように屈曲し端部へ達し、端部はやや内傾しながら下方に屈曲している。坏身は口径14.6cm、器高4.7cmで無高台である。坏・身ともに½程度までヘラケズリ調整がみられる。41・42はそれぞれ口径15.7cm、17.2cmであるが40にくらべ天井部から端部にかけての屈曲がゆるやかになっている。45は口径11.7cm、器高4.3cmの高台付の坏身であるが、体部の⅔近くにまでヘラケズリ調整がみられるのが特徴である。以上40～45の蓋坏は、Ⅴ期前葉にもⅤ期後葉にも属さない特徴を示している。したがって相対的にⅤ期中葉ということになろう。49・50はいわゆる削り出し高台の坏である。49は底端部を両側から削り出すことにより高台をつくり出しているが、50は底部から体部にかけての屈曲部を削り出しているため斜めの高台となっている。藤枝市助宗古窯産と考えられるが、ここでは一応Ⅴ期末の資料と考えておきたい。Ⅴ期＝奈良時代と考えられる蓋坏は図示できないものも含め23点を数える。

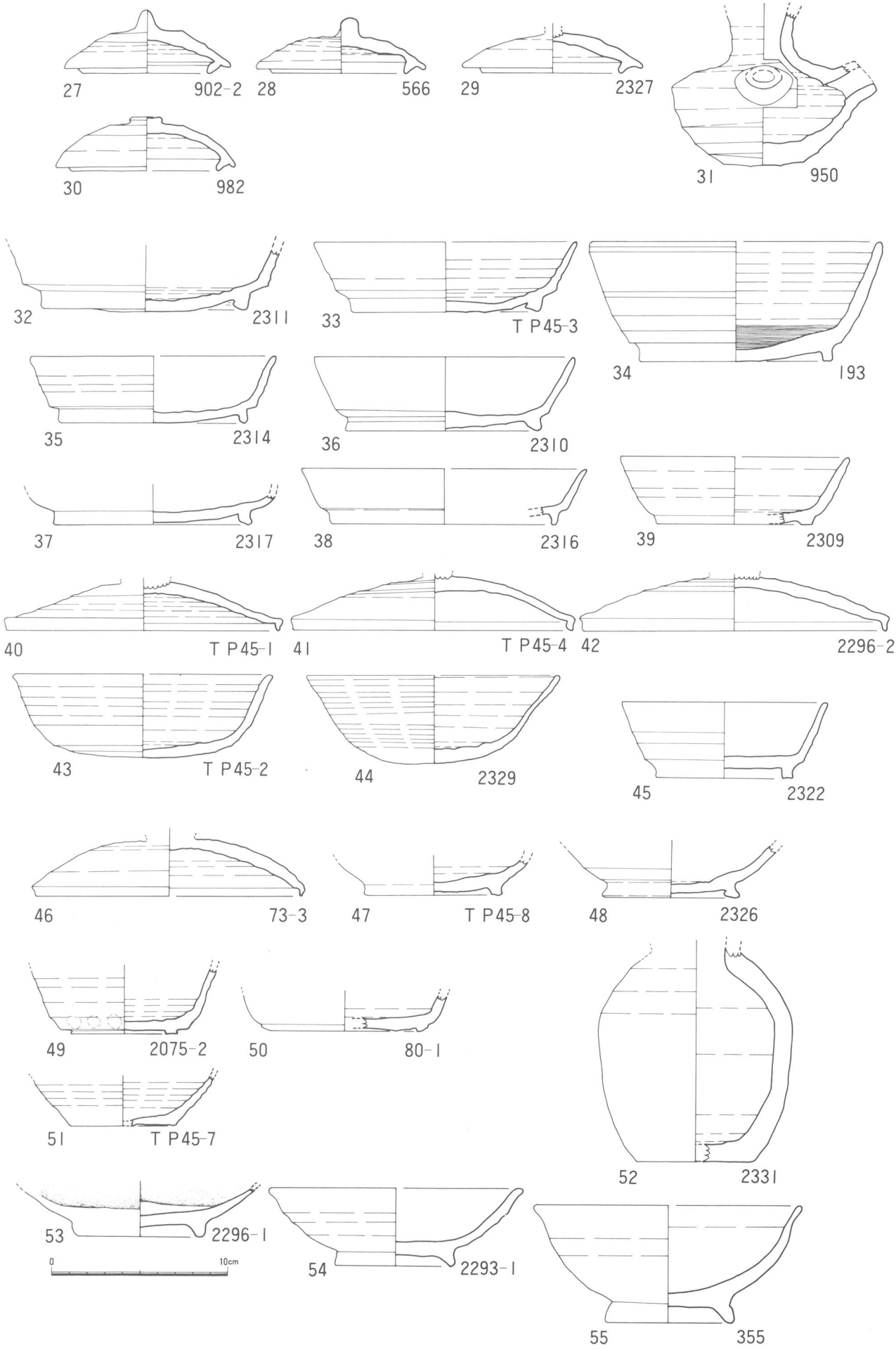
51～53・55は9世紀以降と考えられる土器である。51は底径6.0cmの坏で、底部に糸切り痕を明瞭に残す。52・53は灰釉陶器である。52は底部外面に墨書を有するが（第83図参照）、体部内外面に施釉されている。猿投窯編年のK90～O53前半併行期と考えられる。53は無釉であり底部は糸切りをきれいにナデ消している。O53後半併行と考えられる。55は口径14.9cmに対し器高6.7cmと深いタイプの椀である。H72併行期の椀であろう。以上平安時代と考えられる土器は4点を数える。

他の器種では碗が3点出土しているが、蓋坏同様年代幅が認められる。また口径41.8cmの大型の甕（56）や横瓮（57）などもみられる。

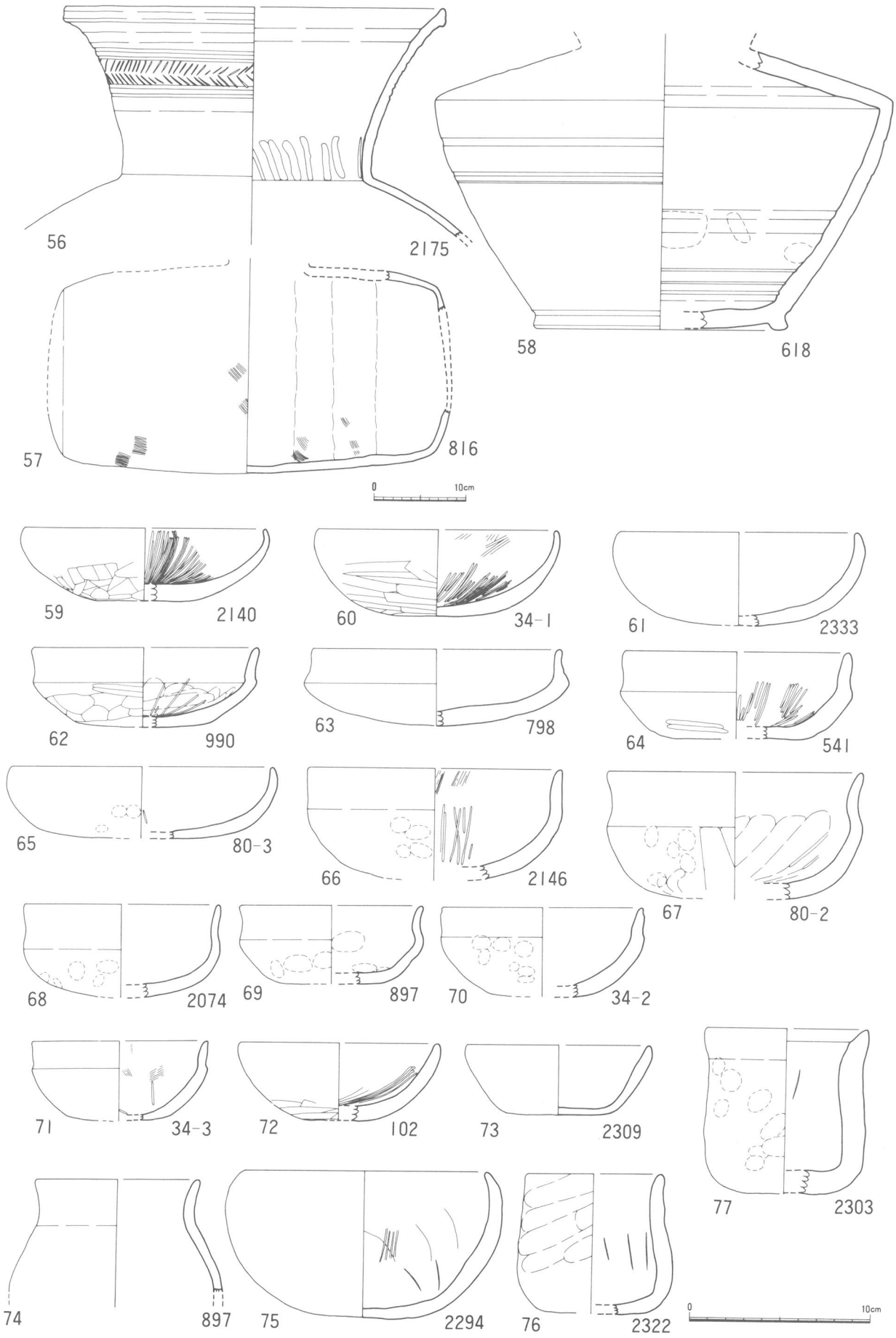
さてここで問題になるのはＳＲ312の年代認定である。出土須恵器からは6世紀中葉から11世紀までの年代が得られるが500年以上の長期にわたり同じ河道が存続していたとは考えにくく、どの地域の旧河道でも新しい土器に混じり古墳時代の須恵器・土師器が出土している。そこで年代幅のある土器の主



第42図　宮川6区SR 312出土土器実測図1



第43図　宮川6区SR312出土土器実測図2



第44図　宮川6区SR 312出土土器実測図3

体がどんな時期にあるのか推定することとした。まず6世紀代（Ⅲ期前葉～中葉）と考えられるもの8点、7世紀代（Ⅲ期後葉～Ⅳ期）と考えられるもの22点、8世紀代（Ⅴ期）と考えられるもの23点、9世紀以降と考えられるもの4点である。遺構の年代はその遺構内の最も新しい遺物の年代をもって決定すべきであり、11世紀の旧河道とすべきである。しかしここで問題にしたいのは河道の年代そのものではなく、多量に出土した土製品・玉類等の遺物そのものの時期認定である。そうした意味からすれば伴出土器の中で主体を占めている時期をおさえることは重要である。57点の蓋坏（灰釉椀も含む）のうち45点を占める7～8世紀が中心となる時期と考えてよいであろう。

土師器は図化できたものは19点にすぎないが、接合不可能な破片はコンテナ10箱以上にのぼる。59～61は宮之腰期の系譜を引く坏で59・60は内面にヘラミガキ、底部～体部下半の外面にヘラケズリ調整がみられる。特に59は体部下半部が直線的で、口縁端部で内湾しているなど古い要素を含んでいる。62～64はいわゆる模倣坏である。口径はそれぞれ12.5cm、12.4cm、13.6cmと比較的大きい。62・64は体部外面ヘラケズリ、内面にヘラミガキ調整がみられる。66・67は口径・器高ともかなり大きめであるが、やはり模倣坏なのであろう。68～70は口径10.0cm～11.0cmで少し小振りである。71は口径9.6cmとさらに小さい。72・73は屈曲して外反する口縁を持たない坏で72は口径11.0cm、器高4.3cmで内面にヘラミガキ、体部の外面下半部にヘラケズリ調整がみられる。全体にやや厚手である。73は口径10.1cm、器高3.8cmで底径5.6cmと広めの底部からあまい稜をもちながら斜め上方に体部が直線的に立ちあがっている。SR312出土の土師器坏の中では最も新しい様相を呈しているといってよかろう。その他では椀状のもの（75）や壷（74）、頸部をもたず底部から口縁部にほぼ垂直に立ちあがる小型の壷（76・77）等がある。須恵器ほどはっきりしないが、59の坏と73の坏ではかなりの年代幅があるように思われる。

木製品

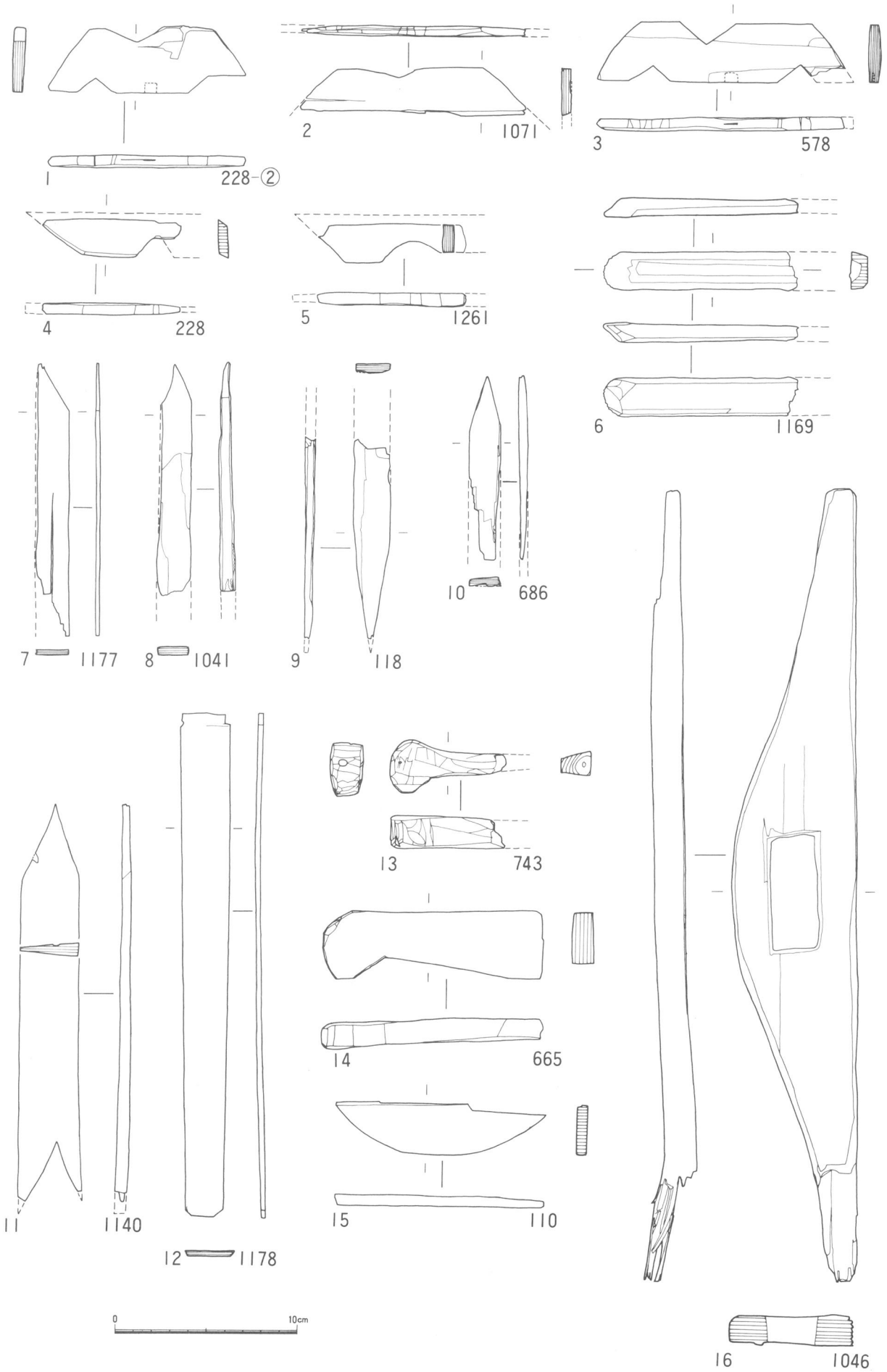
祭祀関係遺物が多い。馬形3点・斎串状木製品3点以上が検出されている。またその他の遺物としては木札・曲物・大足などがある。

祭祀関係では馬形が多いのが注目される。1・3とも本遺跡の中では形の整ったもので、頭部と尾部の区別が意識されているように思えるものである。また下部に棒を挿し込む穴があけられている。2は下部が欠失しているため詳細は不明である。

4および5は欠失部分が大きいため判定しがたいが、刀形木製品あるいは馬形木製品の可能性のあるものである。6は非常に小型ではあるが、中央部分が刳り抜かれており舟形と考えたい。13・14は柄の部分であるが、全体としてどのような形態になるのか不明である。15は曲げ物の底板ないしは蓋と思われる。

宮川6区SR312出土木製品一覧表

番号	名称	遺物番号	出土地点	計測値			特徴	樹種	木取り	備考
				長さ	幅	厚さ				
1	馬形	3-228-2	F 103	10.8	3.7	0.7	下部に穴あり。深さ0.4cm。		板目	
2	〃	3-1071	F 103	(14.4)	(2.6)	0.6	上部に刳り込み1ケ所。下部欠損。		〃	
3	〃	3-578	F 103	(13.7)	3.2	0.7	下部に切り込みあり。		〃	
4	刀形?	3-228-1	F 103	(8.6)	2.1	0.6	端部は斜めに切り落とされている。		柾目	刀形の可能性あり
5	〃	3-1261	F 103	(8.2)	(2.1)	0.7	端部は斜めに切り落とされるえぐり込み1ケ所。		板目	
6	舟形	3-1169	F 103	(10.6)	2.8	0.9	中央がほり凹められている。一方の端部欠損。	スギ	柾目	
7	斎串	3-1177	F 103	(14.8)	1.8	0.3	端部を斜めに切り落とす。		板目	
8	〃	3-1041	F 103	(12.6)	1.8	0.6	端部を圭頭状につくる。		〃	
9	〃	3-118	F 103	(10.9)	2.0	0.5	端部が鋭く尖る。		〃	
10	〃	3-686	F 103	(10.0)	1.7	0.5	端部は圭頭状。		〃	
11	人形?	3-1140	F 103	(21.3)	3.4	0.5	先端部は圭頭。一方は2つに分かれ脚を表現しているともとれる。		—	人形の可能性あり
12	板状	3-1178	—	(27.5)	3.2	0.3	板状。丁寧に削られている。		板目	
13	柄	3-743	F 103	(6.3)	2.9	1.3	柄頭状につくり出す。整形は丁寧。		芯持ち	
14	柄?	3-668	F 103	(12.2)	3.7	1.3	一辺を大きくえぐり、柄頭状につくり出す。		板目	
15	底板	3-110	F 103	(11.6)	2.8	0.5	曲物の底板か?		柾目	
16	大足	3-1046	F 103	43.5	6.9	1.7	大足の部材。中央に方形の穴があり、足をのせる板が固定される。		板目	

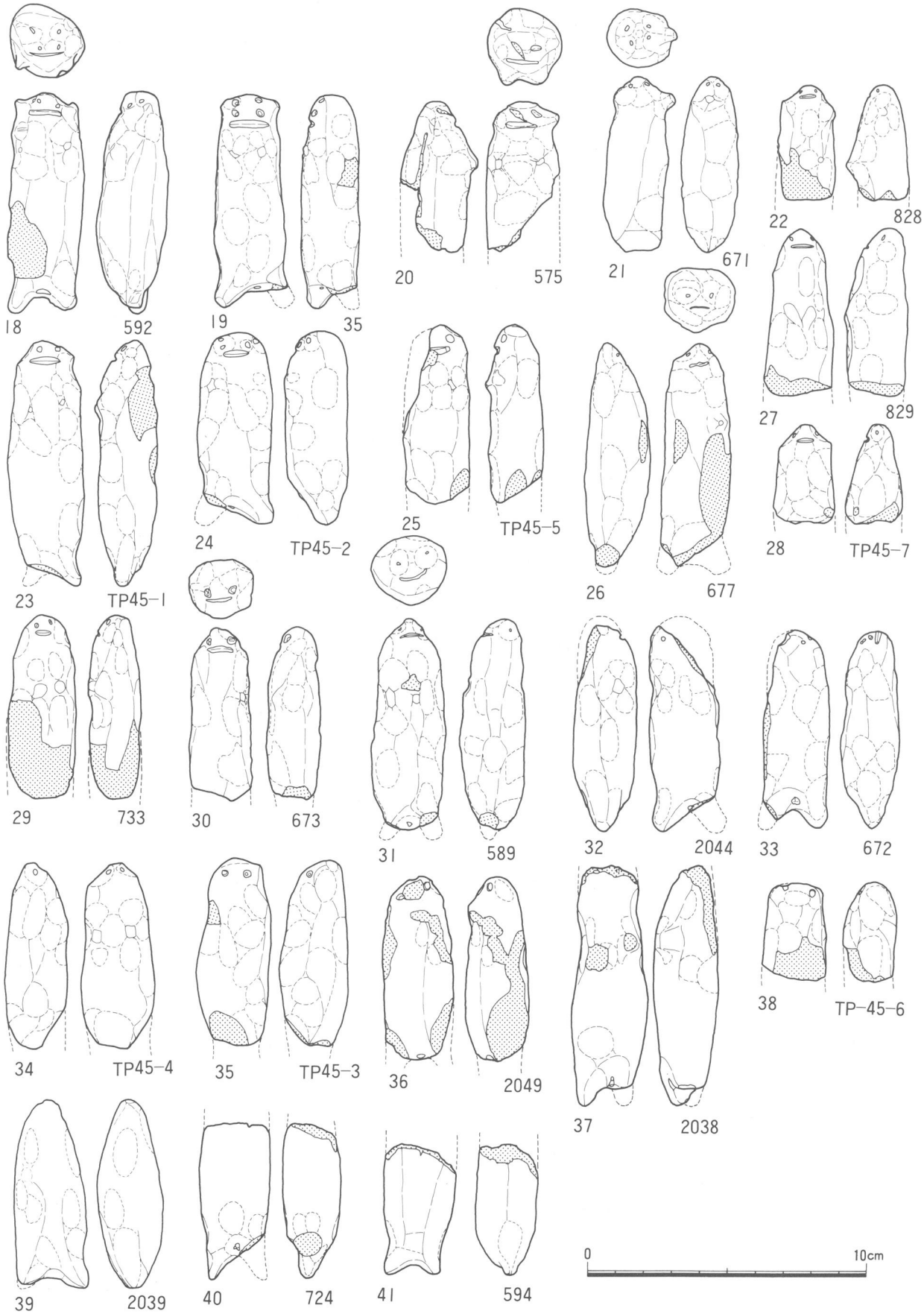


第45図　宮川6区SR312出土木製品実測図

人形土製品　人形土製品は56点出土している。他にも土製品と考えられる破片が多数あり実際にはもう少しあるのかもしれない。このうち形状がはっきりしているものを図示した（第46図・第47図）。

1は下半身のみであるが大きめで、胴部径にくらべ足は長く股間に女性器と思われるヘラ状器具による溝状の切り込みがみられる。全体の調整は指頭による整形のみである。類例は西大谷地区に見られ（後述）便宜上A類とした。2～5は1にくらべやや小さめで3・4は胴部の上下両端に足のようなものが見られる。4は一方の端に棒状器具による刺突孔が2つあり、目の表現と考えられる。また3は股間に3孔があり、女性器及び尻穴の表現と考えられる。3・4の状況から2は半身のみの残存であるが頭部片と考えられ、上端に見られる2孔は目の表現で足状に見える2肢は耳としてもよいのかもしれない。孔はいずれも棒状器具による刺突で、足は別につくり胴部に貼り付けている。これら2～5をB類とした。6・7はいずれも体長5.6㎝で手・足とも明確に表現されているが、顔は目・口等の表現はなく股間にも孔は見られない。6・7ともに足は別につくり胴部に貼付しているが、手は胴部の粘土をつまみ出してつくっている。7は胴部上端の粘土を前に折り曲げ先端を細くし頭部をつくり出している。6・7をC類とした。12～17は胴部三角形で小型である。このうち13～15は上端に棒状の刺突による4孔が見られ、目・鼻の表現と考えられる。13は股間に1孔があり、14は胴部中央に1孔を有する。15は股間・胴部中央ともに孔がある。13～15はいずれも足を胴部に貼付している。12・16は孔は見られず、三角形の底辺にあたる部分の中央を窪めることにより足を表現している。17は調整が雑で底面の窪みがわずかに認められる程度で三角形に近い形状である。12～17は手の表現がなく胴部が三角形であるという共通点があり、E類とした。これに対し8～11は下半身のみの破片であるが、足の表現が明確であり胴部が平行に近い形で続きそうなことからC類とE類の中間的な様相を呈していると判断され、D類とした。このうち8は股間に孔があり、10は胴部中央に孔が見られる。18～41の24点は棒状の長めの胴に短い足がつくタイプでF類とした。顔面の表現は棒状の刺突による4孔で目・鼻をあらわし、ヘラ状器具による溝状の切り込みで口をあらわしているもの（1・2・7）と、2孔の切り込みだけのもの（3・5・6・8～14・16）、2孔のみで切り込みが見られないもの（15・17～21）、4孔だけのもの（4）、表現のないもの（22）等があるが、いずれも魔滅が激しく本来は調整があったのかもしれない。顔面の表現と同じように股間に孔を有するものとないものが見られる。また頭部左右両端部に突起を有するもの（1～6）がみられ、耳の表現かとも考えられる。胴部は粘土を棒状につくり出しただけの簡単なつくりであるが、頭部端から2～3㎝ほどの位置に突き出た山形の小さな突起が左右一対みられるものがほとんどであり、手かあるいは乳房の表現かと考えられる。足は胴部に貼付している。これらF類は外見上、人形と速断することはできないが胴と足の方向が一致することと、水上7区の人形に類例が認められる（後述）ことから、ここでは人形土製品としておきたい。

第46図　宮川6区SR312出土土製品実測図1　人形土製品



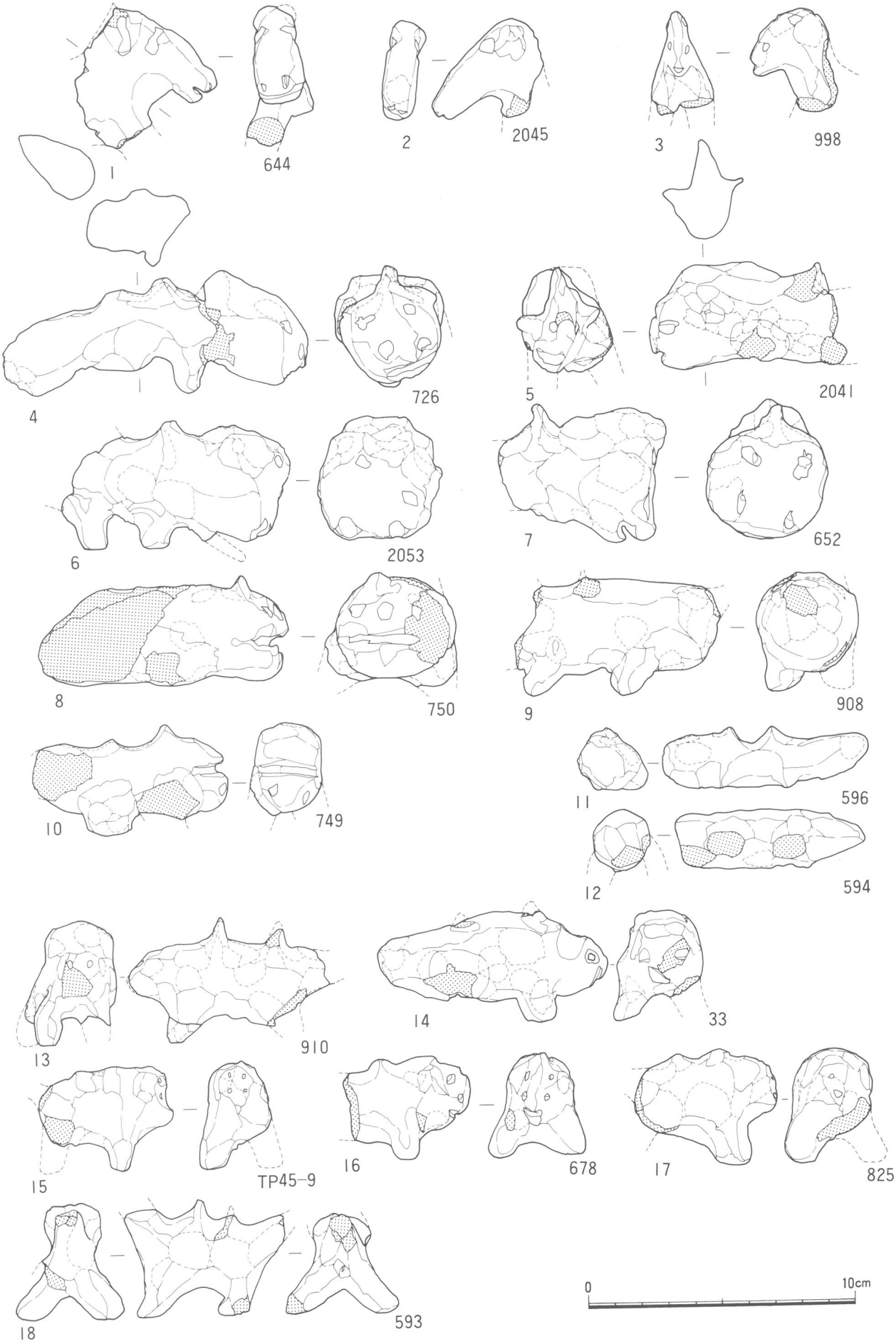
第47図　宮川6区SR312出土土製品実測図2　人形土製品

動物形土製品　66点が出土している。このうち形状がはっきりしているものを第48図・第49図に示した。形状・手法・大きさ等によりA～Eに大きく分類した。1～3は比較的写実的なタイプでA類とした。いずれも頭部しか残存していないが「馬」と呼ぶにふさわしい形状を呈している。このうち特に1は口をヘラ状器具で切り込んで表現し、目鼻は同じヘラ状器具で刺突している。また耳は剥離しているが粘土を貼付した後にヘラ状器具で刺突している。2もほぼ1と同じ調整がみられるが、3は目鼻が棒状器具による刺突となっている。4～12は断面円形状の胴部がそのまま頭部に連続するタイプで頸部が存在しない。これをB類とした。棒状の胴部は指頭による調整だけで背には胴部の粘土をつまみ出して鞍としている。鞍の手法と同様にたてがみを表現したものもみられる（4・5・7）。四肢は別につくり胴部に接合したものがほとんどであるが、11のように胴部からつまみ出しただけのものもある。顔面は口をヘラ状器具で切り込み、目・鼻を棒状あるいはヘラ状器具で刺突するものが多いが、口がヘラをわずかにあてただけのもの（4）、目と鼻の刺突が不十分なもの（8）、耳が貼付されているもの（5・8）、目が口より下にあるもの（10）などがある。11は全長7.7㎝、幅2.6㎝と小さめで顔の表現はなく四肢もつまみ出しただけである。幅4㎝以上である他のものとは若干形態を異にするようである。13～16は断面がたて長の長円形の胴にやや長めの四肢が「ハ」の字状につくタイプでC類とした。背には帯状の鞍が貼付され、B類にくらべやや小さい。手法的にはB類とほとんど変わりはないが、B類の頭部が胴部径と同じくらいかむしろ大きめのものが多いのを対し、先端を先細にし頭部らしくつくり出しているのが目立つ。顔は13・14は2孔、15・16は4孔の棒状器具による刺突がみられる。2孔は目を、4孔は目と鼻を表現しているのであろう。14・16には口の表現とみられるヘラ状器具による切り込みがみられるが、13・15は魔滅のためか痕跡は不明瞭である。また18は断面三角形に近い胴部に鞍を帯状に貼付し、長めの四肢が「ハ」の字状に開いてついている。頭部・尾部が上方に向いているのも他とは異なった形態である。次に示すD類との中間点な要素とみてよかろう。18～24をD類とした。D類はC類よりさらに頭部・尾部が強調され、より小型のものが見られる。頭部の方向軸は下向きのもの（19・22・25）と上向きのもの（21）がある。尾は先端で頭部同様上向きと下向きがある。鞍の表現はなく、口はヘラ状の器具による切り込みで表現し、目は棒状器具で刺突している。また耳を刺突孔で表現したもの（19・25）、鼻の表現があるもの（25）、尻の穴があるもの（21・22）などがみられる。正面から見ると胴の側面から角度を同じにして四肢がついており、頭を頂点に二等辺三角形状を呈しているのが特徴である。なおD類およびC類については藤枝市郡遺跡の溝から出土したものにその類例が求められ、郡遺跡の資料が奈良時代の須恵器を伴っているところから年代を考える上で参考になろう。(1) 26～37は三角柱状の胴部からそれぞれの角を指で押圧して、四肢・頭・尾を表現しただけの簡単なものでE類とした。一見三角柱の土の塊にしかみえない。いっそう小型化の傾向がみられ37などは全長2.4㎝、高さ1.45㎝である。顔や鞍の表現は全くみられない。ただ尻の穴を表現したもの（26・28）は存在する。頭および尾は指で押圧し偏平になっているものが多く幅の広い方が頭のようであるが判然としない。四肢は指で軽くひっぱりつくっているが胴部底面と同一平面になっているものも目立つ。

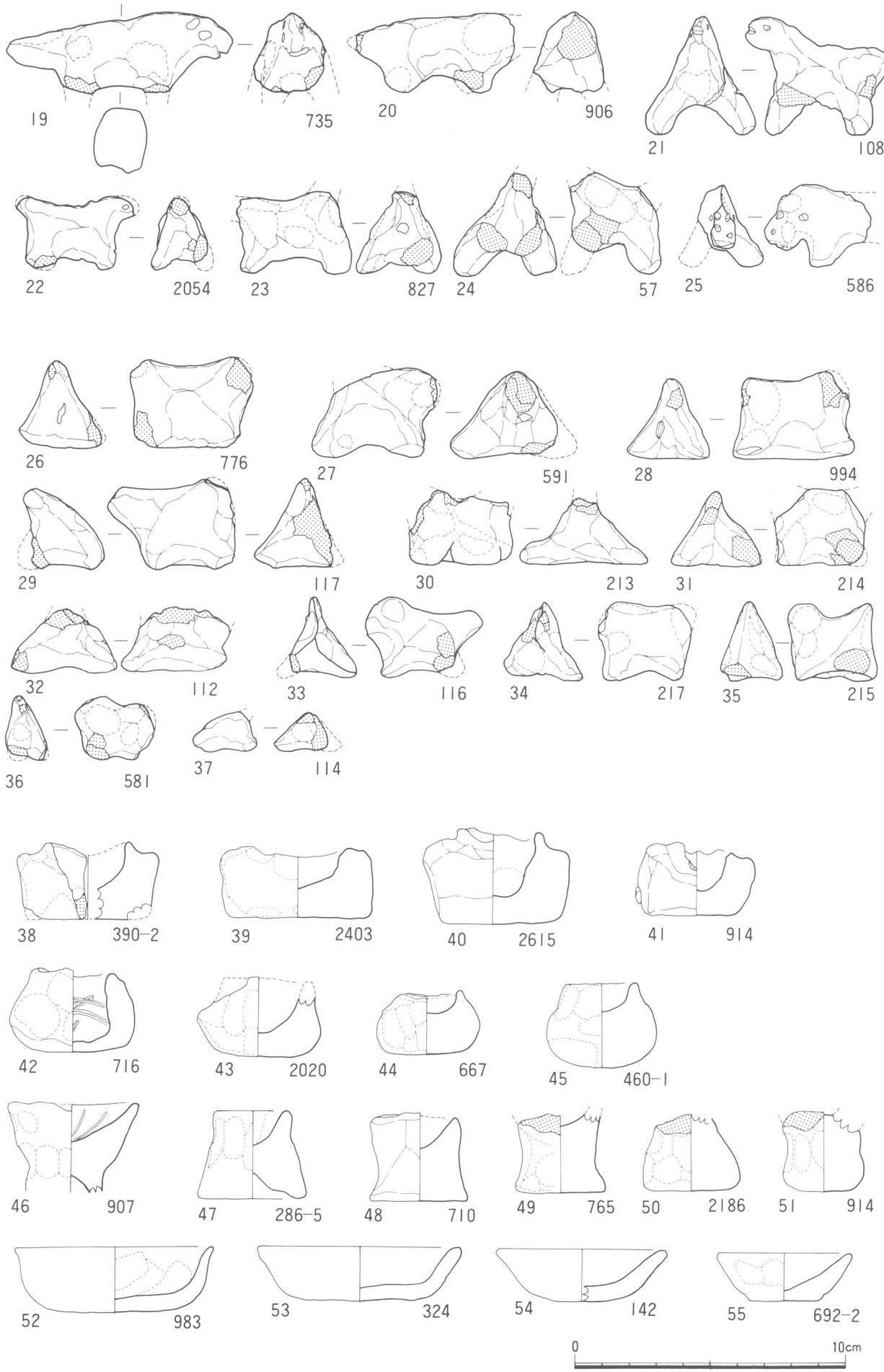
以上動物形土製品を形態別に概観したが、外見上馬と考えられるA類と鞍の表現のあるB・C類は馬形土製品としてよいであろう。D・E類については静岡県中津坂上遺跡や三重県草山遺跡などでは犬形とされる土製品も出土しており[2]、本遺跡出土品も犬形となる可能性もあるが判然としない[3]。また人形をA～F、動物形をA～Eに分類したが、人形・動物形ともにSR 312南東部の河道屈曲に偏在しており、おそらく原位置を動いているものとみられ人形・動物形相互の関係を論ずることは困難である。年代については前述したように伴出土器は6世紀中葉から11世紀の幅が認められ推定は困難であるが、伴出土器のうちその大半を占める7～8世紀に位置づけることも許されるかもしれない。

なお墨書土器「神」と人形・動物形土製品の一部は本調査前の試掘により出土している。その墨書内容から土製品とのセット関係の有無が注目されるところであるが、重機による試掘のため出土状況は不明である。

手捏土器　手捏土器は33点が出土している。このうち全体の形状が把握できるものを第49図に示した（38～55）。このうち38～41は断面円形の柱状の粘土塊を胴部とし、上面中央を円形あるいは長円形に窪ませ口縁をつくっている。口縁端部を胴部より上方につまみ出しているものもある（38・40）。胴部の長さは短いもので4.3㎝（41）、長いもので5.6㎝（39）を計る。器高は2.6㎝（39）から3.5㎝（40）である。藤枝市郡遺跡の奈良時代の溝状遺構SD26上面より類似した土製品が出土しており皮袋形土製品とされている[4]。本遺跡のSR 312出土のものは郡遺跡のものにくらべやや角張った印象である。SR 312からは須恵器横瓮（57）も出土しており、38～41の手捏土器はその形状から横瓮の模倣である可能性が高いと考えられる。42～45は前述の38～41とほぼ同様であるが胴部中央の長さにくらべ器高がやや高く丸味を帯びている。このうち42は内深が2.5㎝とかなり深く、胴部の粘土をヘラ状器具で奥深くまで抉り取っている。逆に44・45は浅く、胴部上面中央の粘土を指で窪めて口縁をつくり出している。42・45は胴部が球形に近く口縁も円形につくり出している。胴部の長さは3.8㎝～4.6㎝と38～41にくらべてやや小さめである。46は下半部が欠損しているが脚台が付き高坏状の器形になると思われる。上部内面はヘラ状器具で弧をえがくように削って調整しているが外面は指頭による押圧だけである。47は46に似るが調整は雑である。上下の区別はつけ難いが、上部とした方はなめらかな面を有し、下部とした面は凹凸が激しい。48～51は断面円形の柱状の粘土塊を本体としている点は38～41と同じであるが、38～41が横方向であるのに対し縦方向を基本とする。中央付近を指頭の押圧によりくびれさせ、上面中央の粘土を指で窪ませ口縁をつくり出している。臼状を呈するが49～51は上端を欠損している。また48は断面横長の長円形を呈する。52～55は坏の小型品と考えられる手捏土器である。38～51にくらべいずれもつくりが丁寧である。52は口縁部をつまみ出し外反させている。同タイプの土師器坏の模倣とみてまちがいないであろう。内外面ともにかなり丁寧な調整がなされ、指頭圧痕とともにヘラ状の痕跡もみられるがはっきりしない。口縁には横ナデ調整が施されている。52～54は口縁部の外反はみられず直線的に立ち上がっている。いずれも指頭による調整のみのようである。



第48図　宮川6区SR 312出土土製品実測図3　動物型土製品



第49図　宮川6区SR 312出土土製品実測図4　動物型土製品・手捏器

以上、ＳＲ312出土の土製品を紹介したが、年代幅の大きい流路であり個々の遺物の年代を論じることは困難である。他地区の土製品との比較はⅣ章で述べることとし、ここでは紹介だけにとどめたい。

（1） 藤枝市教育委員会『静岡県藤枝市郡遺跡発掘調査概報Ⅲ』　1986
（2） 向坂鋼二「浜松市都田町中津・坂上出土の祭祀遺物」『考古学雑誌』第50巻1号　1964
（3） 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報№6』　1983
（4） （1）に同じ

2. ＳＲ313（第50図～第65図）

ＳＲ313は宮川６区の南東部Ｇ102・Ｇ103グリッドで検出された旧河道屈曲部である。幅４～５ｍほど、長さ８ｍほどの範囲で最深部は3.20ｍであった。北東から屈曲しながら南へ流れ、さらに大きく蛇行し東へ流れる攻撃面で流路の外側と内側に分かれ多量の木製品が出土した（『大谷川Ⅱ』）。これら木製品のうちには斎串や馬形・人形・刀形の木製品模造品が多く含まれていた。上層のレベルは4.5ｍにも達し、1.3ｍほどの砂層および砂質粘土層が堆積していた。ここでは現地で作成された遺物分布図を頼りに①上層出土土器、②下層出土土器、③下層（河床面）出土土器に分け紹介することにする。なお祭祀関係の木製品は②下層から多く出土している。その他の主な遺物としては、勾玉２点、石製丸玉16点、土製丸玉１点の玉類、小型の鏡、耳環、石製紡錘車が各１点出土している。また、勾玉を意識した滑石製品が２点出土している。馬形土製品と考えられるものも２点出土したがこれはレベルが4.2ｍとかなり高い。

土器

上層出土土器（第50・51図）出土レベルは4.2ｍ～4.5ｍである。土師器が圧倒的に多く図化できた須恵器は１点のみである。須恵器坏身（１）は受身径15.8㎝、器高4.0㎝を測る。Ⅲ期中葉と考えられる。土師器は口縁部を屈曲させたいわゆる「鬼高期」の坏がほとんどである。口径は10.5～14.4㎝の幅がある。形態的には平底のものと丸底のものとがあり、口縁部は屈曲して外側に開くものと屈曲しながら直立気味に立ち上がるものがある。表面調整は摩滅のためはっきりしないものが多いが、内面にヘラミガキがあるもの（６・９・10・12）やナデ調整が施されているもの（２・３・５・８・13 14・15・16・18・25）がある。また11は外面にヘラケズリがあり、24は内面底部にヘラミガキ、体部にナデ調整がみられる。なお９は平底で底径が大きく口縁は屈曲せずやや内湾しながら立ち上がっている。25は平底で底径が小さく口縁は屈曲して外に開いている。28は口径11.0㎝に対し器高3.3㎝と低く、口縁の屈曲はほとんどない。29～36は口径に対して深い体部を有するもので壷あるいは椀に近いタイプである。このうち29～31は口径はそれぞれ14.8㎝、13.7㎝、12.5㎝と大きく、32～36は口径10㎝前後からそれ以下で小さい。坏と同じように口縁は屈曲しているものが多いが、34は外側に直線的に開き、35・36はやや内湾している。37は口径8.3㎝、器高10.6㎝の小型の壷である。外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキ調整がみられる。38～41は甕である。38は口径31.8㎝と大きい。「く」の字状に屈曲する口縁は端部で内側に肥厚している。肩はあまり張らないようである。内外面にハケメ調整がみられる。39・40とも「く」の字状に屈曲する口縁を有する。口径は39が19.9㎝、40が20.2㎝であり、39は内外面に40は外面にハケメ調整がみられる。41は口径13.8㎝の小型の甕である。口縁は直立気味であり肩は張らない。

下層出土土器（第52図）多量の木製品とほぼ同じ面と考えられる土器である。須恵器は２点のみである。坏（１）は受部径14.8㎝、器高4.0㎝をはかる。底部から１／３程度にヘラケズリ調整がみられる。高坏（２）は受部径13.9㎝、器高7.6㎝をはかる。坏・高坏ともにⅢ期後葉と考えられる。３～24は土師器である。坏は上層と同じように口縁部を屈曲させたものがほとんどであるが、４・７は屈

曲せずやや内湾しながら立ち上がっている。口縁部が屈曲した坏は口径10.8㎝～12.6㎝と比較的まとまっている。底部は平底のものと丸底のものがあり、平底には13のように底径4.2㎝と口径の1／3程度のものや、17のように底径6.2㎝と口径の1／2程度のものまである。また3のように口径12.6㎝、器高4.3㎝と浅いものも、16のように口径10.8㎝、器5.3㎝と深いものとがある。表面調整は内面に縦方向のナデ調整、外面に指頭による調整痕が残るもの（3・6・7・9・10・16）が多いが、4や19は内面にヘラミガキ調整がみられる。20～24は小型の壷である。20～22は坏を深くしたような形状を呈する。20は口径10.1㎝、器高7.4㎝で内面にナデ調整、外面にヘラ調整がみられる。21は口径9.0㎝、器高9.3㎝で内面にヘラミガキ、外面底部近くに指頭痕がみられる。22は口径13.8㎝、器高8.8㎝と口径の割に浅い。23・24は他にくらべて平底が強調されている。23は口径10.4㎝、器高11.1㎝、底径5.8㎝で内面にナデ調整、外面にヘラケズリ調整がみられる。24は口径8.5㎝、器高12.6㎝、底径7.6㎝とかなり広い底部を有する。胴部外面にヘラミガキ調整がみられる。

下層（河床面）出土土器（第53～59図）おびただしい量の土器が出土している。形状が認識できるものだけでも200点以上あり、破片はコンテナ40箱にも及ぶ。土師器が圧倒的に多いが、須恵器も形状が認識できるものが28点出土した。

須恵器は第53図に示した。年代推定に重要であると思われるので小破片でも敢えて図化した。1は坏蓋の口縁部であるが外面に沈線による稜があり、口唇部にも沈線がみられる。小破片ではあるがⅡ期後葉の特徴を示している。2の坏身は受部径14.4㎝、たちあがり高1.2㎝をはかる。口唇部には軽く押さえた程度の整形がある。3の坏蓋はやはり口縁部のみであるが、あまい稜があり口唇部にもわずかに押さえただけの調整がある。2・3ともⅢ期前葉と考えられる。4・5はⅢ期前葉から中葉への中間的な要素を含み大きな意味でⅢ期前葉としてよいと思われる。4の坏身は受部径15.8㎝で器高は2.7㎝前後と考えられ浅い。ヘラケズリは1／2以上に達し、口唇部に内傾するあまい面を有する。5は口径12.5㎝、器高5.2㎝で非常にあまい稜があり、口唇部には軽く押さえたあまい沈線がみられる。坏蓋6・7と坏身11～13はⅢ期中葉と考えられる土器である。6は口径14.1㎝、器高4.1㎝で口唇部に非常にあまい沈線がみられる。7は口径14.0㎝、器高3.9㎝で口縁端部外面に整形痕を残す。11は受部径17.4㎝、器高5.3㎝でヘラケズリは1／2近くにまである。12は受部径15.4㎝でヘラケズリは受部近くにまでおよんでいる。13は受部径14.9㎝、器高3.6㎝で1／2程度までヘラケズリがみられる。いずれも口縁端部は丸く仕上げられている。8～10の坏蓋と14～24の坏身はⅢ期後葉～末葉と考えられる土器である。8は口径12.8㎝、器高3.6㎝、9は口径13.1㎝、器高3.6㎝である。いずれも稜はなく口縁端部は丸い。10は口径11.8㎝、器高4.6㎝であまい稜をもつ。坏身は受部径で14㎝代のもの（14・15・17）と13㎝代のもの（16・18・20）、12㎝代のもの（19・21・22・24）があり、23は11.8㎝である。端部は丸く内傾し、底部周辺のみヘラケズリ調整しているものが多い。23・24はⅣ期前葉とした方がよいかもしれない。坏以外では長頸壷の蓋（25）、長脚二段スカシ高坏（26）、短頸壷（27）、甕（28）がある。以上みてきたように須恵器はその主体がⅢ期中葉～後葉であると考えられる。

多量に出土した土師器は坏が圧倒的に多い。上層や下層ではほとんどみられなかった伝統的な形態の坏が存在する。29～43は伝統的な坏のうち丸底のものである。口径は16.4㎝（30）から11.5㎝（42）の

ものまである。口唇部をわずかに内湾させたものと皿状に開くものがあり、前者は口径も大きく29のように内面に縦のヘラミガキ、外面体部に横位ヘラケズリ調整が施されているものが多い。また37は体部が丸味を帯び他とは若干異なるようである。44～61は平底のものである。あげ底風のものはみられず、底径は口径の1／2程度のものが多い。やはり口唇部をわずかに内湾させたものとそうでないものがある。口径は16.6㎝（47）～12.4㎝（58)のものまである。内面にヘラミガキ、外面体部に横位のヘラケズリを施したものが多い。62・63はそれぞれ口径12.9㎝、13.3㎝に対しともに器高5.6㎝と深めで体部は丸味を帯びている。

64～157は口縁を屈曲させた坏である。64は口径17.5㎝と大きく口縁屈曲部に明瞭な稜を有する。65～69は口縁部が大きく外に大きく開く形態を示す。このうち66は内面に縦のヘラミガキ、外面体部にヘラケズリ調整がみられる。

70～115は丸底あるいはそれに近いものである。口径は14.7㎝（70）～10.1㎝（115）まであるが口径による形状・手法の差異はほとんど認められない。形状では口縁部が大きく屈曲するものと屈曲が緩やかで直立気味なものあるいは屈曲して外に開くものなどバラエティーに富む。手法的には内面にヘラミガキを施すものもみられるが、伝統的な形態の坏にくらべると顕著でなくむしろナデ調整を施しているものが多い。外面もヘラケズリ調整したものもみられるが指頭による調整が多いようである。

116～157は平底のものである。口径は14.3㎝(116)～9.6㎝(151)のものまである。丸底のものにくらべ口径に対し浅い体部をもつものが多い。口径の違いによる形状・手法上の差はほとんどないようである。口縁部は屈曲して外に開き気味のものが多いが、142・146・149・153など口径の小さいものには屈曲が緩く直立気味のものもみられる。表面調整では内面にヘラミガキが施されているものはほとんどなく、外面もヘラケズリがごく小数にしかみられない。なお115～157は底径が大きく口縁部の屈曲はごくわずかで直立気味の口縁を有する。

158～162は体部が直線的で口縁が屈曲せずそのまま開く形態で口径は比較的小さい。このうち159は底径が小さいが、他は底径が大きい。表面調整は摩滅のためはっきりしないものが多いが、161は内面にヘラミガキが施されている。158・160は外面にヘラケズリがあるようであるがはっきりしない。

163は高坏であるが、坏部を欠くため全体の形状はわからない。高坏はこれ1点のみである。164～187は坏より若干深めで壷と呼称した方がよい土器である。口縁部は坏と同じように屈曲させている。口縁は外に開くもの、直立気味のもの、やや内湾するものがあるが、坏にくらべ直立気味からやや内湾するものが多い。表面調整は内面にヘラミガキを施したもの（172・175・184）やヘラケズリがあるもの（174）などがあるがナデ調整が多いようである。外面はヘラケズリを施したもの（165～167・174～176・180・183）もあるが、指頭による調整が多い。坏を深くしたようなものが多いが184は張り出した底部を有し、187は口径と器高が同じくらいである。

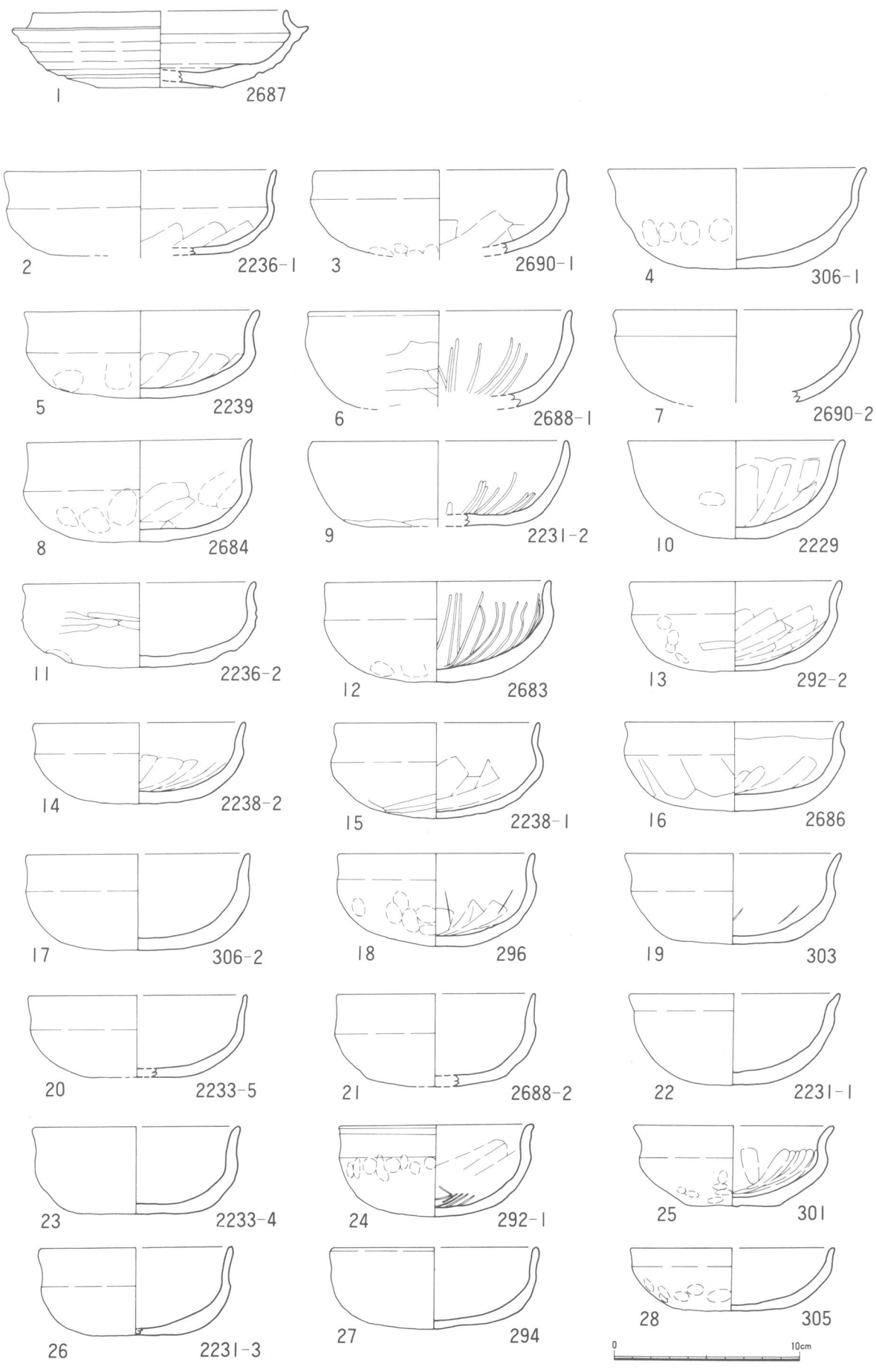
188～192は甕である。188は口径17.5㎝、器高19.4㎝で胴部はやや偏平な球形を呈し、中央部に最大径をもつ。口縁は「く」の字状に屈曲し、口唇部内面をやや肥厚させている。内外面にハケメ調整がみられる。190は口径22.2㎝、底径8.4㎝、器高31.5㎝で胴部中央に最大径をもつ。胴部および口縁部内外面にハケメ調整がみられる。口縁部は「く」の字状に屈曲し、口唇部は内側にやや肥厚する。

192は口径22.8㎝、底径9.0㎝、器高32.8㎝で胴部中央よりやや上位に最大径をもつ。胴部内外面にハケメ調整がみられる。「く」の字状に屈曲した口縁はやや厚手で、口唇部は内側に若干肥厚する。189は口径19.4㎝で口縁部は192と同じような形状であるが肩部が張っていて、それほど深くならないと思われる。193も口径19.0㎝で肩部は張るようである。191は口径18.5㎝で胴部中央付近に最大径をもつと考えられる。いずれも内外面にハケメ調整を施す。

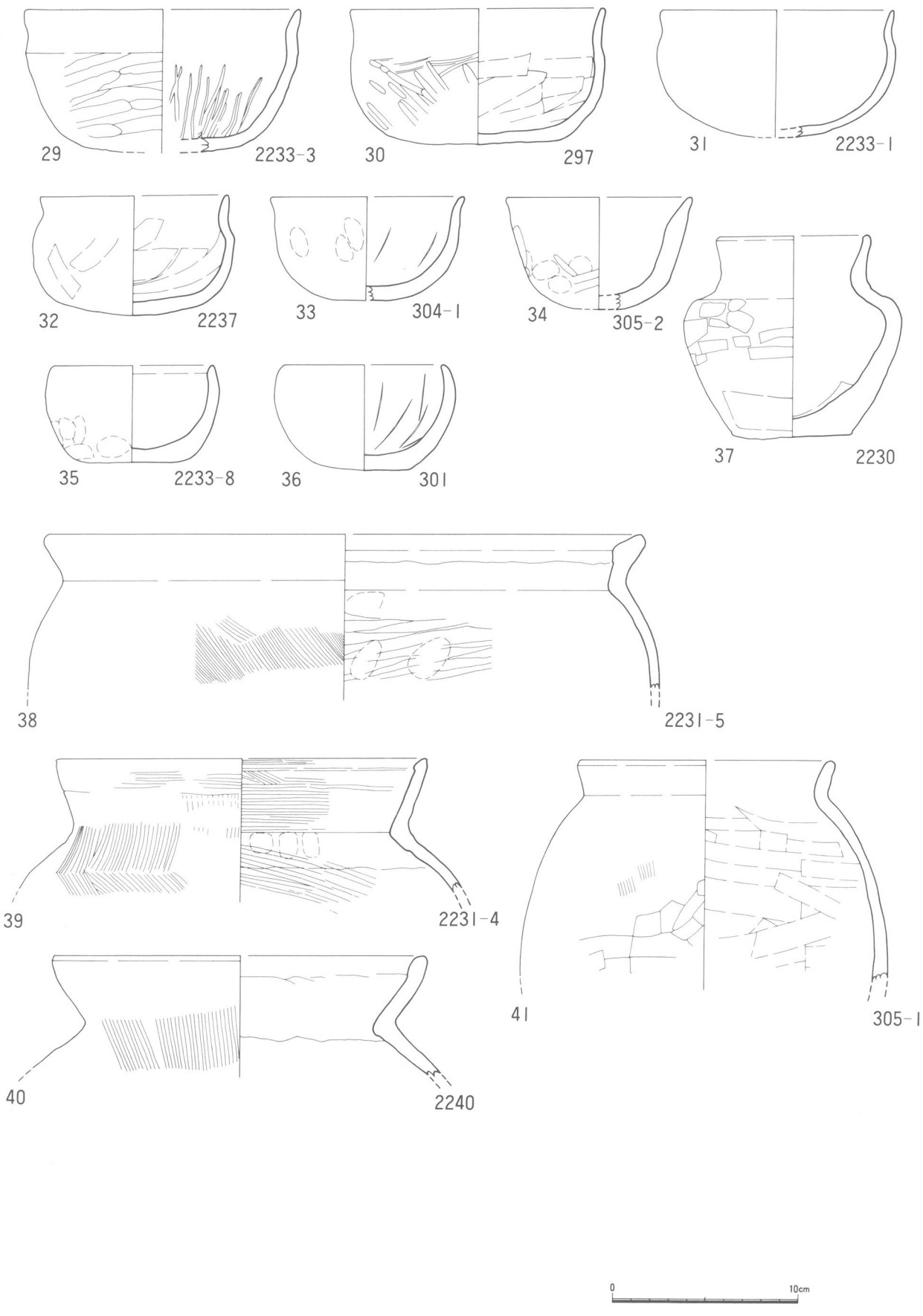
ま と め

以上ＳＲ313の土器を上層・下層・下層（河床面）に分け概観したが、これらの層位は現地作成の遺物分布図により便宜上設定したもので、残念ながら報告者は現地の出土状況や土層の詳細については知り得ない。現地の写真あるいは遺物分布図、土層断面図から推測するとＳＲ313は大量の砂礫の押し出しにより比較的短時間に堆積したと考えられ、分層というより上面にある遺物から確認し分布図を作成したという状況が窺われ、上層・下層というよりも上面・下面という方がよいかもしれない。

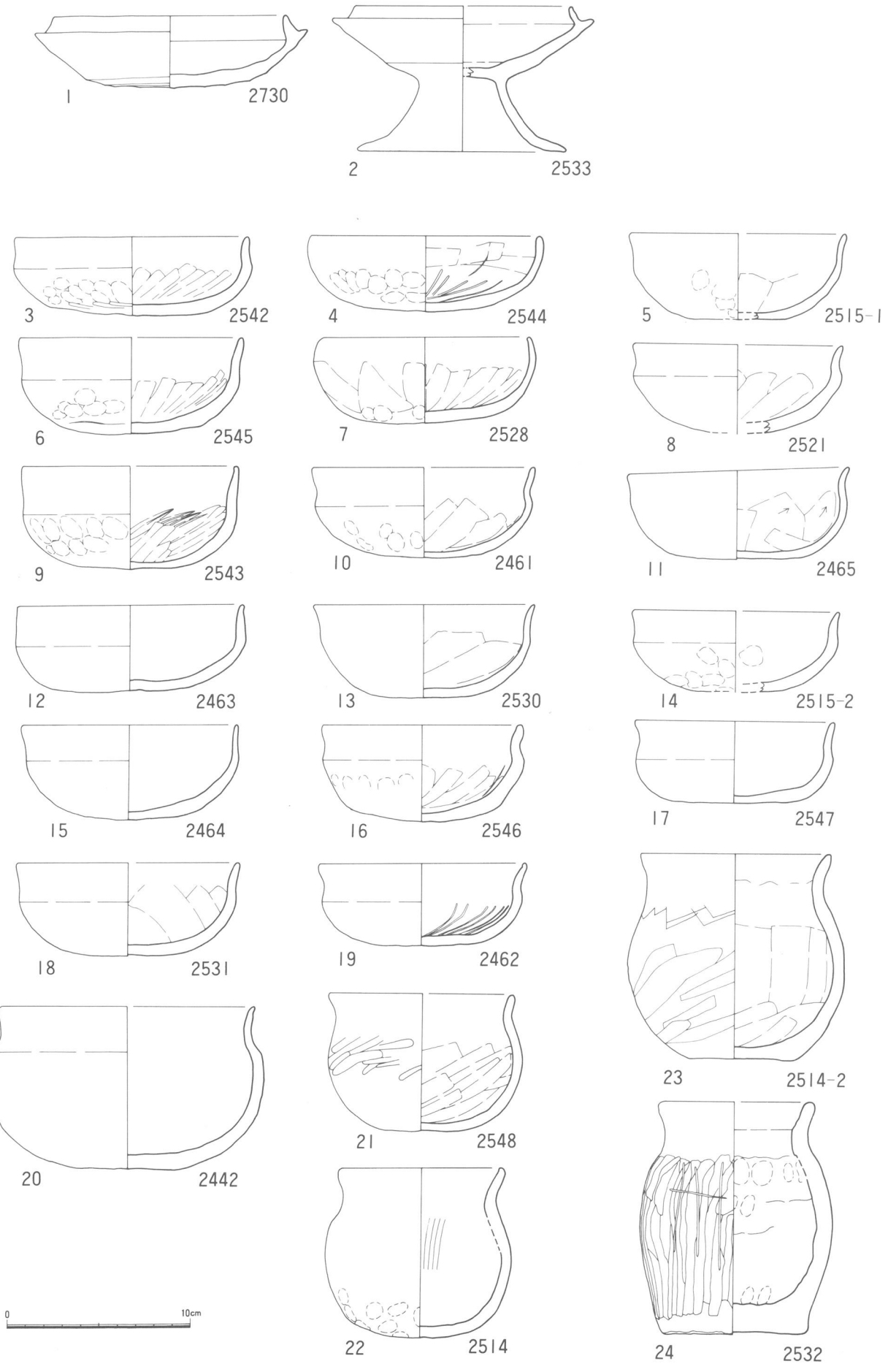
さて上層・下層・下層（河床面）の土器を比較してみたい。まず問題になるのは須恵器の年代である。上層で出土している須恵器坏（１）はⅢ期中葉と考えられ、下層の坏（１）、高坏（２）はⅢ期後葉である。また下層（河床面）の須恵器坏（１～24）はⅡ期後葉～Ⅳ期前葉の幅があり、下限をとると上層が一番古く河床面が最も新しいということになる。これは上層および下層の須恵器がごく少数であることに起因すると考えられ、河床面の年代幅のみが参考となろう。そこで土師器を比較する。上層・下層には伝統的な形態の坏はほとんど存在しない（下層にはわずかに２点それに近いものがある）。これに対して河床面には平底のものを含めて50点以上の伝統的な坏がみられる。また口縁を屈曲させた坏も上層・下層にはみられない口径15㎝以上で須恵器を意識したと考えられるものも河床面にはみられる。ただ河床面には口径が小さく口縁部が屈曲しない比較的新しい要素と考えられる坏もみられる。これらのことを総合するとＳＲ313の状況は次のように推定される。ＳＲ313中央には２ｍほどの幅で弧状に拳大から人頭大の礫が河床面に多量検出された（『大谷川Ⅱ』）。この部分が本来の河道の範囲と考えられ、ここから出土した土器（河床面出土）の上限から６世紀中葉にはこの河道が存在していたと思われる。そして河床面出土の土器の下限＝７世紀前半以降に多量の砂礫の押し出しにより比較的短期間のうちに埋没したと思われる。左右両岸に分かれ河道に沿うように分布する木製品はこうした状況を示すものではないだろうか。これはあくまで仮定であり根拠には乏しい。この仮定に従えば上層・下層の須恵器が河床面出土の最も新しい須恵器より古いこともあり、上層・下層の土器そのものは古い包含層のものが新しい年代に運ばれた可能性もあり、木製品と土器そのものの年代とは必ずしも一致しないと考えた方がよいかもしれない。ともあれ木製模造品が多量に出土したＳＲ313の土器のうち形状のわかるもの全てを現地作成の分布図に忠実に従い紹介したが、これらの土器を須恵器から判断すれば上限を６世紀中葉、下限を７世紀前半に求められる。また木製品と同一と考えられる面およびそれより上面より出土した土器も土師器が多いためはっきりしないが８世紀に下るものが見あたらないということを指摘しておくが、現地調査の状況を知らない報告者としては明確な共伴関係という認定を避けたい。



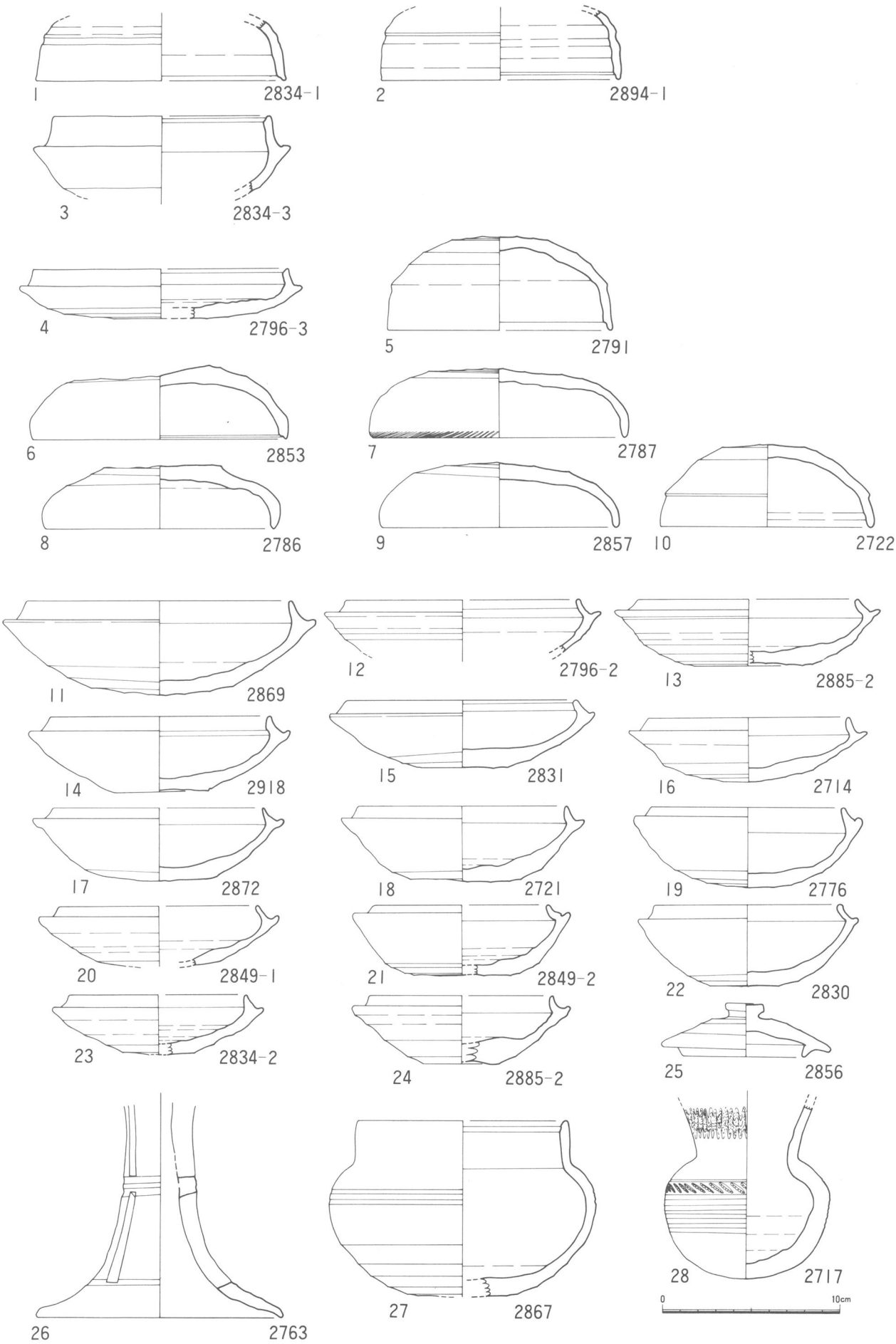
第50図　宮川6区SR313上層出土土器実測図



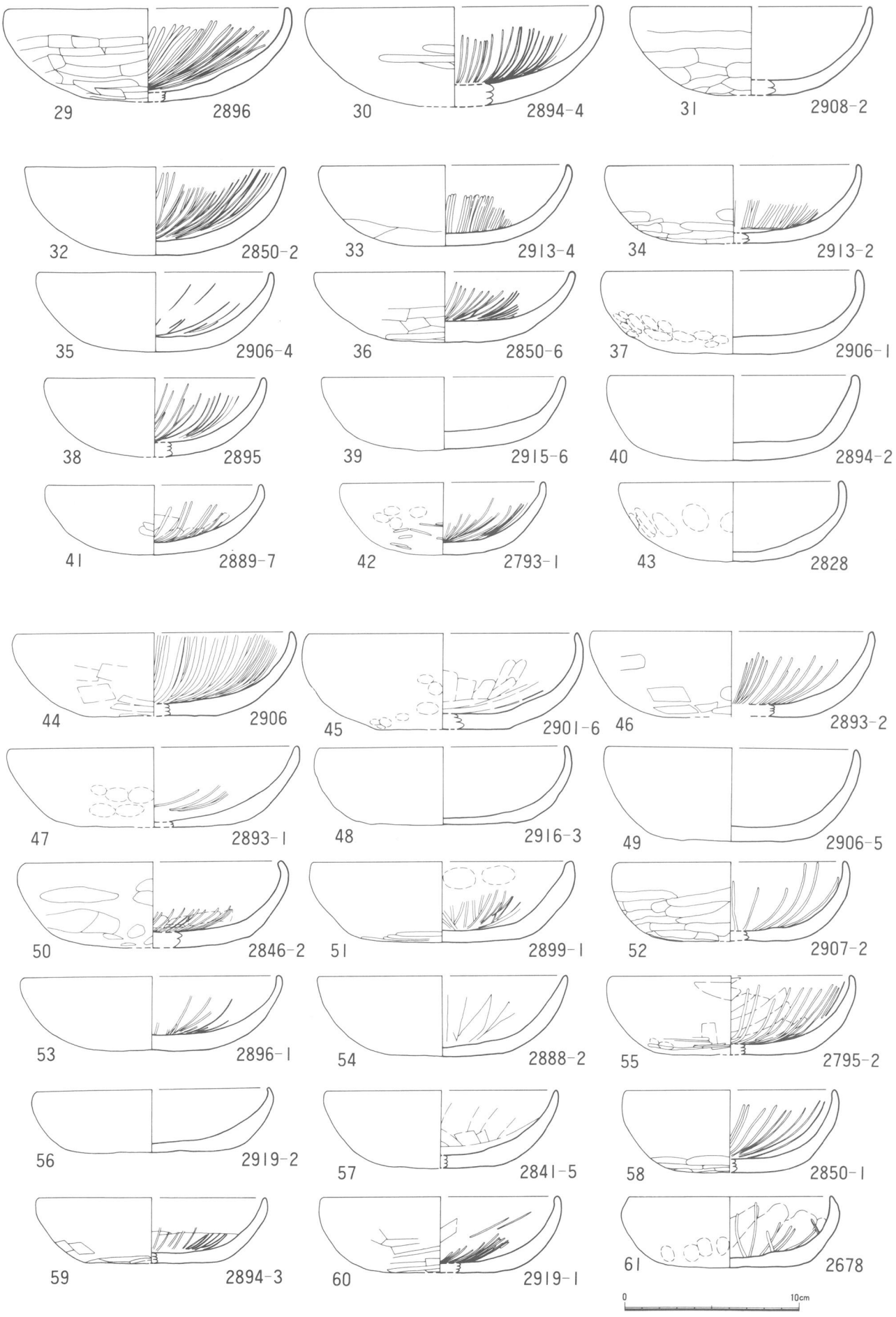
第51図　宮川6区SR 313上層出土土器実測図



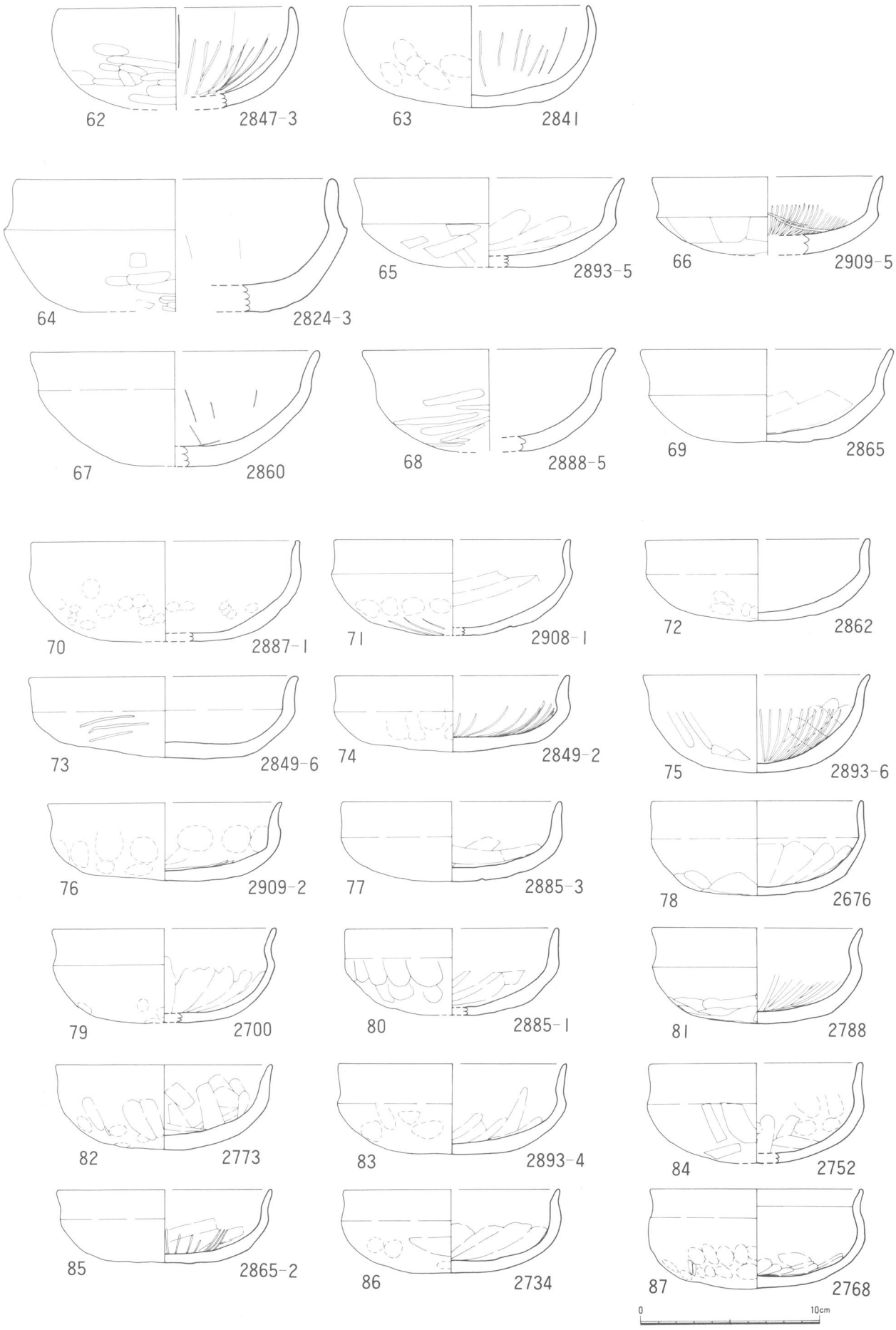
第52図　宮川6区SR313下層出土土器実測図



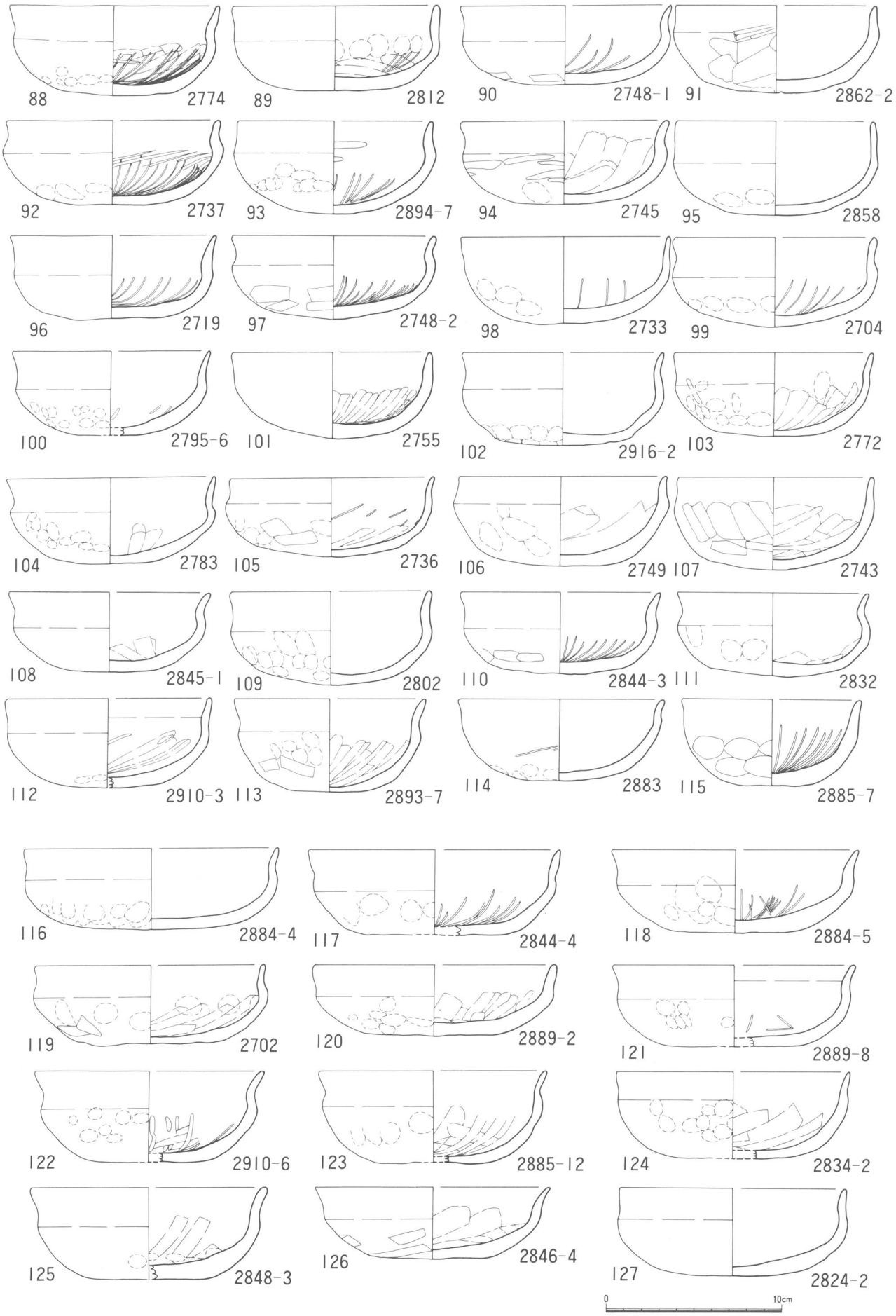
第53図　宮川6区SR 313下層（河床面）出土土器実測図1



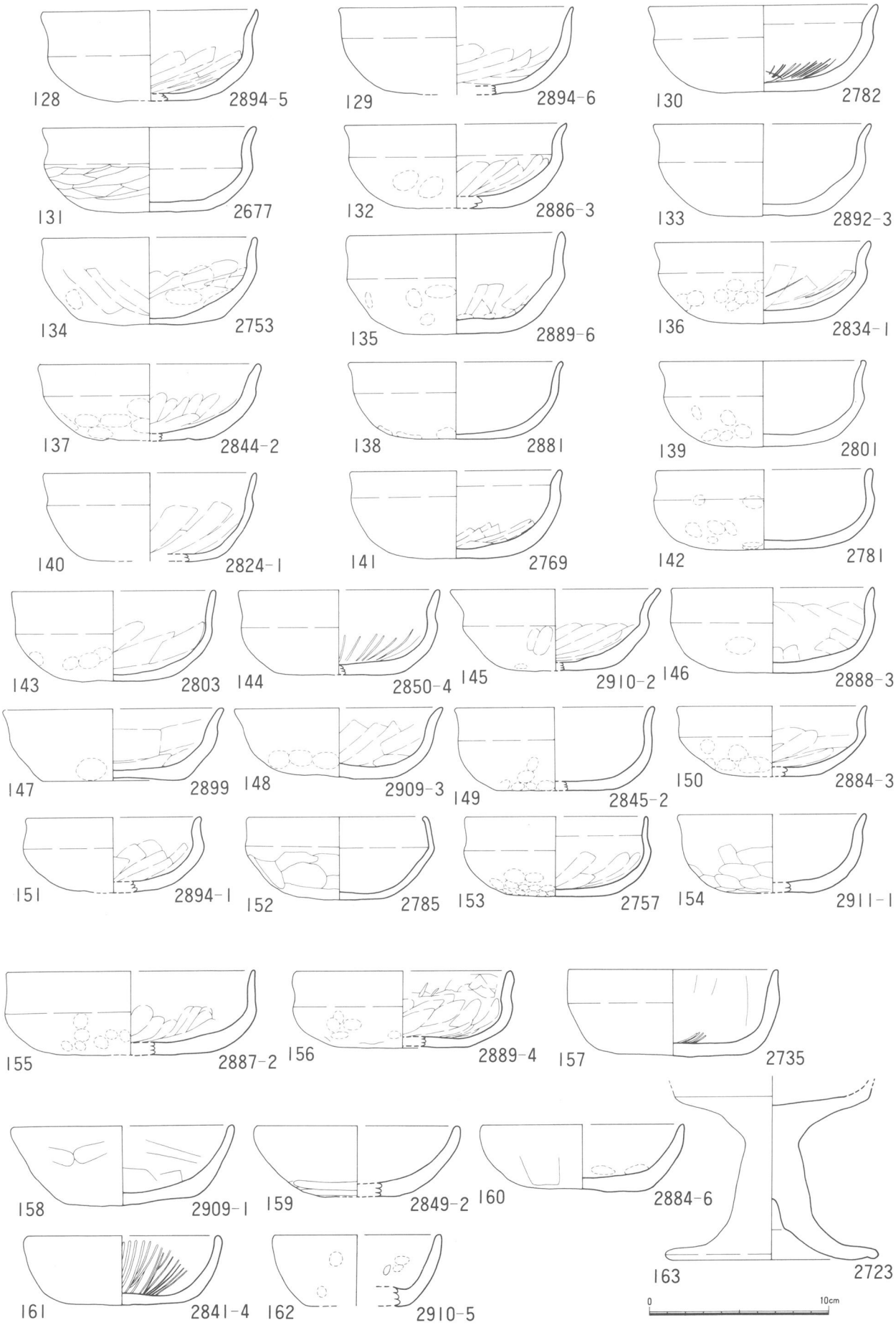
第54図　宮川6区SR313下層（河床面）出土土器実測図2



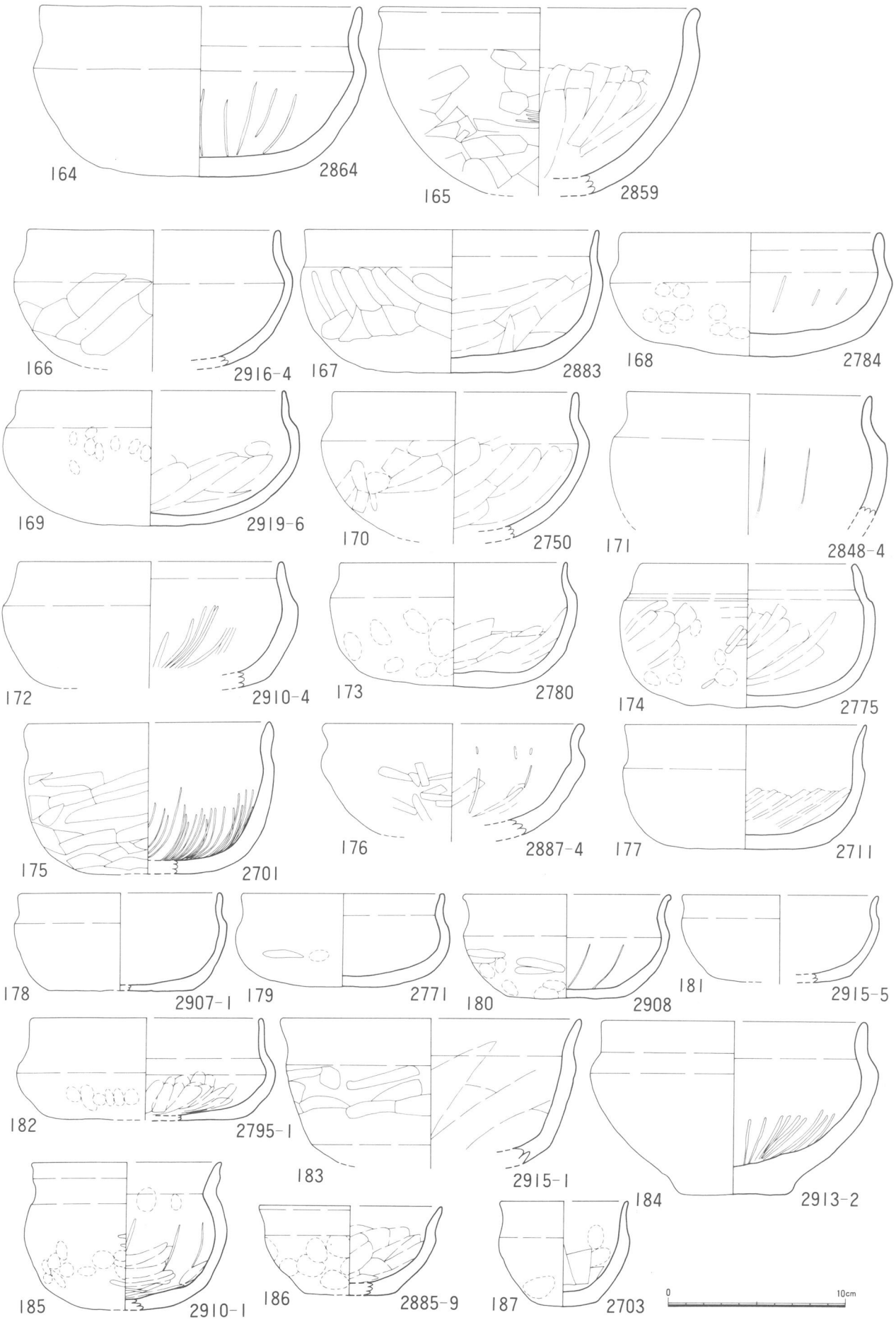
第55図　宮川6区SR313下層（河床面）出土土器実測図3



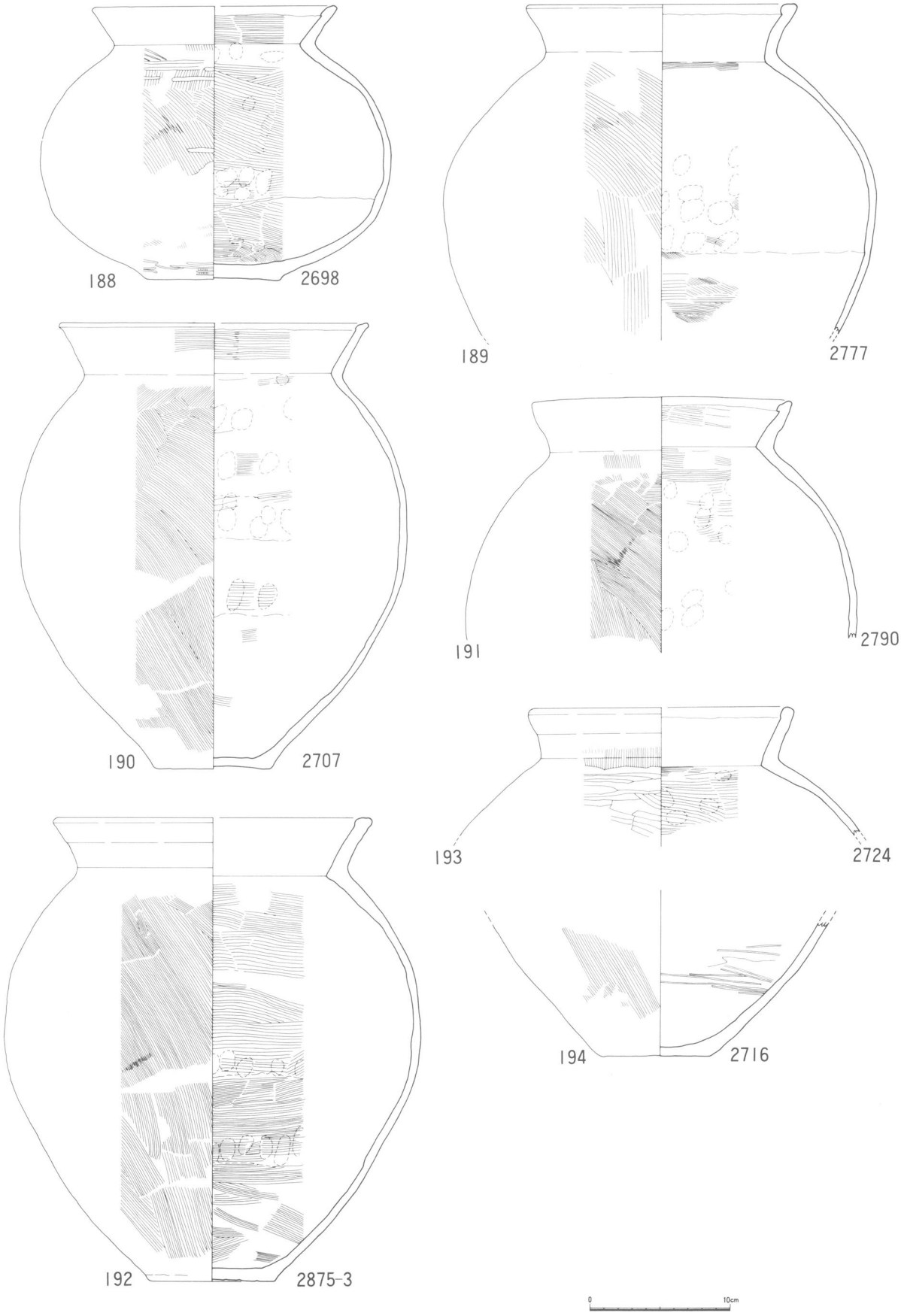
第56図　宮川6区SR313下層（河床面）出土土器実測図4



第57図　宮川6区SR 312（河床面）出土土器実測図5



第58図　宮川6区SR 312下層（河床面）出土土器実測図6



第59図　宮川6区SR313下層（河床面）出土土器実測図7

木製品

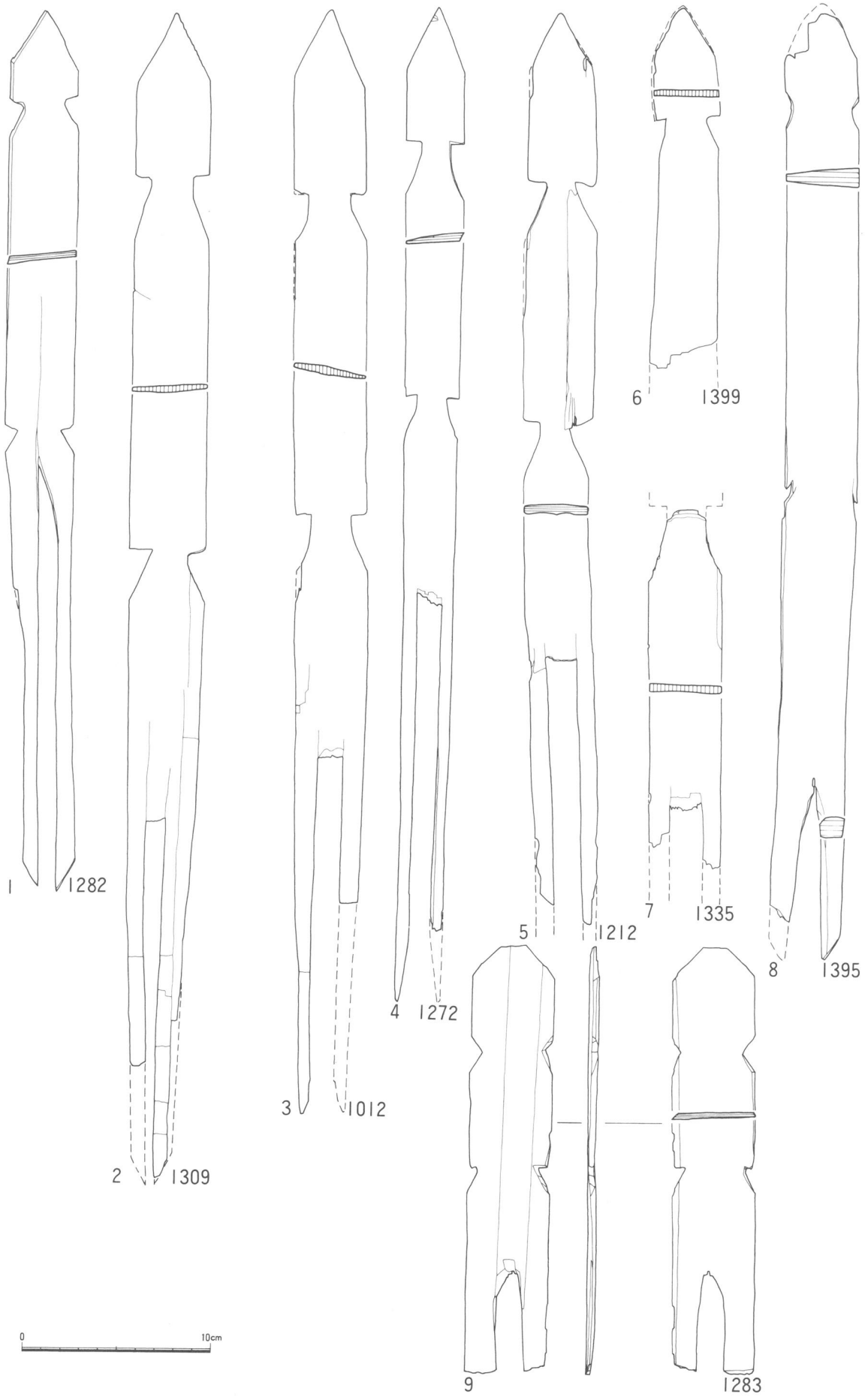
祭祀関係遺物が豊富である。人形16点・馬形３点・刀形木製品９点・斎串状木製品40点以上が検出されている。またその他の遺物としては板草履？・鍬？などがある。

祭祀関係では人形木製品が多いのが注目される。16点を数え本遺跡の中で最もまとまっている。その形態も変化に富んでいる。詳細な検討は『大谷川Ⅳ』において行う予定であるが、大きくみて６類程度に分類出来よう。第１類は１・２のように圭頭・撫肩・腰部に切り込み・二本足のものである。このタイプは最も多く、ほぼ形のわかるもので５例を数える。さらに脚の作り方により２類に細分できる。すなわち三角形に切り取るものと、平行な切れ目を入れ折り取るものとである。２は８のように若干丸味を帯びた圭頭で、首から肩にかけてはわずかにえぐり込むことで表現されている。手および腰は下から斜めに切り込みを入れることにより表される。11はさらにこれを強調したものであろう。また10もわずかではあるがこれを意識したものと考えられる。３は12のように切り込みが上部に二か所あるもので、肩のほかに何を意識しているものか不明である。４は12がさらに簡略化されたような形態で、13のように首から肩にかけて大きくえぐり込まれており、首が表現されていると考えられる。５は巾広のもので頭頂部が平らで、肩および腰の二か所の切り込みがあり、二本足である。６は16のように一本足のものである。馬形は３点検出されており、19と21は完形である。いずれも下部に棒を挿し込む穴があけられている。

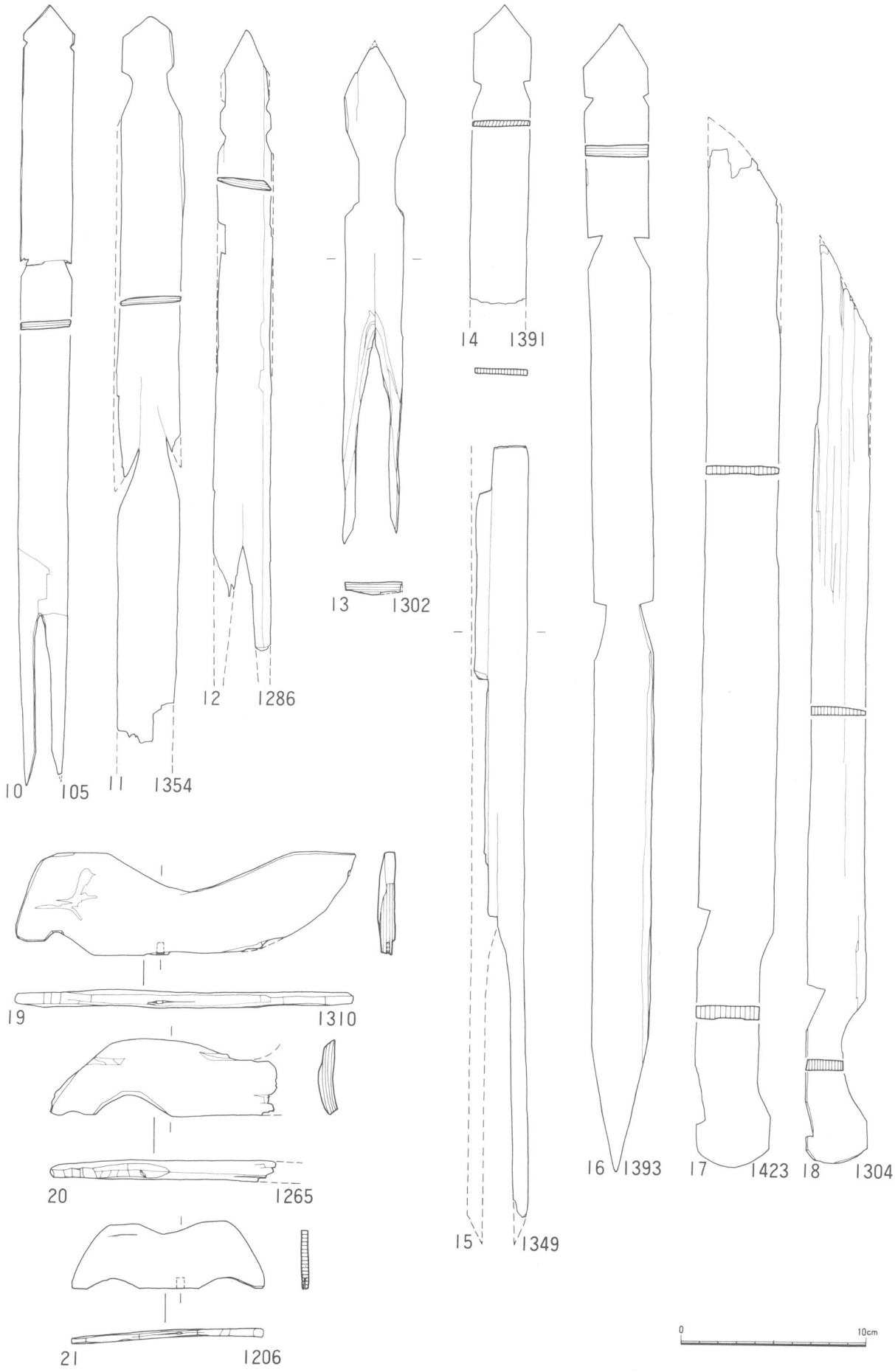
刀形木製品は９点を認定したが、そのほかにも疑問は残るものの刀形の可能性の高いものが、多数認められる。17および18は、本遺跡の中では最も形の整ったもので、柄頭を丁寧に作り出している。特に18は全長49.3㎝を測り、その細工も細かく本遺跡資料の中では優品である。その他は、いずれも圭頭状の柄頭をなすもので、本遺跡資料の大半を占める。そのなかもいくつかに細分される。すなわち、24のように上辺に二か所の切り込みのあるもの、上辺および下辺に一か所ずつのえぐり込みのあるもの、26のように下辺のみにえぐり込みを持つものの、３タイプである。26は最も長大なもので全長71.1㎝を測る。また注目すべきことは断面形が三角形を呈することで明瞭に刃部を表現していると考えられる。

斎串状木製品の認定については、どこまでとするのか判断に苦しむところである。この点については『大谷川Ⅳ』において検討を行う予定であるが、とりあえず大きく３類に分類しておきたい。１は頭部を圭頭に作り端部を鋭く尖らせているもの。38がその典型例であり34もこのタイプに属するものであろう。２は両端とも圭頭状に作られているもの。上下の判断はつけ難いものばかりである。60・66・67などがはたして斎串といえるかどうか疑問である。３は両端とも斜めに切り落としてしまうものである。完形のものは68のみであり、破片の場合刀形の切先と区別出来ない。

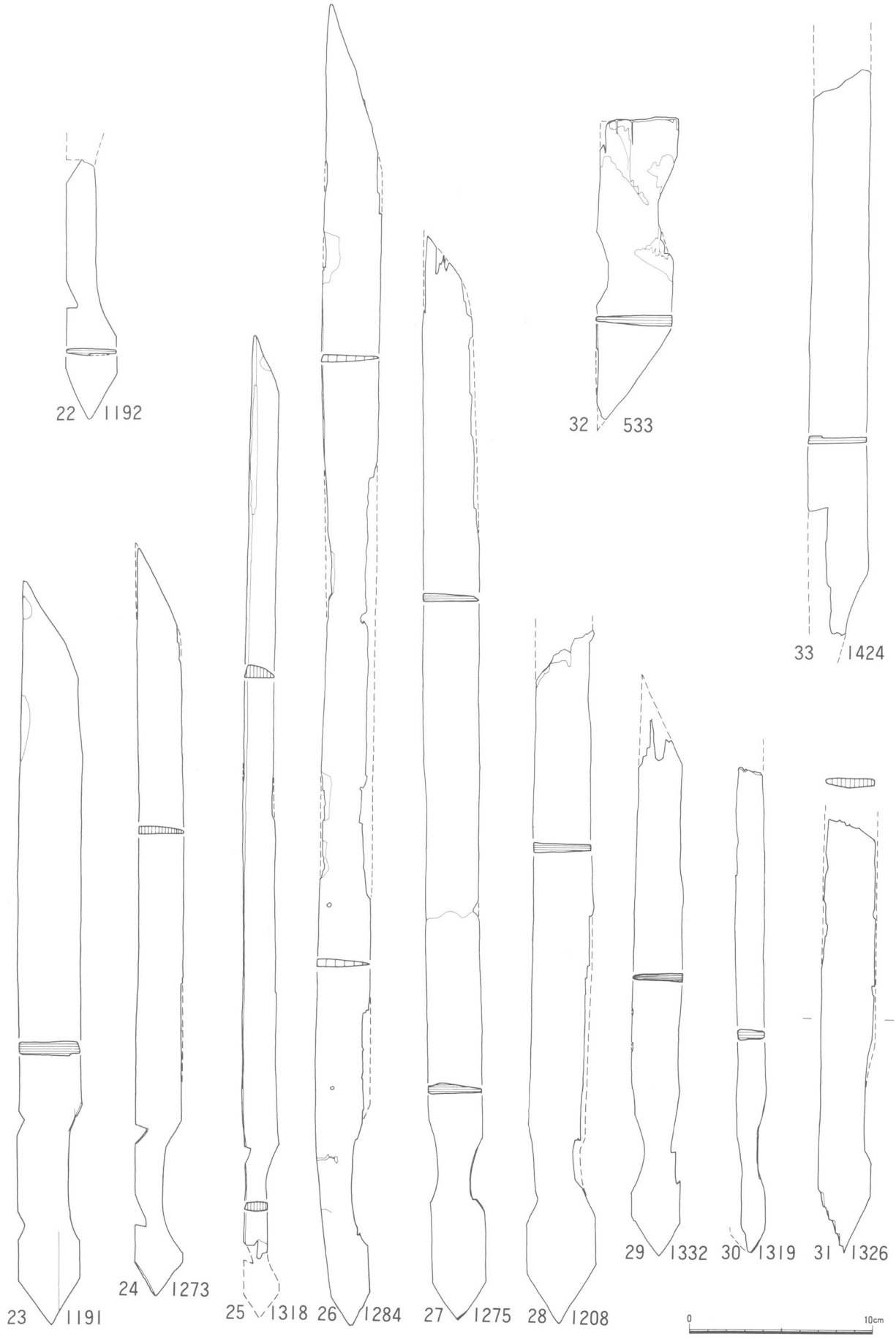
その他の遺物として注目すべきものに90がある。カシかと思われる広葉樹で作られており、基部のえぐりは後世の破損である。斎串等の祭祀関係遺物とは考えられず、むしろ又鍬の部分の可能性を考えたい。



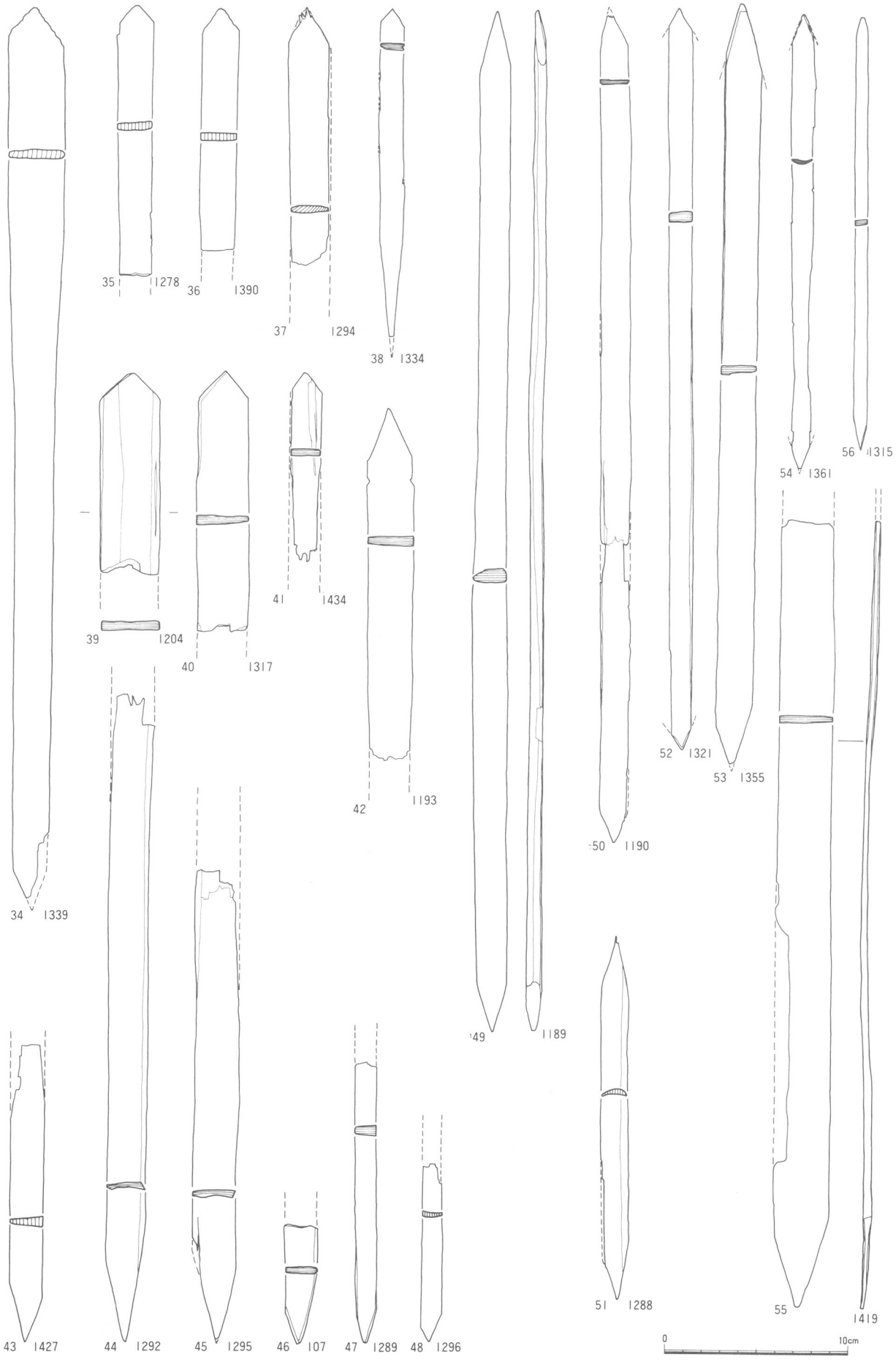
第60図　宮川6区SR313出土木製品実測図1



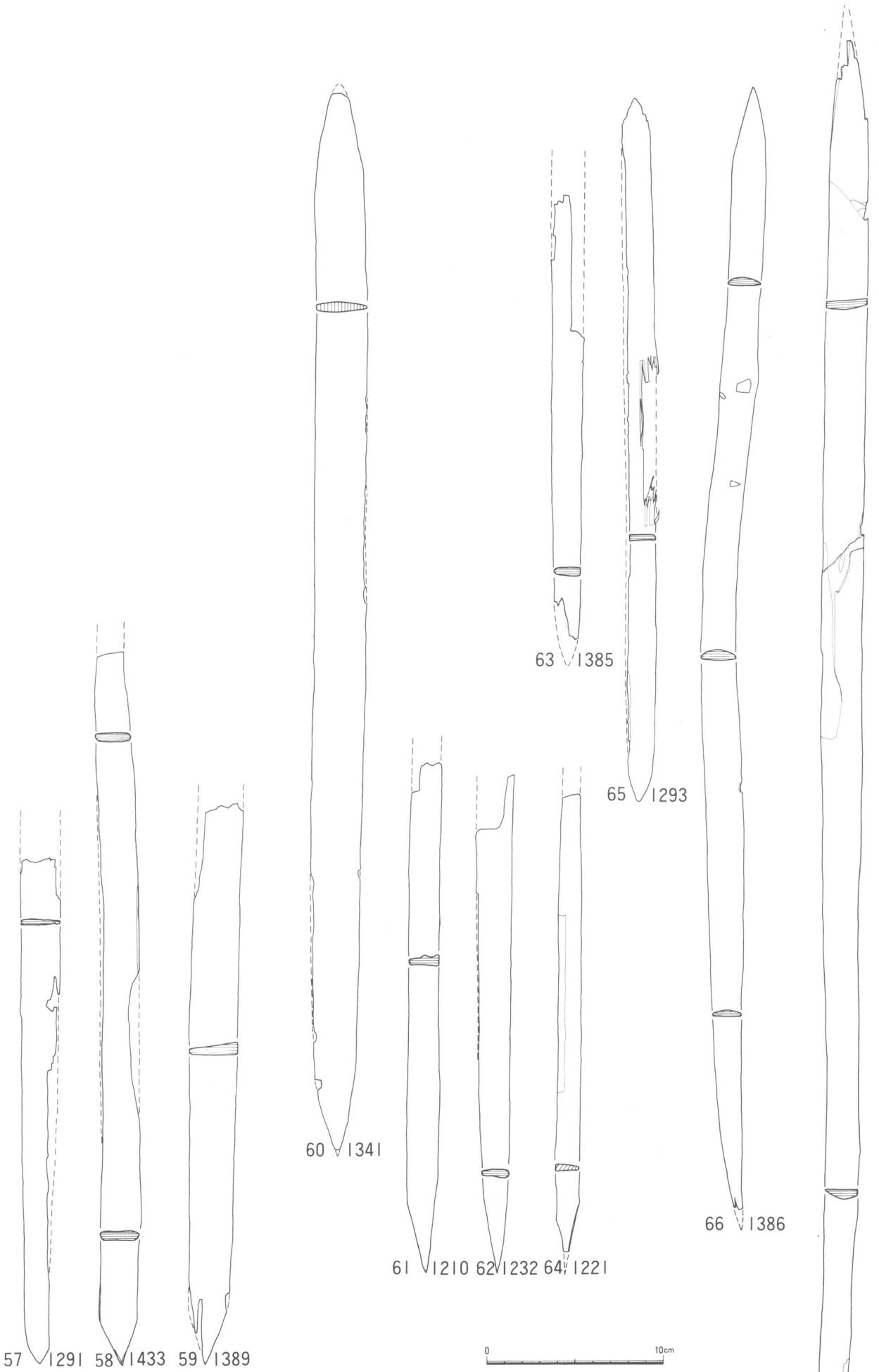
第61図　宮川6区SR313出土木製品実測図2



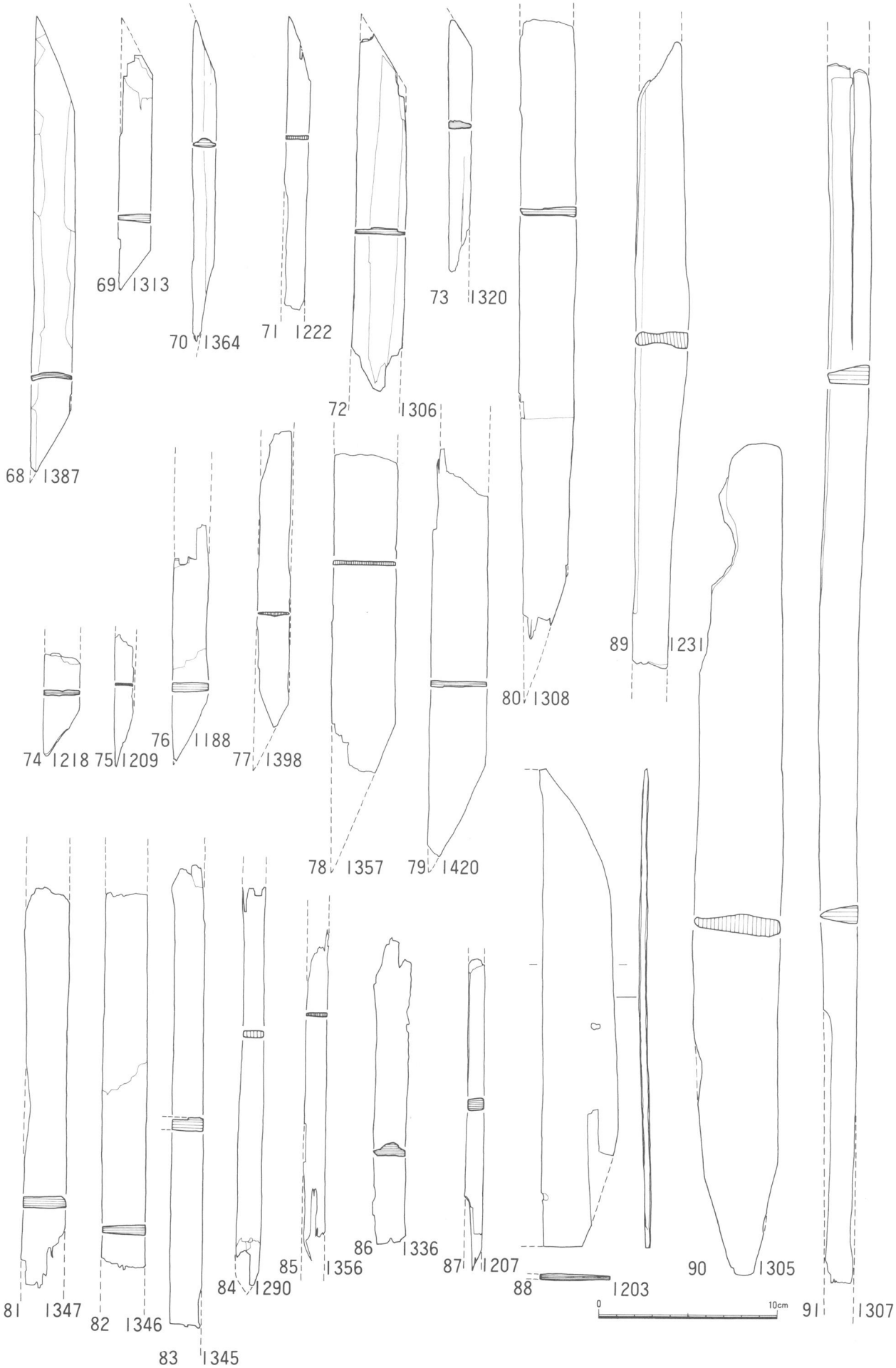
第62図　宮川6区SR313出土木製品実測図3



第63図　宮川6区SR313出土木製品実測図4



第64図　宮川6区SR 313出土木製品実測図5



第65図　宮川6区SR 313出土木製品実測図6

宮川6区SR313出土木製品一覧表

番号	名　称	遺物番号	出土地点	計測値（cm）			特　　徴	樹種	木取り	備　考
				長さ	幅	厚さ				
1	人　形	3－1282	G 102	46.3	3.7	0.4	頭部は比較的小さい。脚部の間は三角に切り取る。	スギ	板　目	完形
2	〃	3－1309	G 102	61.3	4.1	0.4	脚部の間は折り取られている。		柾　目	
3	〃	3－1012	G 102	58.1	3.9	0.5	頭部は圭頭で鋭い。なで肩。脚部の間は折り取られている。		〃	
4	〃	3－1272	G 102	52.3	3.1	0.5	なで肩。脚部の間は折り取られている。		板　目	
5	〃	3－1212	G 103	(48.0)	3.7	0.5	頭部は圭頭で鋭い。なで肩。		〃	脚部先端欠
6	〃	3－1399	G 103 右岸	(18.9)	3.4	0.5	頭部は圭頭。		柾　目	上半部のみ
7	〃	3－1335	G 102 右岸	(18.9)	3.9	0.4	頭部欠失。脚部の間は折り取られる。		〃	胴部のみ
8	〃	3－1395	G 103 左岸	(46.9)	3.9	1.0	頭部・脚部が短い。	スギ	板　目	頭部わずかに欠失
9	〃	3－1283	G 102	22.4	4.4	0.4	頭部は頂部を平に切る。	〃	〃	完形
10	〃	3－105	G 102	41.7	2.8	0.4	頭部は圭頭で非常に小さい。	〃	〃	〃
11	〃	3－1354	G 102	(38.8)	3.3	0.4	腰部は斜め上方に切り上げている。手の表現か？	〃	〃	脚部欠損
12	〃	3－1286		(33.3)	3.1	0.5	頭部は圭頭状。上部に2ケ所のえぐり込みあり。脚部の間は三角に切り取る。		〃	
13	〃	3－1302	G 102	26.7	3.2	0.7	首の部分が長く取られている。	スギ	〃	
14	〃	3－1391	G 103	(16.0)	3.1	0.3	頭部は圭頭状。		〃	上半部のみ
15	人形？	3－1349	G 102 左岸	(41.5)	2.8	0.4	胴部から脚部にかけての片側のみか？		柾　目	
16	人　形	3－1393	G 103 左岸	61.5	3.5	0.7	脚部は圭頭状で鋭く尖る。1本脚である。		板　目	完形
17	刀　形	3－1423	G 103	(54.4)	4.1	0.7	柄部を丁寧に造り出している。		柾　目	切先部欠損
18	〃	3－1304	G 102	4.93	3.0	0.7	柄部を丁寧に造り出している。下部のえぐりが大きい。		〃	ほぼ完形
19	馬　形	3－1310	G 103	18.2	5.5	1.0	頭部のキズは、目の表現か。	スギ	板　目	〃
20	〃	3－1265	G 103	(12.2)	4.1	0.8	頭部のみ。大きなえぐりは首の表現。小さなえぐりは、口か？	〃	〃	

番号	名　称	遺物番号	出土地点	計測値(cm)			特　　徴	樹種	木取り	備　考
				長さ	幅	厚さ				
21	馬　形	3－1206	G 102	10.3	3.6	0.4	頭部・尾部の区分不明瞭。	ヒノキ	柾　目	完形
22	刀形？	3－1192	G 102	(14.0)	2.8	0.4	柄部のみ。柄頭を圭頭状につくる。		板　目	
23	刀　形	3－1191	G 102	40.0	3.3	0.8	上辺に2ケ所、下辺に1ケ所の切り込み。柄頭部は圭頭状。	スギ	〃	
24	〃	3－1273	G 102 暗灰色砂層	40.2	2.5	0.4	柄頭は圭頭状につくる。		〃	
25	〃	3－1318	G 102	(49.8)	1.6	0.7	柄頭部を欠く。	スギ	柾　目	
26	〃	3－1284	G 102	71.1	3.6	0.5	下辺に大きなえぐり1ケ所。		〃	
27	〃	3－1275	G 102	58.5	3.0	0.6	柄は短く、柄頭を圭頭状につくる。	スギ	板　目	
28	刀形？	3－1208	G 103	(37.4)	3.8	0.6	端部は圭頭状につくられる。		〃	
29	刀　形	3－1332	G 102	(29.0)	2.7	0.5	上辺・下辺とも1ケ所のえぐり。		〃	
30	刀形？	3－1319	G 102	(26.1)	1.6	0.6	下部は大きなえぐり1ケ所。		〃	
31	刀　形	3－1326	G 102	(23.3)	2.9	0.5	下辺に1ケ所えぐり。柄頭は圭頭状。			
32	刀形？	3－533	G 102	(16.3)	4.1	0.6	上辺・下辺とも1ケ所のえぐり。端部は斜めに切り落とされる。	スギ	板　目	
33	〃	3－1424	G 103 左岸	(30.5)	3.2	0.4	両端ともに欠失。片側に大きなえぐりあり。		〃	
34	斎　串	3－1339	G 102 右岸	(48.1)	3.1	0.5	基部をわずかに欠失。上部が幅広く下部は若干狭い。	スギ	柾　目	
35	〃	3－1278	G 102	(14.6)	2.0	0.5	端部は圭頭状に造り出される。		〃	
36	〃	3－1390	G 103 左岸	(13.2)	2.0	0.4	圭頭。		〃	
37	〃	3－1294	G 102 左岸	(13.9)	(2.1)	0.4	側面がわずかに欠損。		追　柾	
38	〃	3－1334	G 102 右岸	(17.7)	1.4	0.4	頭部は圭頭。基部は鋭く尖っている。		板　目	
39	〃	3－1204	G 102	(10.9)	3.3	0.5	圭頭。		〃	
40	〃	3－1317	G 102	(14.5)	2.8	0.4	圭頭。		〃	
41	〃	3－1434	G 102	(10.3)	1.7	0.4			〃	損耗著しい

番号	名　称	遺物番号	出土地点	計測値（cm）			特　　徴	樹種	木取り	備　考
				長さ	幅	厚さ				
42	斎串？	3－1193	G 102 左岸	(19.0)	2.6	0.5	圭頭状。左右より切り込みあり。頭部の表現か？		柾　目	人形の可能性もあり
43	斎　串	3－1427	G 102	(16.0)	1.8	0.5			〃	
44	〃	3－1292	G 102	(34.8)	2.2	0.4	端部は鋭く尖る。		板　目	
45	〃	3－1295	G 102 右岸	(25.2)	2.4	0.5	端部は鋭く尖る。		〃	
46	〃	3－107	G 102	(6.4)	1.8	0.4	端部の切り落しが左右で若干異なる。		〃	
47	〃	3－1289	G 102	(15.2)	1.2	0.6		スギ	〃	
48	〃	3－1296	G 102 右岸	(9.7)	1.1	3.0			柾　目	
49	〃	3－1189	G 102 左岸	55.2	1.9	0.8		スギ	板　目	完形
50	〃	3－1190	G 102	44.7	1.7	0.3	端部より16.5cmのところで折れている。		柾　目	
51	〃	3－1288	G 102	19.2	1.5	0.4	断面がカーブを持っている。		〃	ほぼ完形
52	〃	3－1321	G 102 暗灰色砂層	40.1	(1.3)	0.5	両側は欠損している可能性あり。		板　目	
53	〃	3－1355	G 102 暗灰色砂層	40.9	2.0	0.5	頭部の両側は若干欠失しているか？		〃	
54	〃	3－1361	G 102 暗灰色砂層	24.5	(1.4)	0.4	全体に損耗著しい。		〃	
55	〃	3－1419	G 103	(42.6)	3.0	0.4	大型品。		〃	
56	〃	3－1315	G 102	23.4	0.8	0.3			板　目	完形
57	〃	3－1291	G 102 右岸	(28.2)	2.2	0.4	端部は幅が狭くなる。		〃	
58	〃	3－1433	G 102	(40.0)	2.3	0.5			〃	
59	〃	3－1389	G 103 左岸	(30.5)	2.7	0.8	先端部は損耗が著しい。		〃	
60	〃	3－1341	G 102 左岸	(59.3)	2.9	0.7			柾　目	
61	〃	3－1210	G 103	(28.7)	1.7	0.7	端部は鋭く尖る。		板　目	
62	斎串？	3－1232	G 103	(27.9)	2.0	0.5	端部は鋭く尖る。		〃	
63	〃	3－1385	G 103	(24.9)	1.8	0.5	両端ともに欠失。一方は尖る。		〃	
64	斎　串	3－1221	G 103	(25.7)	1.4	0.4	端部は鋭く尖る。		追　柾	
65	〃	3－1293	G 102	39.6	1.7	0.2	中央部一部欠損。		柾　目	

番号	名　称	遺物番号	出土地点	計測値（cm）			特　　徴	樹種	木取り	備　考
				長さ	幅	厚さ				
66	斎串？	3－1386	G 102	63.0	2.1	0.6	両端とも鋭く尖る。		板　目	
67	〃	3－1307	G 102	(80.2)	2.9	0.6	両端とも鋭く尖る。		〃	
68	斎　串	3－1387	G 103	(25.4)	2.3	0.3	一方の端部に切り込みあり。		〃	
69	〃	3－1313	G 102	(13.0)	1.8	0.6	両端を斜めに切り落とす。		〃	
70	〃	3－1364	G 102 暗灰色砂層	(17.5)	(1.3)	0.5	両端を斜めに切り落とす。		〃	
71	〃	3－1222	G 103	(16.2)	1.3	0.2	端部は斜めに切り落とされている。		柾　目	
72	〃	3－1306	G 102 右岸	(19.8)	2.8	0.3	端部は斜めに切り落とされている。		板　目	
73	〃	3－1320	G 102 暗灰色砂層	(14.0)	1.3	0.6	端部は斜めに切り落とされている。		〃	
74	〃	3－1218	G 103	(5.7)	2.0	0.3	端部は斜めに切り落とされている。		〃	
75	〃	3－1209	—	(7.3)	(1.0)	0.1	端部は斜めに切り落とされている。		柾　目	損耗著しい
76	〃	3－1188	G 102	(13.1)	2.0	0.5	端部は斜めに切り落とされている。先端より5.5cmのところ付近に折れ目あり。		板　目	
77	〃	3－1398	G 103	(16.4)	1.9	0.2	端部欠失。		柾　目	損耗著しい
78	〃	3－1357	G 102 暗灰色砂層	(17.6)	3.5	0.3	端部欠失。		〃	
79	〃	3－1420	G 103 右岸	(22.6)	3.2	0.4	端部は斜めに切り落とされている。		板　目	
80	〃	3－1308	G 102 右岸	(34.2)	3.1	0.5	端部より12.5cmのところに焦げた痕跡あり。		〃	
81	板　状	3－1347	G 102 左岸	(22.2)	2.5	0.7	板状品。両端ともに欠く。		〃	
82	〃	3－1346	G 102 左岸	(20.7)	2.4	0.5	板状。両端ともに欠く。		〃	
83	〃	3－1345	G 102 左岸	(25.6)	(1.8)	0.8	板状。片側は欠失。		〃	
84	〃	3－1290	G 102 暗灰色砂層	(22.1)	1.4	0.4	端部欠失。		柾　目	斎串の可能性あり
85	斎串？	3－1356	G 102 左岸	18.5	1.2	0.2	板状。両端ともに欠失。		〃	
86	板　状	3－1336	G 102	(17.0)	(2.1)	0.7	斎串とは確認しがたい。		板　目	損耗著しい

番号	名　称	遺物番号	出土地点	計　測　値（cm）			特　　徴	樹種	木取り	備　考
				長さ	幅	厚さ				
87	棒　状	3－1207	G 103	（17.4）	1.0	0.7	断面四角形の棒状品。両端ともに欠失。		板　目	
88	—	3－1203	G 102	26.5	4.2	0.4	曲物あるいは桶の底板か。		〃	
89	板　状	3－1231	G 103	（34.7）	3.0	0.9	板状。中央部が最も幅広い。両端共に欠失。		柾　目	
90	鍬　？	3－1305	G 102	（45.9）	5.0	1.1	端部が鋭い。		〃	鍬の可能性あり
91	棒　状	3－1307	G 102	（67.7）	2.4	1.1	断面三角形の棒状品。両端ともに欠失。		板　目	

◦計測値の（　）は破片での現状の数値である。

第４節　水上７区ＳＲ810・811・812

調査対象範囲のほぼ中央、現大谷川の左岸にあたる。水上７区からは、古墳時代中期から後期初頃の溝状の低地１か所（ＳＲ807）、古墳時代後期から近世までの旧河道跡が７本（ＳＲ808～ＳＲ814）検出されている。旧河道跡は旧大谷川の蛇行部分がしだいに外湾し河道が外側・南側に移動した状況を示している。時期を特定出来る流路が残存しているところとして注目され、また祭祀遺物の時期を与えうるところとして着目されていた。また流路が砂礫の堆積によって埋められた州の上に水辺の祭祀に関連すると考えられる遺構が６か所（ＳＸ801～ＳＸ806）検出されており、旧河道跡とどのように対応するか注目されるところである。ＳＸ801～ＳＸ806についてはすでに『大谷川Ⅱ』において紹介しているので、今回は古墳時代後期とされているＳＲ810・ＳＲ811・ＳＲ812の３本の流路の遺物を紹介する。

1.　ＳＲ810（第66図～第68図）

水上７区Ｉ77グリッドからＪ72グリッドまで、ＳＲ809の外側に蛇行して流れる。確認面での巾は13.6ｍ、延長66.7ｍである。河床は平坦で、覆土は灰茶褐色砂礫層である。覆土中から大量の土師器・須恵器が検出されているが、ここではＪ72グリッド付近の平面図より確実にまとまりとなる河床直上の土器に限定して紹介する。

須恵器

須恵器は６点検出されている。坏の蓋１点、身５点である。２は坏の身で最大径16.0㎝高さ推定4.2㎝底部のヘラケズリは高く体部の半ばに達する。３は最大径16.2㎝高さ3.7㎝で立ち上がりは低く内傾している。４は最大径15.4㎝、高さ3.7㎝を測る。いずれも径の最も大きくなるグループのものである。１は口径13.7㎝で若干小さいがこのグループのものの蓋と考えられる。頂部は回転ヘラケズリである。５は最大径12.6㎝高さ3.3㎝で蓋受けの立ち上がりは比較的高い。底部のヘラケズリも６に比べれば高くていねいである。６は最大径11.4㎝高さ3.8㎝で、立ち上がりは厚くぼってりした造りで内傾している。

２は須恵器編年の第Ⅲ期中葉に位置付けられるものであり、５は第Ⅲ期後葉に位置付けられよう。６は手法的には若干後出の要素を持つといえる。わずかな須恵器での断定は避けたいが、６世紀後半の比較的時期のまとまった資料となりそうである。

土師器

多量の坏の他に椀あるいは鉢と呼んだ方が良いもの・甕・高坏・小型壺等が出土している。

坏は大きく２類に分けられる。丸底ないしは平底でゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾するものが主体で、くの字状に屈曲し外側に開くものがわずかに認められる。

７は平底でゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がそのままのカーブで内傾する。口径10.3㎝

高さ4.6㎝で、ナデ調整で口縁部はヨコナデが施されている。小振りでナデ調整であることなど疑問の点もあるが、伝統的な坏であるA類の系譜を引いていると考えて、とりあえずここに置いた。

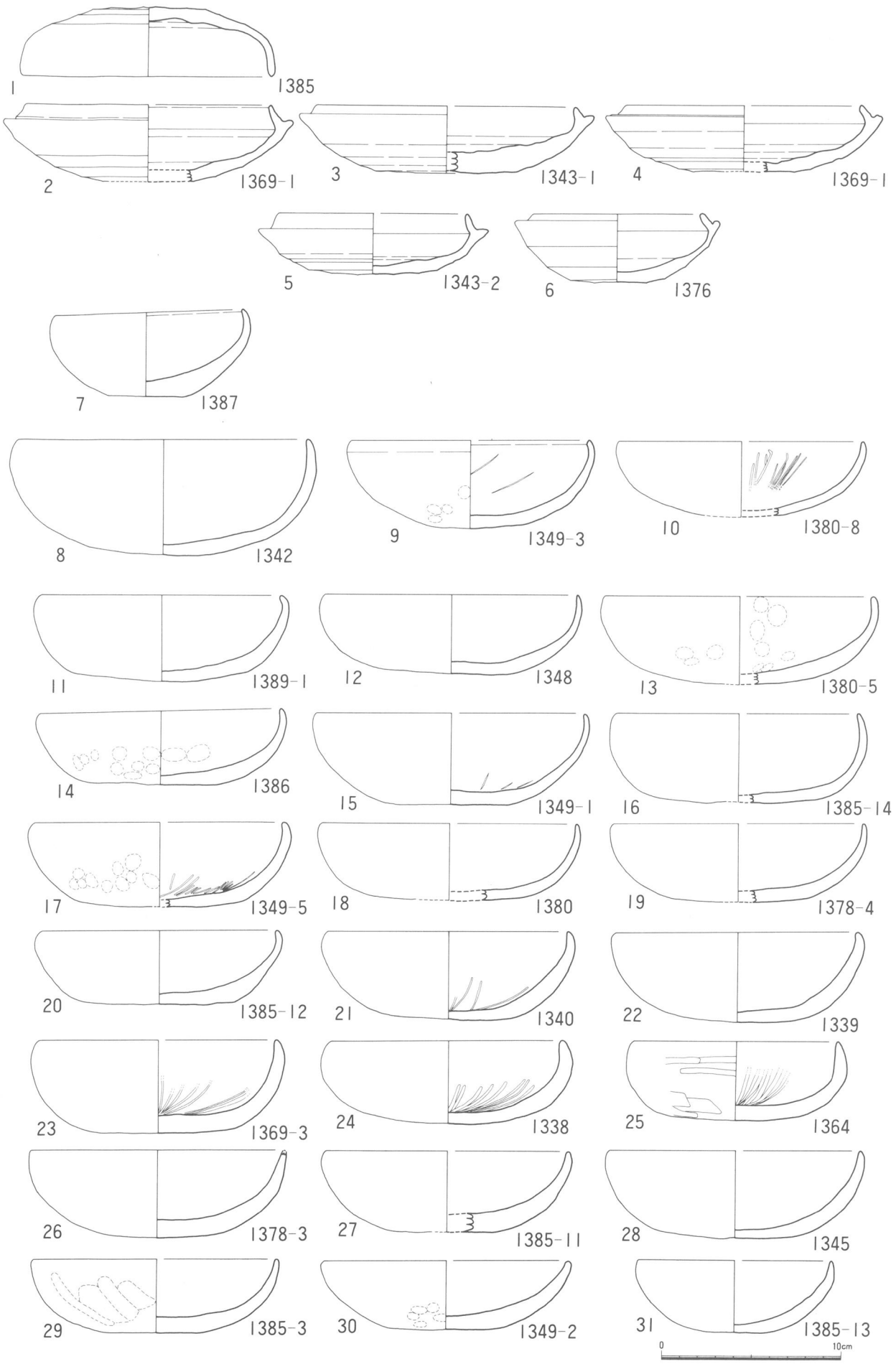
8～39は丸底ないしは平底でゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾するもので10・14・17などをその典型例としよう。14は口径13.4㎝高さ4.0㎝でナデ調整、口縁部はヨコナデである。内外面に指頭圧痕が観察される。全体に外面に横位のヘラ削りが観察できるものは少なくナデ調整がほとんどで指頭圧痕の観察されるものも多い。内面に放射状のヘラミガキ調整が認められるものは少なく、そのヘラミガキも荒く不規則なものが多い。口縁はゆるやかなカーブでわずかに内傾している。全体に器壁が厚くぼってりとはしているものの伝統的な坏の系譜をひいていると考えられる。平底化の傾向が強く15・20などのように平底となっている。8は口径16.0㎝最大径17.0㎝高さ6.4㎝とこの中では際立って大型のものである。8を除けば口径は13㎝～14㎝、高さ4㎝～5㎝が中心で大きなばらつきは無い。26～は口縁が内傾せずにそのまま開くもので後出の要素であろう。

いわゆる鬼高期並行の坏といわれるC類はこのSR 810では非常に少ない。42は口径12.8㎝器高の2／3程度のところから屈曲して口縁は外側に開く。ナデ調整であるがわずかにヘラミガキの痕跡が観察される。43は口径12.4㎝高さ4.8㎝、44は口径12.8㎝高さ4.4㎝を測るものである。また45はC－c類とした口縁がまっすぐに伸びるグループに属するものであろう。40は口径18.8㎝高さ6.8㎝で、外面にわずかにヘラミガキが観察される。坏の身として図化されているが、須恵器の坏の蓋を模したものである可能性がある。

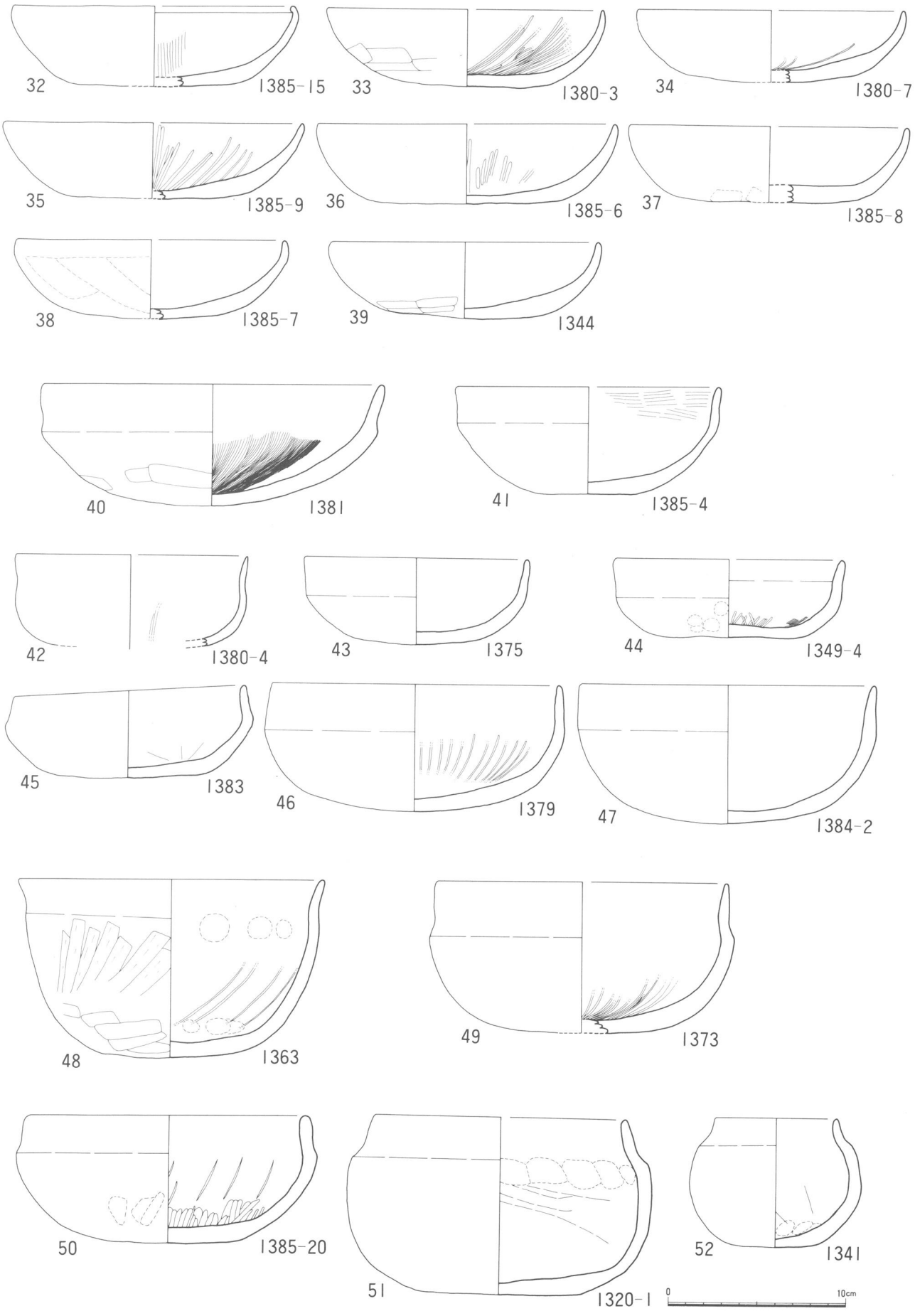
口径が高さの1／2以下のものを椀としてまとめた。48は口径16.9㎝高さ9.9㎝である。外面にヘラケズリが観察される。51は最大径17.1㎝口径14.0㎝高さ9.8㎝で口縁部が大きく内傾している。ナデ調整が基本で外面に指頭圧痕の残る部分が観察される。50は高さは無いがこの類としてよかろう。52は非常に小型で口径6.8㎝高さ7.2㎝であるが、口縁の形態からこの類に入れておきたい。53は口径15.2㎝高さ8.1㎝、内面に放射状のヘラミガキが施されている。また54は鉢で、口径12.2㎝高さ9.5㎝、いずれも厚手で底部に木葉痕をつける。

高坏は9個体分検出されているが、これらは3類に細分出来よう。58・63・64のように脚が中空で裾部が外側へ大きく開くもの、60・61のように脚部が柱状のもの、65・66のように脚部が極端に短く外側に大きく開くもの　である。

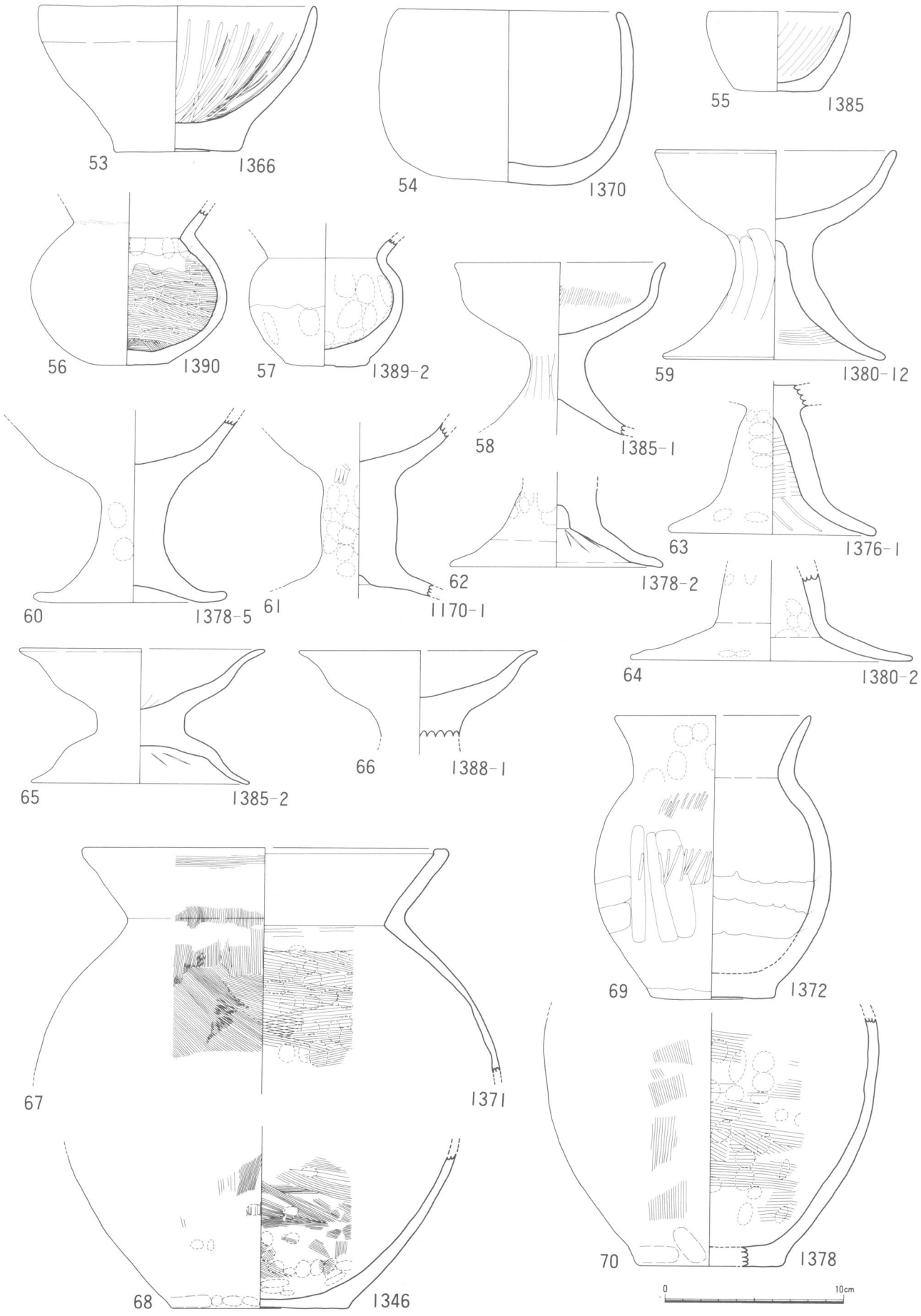
甕は合て破片で、全形を知りうるものは無い。口縁部のわかる1点を図示した。頸部がくの字状に屈曲するもので、口縁部内面がわずかに肥厚する。調整は口縁部が横ナデ・胴部がハケ目調整となり、内面はハケ調整の下に指頭圧痕がわずかに観察出来る。68は同一個体ではないがこのタイプの甕の底部となるもので、内外面に指頭圧痕が観察出来る。球胴を呈するもので、いわゆる駿東型の甕といわれるものである。



第66図　水上7区SR 810出土土器実測図1



第67図　水上7区SR 810出土土器実測図2



第68図　水上7区SR 810出土土器実測図3

2. ＳＲ811

水上７区Ｉ77グリッドからＪ71グリッドまで、ＳＲ810の外側に蛇行して流れる旧河道跡である。確認面での巾は4.10ｍ、延長69.6ｍである。河床は平坦で、覆土は茶褐色砂礫層である。覆土中から大量の土師器・須恵器が検出されているが、ここではＩ72・Ｊ72グリッド付近の平面図より確実にまとまりとなる河床直上の土器に限定して紹介する。

須恵器

須恵器は６点検出されている。坏の蓋１点、身４点、長頸壺１点である。１は坏の蓋で口径15.0㎝高さ3.1㎝をはかる。若干の歪みがあるが、口径の大きなものである。２は坏の身で最大径14.1㎝高さ3.9㎝である。３は最大径11.3㎝高さ4.2㎝で蓋受けの立ち上がりは、２・４・５などに較べると厚く高くなっている。４は最大径10.1㎝、５は最大径10.7㎝と径が小型となるグループであり中でも５は高さ2.5㎝と非常に扁平である。長頸壺は、口縁部および底部を欠いている。最大径10.4㎝で肩部に二条の沈線と櫛状工具による列点の刺突が巡らされている。

１は口径が15.0㎝と大きいが、歪みのあることを考慮に入れると、須恵器編年の第Ⅲ期中葉ないしは第Ⅲ期後葉に位置付けられよう。３・４・５は若干の大小の違いはあるが第Ⅳ期前半に位置付けられるものである。須恵器で見るかぎり、古墳時代後期の中に納まるものであり、それ以降に下る要素は認められない。『大谷川Ⅱ』においても、ＳＲ811の出土須恵器を８点紹介している（ｐ83第44図)。今回はＩ72・Ｊ72グリッドに限定しているので含まれていないが、長い流路の中での須恵器・土師器の傾向は変わらない。新しいもので乳頭状つまみを持つ蓋が入っているが、いずれにしても、古墳時代以降の要素は認められない。

土師器

多量の坏の他に椀あるいは鉢と呼んだ方が良いもの・甕・高坏・甑が出土している。

坏は大きく２類に分けられる。丸底ないしは平底でゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾するものとくの字状に屈曲し外側に開くタイプのものとである。前者は２点と少なく、主体はくの字状に屈曲し外側に開くタイプのものである。

７は平底気味の底部から、ゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がそのままのカーブで内傾する。口径17.4㎝高さ5.1㎝と大振りで、調整はナデ調整で口縁部はヨコナデが施されている。底部には木葉痕がある。８は平底で口径17.8㎝高さ6.3㎝で、ナデ調整で口縁部はヨコナデが施されている。内面に調整工具の痕跡が、底部には木葉痕が観察される。

坏の主体は、いわゆる鬼高期並行の坏といわれるＣ類である。大小のバラエティがあり、９は口径14.6㎝高さ6.6㎝と大きく、反対に小さなものでは27の口径10.8㎝高さ4.0㎝がある。中心となるのは口径11～12㎝高さ4.5～５㎝のものである。器高の⅔程度のところから屈曲して口縁は外側に開く。基本的にはナデ調整で口縁部はヨコナデが施される。しかし調整は十分でなく内外面に指頭圧痕の観察されるものが多く、またヘラ様の工具痕の観察されるものもある。全体に平底の傾向にあり、底部には木葉痕

が観察される。

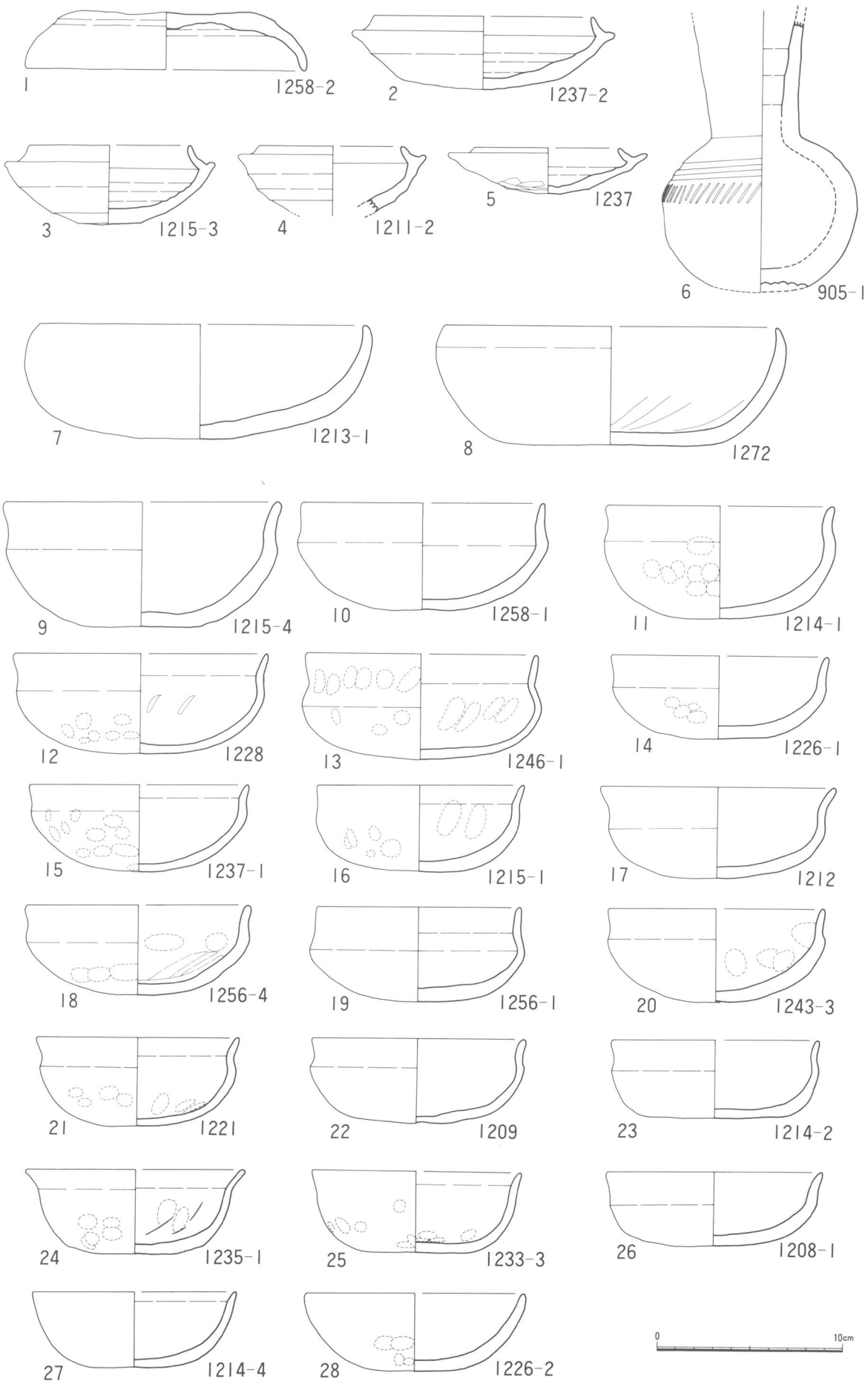
口縁の開き方に若干のバラエティがある。17・24のように大きく外に開くもの、10・20および29～32のようにまっすぐ上に伸びるもの、25・27のようにほんのわずかしか屈曲しないもの、などに細分できるが基本的には違いはない。

33は口径10.8㎝最大径12.2㎝高さ5.4㎝と口縁部が内傾するもので、体部外面には横位のヘラミガキ内面には放射状のヘラミガキが施されている。同様に口縁が内傾する34等とは若干様相を異にする。34は口径8.4㎝最大径10.5㎝高さ6.0㎝を測り、口縁部が内傾するが、技法的にはヨコナデを基本とし、坏C類と変わらない。

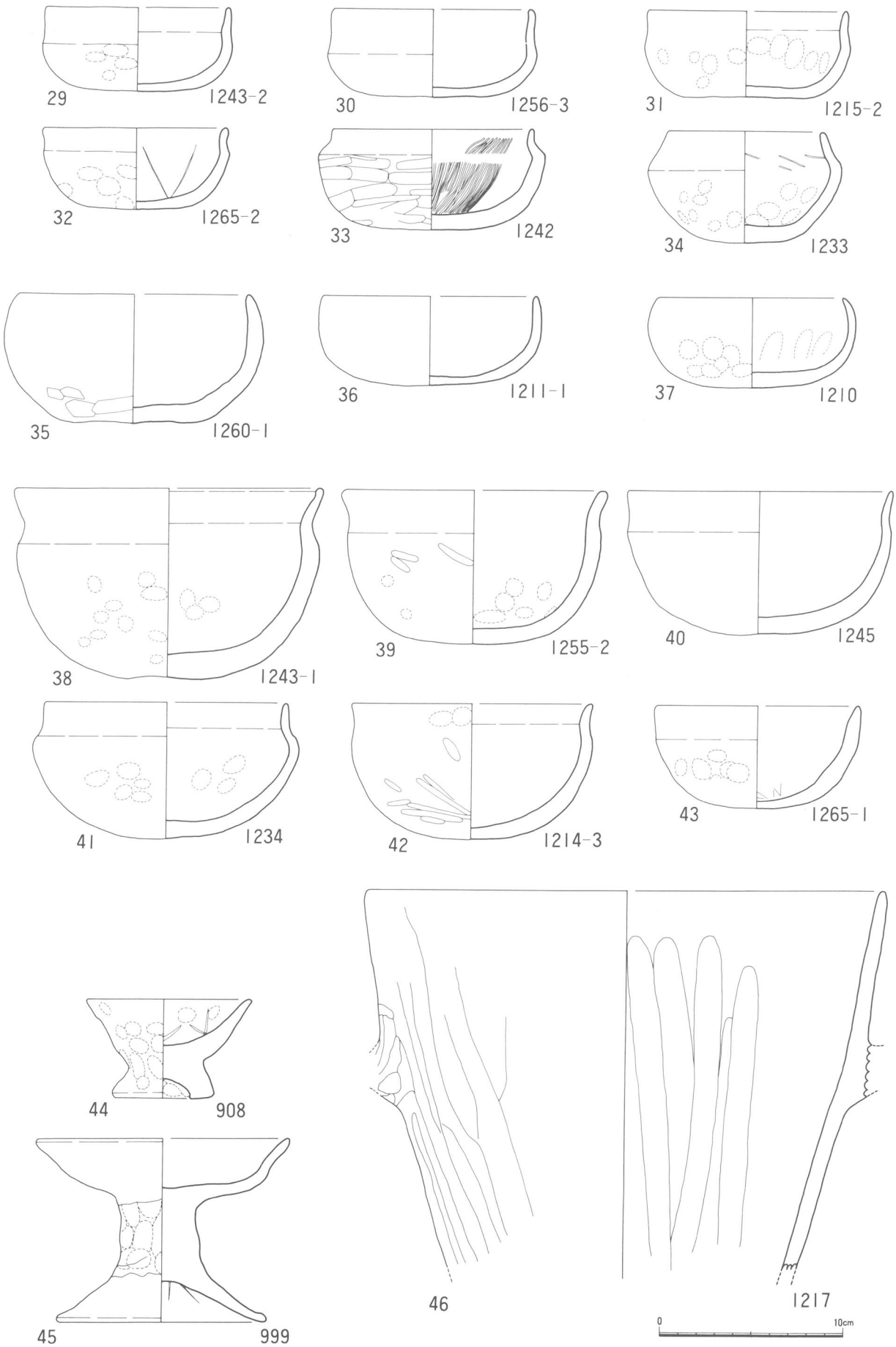
38～42の様に、口径が高さの1/2以下のものを椀としてまとめた。技法的には坏C類と変わらない。38は口径16.6㎝高さ10.2㎝である。内外面に指頭圧痕が観察される。41は最大径14.4㎝口径13.0㎝高さ7.4㎝で口縁部が内傾している。ナデ調整が基本で内外面に指頭圧痕の残る部分が観察される。43は小型で口径11.0㎝高さ5.5㎝であるが、深い形態であるのでこの類に入れておきたい。

45は口径13.5㎝器高9.9㎝の高坏で、中実の脚の裾部がハの字状に大きく拡がっている。44は高坏とするよりも底部が指により押し上げられたと理解したほうが良いものである。

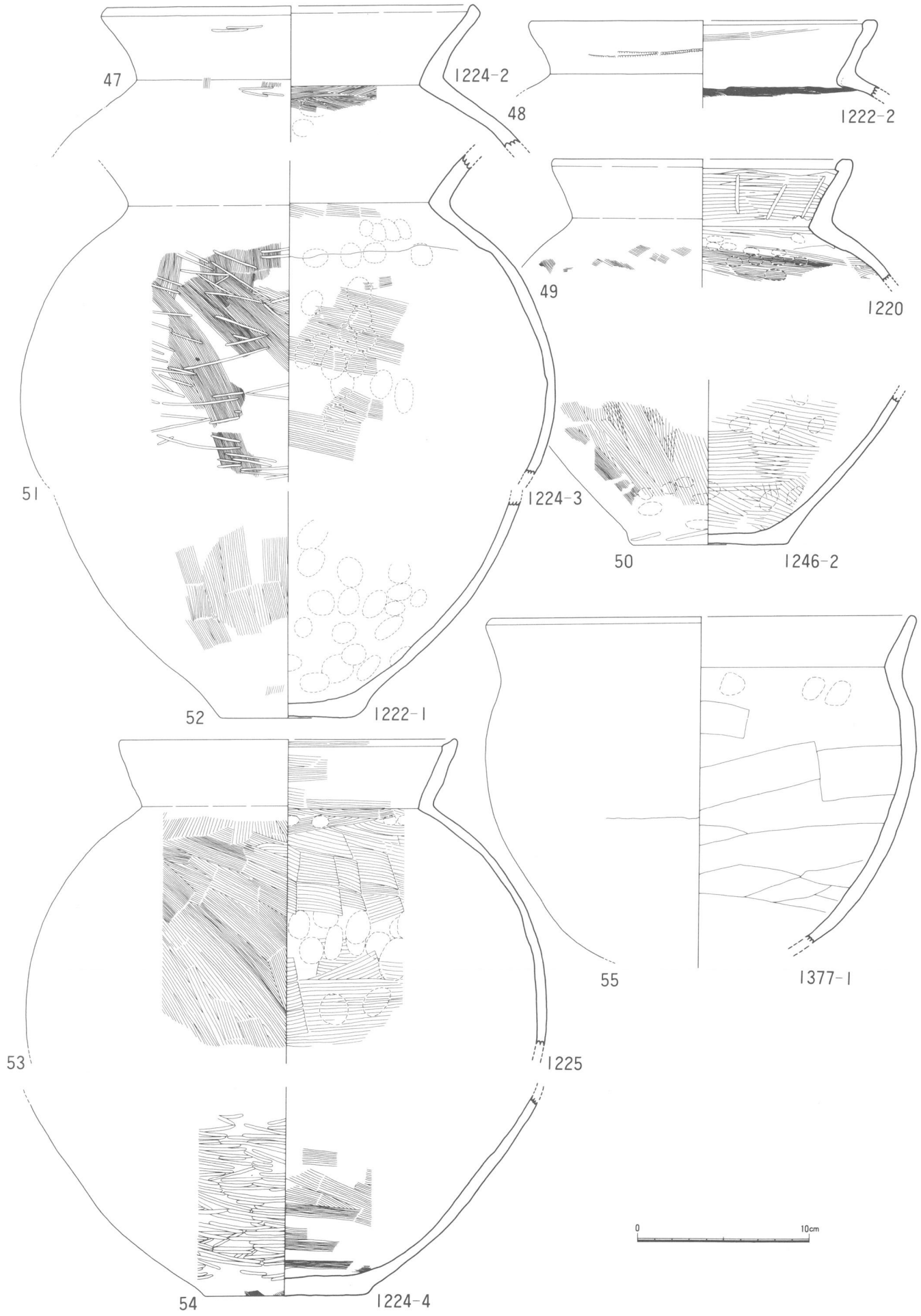
甕は全て破片で、全形を知りうるものは無い。しかし、口縁部と底部の組み合わせでほぼその様相は理解出来る。主体となるのは、口縁部内面をわずかに肥厚させ、頸部がくの字状に屈曲して胴部に続くもので、球胴を呈する。調整は口縁部が横ナデ・胴部がハケ目調整となり、50では横位のヘラミガキが施されている。内面はハケ調整の下に指頭圧痕がわずかに観察出来る。いわゆる駿東型の甕と呼ばれるものである。底部のみではあるが51・52等を見ると、全くの球胴ではなく若干細長くなっている。50が球胴の傾向が強く出ているもので、ヘラミガキと合わせて後出の要素を持つものといえよう。



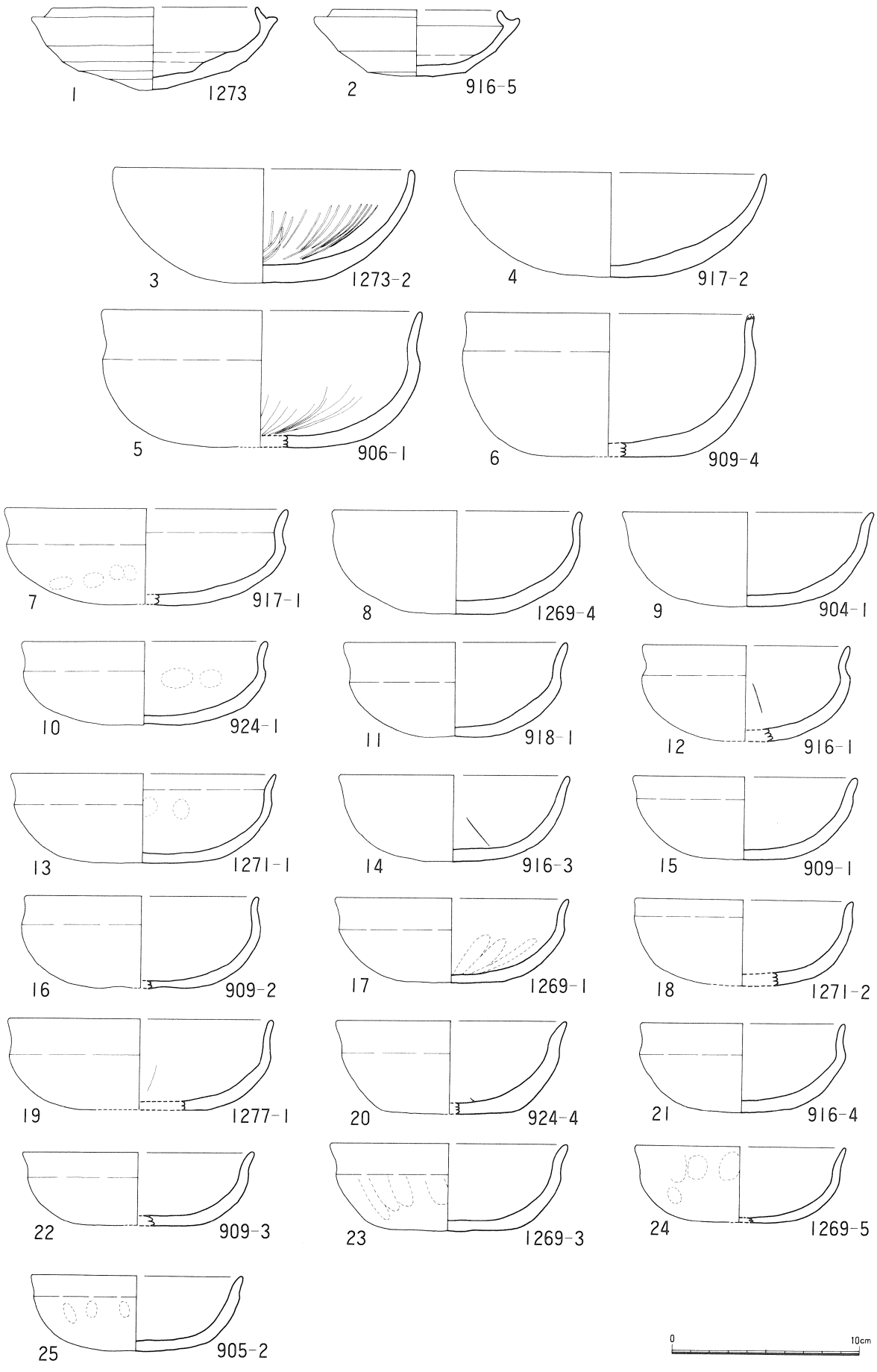
第69図　水上7区SR 811出土土器実測図1



第70図　水上７区ＳＲ811出土土器実測図２



第71図　水上７区ＳＲ811出土土器実測図３



第72図　水上7区SR 812出土土器実測図1

3. ＳＲ812

水上７区Ｉ77グリッドからＪ77グリッドまで、ＳＲ811の外側に蛇行して流れる旧河道跡である。確認面での巾は38.4ｍ、延長78.1ｍである。河床は平坦で、覆土は暗茶褐色砂礫層である。覆土中から大量の土師器・須恵器が検出されているほか、馬形土製品２点が検出されている。

須恵器

須恵器は２点検出されている。坏の身のみである。１は坏の身で最大径13.0㎝高さ4.4㎝をはかる。若干の歪みがあるが、口径の大きなものである。２も坏の身で最大径10.9㎝高さ3.5㎝を測り、小型となるグループである。須恵器編年の第Ⅲ期後葉から第Ⅳ期前半に位置付けられるものである。

土師器

坏がほとんどで、坏の他に椀あるいは鉢と呼んだ方が良いもの・高坏が出土している。

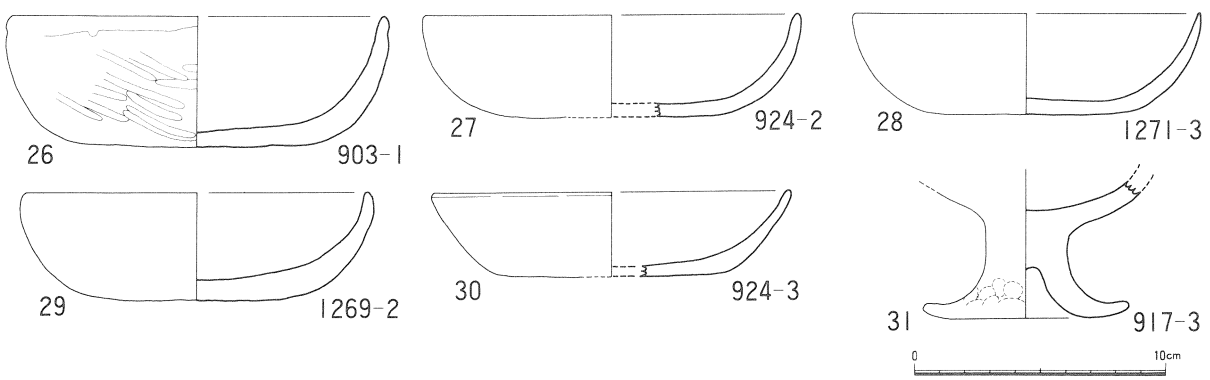
坏は大きく２類に分けられる。丸底ないしは平底でゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がゆるやかに内傾するものとくの字状に屈曲し外側に開くタイプのものとである。前者は２点と少なく、主体はくの字状に屈曲し外側に開くタイプのものである。

３は平底気味の底部から、ゆるやかなカーブを持って立ち上がり、口縁がそのままのカーブでわずかに内傾する。口径15.8㎝高さ6.0㎝と大振りである。４は口径16.4㎝高さ5.5㎝で、いずれも調整はナデ調整で口縁部はヨコナデが施され、底部には木葉痕がある。

坏の主体は、いわゆる鬼高期並行の坏といわれるＣ類である。大小のバラエティがあり、７は口径15.0㎝高さ5.1㎝と大きく、反対に小さなものでは25の口径10.0㎝高さ4.0㎝がある。器高の2/3程度のところから屈曲して口縁は外側に開く。基本的にはナデ調整で口縁部はヨコナデが施される。しかし調整は十分でなく内外面に指頭圧痕の観察されるものが多く、またヘラ様の工具痕の観察されるものもある。全体に平底の傾向にあり、底部には木葉痕が観察される。口縁の開き方に若干のバラエティがある。９・11のように大きく外に開くもの、19・21等のようにまっすぐ上に伸びるもの、18・25のようにほんのわずかしか屈曲しないもの、などに細分できるが基本的には違いはない。

５・６は大型で高さが口径の1/2以上あるもので椀としてまとめた。技法的には坏Ｃ類と変わらない。５は口径16.8㎝高さ7.2㎝である。６は最大径15.6㎝口径15.3㎝高さ7.6㎝で口縁部がわずかに内傾している。ナデ調整が基本である。

26～30は口縁部の屈曲がほとんどなくなり、皿状を呈するものである。



第73図　水上７区ＳＲ812出土土器実測図２

第Ⅳ章　主　要　遺　物

第1節　文　字　資　料

神明原・元宮川遺跡では19点の木簡、絵馬1点、ヘラ書き土器1点、及び110点の墨書土器が出土している。これらの文字資料のうち第1号木簡については『大谷川Ⅰ』によって報告済みであるが、他の木簡との比較検討の便を考え、『大谷川Ⅲ』ではこの第1号木簡も含めた文字資料について報告するものとする。

1.　木簡・絵馬（第74図～第80図）

1）出土状況概観

19点の木簡と絵馬1点の出土状況は墨書土器のそれと酷似している。即ち西大谷地区が3点、宮川4区で8点、宮川3区で6点、宮川6区は2点の木簡と絵馬が出土しており、宮川地区出土の総数は絵馬

神明原・元宮川遺跡出土木簡一覧

	地　区	遺構番号	グリッド	遺物番号	釈　文	
1号	西大谷2		E 43	N1240	他田里宇刀マ真酒	
2号	西大谷4		Q 23	2-486	＜梵字＞南無阿弥□□	
3号	西大谷4		R 21	2-725	天罡カ 鬼鬼　□　（陀佛カ）	
4号	宮川4区	SR 54	O 93	3-151	□	
5号	〃	SR 56		3-1055	相星五十戸・□□	
6号	〃		L 95	3-1200	＜梵字＞南無大□□□（日如来カ）	
7号	〃		I 100	3-2582	墨痕不明瞭	
8号	〃		I 99	3-2760	□永二年	
9号	〃		I 99	3-2835	〔　　〕	
10号	〃		K 98	3-2904	〔　　〕	
11号	〃	SR 56	N 94	3-262	〔　　〕	
12号	宮川3区	SR 486	K 94	3-580	仁王如カ □	
13号	〃	SR 486	J 94	3-630	南〔　　〕	
14号	〃	SR 486	J 94	3-655	南〔　　〕	
15号	〃	SR 486	J 94	3-767	南〔　　〕	
16号	〃	SR 486	J 94	3-768	南冱大日〔　　〕	
17号	〃	SR 487	L 93	3-758	＜梵字＞南無大日如来カ	
18号	宮川6区	SR 312	F 103	3-695	□□	
19号	西大谷4区		R 21	2-1449	□	
絵馬	宮川6区	SR 321	D 108	3-227	（馬を引く絵）いろ□・下 （裏面）　「古能へ見てハ」「□くハ人（んカ） 能心を」「□□かゝて□」	

をふくめて17点にのぼる。しかも、いずれも旧大谷川河道内で出土している。また、平安時代から中世とみられるものが大半をしめていることなど墨書土器の出土状況との共通点を有している。出土木簡の点数が少ないため問題はあろうが、墨書土器との関連性について考えることも必要であるかもしれない。

2）木簡の釈文と年代観

1号木簡

「他田里戸主宇刀マ真酒」
（部）

西大谷2区E43　N 1240

旧大谷川流路内より出土。年代については伴出遺物からは確定できないが、「他田里」「戸主」とあることから715年の郷里制施行以前、701年の大宝律令施行以後と考えられる。「他田里」は『和名類聚抄』にみえる有度郡七郷のうち「他田（ヲサダ）」に比定できよう。また「宇刀マ」の「宇刀」は「有度」にあたると考えられ、有度の用字例を増やした。1号木簡の詳細については既刊報告書『大谷川Ⅰ』第4章第4節を参照されたい。

2号木簡

「＜梵字＞南無阿弥□□」
（陀佛）カ

西大谷4区Q23　2 - 486

旧大谷川流路内の暗灰色粘土層より出土。上端を圭頭状に、下端を串状につくる。一字目は梵字で、以下「南無阿弥」と続むことができ、これ以下は墨痕が不鮮明であるが、「陀佛」あるいは「陀如来」と思われる。時代は限定できないが阿弥陀信仰が顕著となる平安時代末から中世と考えることもできよう。

3号木簡

「天罡カ鬼□
鬼　」

西大谷4区R21　2 － 725

旧大谷川流路内砂層より出土。上端を圭頭状に、下端を串状につくる。表面を丁寧に面調整している。上から「天罡カ」とあり、「罡カ」の「罒」は鮮明であるが「山」の部分は不鮮明である。「罡」は「岡」の異体字であり「天丘」を示すものと思われる。この下に「鬼」の文字が横に並ぶ。全体のバランスからいえば右にもう一字配してもよいと思われるが墨痕が確認できない。また、「鬼」の文字の下にも墨痕がみられるが欠損部分もあって判読しがたい。

4号木簡

「〔　　〕」　　宮川4区SR54　3 － 151

旧大谷川流路内のうち10世紀代に限定されるSR54より出土。上端を左右から切り込みがほどこしてある。切り込みの下に墨痕がみられるものの判読は困難である。黒笹90号窯式から折戸53号窯式の灰釉陶器が伴出している。

5号木簡

「相星五十戸」・「□□」　　宮川4区SR56　3 － 1055

桧の板目板を利用している。上端・下端ともに角に切り落とし、平面は削りにより面調整している。下部に約0.5㎝の方形の穴が開けられ、これより下端まで穴の幅で木目に沿って欠落している。文字は

木表に五文字、木裏に二文字が認められる。「相星」は「相」を「會」にあて、『和名類聚抄』の「駿河国有度郡」に記載されている郷名のうち「會星（アフホシ）」に該当するものと考えられる。「五十戸」については伊場遺跡出土の木簡三号「柴江五十戸」、同六号「竹田五十戸人」、同二十一号「加□□五十戸人」などの類例（伊場遺跡発掘調査報告書第一冊・同別冊）があげられる。

木裏の二文字については一文字目の偏を「馬」と解することもできる。旁は不鮮明であるが上に「口」のような字形がうかがえることから「驛」の可能性もあろう。二文字目は「長」と読むのか「表」と読むのか判然としない。いずれの文字にあてても点画が一致せず解釈には困難を要する。

5号木簡の出土したＳＲ56は大量の土師器とともに、須恵器、祭祀遺物とみられる人形木製品、馬形木製品、斎串、馬形土製品などの他、木製品、石製品が多量に出土している。（『大谷川Ⅱ』参照）5号木簡はこのＳＲ56の川底に密着した状態で出土しており、これら伴出遺物との年代差はほぼないものと理解される。ＳＲ56出土の須恵器の年代は静岡県の須恵器の編年観から、ほぼ6世紀中葉～7世紀中葉に比定することができよう。

また、大宝律令成立以前の「五十戸」の表記について、県内出土の例は伊場遺跡出土の第3号木簡があげられる。これは『8世紀を下らない。7世紀後半と推定』され、同木簡に記されている年季が「辛巳」と解されれば681年とされることもありうるという。従って、本遺跡出土の5号木簡は伴出した須恵器の年代観の異動などを考慮にいれ、「7世紀第3四半期」としたい。

「五十戸」を「サト」と読むか、「石部」・「磯部」を音通で表記したものと考え「イソベ」と読むか（伊場遺跡発掘調査報告書第一冊参照）は上に記される「相星」が地名と考えられることから「サト」と読むことも可能であろう。今後の検討が必要である。

6号木簡

「＜梵字＞南無大〔　　〕」　　宮川4区L95　3－1200

旧大谷川流路内の暗灰色砂混じり粘土層より出土。年代は限定できない。

上端を圭頭状に、下端を串状につくる。一文字目は梵字、間をあけ二文字目以下が書かれている。五文字目以下は不鮮明。文字の内容から平安時代末から中世の呪符木簡と考えられる。

7号木簡

「（不鮮明）　　」　　宮川4区Ⅰ　100　3－2582

旧大谷川流路内より出土。年代は限定できない。上端を尖らしており、下端は欠損している。上端に墨痕がみられるが判読できない。

8号木簡

「□永二年」　　宮川4区Ⅰ　99　3－2760

旧大谷川流路内より出土。年代は限定できない。上端・下端ともに切りとられ、厚さも0.1㎝程度と薄く剥離している。削り屑とみられる。一文字目は切りとられていて判読が困難であるが、以下「永二年」と読むことができる。

9号木簡

「（不鮮明）　　」　　宮川4区Ⅰ　99　3－2835

旧大谷川流路内より出土。上部が欠損している。下端は角形に整えている。上端に墨痕がみられるが判読できない。年代は限定できない。

10号木簡

「(不鮮明)　　」　　宮川4区K98　3－2904

旧大谷川流路内より出土。年代は限定できない。上端を圭頭状に、下端を串状につくる。墨痕不鮮明で判読できない。

11号木簡

「(不鮮明)　　」　　宮川4区SR56　3－262

旧大谷川流路内SR56より出土。流路の年代は伴出の須恵器から6世紀中葉～7世紀中葉とみられるが（5号木簡参照)、木簡の年代は限定できない。

上部左に切込みが施されており、欠損しているが右側も同様と考えられる。上端は角形にととのえ、下端も同様とみられるが欠損のため明瞭ではない。墨痕不鮮明のため判読できない。

12号木簡

「仁王如カ□」　　宮川3区SR486　3－580

旧大谷川流路内SR486より出土。上端・下端ともに欠損している。上から二文字は鮮明で「仁王」と読めるが、以下は不鮮明である。「如来」ともみえるが「仁王如来」との用例があるのか不明であり、判読が困難である。

年代は出土したSR486第2層に従い平安時代末から鎌倉時代とする。

13号木簡

「南〔　〕　」　　宮川3区SR486　3－630

旧大谷川流路内SR486より出土。上端は五輪状に刻む。下端は欠損している。上に「南」とみえ、以下は墨痕が不鮮明である。年代は出土したSR486第2層に従い平安時代末から鎌倉時代とする。

14号木簡

「南〔　〕　」　　宮川3区SR486　3－655

旧大谷川流路内SR486より出土。上端を五輪状に刻む。下端は欠損している。上に「南」とみえ、以下は墨痕は不鮮明であることと、欠損のため判読ができない。年代は出土したSR486第2層に従い平安時代末から鎌倉時代とする。

15号木簡

「(不鮮明)　　」　　宮川3区SR486　3－767

旧大谷川流路内SR486より出土。上端を五輪状に刻む。下端は串状を呈している。SR486から出土した呪符木簡としては最長である。全体に墨痕が不鮮明であるため判読ができない。年代は出土したSR486第2層に従い平安時代末から鎌倉時代とする。

16号木簡

「南無カ大日〔　　〕」　　宮川3区SR486　3－768

旧大谷川流路内SR486より出土。上端を五輪状に刻む。下端は欠損している。二文字目は不鮮明で

あるが6号・17号木簡の例から「無」あるいは「无」と考えられる。以下「大日」と読むことができ、これ以下は欠損のため不明である。年代は出土したＳＲ486第2層に従い平安時代末から鎌倉時代とする。

17号木簡

「＜梵字＞南無大日如カ来カ」　　宮川3区ＳＲ487　3－758

旧大谷川流路内ＳＲ487より出土。

上端を圭頭状に、不端は欠損のため不明。下部が斜めに削りとられている。一文字目は梵字、二文字目以下五文字目までは鮮明であるが六・七文字目は削りとられているため文字が一部欠損しているが「如来」と考えてよいと思われる。6・16号木簡を判読する資料となろう。年代は出土したＳＲ487に従い中世とする。

18号木簡

「□□〔　　〕」「（不鮮明）」　　宮川6区ＳＲ312　3－695

旧大谷川流路内ＳＲ312より出土。上端に左右に切込みをいれる。下端が欠損しているが、欠損部分は大きなものではないと考えられる。上端の切込み部分をはさんで上下に二文字がみえるが判読できない。以下は墨痕が不鮮明である。年代はＳＲ312が古墳時代後期から平安時代とされるが、18号木簡については平安時代より時代が遡る可能性もある。

19号木簡

「□　　」　　西大谷4区Ｒ21　2－1449

旧大谷川内より出土。上端を圭頭状につくる。下端は角形に整える。上端に文字とみられる墨痕がみえるが判読が困難である。時代は限定できない。

絵馬

表）「（人物と馬の絵）いろ□」「下」

裏）「古能へ見てハ」「□くハ人能心を」「□□かゝて□」
（ん）

宮川6区ＳＲ321　3－227

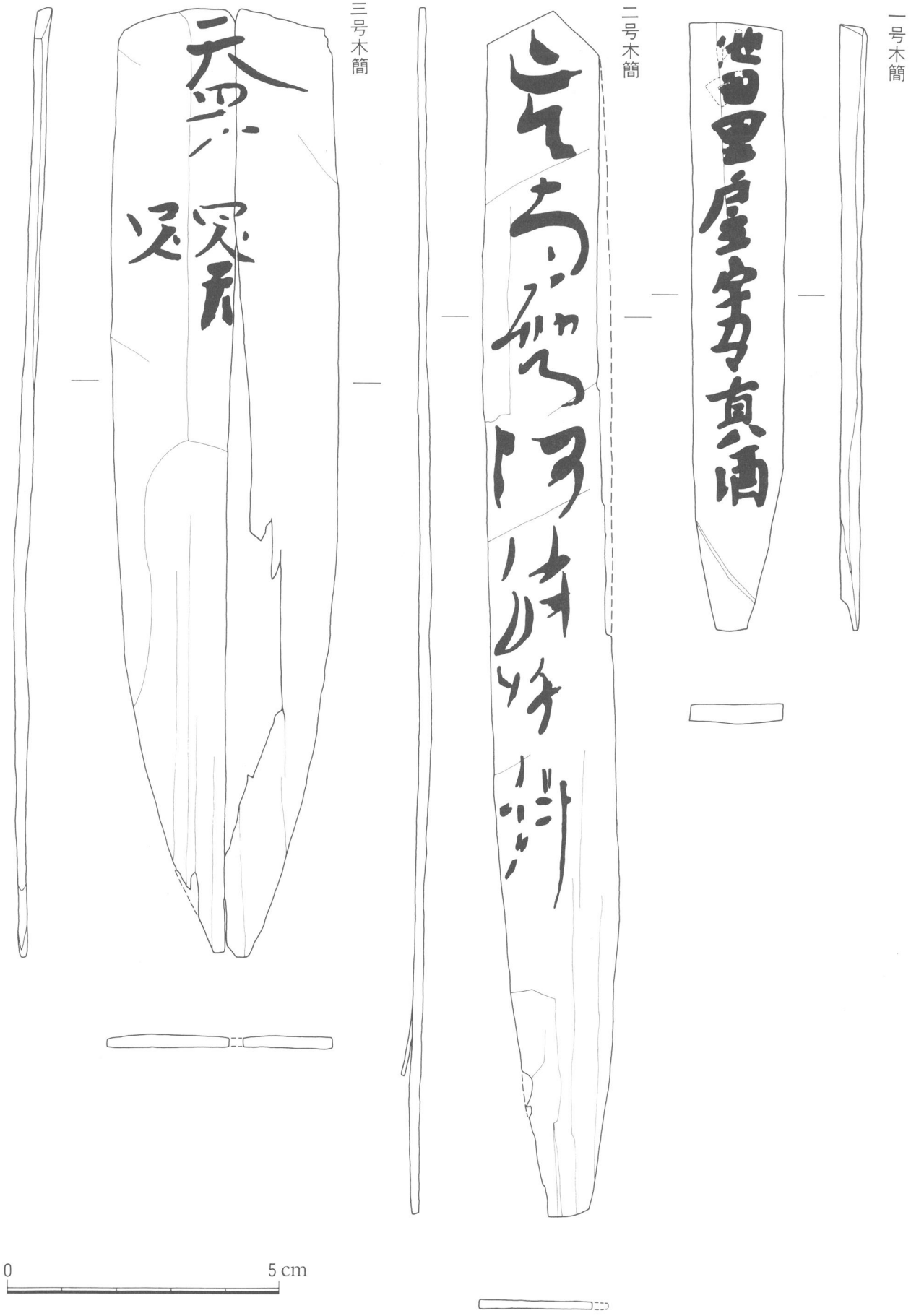
上部を弧形に削り、下部を角形に整えている。上部中央に穿穴をあけている。また右三分の一ほどの部分に上・下に切込みを施す。

時期についてはＳＲ321が平安時代中期から鎌倉時代であること、人物が馬を引く図をもつ絵馬が描かれている当麻寺の絵馬が鎌倉時代と推定せられていること、こうした図の絵馬が平安時代まで遡ることは考えられないこと（「絵馬」岩井宏実・法政大学出版局1974）などから、ＳＲ321の後半にあたる鎌倉時代と考えてよかろう。

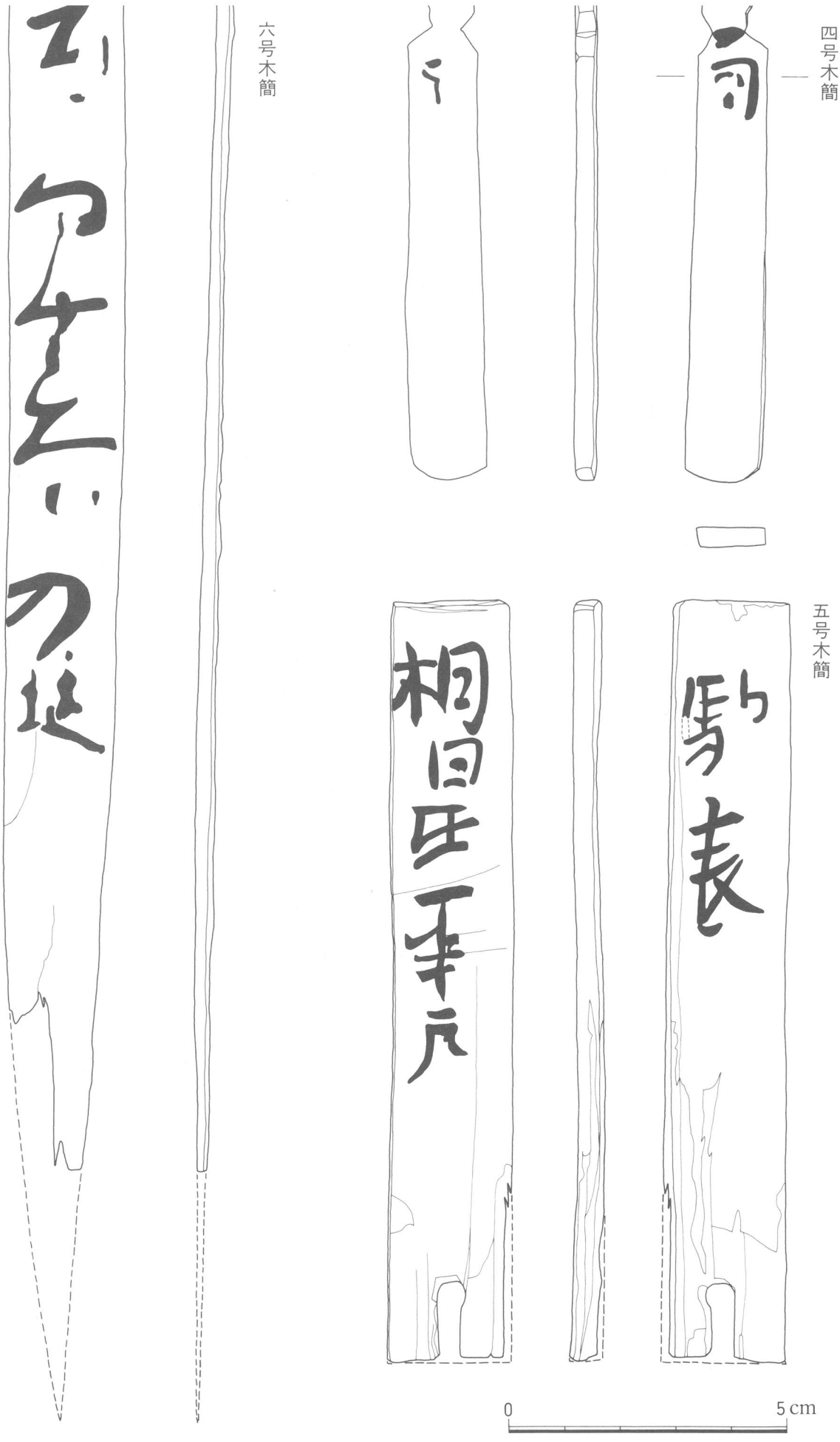
表に左に向かって人物（僧カ）が馬の手綱を引く絵が描かれている。馬の尻より右部分に「いろ□」と記す。三字目は欠損していて判読ができない。その右に「下」の文字が読取れる。絵の馬の脚部がとぎれていることと考え合わせて絵馬の下部が欠損しているともみられるが、右三分の一部分と切込みと矛盾する。先に絵・文字を描いて後に形を整えたのかもしれない。

裏には三行の文字がみられる。一行目は「古能へ見てハ」とあり、表の絵と関係がある一文であるこ

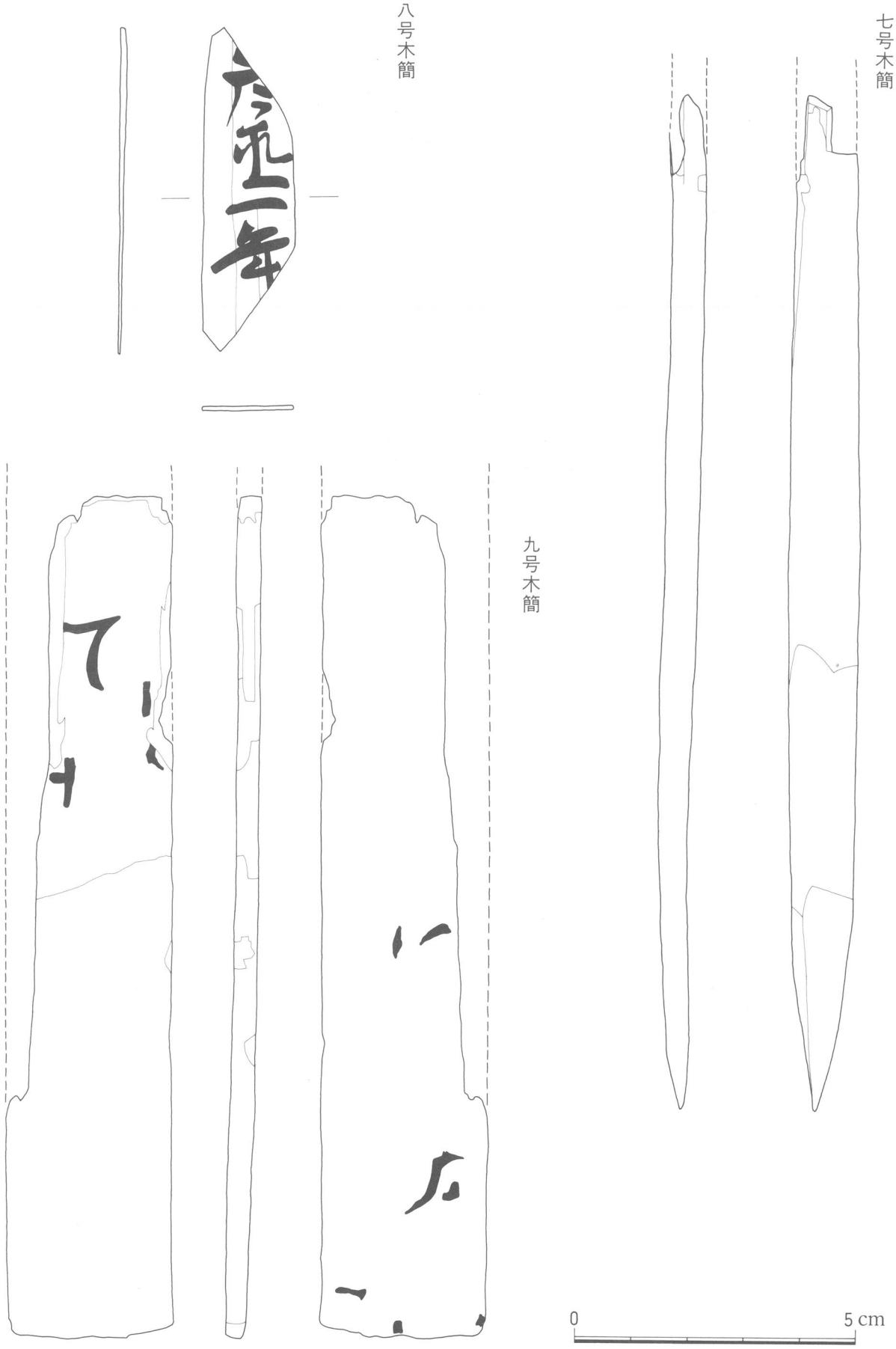
とを示唆しているとみられる。この時期には「え・ゑ・へ」の区別が判然と区別されないことを考えあわせると「絵」を「へ」と表記したと理解することができよう。二行目の最初の文字が不明瞭で、以下「くハ人能心を」と続く。また「人」を仮名の「ん」と理解することもできよう。三行目も始め部分が一部欠損しており、二文字ほど不明瞭である。つづいて「かゝて」とあり、最後の一文字が欠損のため判読困難である。「かゝで」は「書かで」の意であろうか。したがって『「この絵見ては」「引カくカは人の心を」(あるいは「□くはんの心を」)「□□書かで」』とまとめられようが、文意は不明な点が多い。



第74図　木簡実測図1（1／1）



第75図　木簡実測図 2（1／1）



第76図　木簡実測図 3（1／1）

第77図　木簡実測図 4（1／1）

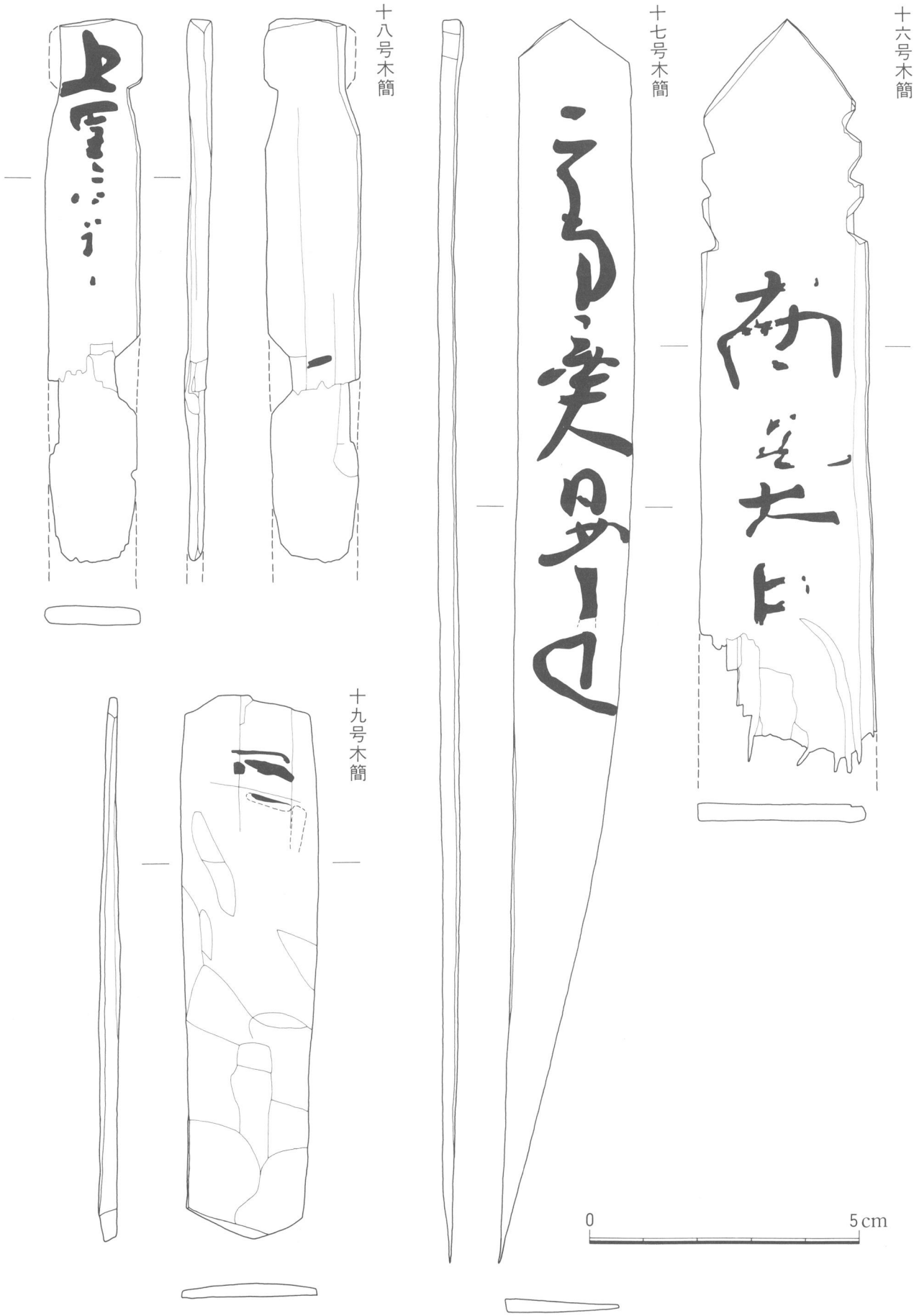
十二号木簡

十三号木簡

十四号木簡

十五号木簡

第78図　木簡実測図 5（1／1）(15号は1／2)



第79図　木簡実測図 6（1／1）

第80図　絵馬実測図（1／1）

2. 墨書土器（第81図～第89図）

1）墨書土器の出土状況

神明原・元宮川遺跡では109点の墨書土器と、1点のヘラ書き土器が確認されている。この内、水上1区ＳＥ192より出土した3点、宮川3区ＳＤ181・182より出土した各々1点の墨書土器以外はいずれも旧大谷川流路内より出土したものである。

これらの墨書土器を出土地点別にみると、宮川3・4区での出土が83点と大半を占め、宮川5・6区を加えると101点と全体の9割以上を占めている。器種別にみても宮川5区に灰釉陶器、6区奈良時代の須恵器から灰釉陶器が大半をしめ、宮川2・3・4区は灰釉陶器折戸53号窯式併行期以降から山茶碗に至るものが81点のうち54点と大半を占めている。なかでも宮川4区からは奈良時代の須恵器から灰釉陶器、山茶碗とかなりの時代幅をもち、しかもＳＲ53からＳＲ55の3流路にほぼ区分された形で出土している。

また、宮川3区ＳＲ486では5点の木簡と多量の箸状斎串とともに41点の墨書土器と1点の箆書き土器が出土している。年代的にも平安時代末から中世初頭にほぼ限定されている。

宮川地区の下流にあたる水上・西大谷地区の旧河道から出土した墨書土器はわずかに9点と、全体の10％に満たない点数である。山茶碗の出土はみられず奈良時代から平安時代の墨書土器数点をみる。調査区全体の墨書土器の分布をみると上流の宮川5・6区に奈良時代から平安時代、中流部の宮川3・4区に平安時代から鎌倉時代、やや間をおいた水上7区から西大谷1・2区にかけて奈良時代から平安時代のものが散布している。なかでも宮川3・4区の集中度は他地区と比べて群をぬいている。

地区	遺構番号	奈良～平安初 須恵器	奈良～平安初 土師器	平安時代 灰釉陶器	平安時代 須恵器	平安時代 土師器	平安末～鎌倉 山茶苑	その他 須恵器	その他 土師器	計	合計
宮川5区	ＳＲ201		2	3						5	5
宮川6区	ＳＲ312	2		1						3	
	ＳＲ314	2								2	
	ＳＲ315				1					1	
	ＳＲ316		1							1	
	ＳＲ320			2						2	
	旧河道内	1				1	1			3	12
宮川2区	旧河道内						1			1	1
宮川2区	ＳＲ486	1		4	1		38	※1		45	
	ＳＲ487				1		4			5	
	ＳＤ181						1			1	
	ＳＤ182						1			1	52
宮川4区	ＳＲ53			1			7			8	
	ＳＲ54		1	2	2					9	
	ＳＲ55	1			1	1	1			4	
	ＳＲ56	1								1	
	旧河道内	1	3		2		2		1	9	31
水上1区	ＳＥ192			3						3	3
水上7区	ＳＲ813				1					1	1
西大谷地区	旧河道内				1					5	5
合計		11	7	21	10	2	57		2	110	110

※は器種不明・ヘラ書き

2）墨書部位

墨書の部位については、坏・碗・皿類のうち外底部に墨書されたものが93点と８割を越え、つづいて外体部が８点、内底部はヘラ書き１点を含め５点にとどまる。また、内底部・外底部・外体部に同一文字がそれぞれ墨書されたもの、体部内・外面に墨書されたもの、内・外底部に墨書されたものがそれぞれ１点ずつ確認された。

墨書部位別一覧

時代	器種 部位	外底	内底	外体部	蓋内面	蓋外面	その他	合計
奈良	須恵器 坏	8						8
	坏蓋				2	1		3
平安初	土師器 坏	7						7
	小計	15			2	1		18
								16.4％
平安	土師器坏	3	1	4			2	10
	須恵器坏	2						2
	灰釉坏碗	12	2	2			1	17
	皿	3						3
	小瓶	1						1
	小計	21	3	6			3	33
								30.0％
平安末	山茶碗	36		1			1	38
	小碗・小皿	18						19
鎌倉	小計	52	1	1			1	57
								51.8％
時期	土師器坏			1				1
不明	その他		※1					※1
	小計	6	※1				1	2
								1.8％
合計		90	3	9	2	1	4	110
		※1						
		81.8％	3.6％	8.2％	1.8％	0.9％	3.6％	100％

※はヘラ書き

3）墨書内容

奈良時代から平安時代初期にかけての須恵器・土師器に書かれた文字はいずれも楷書ないし行書とみられ、3801をのぞいては比較的解読が容易である。「□□長」「多麻呂」「田人」「信孝」「大成」「□千」などの２ないし３文字の墨書が多いのも特徴の一つといえるであろう。

灰釉陶器を中心とする平安時代にはいると記号的な「 」のほか「 」「」「 」などの字体不明の文字があらわれ、さらに水上１区ＳＥ192出土の「 」「」「 」などがみられる。これらは２文字が結合され一文字化したものと考えてよかろう。こうした文字の記号化の傾向は本遺跡出土の墨書土器に限れば黒笹90号窯式併行期ころから始まり、折戸53号窯式併行期以後顕著となるとみられる。

平安時代から鎌倉時代とみられる山茶碗になると、文字の記号化傾向は一層強まる。「」「」

「あ」「ス」「ヘ」 など文字か記号か判断し難いものも含めて、「も」「ヤ」「ヨ」「⊗」「∠」 など、その数は急に増加してくる。一方では 645 、 911 、 2592 ― 1 などのように草書的な書体もみられるが、記号的なものが大半を占める。

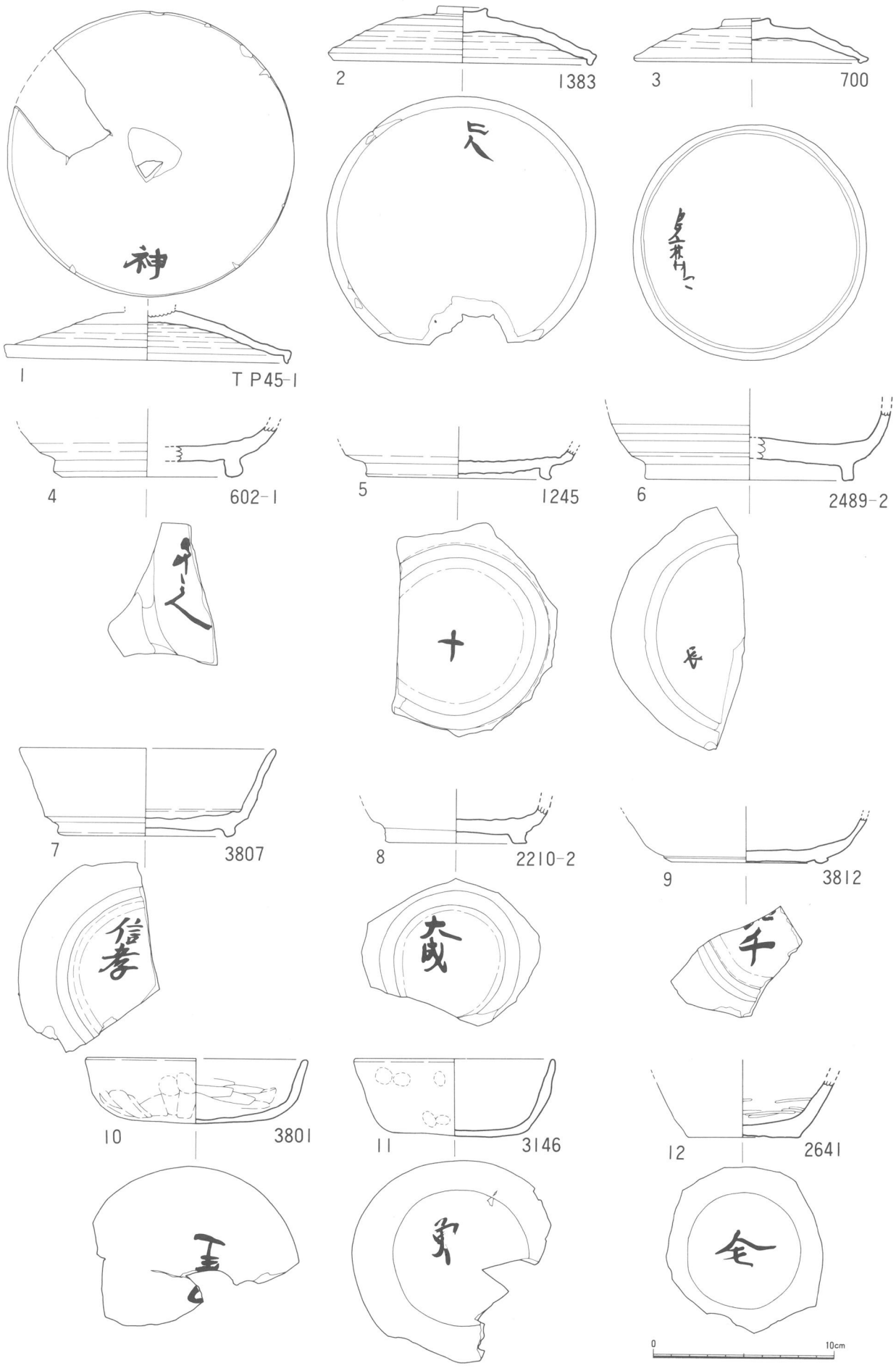
また「大」は宮川 3 ・ 4 区より 9 点、「も」 は 8 点、「小光」が 2 点（ 3 点カ）、加えて「みやいめ」が 4 点認められており、山茶碗の土器編年と考えあわせてみることのできる資料の一つとなろう。

墨書土器一覧表

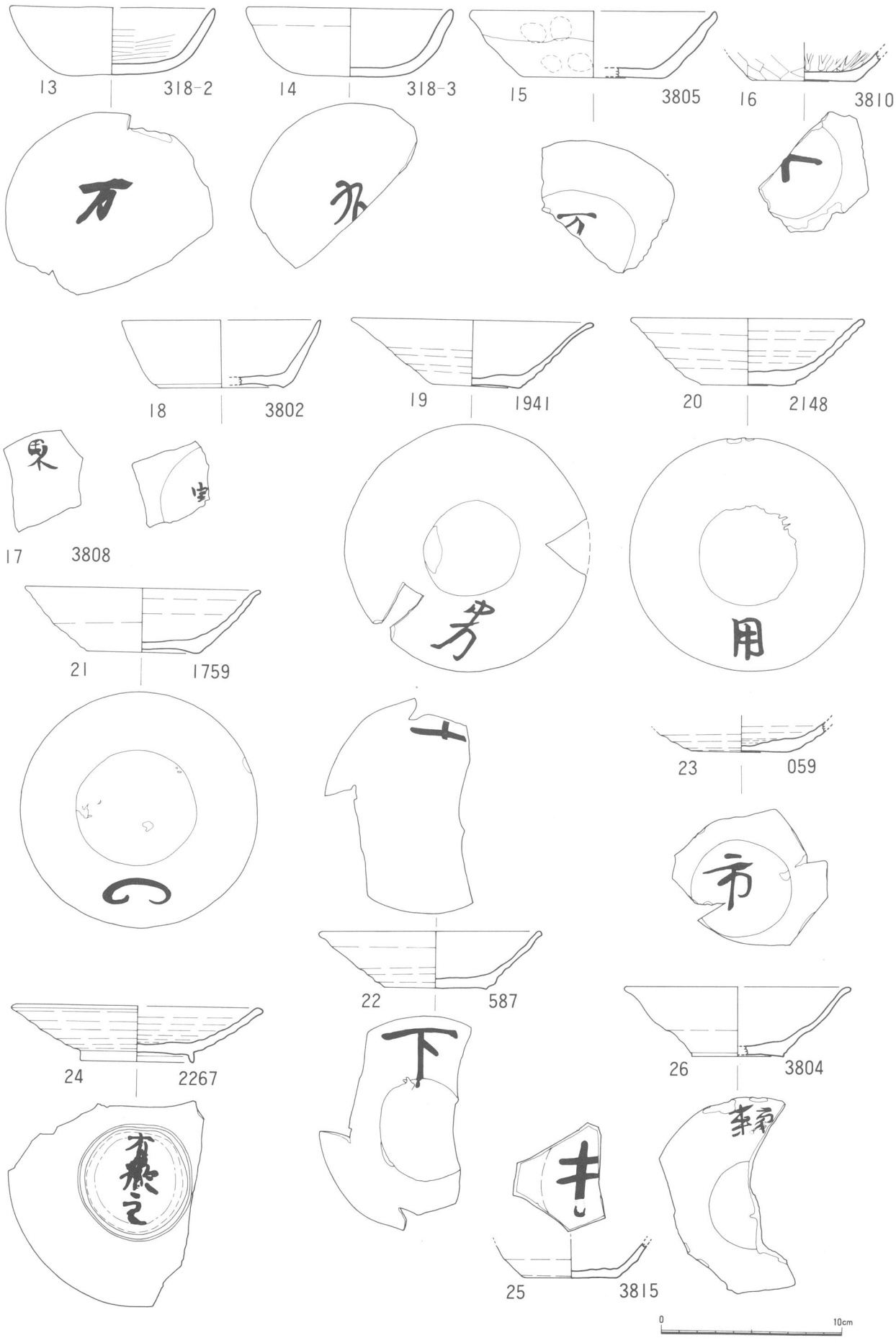
図版No.	区	グリッド	遺構	年代観	遺物番号	器種	墨書部位	釈文
1	宮川6区	F103	SR312		TP45－1	須恵坏蓋	外面	神
2	西大谷	—	旧河道内		1383	須恵坏蓋	内面	田人
3	宮川4区	O94	SR56		700	須恵坏蓋	内面	多麻呂
4	宮川6区	G103	旧河道内		602－1	須恵坏	外底部	
5	西大谷	E43	旧河道内		1245	須恵坏	外底部	十
6	宮川6区	E104	SR314		2489－2	須恵坏	外底部	□□長
7	宮川4区	O94	SR55		3807	須恵坏	外底部	信孝
8	宮川6区	F104	SR314		2210－2	須恵坏	外底部	大成
9	宮川4区	J98	旧河道内		3812	須恵坏	外底部	□千
10	宮川4区	N93	SR54		3801	土師坏	内面	□
11	宮川4区	J99	旧河道内		3146	土師坏	外底部	□
12	宮川6区	C107	SR316		2641	土師	外底部	舎
13	宮川5区	A108	SR201		318－2	土師坏	外底部	万
14	宮川5区	A108	SR201		318－3	土師坏	外底部	九
15	宮川4区	K96	旧河道内		3805	土師坏	外底部	万
16	宮川4区	J98	旧河道内		3810	土師坏	外底部	十ヵ
17	宮川4区	J99	旧河道内		3808	土師坏	体部外面	□
18	宮川4区	O93	SR55		3802	土師坏	外底部	□
19	宮川4区	N93	SR54		333・1941	須恵坏	体部外面	中万
20	宮川6区	C107	SR315		2148	須恵坏	体部外面	用
21	水上7区	—	SR813		1759	須恵坏	体部外面	
22	宮川3区	K94	SR486		587	須恵坏	体部外面	下
							体部内面	□
23	宮川3区	L93	SR487		059	須恵坏	外底部	市
24	西大谷	D44	旧河道内		2267	須恵皿	外底部	有於主
25	宮川4区	J99	旧河道内		3815	須恵坏	内底部	□
26	宮川4区	O93	SR54		3804	須恵坏	体部外面	□
27	宮川4区	J99	旧河道内		3809	須恵坏	外・内底部	□・□
28	宮川4区	O93	SR55		3814	土師坏	外底部	割符ヵ
29	宮川6区	E104	旧河道内		2539	土師皿	外底部	万ヵ
30	西大谷	D44	旧河道内		2266	灰釉皿	外底部	廿
31	宮川4区	N93	SR54		823	灰釉碗	外底部	水
32	宮川6区	F103	SR312		2296－1	灰釉碗	外底部	□□
33	宮川4区	O93	SR54		772	灰釉碗	外底部	□
34	宮川3区	J95	SR486		2322	灰釉碗	外底部	□
35	宮川5区	B108－109	SR201		29	灰釉皿	内底部	正
36	宮川6区	D105	SR320		808－1	灰釉碗	外底部	□
37	宮川5区	A108	SR201		184	灰釉碗	内底外底外体部	仁
38	宮川4区	O92	SR53		297	灰釉碗	外底部	□
39	宮川3区	K94	SR486		042	灰釉碗	底部内面	□

図版No.	区	グリッド	遺　構	年代観	遺物番号	器　種	墨書部位	釈　文
40	水上1区	L 59	S E 192		2－607－2	灰釉碗	体部外面	集
41	水上1区	L 59	S E 192		2－609－1	灰釉碗	外底部	風
42	水上1区	L 59	S E 192		2－624－2	灰釉碗	底部内面	架
43	宮川6区		S R 320		931－1	灰釉碗	外底部	午カ
44	宮川3区	K 94	S R 486		574	灰釉碗	外底部	□
45	宮川4区	O 93	S R 54		3803	灰釉碗	外底部	□
46	宮川3区	K 94	S R 486		2001	灰釉碗	外底部	吉カ
47	宮川3区	J 95	S R 486		2355	灰釉碗	体部外面	□
48	宮川4区	N 93	S R 54		3813	灰釉碗	体部外面	□
49	宮川3区	K 94	S R 486		645	山茶碗	外底部	内□□
50	宮川3区	M 90	S D 182		911	山茶碗	外底部	□
51	宮川3区	J 94	S R 486		449	山茶小皿	外底部	□
52	宮川4区	I 99	旧河道内		4101	山茶碗	外底部	古
53	宮川3区	J 94	S R 486		558	山茶碗	外底部	みやいめ
54	宮川3区	J 94	S R 486		462	山茶碗	外底部	みやいめ
55	宮川3区	K 93	S R 486		443	山茶碗	外底部	みやいめ
56	宮川4区	O 93	S R 53		450	山茶碗	外底部	みやいめ
57	宮川3区	J 95	S R 486		638	山茶碗	外底部	□□
58	宮川3区	K 94	S R 486		2002	山茶碗	外底部	□
59	宮川6区	D 107	旧河道内		2592－1	山茶碗	外底部	□
60	宮川3区	K 94	S R 486		584	山茶碗	外底部	大
61	宮川3区	J 94	S R 486		776	山茶碗	外底部	大
62	宮川2区	I 101	旧河道内		425	山茶碗	外底部	大
63	宮川4区	O 93	S R 55		415	山茶碗	外底部	大
64	宮川4区	O 92	S R 53		402	山茶碗	外底部	大
65	宮川3区	J 95	S R 486		534	山茶小碗	外底部	大
66	宮川3区	J 94	S R 486		2717	山茶碗	外底部	大
67	宮川3区	K 94	S R 486		453	山茶小碗	外底部	大
68	宮川3区	K 93	S R 486		459	山茶小皿	外底部	大
69	宮川3区	J 94	S R 486		473	山茶小碗	外底部	大
70	宮川3区	J 94	S R 486		470	山茶小皿	外底部	大
71	宮川3区	K 94	S R 486		433	山茶小皿	外底部	大
72	宮川3区	K 94	S R 486		582	山茶小碗	外底部	小
73	宮川3区	J 95	S R 486		757	山茶小碗	外底部	小
74	宮川3区	K 94	S R 486		1970	山茶小碗	外底部	小
75	宮川4区	O 93	S R 53		299	山茶小碗	外底部	
76	宮川3区	J 95	S R 486		535	山茶碗	外底部	
77	宮川4区	I 99	旧河道内		3475	山茶碗	外底部	
78	宮川3区	J 94	S R 486		637	山茶碗	外底部	
79	宮川4区	O 93	S R 53		363	山茶小皿	外底部	
80	宮川3区	K 94	S R 486		631	山茶小皿	外底部	
81	宮川4区	O 92	S R 53		3806	山茶碗	外底部	

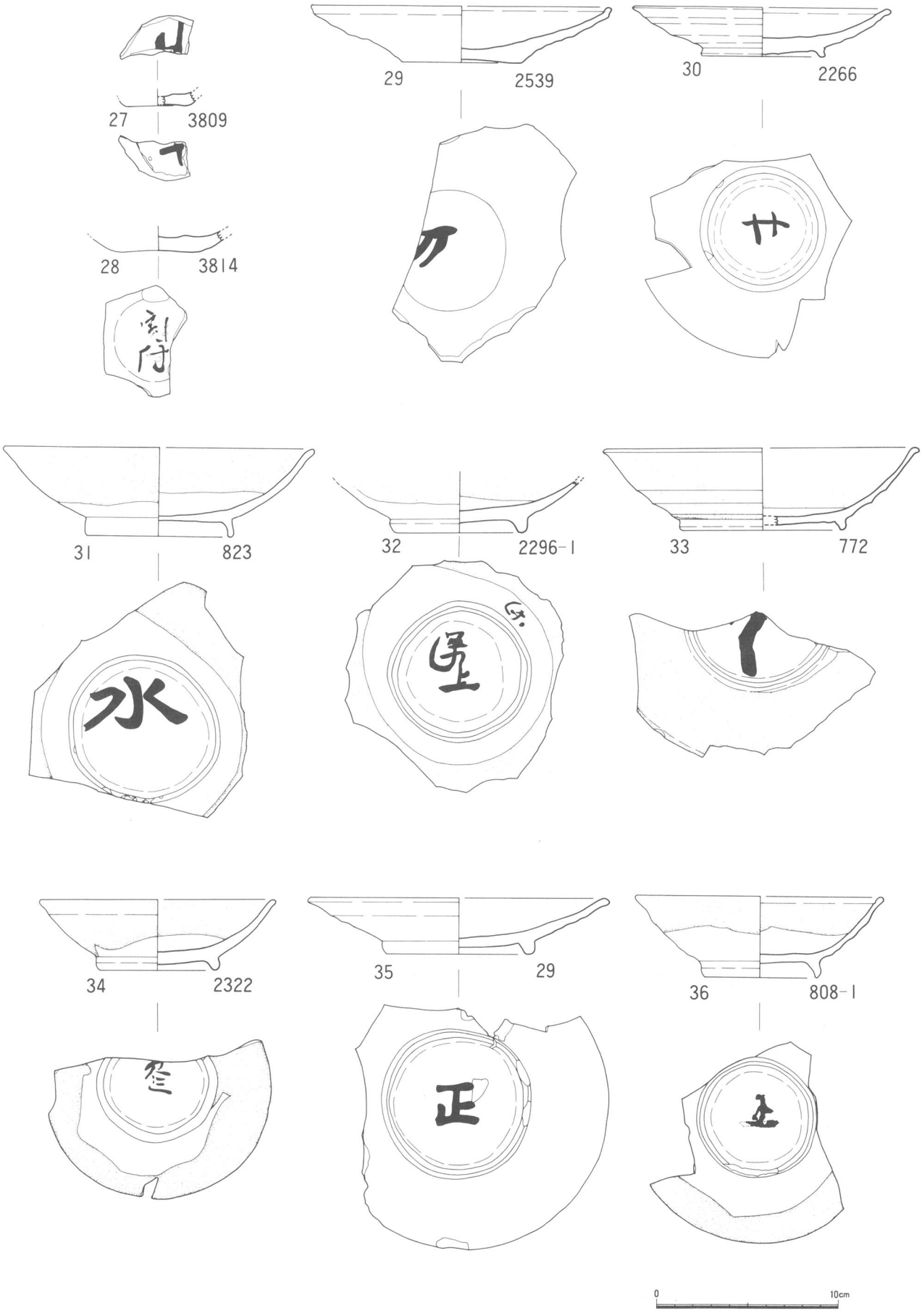
図版No.	区	グリッド	遺　構	年代観	遺物番号	器　種	墨書部位	釈　文
82	西大谷4	Q 23	旧河道内		2113	山茶碗	体部外面	㋣
83	宮川3区	M 93	S R 487		778	山茶小皿	外底部	
84	宮川3区	K 94	S R 486		579	山茶碗	外底部	
85	宮川3区	K 94	S R 486		552	山茶碗	外底部	㋣
86	宮川3区	K 94	S R 486		593	山茶碗	外底部	㋣
87	宮川4区	O 93	S R 53		471	山茶碗	外底部	㋣
88	宮川3区	J 94	S R 486		775	山茶碗	外底部	㋣
89	宮川3区	J 94	S R 486		960	山茶碗	外底部	㋣
90	宮川3区	J 94	S R 486		866	山茶小皿	外底部	㋣
91	宮川3区	J 94	S R 486		517	山茶小皿	外底部	㋣
92	宮川3区	K 94	S R 486		471	山茶小皿	外底部	㋣
93	宮川3区	M 91	S R 487		865	山茶碗	外底部	
94	宮川4区	O 93	S R 53		454	山茶碗	外底部	
95	宮川3区	N 90	S D 181		2676	山茶碗	外底部	
96	宮川3区	L 92	S R 487		887	山茶碗	外底部	
97	宮川3区	J 94	S R 486		772	山茶小碗	外底部	
98	宮川5区	B 108	S R 201		119	灰釉手付小瓶	外底部	
99	宮川3区	J 95			2326	灰釉碗	外底部	
100	宮川3区	J 94	S R 486		754	須恵坏	外底部	
101	宮川4区	O 93	S R 54		773	灰釉皿	外底部	
102	宮川6区	F 103	S R 312		2301	須恵坏	外底部	
103	宮川4区	O 93	S R 54		4085	山茶碗	外底部	
104	宮川3区	K 92	S R 487		700	山茶碗	外底部	
105	宮川3区	J 94	S R 486		598	山茶碗	外底部	
106	宮川3区	K 93	S R 486		455	山茶碗	外底部	
107	宮川3区	J 94	S R 486		2090	山茶碗	外底部	
108	宮川3区	K 94	S R 486		2026	山茶碗	外・内底部	
109	宮川3区	J 95	S R 486		648	山茶碗	外底部	
110	宮川3区	K 94	S R 486		626	山茶碗	外底部	
111	宮川3区	J 95	S R 486		649	山茶碗	外底部	
112	宮川3区	J 95	S R 486		2718	山茶碗	外底部・内底部	
113	宮川3区	K 94	S R 486		1953	坏	内底部ヘラ書き	寿



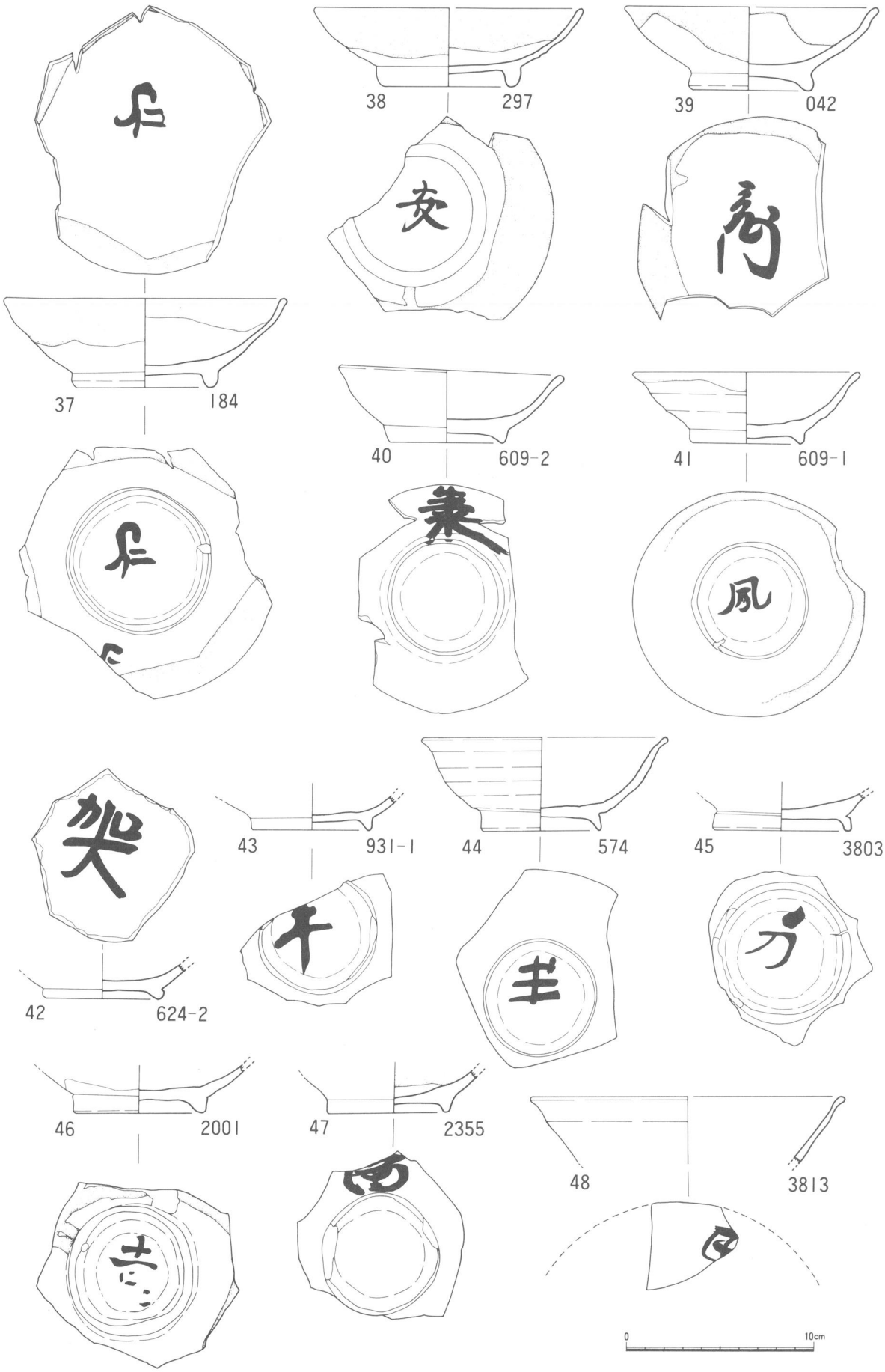
第81図　墨書土器実測図 1



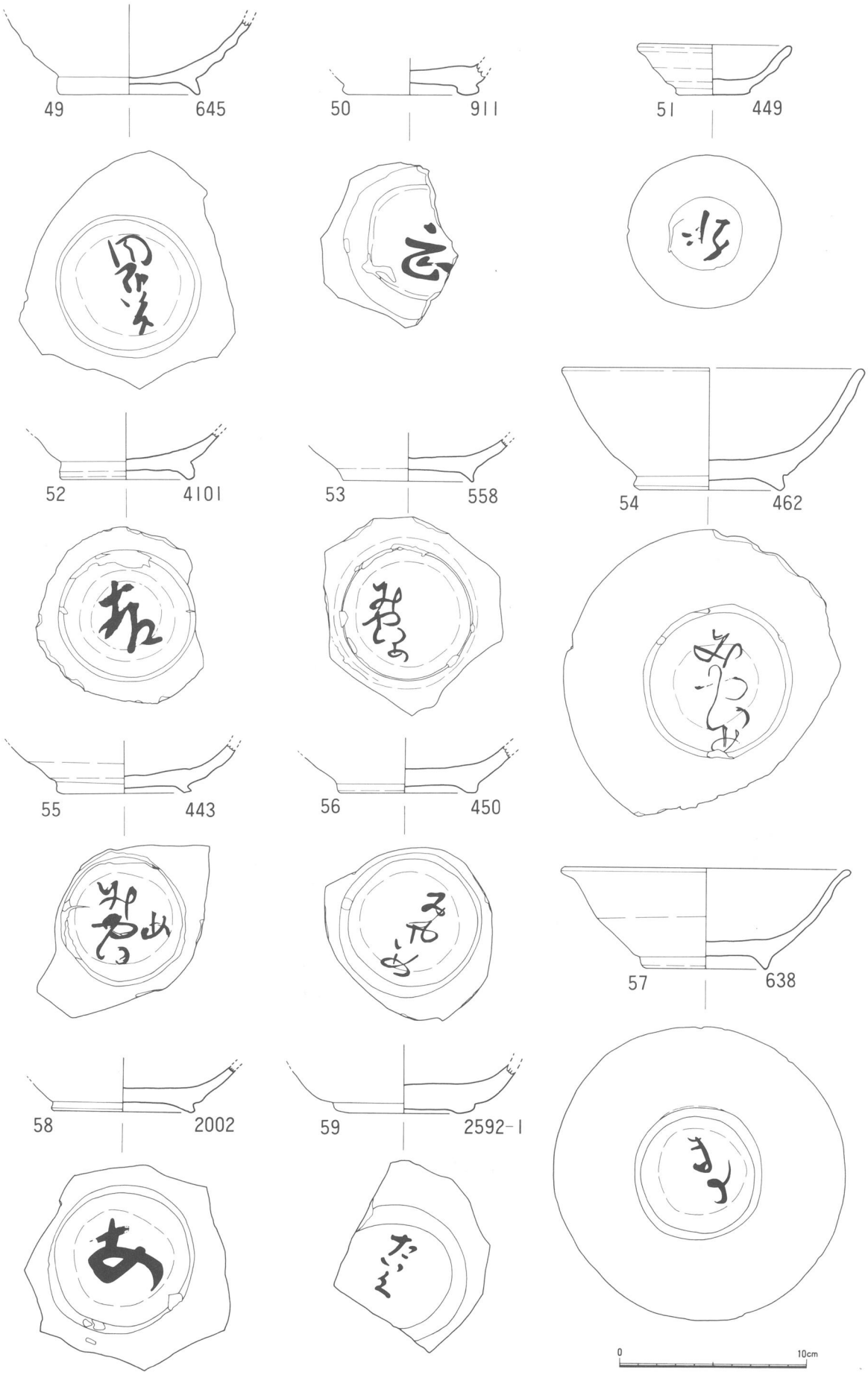
第82図　墨書土器実測図 2



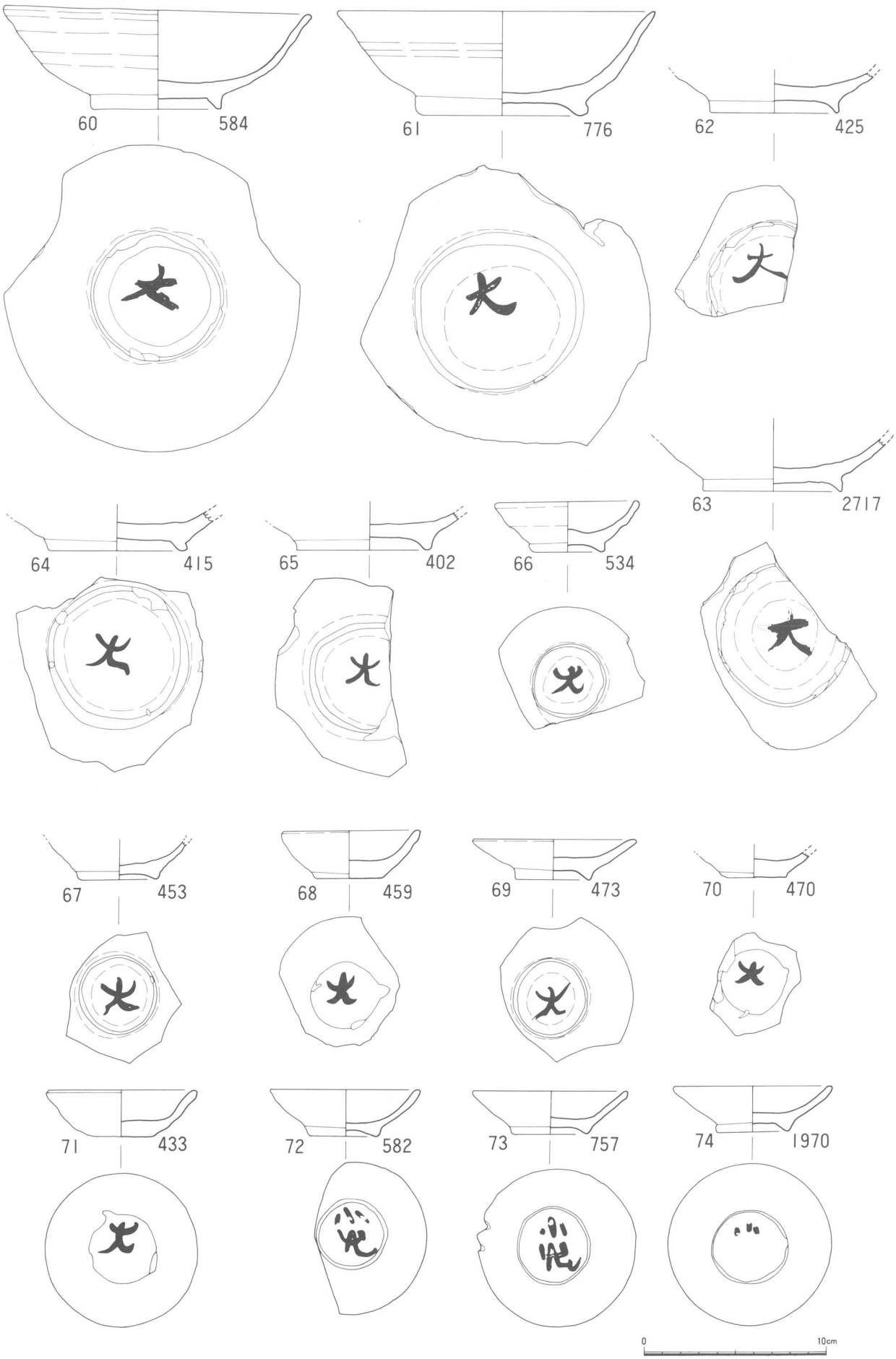
第83図　墨書土器実測図 3



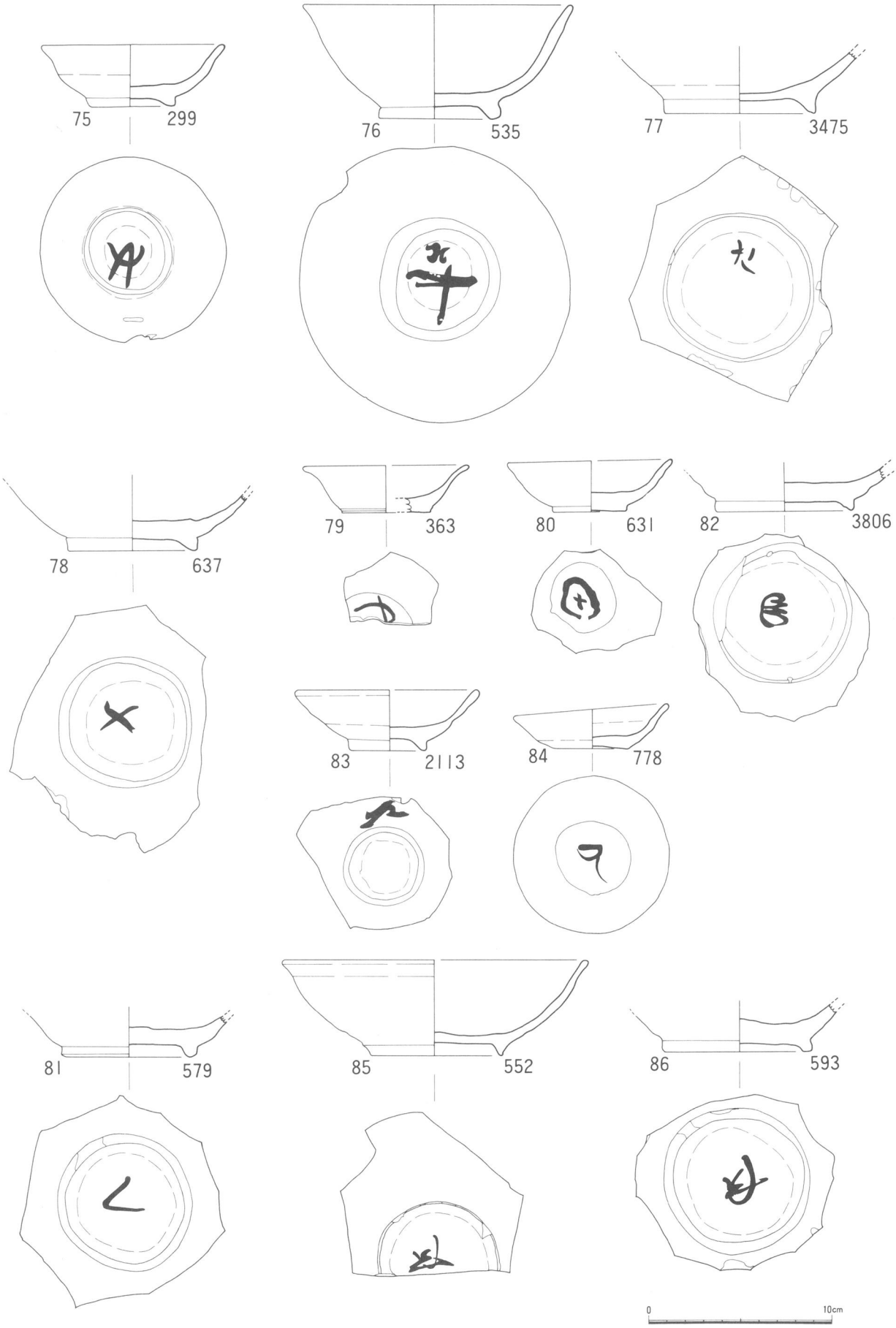
第84図　墨書土器実測図 4



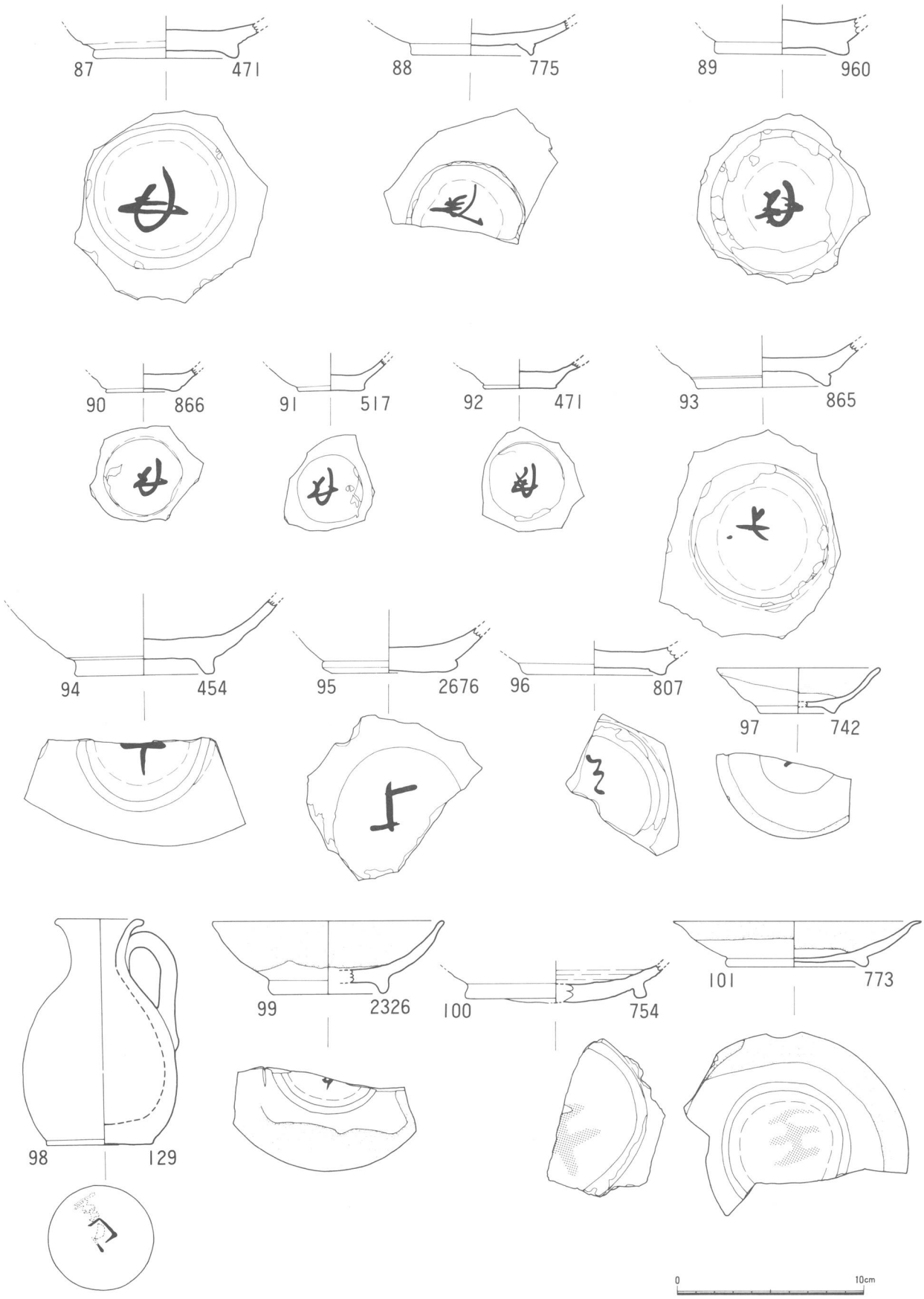
第85図　墨書土器実測図 5



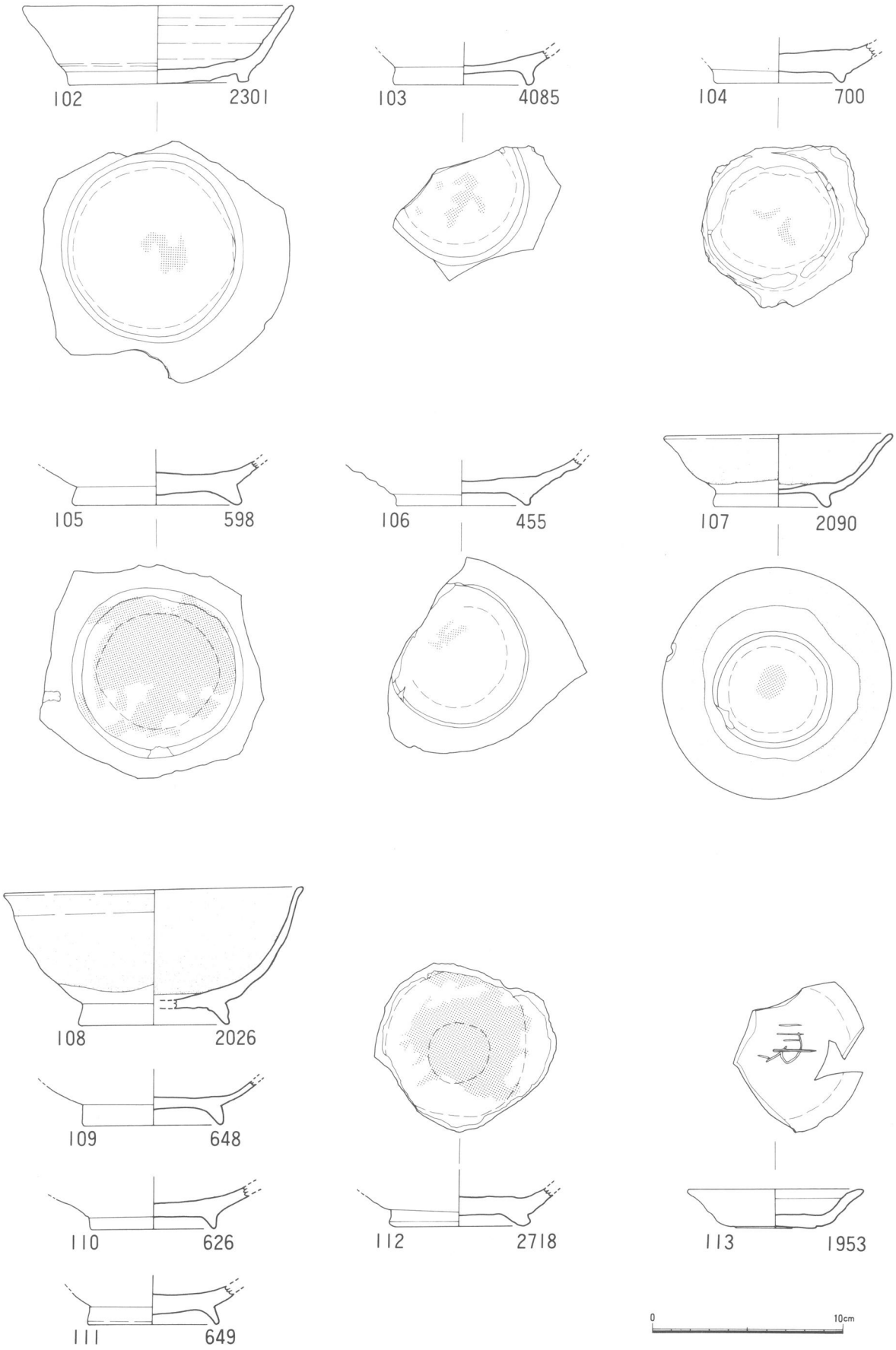
第86図　墨書土器実測図 6



第87図　墨書土器実測図7



第88図　墨書土器実測図 8



第89図　墨書土器実測図 9

第２節　祭祀関係遺物

1. 人形土製品（第90図～第92図）

107点の出土をみた人形土製品について述べたい。馬形土製品については近年発見例が多く、畿内を中心に広い分布が見られるが人形土製品は出土例が少なく、「古代の祭祀と信仰」附篇『国立歴史民俗博物館研究報告　第７集』によれば40弱の出土例しかないようである。このうち約半数例が採集あるいはそれに近いかたちの偶発的な発見であり、発掘調査により出土したまとまった資料としては三重県草山遺跡、大阪府奈良井遺跡等、きわめて少ない。

本遺跡の人形土製品はすべて旧大谷川から出土している。107点が出土したが馬形土製品や他の祭祀遺物にくらべ出土地が集中する傾向が見られ、西大谷１・２区、41列～45列で12点、水上７区で10点、宮川６区ＳＲ312で56点、宮川６区ＳＸ339で４点、宮川６区ＳＤ322で３点、宮川６区ＳＲ314で７点が出土している。これらの他は宮川４区で２点、宮川５区、宮川６区の旧大谷川から各１点が出土しているにすぎない。宮川６区ＳＲ312についてはすでに第Ⅲ章で述べたのでここでは他の地区出土の人形土製品を紹介する。

１～４は宮川６区ＳＸ339の資料である。宮川６区ＳＸ339はＳＲ312の北側に隣接する中州状の地点で、人形土製品４点・馬形土製品13点が出土している。２～４はＳＲ312のＥ類に似るが、穿孔は見られず３はやや大きめである。１は足とともに手が胴に貼付され、整形も他のものにくらべていねいである。また馬形土製品はその大半が宮川６区Ｅ類に属するものがほとんどである。ＳＸ339はＳＲ312の中州上の岸と考えられ、原位置をあまり動いていない可能性もあり人形土製品Ｅ類と馬形土製品Ｅ類との関係を知る手掛かりであると考えられる。なお伴出土器は破片が少量で年代推定は困難である。

５～７の３点は宮川６区ＳＤ322から出土した。宮川６区ＳＤ322はＳＸ339北側に隣接し、ＳＸ339が存在する中州状の地点内を東西に流れる溝状遺構で延長2.90ｍ、幅1.75ｍ、深さ0.22ｍを測る。馬形土製品５点と人形土製品３点が出土した。５は上半身のみ残存するが、宮川６区ＳＲ312Ｆ類に似る。棒状器具による刺突の２孔とヘラ状器具による切り込みを有し、目・口を表現しているものと考えられる。６は胴部が三角形に近くＳＲ312Ｅ類に似るが、やや大きめで頭端部を前側に折り曲げ４孔を有している。７はやはりＳＲ312Ｅ類に似るが、顔面の表現が２孔とヘラ状の切り込みで目・口をあらわしているのが特徴的である。これらに伴う馬形（動物形）土製品のうち３点は形態が同じで断面三角形の胴にハの字状に開く短めの四肢とやや上方に向く長めの尾を有し、顔は頭部端を正面から指頭で押圧することによりつくり出されている。これら３点は外見上、大和型土馬である平城京右京八条西一坊々間大路西側溝ＳＤ920出土の第Ⅶ型式に似る（後述）。

８～13は宮川６区ＳＲ314の資料である。宮川６区ＳＲ314はＥ103・Ｅ104・Ｅ105・Ｆ104グリッド検出された旧河道でＥ104グリッドを中心に摺鉢状を呈している。南側にＳＲ312、東側にはＳＸ339、ＳＤ322が隣接している。ＳＲ312との関係は不明であるというが、馬形土製品10点と人形土製品が７点出土している。馬形土製品のうち２点（第91図18・19）はＳＲ312のＥ類と同じであり、他の２点（16・17）はＳＲ312Ｄ類に似る。この事実はＳＲ314が隣接するＳＲ312に連続

し、ＳＸ339の中州を西岸とし、南進していた可能性を示唆している。またこれはＳＲ312・ＳＲ314・ＳＸ339・ＳＤ322に土製品が集中するという傾向にも合致している。さてＳＲ314出土の人形土製品は大きめのもの（８～11）と小さめのもの（12・13）に大別される。８は胴部を三角形につくり出し、底辺中央部に窪みをつけ両側をつまみ出し両足をつくっている。手は胴部中央側面を小さくつまみ出してつくっている。顔面は正面側に２孔、側面に２孔を有し、耳と目の表現かと思われる。正面２孔間には溝状の削り込みがみられ口の表現と思われる。８の類似例を全国に求めると、三重県草山遺跡方形台状遺構出土のＡ類のうち小型品や浜松市中津・坂上遺跡出土のＡ類に見られるが坂上遺跡のものは本遺跡のものより立体的(3)である。草山遺跡の資料は５世紀末～６世紀初頭(4)であり、また坂上遺跡の資料は６世紀前葉と推定されている。本遺跡の資料の年代を考える上で一つの参考となる。９・10は８に比べやや丸味を帯び、胴部は棒状に近く、顔面の表現はみられない。８と同じく一つの粘土塊からつくっているようであり、手はわずかながらつまみ出して表現している。全体の手法・形状は８に通じるものがある。12・13はＳＲ312Ｅ類に似る。12は胴部が三角形で、胴部中央よりやや上の両側面を２本の指により強く押圧し、断面ひし形につくり出している。おそらく手を意識しているのであろう。13は胴部径に比しやや長めの足がついている。一塊の粘土からの整形である。ＳＲ314はＳＲ312と同様伴出する土器は７世紀～平安時代までの幅があり、伴出土器から年代を推定するのは困難である。

14は宮川５区ＳＲ201出土の資料である。ＳＲ201は７世紀～12世紀までの年代幅の大きい旧河道で馬形土製品２点と人形土製品１点が出土している。14の人形土製品は宮川６区ＳＲ312第44図の５に似る。

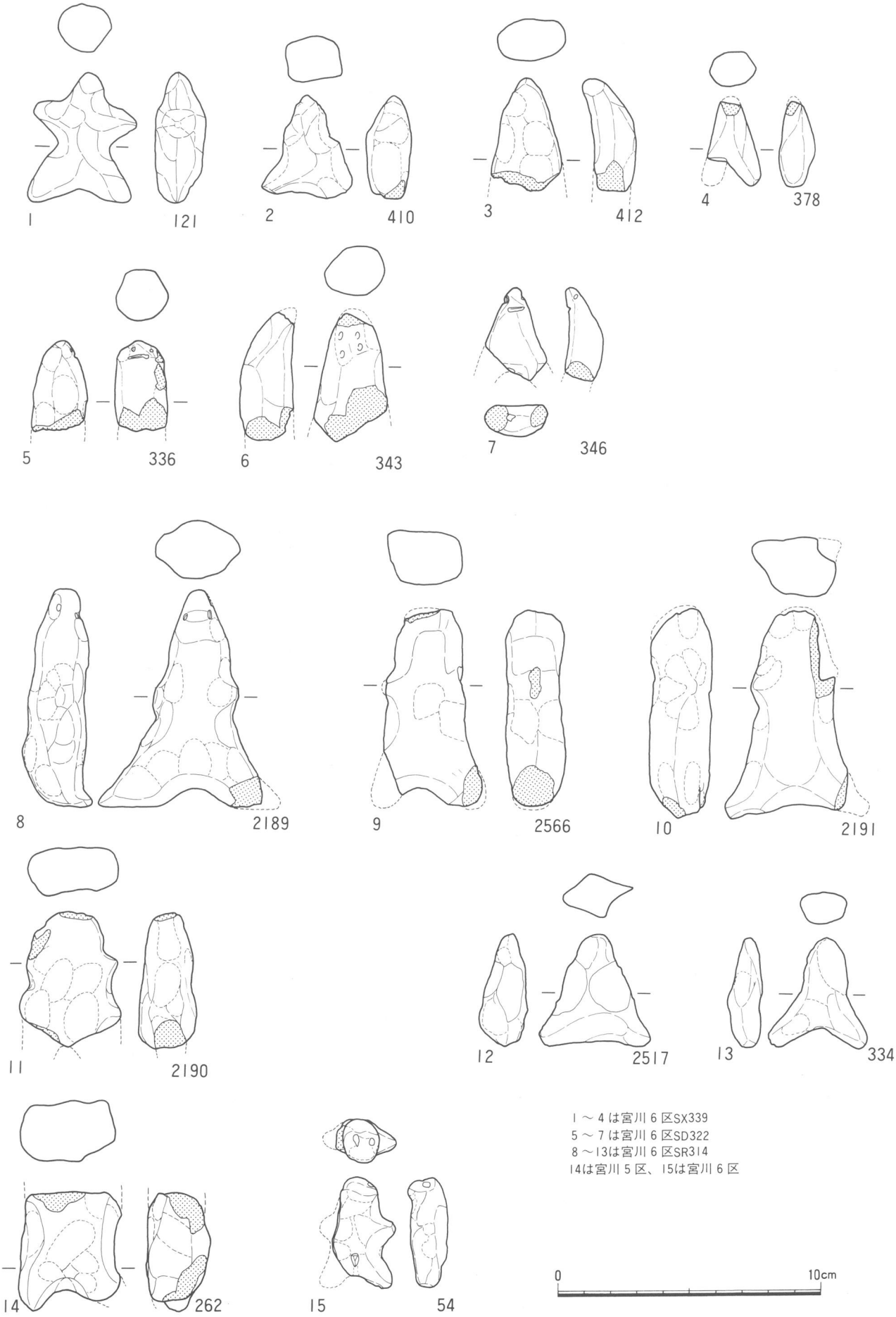
15は宮川６区ＳＲ312西端の岸部分から出土しており、広い意味でＳＲ312に含めてもよいかもしれない。小型で一つの粘土塊から、手・足をつくり出している。頭部上端に２孔を有し目の表現とみられ、股間やや上方にある１孔は女性器と考えられる。孔はいずれも棒状器具の刺突による。15の類似例は水上７区にあり、こちらの資料は動物形土製品とともに出土している（後述）。

第89図は水上７区の資料である。16～19は水上７区ＳＸ802から出土している。ＳＸ802は175グリッドで検出された遺物集中部で土製品９点が出土した。このうち４点（16～19）は形状が推定できるが、他は土製品の破片と推定できるもの５点（形状はわからず）であった。この他に粘土のかけら11点が検出された。16はほぼ完形品で胴部にくらべ太めの足・短かめの手を有する。顔面は正面から棒状器具による刺突が２孔あり、側面上端にも左右両側に２孔ずつ棒状器具による刺突がみられる。６孔はそれぞれ耳・目・鼻の表現と考えられ、正面の２孔の下にはヘラ状器具による横方向の溝状の削り込みがみられ、口の表現と考えられる。股間には前面に縦方向のヘラ状器具による削り込みが幅１㎜長さ1.3㎝ほどにわたってみられ女性器の表現と考えられ、背面には尻穴と考えられる棒状器具による刺突もある。全体は一つの粘土塊からつくり出されているようにもみえるが上半身と下半身の厚さに差が見られ別々につくって接合している可能性もある。17は上半身のみ存在していた。手は16にくらべ長めで別につくって胴部に貼付しているようである。顔面は正面に棒状器具の刺突による２孔があり、右側面には斜め上方から刺突された２孔が正面の１孔と合わせ、等間隔で存在する。一方左側面は正面の孔とは0.9㎝の距離をおいて連続して２孔がある。左右対称とはなっていないものの耳・目・鼻の表現と考えられる。

19もやはり上半身のみであり顔面の表現がみられない。胴部は棒状で手は胴部に貼付しているようである。18も上半身だけである。『大谷川Ⅱ』によると報告者はこれを馬形土製品としているが、ここでは次の理由により人形土製品である可能性が高いことを指摘しておきたい。(1)馬形（動物形）土製品とする一つの目安となる胴部と垂直方向をなす脚が存在せず、貼付痕も認められない（胴部が棒状で頭部が胴部径より小さくなる宮川6区ＳＲ312・Ｃ類などは頭部に近い所に前肢が貼付される例が多い）。(2)顔面やや下方の両側面中央に粘土が円錐状に貼付されており、この位置に動物形土製品で粘土が貼付されているのは西大谷1区出土の牛形土製品（第95図86）を除けば他に例がない。(3)同遺構内に伴出する土製品に馬形（動物形）土製品と断定できる遺物はなく（18と同タイプと思われる頭部片1点あり）、むしろ他の人形土製品の形状を考えれば18に見られる胴部側面に貼付された粘土は16と同じく手と考える方が妥当である。(4)顔面にある棒状の刺突による4孔及びヘラ状器具による口の表現は孔数が少ないながら16・17と同じ手法である。これらにより18を人形土製品とする仮定が正しいとすれば、ＳＸ802は人形土製品のみの一括出土ということになる。また同遺構の北9ｍほどの同一面で、土師器坏形土器31点、同甕形土器1点、手捏土器1点とともに馬形土製品4点が出土したＳＸ801が検出されている(『大谷川Ⅱ』)。同一面のごく近い場所において人形土製品・馬形土製品がそれぞれ別々に出土したことになり興味深い。なおＳＸ802については『大谷川Ⅱ』によれば覆土の状況から7世紀後半代としているが、遺物の年代についてはなお慎重な検討を要する。

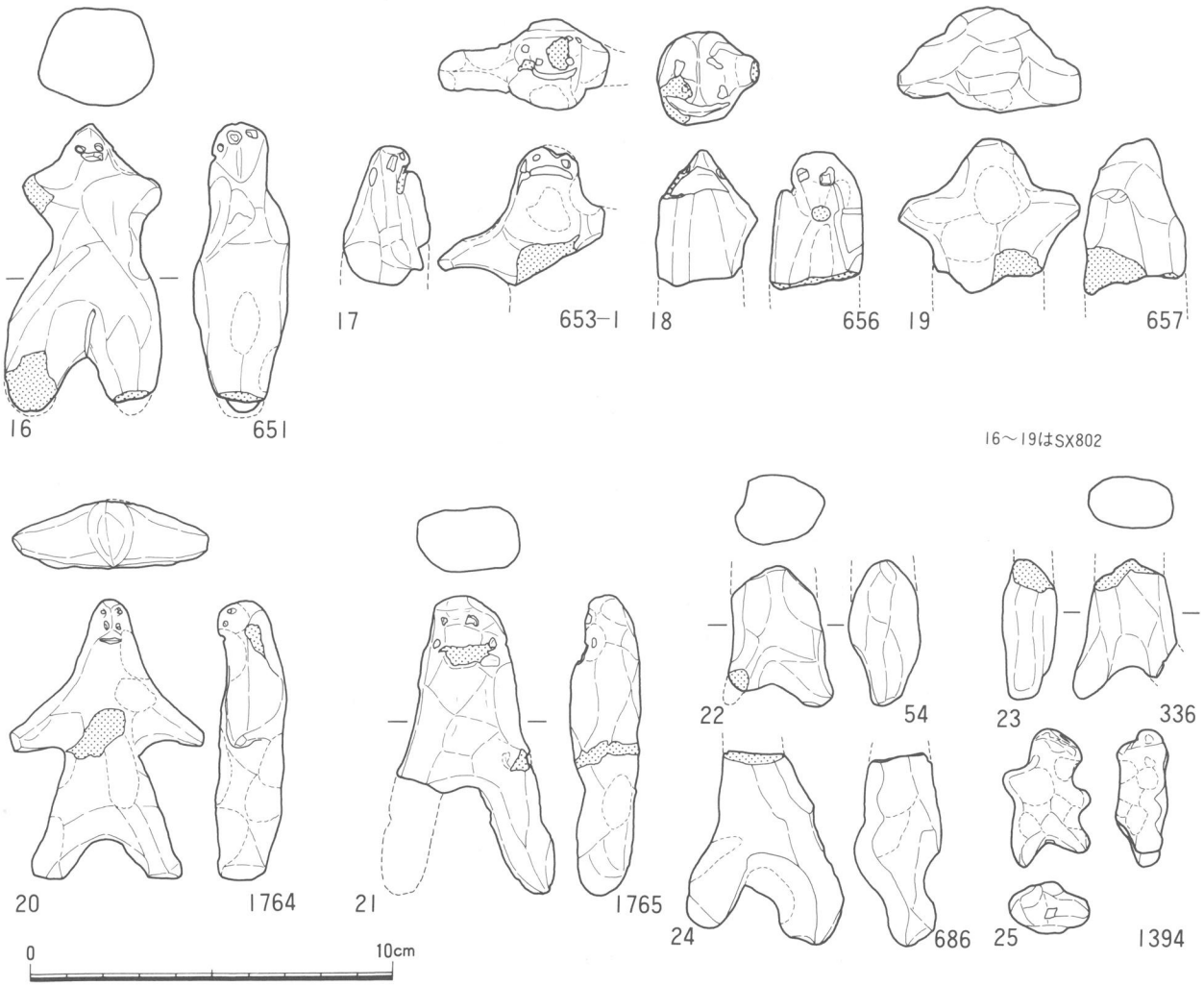
20～25は水上7区旧大谷川出土の人形土製品[(5)]である。20・21は表採資料であり、20は現大谷川法面表土除去時に検出された。2点とも出土地点などは明らかではない。20は胴部三角形を呈し、手は別に貼付しているようであるが、足は胴部の粘土からつくり出されている。顔面は胴部端の三角形の頂点にあたる部分を二本の指で正面前方につまみ出し、その左右両面に2孔ずつを上下2対もうけ、目・鼻を表現している。さらにその下に横方向に長さ0.5㎝ほどのヘラ状器具による削り込みがあり口の表現と思われる。20は本遺跡出土の人形土製品のうちでは手の表現が最もしっかりしており、全体のバランス等も人間の形に近い。類例は三重県草山遺跡出土のＣ類[(6)]・大分県浜遺跡[(7)]出土例などがあるが、上記2例とも20のような顔面調整はみられない。胴部の形状は8のＳＲ314の人形に通じるところがある。21は三角形状の胴部に長めの足を別につくり貼付している。三角形の頂点にあたる頭部は丸くつくられている。顔面は上端に左右0.8㎝の間隔で正面向の小孔があり、さらにその下0.6㎝の位置に1.4㎝の間隔で左右に小孔がみられる。上下2対の小孔は目・鼻の表現と思われるが下の2孔はかなり端にあるため、不自然である。あるいは下の2孔は耳なのかもしれない。胴部三角形で手を有しないのは宮川6区ＳＲ312Ｅ類と同要素であるが、全長8.2㎝と大きく、足は長めであるという違いがある。

22～24は下半身のみの残存であるが、宮川6区ＳＲ312Ｄ類に似る。22は胴部断面が円形に近く短めの足がつく。23は胴部が三角形に近い形状になりそうで宮川6区ＳＲ312Ｅ類となる可能性もある。24はやや大きめで、胴部は上方に細くなっているようで、胴部に比し太めの足が貼付されている。全体に調整は雑である。25は馬形（動物形）土製品1点とともに同一地点で出土しており、セットとなる可能性が高い。全長3.8㎝と小型で一つの粘土塊からつくり出されている。顔面は胴部上端の粘土を上から斜め前方に押圧することによりつくり出され、上面端部に2孔を有する。目の表現であろうがヘラ状の



第90図　人形土製品実測図 1

器具で押さえたような孔で1㎜弱の浅いものである。左側面には手の0.8㎝上方に別の1孔がありこちらは2㎜ほどの比較的深い孔であるが、左側にこれにあたるものはみられない。耳の表現かと思われるが判然としない。手・足とも左右2対胴部の粘土をつまみ出しつくられている。股間には下方からの棒状器具による刺突孔がみられ、尻穴あるいは女性器の表現と考えられる。下腹部がやや突出している。先述したように宮川6区E 103出土のもの（15）に酷似する。25の人形土製品と馬形土製品は水上7区SR 813から出土している。『大谷川Ⅱ』によるとSR 813は灰釉陶器・須恵器・土師器が大量に出土しており、遺物の特徴から平安時代の河道とされている。伴出した土器には古墳時代後期の須恵器・奈良時代の須恵器等も含まれ、土製品そのものの年代についてはなお慎重な検討を要するが、人形・馬形ともに小型であること、馬形土製品が太く長い尾を有し四肢がしっかりはっていて、小型のわりには調整がていねいであること等、古墳時代後期の土製品とは一線を画するようである。このように考えればこれらの遺物をSR 813の年代（平安時代）を下限とし、奈良～平安時代とすることも許されるかもしれない。



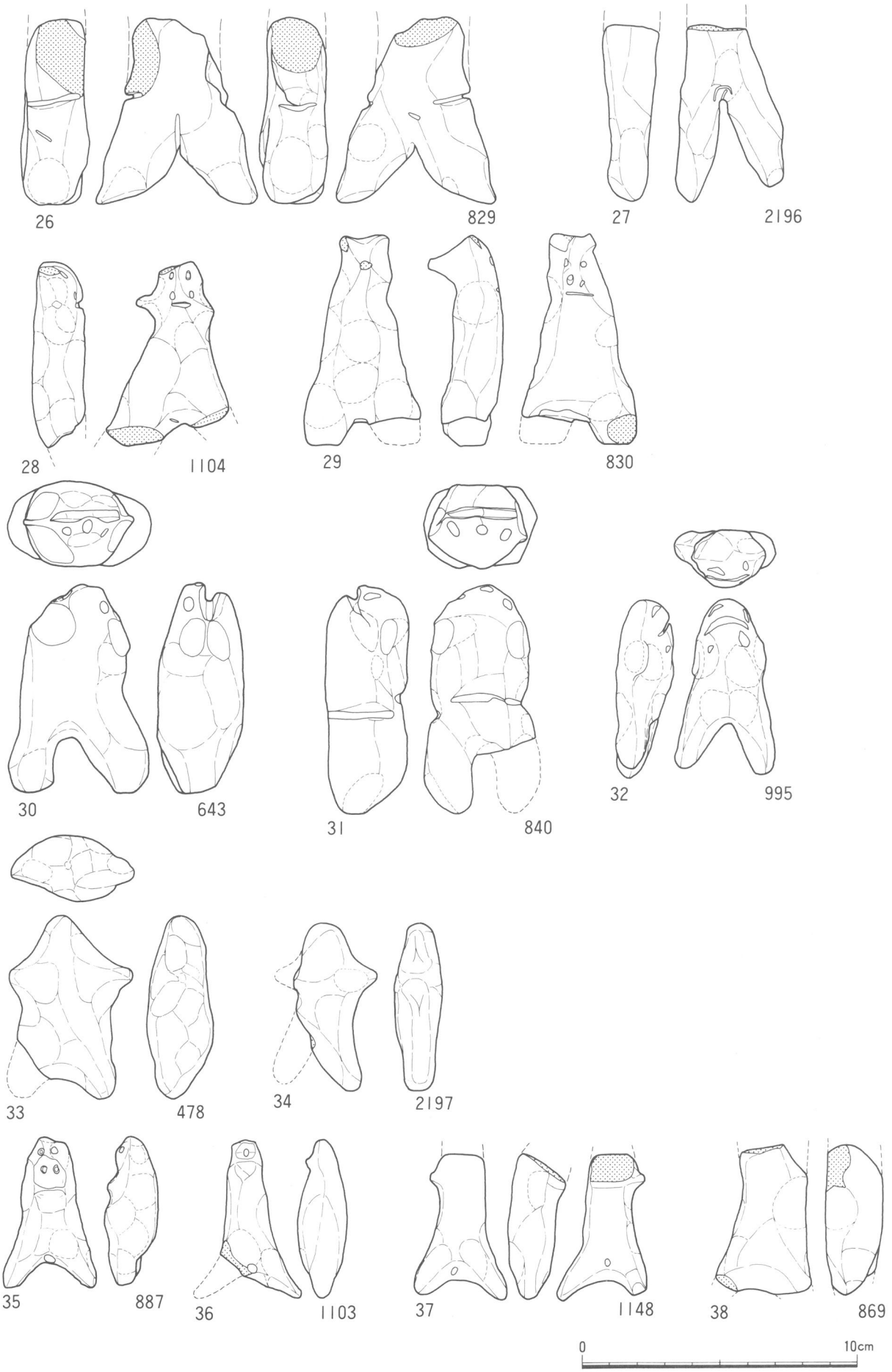
第91図　人形土製品実測図2　水上7区

第90図は西大谷１・２区出土の人形土製品である。すべて旧大谷川からの出土である。この地区の旧河道はすでに『大谷川Ⅰ』において、その中心をなす土器から地域別の年代観が示されているが、各遺物の年代については流れ込み等による混入品も認められることから西大谷１・２の旧河道全体を一つの遺構としてとらえ土製品の分類を試みた。

26・27は下半身のみ残存していた。両方とも本遺跡出土の人形土製品としては大きめである。26は断面長円形の胴にハの字状開く太めの足を別につくり貼付している。股間前面には縦方向に幅0.2㎝弱、深さ0.3㎝、長さ1.4㎝でヘラ状器具による鋭い切り込みがみられ、女性器の表現と考えられる。また背面には股間の上方1.0㎝にヘラ状器具により刺突がみられ尻穴の表現と考えられる。体側の足の付け根部分には横方向のヘラ状器具による切り込みがみられる。特に左側のものは深さ0.2㎝強を測り鋭い。おそらく腰をあらわしたのであろう。27は断面円形に近い胴に、胴部径に比し長めの足が貼付されている。特徴的なのは股間の表現で、ヘラ状器具による半円形の線刻があり、半円中央には半円を二分するように縦方向の線刻もみられる。女性器の表現であろう。本遺跡出土の人形土製品は男性と考えられるものはなく、性別のわからないものを除けば女性と思われるものがすべてであるが、女性器は小孔で表現している例が多く、線刻あるいはヘラ状器具による切り込みによる例はこの２例のほか宮川６区ＳＲ312Ａ類の１点（第44図１）と水上７区ＳＸ802の１点（16）ぐらいである。大きめでしっかりした足がつくという共通点をこれら４点は有しており、そのうち他の３点にくらべやや小さい水上７区例が７世紀後半とする仮定に従えば、人形土製品全体の幅の中で、これら大きめでていねいな表現を有するものを古い要素と解することもできるかもしれない。26・27を西大谷地区Ａ類とする。

28は両足と左手を欠損している。胴部は三角形状を呈し比較的偏平である。顔面は胴部正面の上端の粘土を２本の指でつまみ出し中央に長さ1.3㎝ほどの突帯をもうけている。鼻の表現と考えられ、この突帯の両側に２対の小孔がみられ目と鼻孔の表現と思われる。いずれも棒状器具による刺突である。突帯下端には横方向に長さ0.7㎝のヘラ状器具による切り込みがみられ口を表現している。耳は顔面上端の左右両側をつまみ出すことにより表現されているが右側は欠損している。股間には前面と背面にそれぞれ棒状器具による刺突孔があり、女性器と尻穴を表現している。手は胴に比し小さく、顔面よりの体側に貼付されている。足は別につくって貼付しているようで欠損は接合部分からと考えられる。29は全体の形状・調整等28と酷似する。手の表現はないが同類としてよいだろう。顔面は28とほぼ同じ表現がみられるが中央の突帯は摩滅のため痕跡が認められる程度である。逆に耳は先端が欠損しているものの28より明確につくり出されている。顔面背面には円すい状の突起がある。一見動物の顔のようにもみえるが何を表現しているのか不明である。足は28と同じく貼付しており、右は欠損している。28・29を西大谷Ｂ類とした。

30・31は幅3.6㎝ほどで断面長円形を呈する。他にくらべかなり太めの胴にやはり太めの足がつくタイプで、顔面は上方を向いている。顔面の表現は上端中央に上からの刺突による１孔、その両側に２孔がみられ鼻・目の表現と考えられる。この３孔に隣接してやはり横方向のヘラ状器具による切り込みがあり、口を表現している。さらに両側面には２指による縦方向のつまみ出しがみられ耳の表現と考えられる。足は別につくり貼付しているようで股間は棒状器具で押圧して丸く整形している。30・31ともほ



第92図　人形土製品実測図3　西大谷1・2区

ぼ同じ整形であるが、31には足の付け根の体側部及び背面に、腰を表現したと考えられるヘラ状器具による削り込みが存在する。32は三角形状の胴に棒状の足がハの字状に貼付されている。顔面には棒状器具による刺突孔が左右2対で1㎝ほど離れて存在し、その間にヘラ状器具による切り込みがある。刺突・切り込みとも斜め上方からおこなわれている。上の2孔は目、切り込みは口と考えられるが、下の2孔は不明である。胴部中央付近の側面には2指でつまみ出した縦方向の突帯があり手の表現と考えられる。30・31でみられた側面の調整と同じであり、位置的には不自然であるが耳の可能性もある。32は30・31にくらべ小型であるが形状・手法等共通点もあり30・31とともにC類とした。

33・34は明確な手・足を有し、顔面および股間に刺突孔等の表現をもたない。これらの特徴は宮川6区SR 312 C類のそれと一致する。ここではD類とした。33は一つの粘土塊から手・足をつくり出しているが、34は手・足をそれぞれ貼付している。

35～38は明確な手の表現を有しないやや小さめのものである。便宜上E類とした。このうち35・36は胴部三角形を呈し、宮川6区SR 312 E類に似る。35は顔面に上下に2対の棒状器具による刺突孔を有し、上の2孔の両側面を2指でつまみ出し耳を表現している。2対の小孔は目および鼻であろう。下段の2孔の下0.5㎝には胴部中央の粘土を2指でつまみ出した横方向の突帯がみられる。何を表現したかは不明であるが、位置的に考えて乳房の可能性もある。股間前面には棒状器具による刺突孔があり、女性器の表現であると考えられる。足は別につくり貼付している。36の胴部は細長い三角形状で断面はほぼ円形である。顔面に特徴があり、胴部正面上端を斜め上から指頭で押圧し、その指頭部分の中央に棒状器具により刺突を施している。目などの省略の表現なのか別の目的があるのか不明である。股間には前面に棒状器具による斜め上からの刺突孔があり女性器の表現と考えられる。37は上半身が欠損しているが、形状は宮川6区SR 312 E類に似る。足は別につくり、胴に貼付している。股間には前後両面に棒状の刺突孔があり女性器と尻穴の表現であろう。欠損部分近くの胴部に粘土をつまみ出した突起がみられるが何の表現かは不明である。38は胴部のみで、上半身と足は欠損している。全体の形状はわからないが手はつかないようである。

以上西大谷地区の人形土製品について述べたが、同地区には馬形土製品・人形木製品・馬形木製品も出土している。土製品は人形も馬形も41列～45列で出土し、特に42列～44列に集中する（D41で馬形1点・E41で人形1点・D45で人形1点）が、木製品が集中出土したD46グリッド（馬形11点中9点・人形16点中9点）では土製品は1点も出土してない。E43・D44グリッドなどでは土製品・木製品も共伴している例もあるが、分布の偏在は旧河道内の遺物の移動などを差し引いても無視できない傾向であると考えられる。いずれにしろ、西大谷1・2区全体の出土土器は6世紀後半～11世紀代の年代幅があり、土製品の年代を土器のみで考えるのは困難である。

本遺跡の人形土製品を概観したが、その形態はバラエティーに富み同じものがないといっても過言ではない。多数を出土した宮川6区SR 312と西大谷1・2区で形態分類を試みたが、他地区出土のものを含め全体として比較検討することはできなかった。その全てが旧河道からの出土であり年代的な把握もほとんどできていない。全国例との比較・問題点の提示等は第Ⅴ章で述べることとする。

(1)　松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報№6』1983

(2)　四条畷市教育委員会『奈良井遺跡現地説明会』1979

(3)　(1)に同じ

(4)　向坂鋼二「浜松市都田町中津・坂上出土の祭祀遺物」考古学雑誌第50巻1号　1964

(5)　ＳＸ802と同一面で検出されたＳＸ801の土師器は7世紀後半～末期と推定され、ＳＸ802が同じ時期である可能性もある。

(6)　(1)に同じ

(7)　大分県教育委員会『浜遺跡』大分県文化財報告第48輯　1980

人形土製品一覧表

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺構番号	高さ	幅	厚さ	調整・表現	備考	図番号
1	宮川6区	E103	SR312斜面	3-54	4.1	(2.4)	1.55	顔2孔、尻穴、手	左手、左足欠	15
2	〃	F103	SR312	3-575	(5.3)	(2.6)	2.7	口、顔2孔、耳、手	½残存	20
3	〃	〃	〃	3-577	(5.4)	4.6	(2.1)	2孔	頭カ欠	2
4	〃	〃	〃	3-579	6.4	4.0	1.95	尻穴2	完形	3
5	〃	〃	〃	3-587	(3.7)	3.7	(1.65)	尻穴	頭欠	8
6	〃	〃	〃	3-589	(7.5)	2.6	2.35	口、顔2孔、手、尻穴	足2本欠	31
7	〃	〃	〃	3-590	(3.2)	(3.35)	1.2		頭、足1本欠	11
8	〃	〃	〃	3-592	7.1	2.7	2.25	口、顔4孔、手、耳、尻穴	胴一部欠	18
9	〃	〃	〃	3-594	4.65	2.6	(2.25)		頭欠	41
10	〃	〃	〃	3-597	(4.0)	3.0	(1.25)		頭欠	9
11	〃	〃	〃	3-654	3.85	(2.0)	1.25	顔4孔、胴1孔	足1本欠	14
12	〃	〃	〃	3-655	3.9	2.05	1.1	顔4孔、胴1孔、尻穴	完形	15
13	〃	〃	〃	3-659	3.75	(2.3)	1.35		足2本先端欠	16
14	〃	〃	〃	3-660	(5.0)	(2.4)	2.6	手	頭、足欠	
15	〃	〃	〃	3-661	3.85	(2.3)	2.2	口、顔2孔、耳	½残存	
16	〃	〃	〃	3-671	(6.25)	(2.5)	2.05	顔4孔、耳カ	足2本	21
17	〃	〃	〃	3-672	7.05	(2.4)	2.1	口、顔2孔、尻穴	頭一部、足1本欠	33
18	〃	〃	〃	3-673	(6.2)	(2.3)	(1.95)	口、顔2孔、手カ、尻穴	足欠	30
19	〃	〃	〃	3-677	7.9	(2.45)	(2.35)	口、顔2孔、手	足2本、手1本欠	26
20	〃	〃	〃	3-711	(4.0)	(2.3)	(2.2)	手	頭、足2本欠	
21	〃	〃	〃	3-724	(5.5)	2.5	2.05	尻穴	頭、足1本欠	40
22	〃	〃	〃	3-733	(6.5)	(2.4)	(1.85)	口、顔2孔、手	足欠	29
23	〃	〃	〃	3-737	(2.85)	(3.4)	2.0		½残存	
24	〃	〃	〃	3-721	(5.6)	(3.3)	2.1	手	足1本欠	6
25	〃	〃	〃	3-760	(2.55)	(2.25)	2.0	尻穴	⅓残存	
26	〃	〃	〃	3-766	(3.1)	(2.4)	1.85	尻穴	⅓残存	
27	〃	〃	〃	3-700	(2.2)	(1.6)	(0.9)		頭、足欠	
28	〃	〃	〃	3-819	4.85	(2.65)	(1.5)		足1本欠	12
29	〃	〃	〃	3-828	(4.05)	(2.1)	2.3	口、顔2孔、耳、手	足欠	22
30	〃	〃	〃	3-829	(5.95)	(2.45)	2.25	口、顔2孔、手	足欠	27
31	〃	〃	〃	3-912-1	(3.3)	(1.95)	(1.85)	口カ、顔2孔、耳	½残存	
32	〃	〃	〃	3-912-2	(2.9)	(2.1)	1.55	口カ、顔2孔、耳	⅓残存	
33	〃	〃	〃	3-2010	(5.8)	(2.55)	2.1		頭、足1本欠	
34	〃	〃	〃	3-2019	3.15	(2.15)	(1.1)	顔5孔、尻穴	足2本欠	13
35	〃	〃	〃	3-2024	(2.83)	(2.35)	(1.9)		¼残存	
36	〃	〃	〃	3-2025	(3.25)	(2.55)	(2.05)		½残存	
37	〃	〃	〃	3-2038	(8.5)	2.7	2.3	顔2孔、手カ、尻穴	頭一部、足1本欠	37
38	〃	〃	〃	3-2039	6.65	2.65	2.35		完形	39
39	〃	〃	〃	3-2044	7.3	(2.6)	2.25	顔1孔、尻穴	頭½欠、足1本欠	32
40	〃	〃	〃	3-2049	(6.5)	(2.5)	2.25	顔2孔、尻穴、手	足2本欠	36
41	〃	〃	〃	3-917	(6.5)	(6.8)	2.95		頭欠	1
42	〃	〃	〃	3-2055	(3.3)	(2.8)	1.6	尻穴	頭先端、足2本欠	
43	〃	〃	〃	3-2057	(3.1)	(1.55)	0.9		足2本欠	
44	〃	〃	〃	3-2385	(5.4)	(2.7)	(2.15)		頭、足1本欠	
45	〃	〃	〃	3-2393	6.55	2.95	2.15	手	足1本欠	7
46	〃	〃	〃	3-2402	(3.85)	(2.75)	1.75	胴1孔	頭、足2本欠	10
47	〃	〃	〃	3-2404	(5.25)	(2.95)	2.15	顔2孔	頭先端、足2本欠	4
48	〃	〃	〃	3-2406	(4.55)	(3.55)	2.25		頭、足先端欠	5
49	〃	〃	〃	サ-1	8.7	2.75	2.2	口、顔2孔、手	足1本欠	23
50	〃	〃	〃	サ-2	6.9	(2.6)	2.35	口、顔4孔、手、尻穴	足1本欠	24
51	〃	〃	〃	サ-3	(6.65)	2.65	2.4	顔2孔	足欠	35
52	〃	〃	〃	サ-4	(6.6	2.65	2.2	顔2孔、手カ	足欠	34
53	〃	〃	〃	サ-5	(6.35)	2.3	2.1	口、顔2孔、手	頭⅓、足欠	25

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	高さ・幅・厚さ			調整・表現	備考	図番号
54	宮川6区	F103	SR 312	サ-6	(3.45)	2.3	1.9	顔2孔	½残存	38
55	〃	〃	〃	サ-7	3.5	2.2	2.0	口、顔3孔	½残存	28
56	〃	E103	〃	3-35-2	7.55	(2.65)	2.1	口、顔4孔、尻穴、手、耳	足1本欠	19
57	〃	F104	SX 339	3-121	4.9	4.1	1.9	手	ほぼ完形	1
58	〃	〃	〃	3-378	(3.2)	(2.05)	1.35		頭、足1本欠	4
59	〃	〃	〃	3-412	(4.25)	2.65	2.1		足欠	3
60	〃	〃	〃	3-410	(3.9)	(3.45)	1.75		足1本先端欠	2
61	〃	〃	SD 322	3-336	(3.4)	(2.0)	2.1	口、顔2孔	½残存	5
62	〃	〃	〃	3-343	(4.8)	(2.75)	(2.05)	顔4孔	頭先端、足欠	6
63	〃	〃	〃	3-346	(3.45)	(2.3)	(1.45)	口、顔2孔、尻穴	足2本欠	7
64	〃	E104	SR 314	3-2517	4.2	4.25	1.8		完形	12
65	〃	〃	〃	3-2501	(2.8)	(3.25)	1.5	尻穴	頭、足1本欠	
66	〃	F104	〃	3-334	4.1	3.75	1.3		完形	13
67	〃	E104	〃	3-2566	(7.4)	(3.75)	2.3	手	頭先端、手、足欠	9
68	〃	〃	〃	3-2189	8.15	(6.2)	2.7	口カ、顔4孔、手	足1本先端欠	8
69	〃	〃	〃	3-2190	(5.0)	(3.8)	2.15	手	頭先端、足欠	11
70	〃	〃	〃	3-2191	(7.8)	(4.7)	2.35	手	頭先端～手、足先欠	10
71	〃	F103	緑灰色粘土	3-134	(2.1)	(3.2)	(1.3)		頭、足2本欠	
72	〃	〃	緑灰色砂	3-448-3	(3.5)	(2.45)	1.5	手	頭、足2本欠	
73	〃	〃	〃	3-540-1	(2.55)	(2.35)	(1.9)		⅓残存	
74	〃	〃	〃	3-541	(3.4)	(1.75)	(2.05)	口、顔2孔	½残存	
75	〃	E104	〃	3-545-1	(3.55)	3.95	1.6	手	頭先端、足欠	
76	〃	F103	〃	3-604	(4.2)	(2.5)	(1.7)		½残存	
77	〃	G103	〃	3-785-1	2.65	3.35	1.15	尻穴	頭欠	
78	〃	E104	〃	3-2082-1	2.75	4.0	1.55		完形カ	
79	〃	〃	暗灰色砂	3-2535-3	(4.4)	(3.75)	(1.9)	尻穴	頭、足先欠	
80	〃	F103	緑灰色砂	3-2926-2	(2.5)	(3.1)	(1.6)		頭、足2本欠	
81	宮川5区	A108	SR 201	3-262	(4.45)	(3.85)	(2.45)		頭、足先1本欠	14
82	宮川4区		表採	3-002	(2.8)	(2.95)	1.85	尻穴	頭、足2本	
83	〃	199	暗灰色粘土	3-2944	(4.1)	(2.25)	2.15		½残存	
84	水上7区	175	SX 802	3-651	(7.9)	4.3	2.6	口、顔6孔、手、尻穴	手先1本、足先欠	16
85	〃	〃	〃	3-653-1	(3.8)	(4.55)	(2.45)	口、顔6孔、手	½残存	17
86	〃	〃	〃	3-656-1	(3.8)	(2.85)	(2.55)	口、顔4孔、手カ	½残存	18
87	〃	〃	〃	3-657-1	(4.2)	5.0	(2.85)	手	½残存	19
88	〃	J 70	砂礫層	3-1394	3.8	2.4	1.45	口、顔2孔、尻穴	完形	25
89	〃	J 71	〃	3-686	(5.3)	4.35	2.4		頭欠	24
90	〃	H 75	表採	3-1764	7.7	5.3	1.95	口、顔4孔、手	ほぼ完形	20
91	〃		〃	3-1765	(8.25)	(4.35)	1.95	顔4孔、口カ(欠損のため)	足1本欠	21
92	〃	J 70	砂礫層	3-54	(3.85)	2.95	2.0		頭、足1本欠	22
93	〃	I 71	〃	3-336	(3.9)	(2.85)	1.5		頭、足1本欠、	23
94	西大谷1区	E 42	〃	643	7.5	5.05	3.05	口、顔3孔	完形	30
95	〃	E 41	〃	478	(6.6)	(4.45)	2.4	手	足1本欠	33
96	〃	F 43	〃	1104	(6.6)	(4.4)	1.95	口、顔4孔、手、尻穴カ	頭先端、足2本欠	28
97	〃	E 43	〃	995	6.3	3.65	2.1	口、顔4孔、手	完形	32
98	〃	D 43	〃	830	(7.6)	(4.2)	(2.65)	口、顔4孔、耳	足1本欠	29
99	〃	E 43	〃	887	5.35	3.35	1.9	顔4孔、尻穴	完形	35
100	〃	D 43	〃	840	8.2	(4.05)	3.0	口、顔3孔、刻線(腰2)	足1本欠	31
101	〃	D 43	〃	829	(7.7)	5.8	2.5	刻線(腰2本股1本)、胴1孔	頭欠	26
102	〃	F 43	〃	1103	5.7	(3.0)	1.9	顔1孔、尻穴	足1本欠	36
103	〃	E 43	〃	869	(5.4)	(3.5)	2.05		頭、足先1本欠	38
104	西大谷2区	D 45	〃	2196	(6.35)	3.9	(2.0)	刻線(股)	頭欠	27
105	〃	D 44	〃	1148	(5.35)	3.35	(2.0)	手、尻穴	頭欠	37
106	西大谷地区		表採	2197	6.05	(3.05)	1.75	手	手1本、足1本欠	34
107	〃		〃	N-3	(5.2)	(2.45)	(1.85)	口、顔4孔	足2本欠	
108	西大谷1区	F 42	砂礫層	713	7.5	2.9	(2.5)	口、顔3孔	右半身欠	
109	水上1区	K 56	SR 150	2-357	(3.6)	2.6	(1.1)	手	頭部欠	

( ) 内は残存の数量

2. 動物形土製品（第93図～第97図）

人形土製品とともに動物形土製品も210点が出土している。平城京・長岡京・平安京あるいは平城京造営に伴う人工河川と考えられる奈良県稗田遺跡等で多量に出土しているが、その他では一遺跡の出土数としては他に例をみない。本遺跡出土の動物形土製品には次のような特徴がみられる。

(1) 子どもの粘土細工のような粗製のものが多く、いわゆる大和型土馬とは異質で全国的に類例がきわめて少ない。

(2) 型態的にはバラエティーに富み、馬以外の形代となることも考えられる。

(3) 旧河道内だけでなく低湿地縁辺、微高地の土坑・溝状遺構などからも出土している。

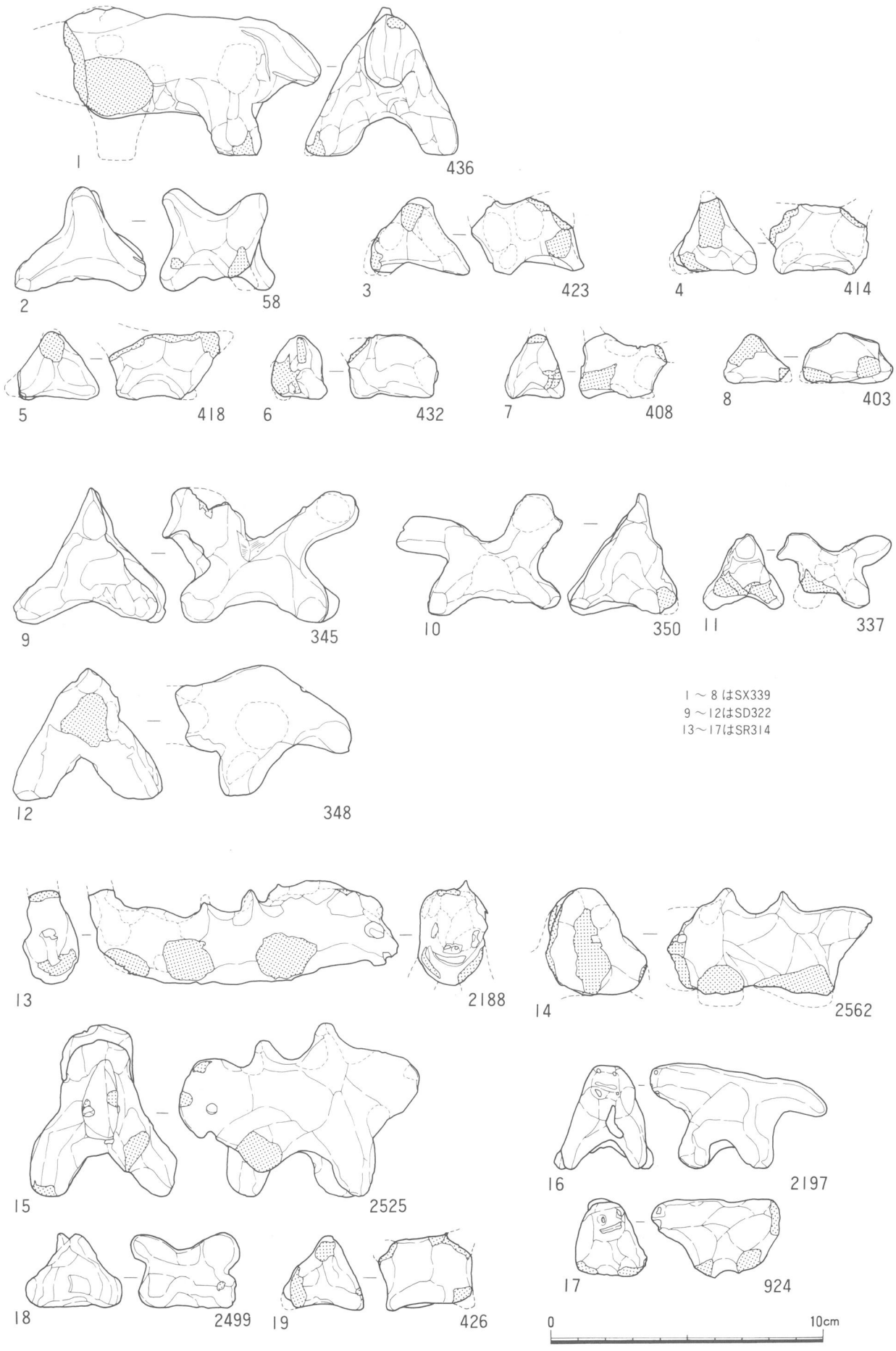
これらの特徴をふまえ本遺跡独自の形態分類を出土数の多い宮川6区ＳＲ312において試みて前章で紹介した。また宮川3区ＳＸ479、水上10区ＳＰ759など土器との伴出関係が明確なものを参考に年代を考えたが、旧河道内の遺物については年代を決定するのはかなり困難である。以下地区別に紹介する。

1～8は宮川6区ＳＸ339出土の動物形土製品である。すでに述べた通りＳＲ312北側に隣接する中州状の地点でＳＲ312の西岸と考えられる。1を除けば他の7点はすべてＳＲ312Ｅ類である。三角柱状の粘土魂を基本にそれぞれの角を若干つまみだしただけで四肢・頭・尾を表現している。顔や鞍の表現は全くみられない。同遺構出土の人形土製品はＳＲ312Ｅ類の特徴を持つものが多く（前述）人形土製品Ｅ類と動物形土製品Ｅ類がセットとなる可能性が高いということができよう。1は頭部と前脚2本が欠損しているが残存長9.45㎝、高さ5.4㎝と大きめである。同程度の大きさのもの（宮川6区ＳＲ312Ｂ類など）は鞍がつくことが多いのに対し鞍の表現がないのが特徴である。ＳＸ339の土製品は人形・動物形ともつくりは雑で顔などの表現が全くないという共通点を有している。

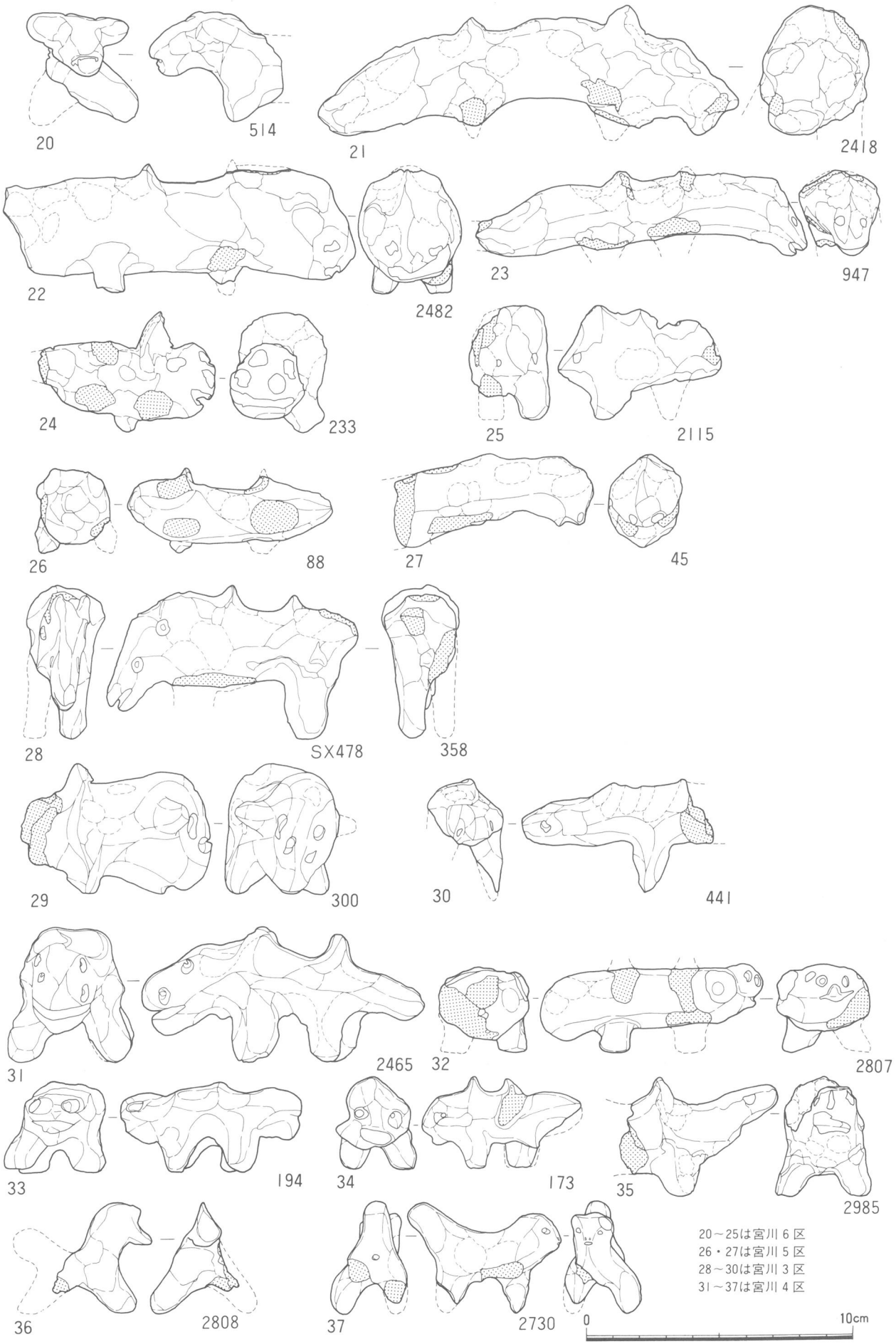
9～12は宮川6区ＳＤ322出土の資料である。動物形土製品6点が人形土製品3点（前述）と出土した。1/3程度の残存状態の2点を除き図示したが、このうち9～11の3点は長さがそれぞれ7.1㎝、6.2㎝、4.15㎝と大小まちまちであるが形態は同じである。断面三角形の胴部に「ハ」の字状に開く短めの四肢とやや上方に向く長めの尾を有し、顔は頭部の端を正面から指頭で押圧することによりつくり出されている。表面の調整は指によるものが多いが、9は胴部中央側面にハケ目状の調整がみられる。これら3点は大和型土馬である平城京八条西一坊々間大路西側溝ＳＤ920出土の第Ⅶ型式の土馬に外見上は似るが、目などの表現は本遺跡のものには見られず手法上は相違点がかなり認められる。[(1)] しかしながら本遺跡出土の他形態の動物形土製品が大和型とはかけ離れたものであることからＳＤ322出土の3点の馬形土製品は大和型との接点として注目される。残念ながら伴出土器は小破片がごく少量しか出土していない。全体の形状のわかるものはないが、7世紀代と考えられる須恵器片と新し手の灰釉陶器片があり決め手に欠ける。いずれにしろ9～11の3点は大和型の影響を強く受けていると考えられる。大中小の3点が同じ形態であることも注目される。先にあげた平城京右京八条西一坊々間大路西側溝ＣＤ920出土の木製の人形は同じ型式で大中小のグループがあり、長岡京跡左京2条2坊6町の溝SD1301出土品にも同じ傾向が認められるという。本遺跡例は土製の動物形であるが同じ性格であるのかもしれない。年代的には平城京の第Ⅶ型式の土馬が9世紀前半代の土器を伴っていることから、灰釉陶器片の伴出も考え合わせ平安時代と考えてよいであろう。

13～19は宮川6区ＳＲ314出土の資料である。13は四肢を欠損している。胴部は断面がたて長の長円形をした棒状の粘土魂を基本とし中央上面の粘土をつまみ出して鞍をつくり、同様にたてがみもつまみ出してつくっている。顔は先端の粘土を斜め下前方に曲げて口とし、ヘラ状器具で切り込んでいる。目・鼻はそれぞれ棒状器具の刺突による2孔で表現している。目の斜め上方には左右両端に指頭による押圧の痕跡があるが耳を意識したものと考えられる。尾は端の粘土を上方に向けて先細にしているが先端は欠損している。尾の下方には棒状器具による刺突孔があり尻穴と考えられる。14は四肢・頭部を欠損しているが鞍はやはり胴部の粘土をつまみ出して作っているようである。15は左前脚を欠損する。胴部の粘土に頭・尾・四肢・肢をそれぞれ貼付している。平たい顔部は左右両側に棒状器具による刺突孔があり目を表現し口はヘラ器具で切り込んでいる。顔部下方の胴部正面中央に棒状器具による刺突孔がある。これはおそらく尻穴としてつくられたものであろうが製作途中で頭部と尾部が逆転したため残ってしまったものと思われる。16は全長6.4㎝と13～15にくらべやや小さい。両端が先細の棒状の粘土に四肢を貼付している。鞍の表現がないのが特徴である。顔は串状の細棒による刺突が2孔と串状器具による横方向の線刻がある。それぞれ目・口の表現と考えられる。刺突・線刻ともにごく浅い。17も16とほぼ同じ形態で四肢と尾部が欠損している。16・17ともにＳＲ312Ｄ類の特徴を示している。18・19は三角柱状の粘土魂の角をそれぞれ少しつまみ出し、四肢と頭部・尾部をつくっている簡単なもので宮川6区ＳＲ312Ｅ類にあたる。長さは4.0㎝、3.45㎝と小さい。

20～25は宮川6区の旧大谷川出土の動物形土製品である。20はＳＲ311出土の資料である。後半身を欠損する。頭部は左右に開く大きな耳が特徴である。顔の下部先端にヘラ状器具による切り込みがあり、口を表現している。脚は別につくり貼付しているようである。目・鼻などの表現はない。21・23はともにＳＲ316から出土している。ともに棒状粘土を胴部とし、四肢を欠損している。21は全長15.7㎝と大型で胴部粘土をつまみ出し鞍とし、同様に耳もつまみ出している。顔の先端を正面から指で押圧し口を表現している。欠損している四肢は別につくり貼付しているようである。23は全長12.4㎝で鞍とたてがみを胴部の粘土をつまみ出してつくっている。口はヘラ状器具で切り込み、目（あるいは鼻か）は棒状器具で刺突し表現している。22は尾と左前脚を欠く。全長13.0㎝と長めで、径4㎝程のかなり太めの棒状粘土を胴部としている。鞍およびたてがみは胴部に貼付しているようで、耳も左右両側に粘土を貼付してつくっている。顔面には左右両側に棒状器具による刺突孔があり目の表現と考えられるが、左側は不明瞭である。口はヘラ状器具で切り込んでいる。胴にくらべ短めの脚が貼付されている。尾の下方には棒状器具による刺突孔がみられ尻穴と考えられる。24は棒状の胴部にかなり大きめの鞍と短めの脚が貼付されている。特に脚は付け根部分の粘土を予め円形に抉って、別につくった棒状の脚を貼付している。顔には正面に4孔、側面に2孔の棒状器具による刺突孔がみられる。径0.4～0.6㎝程度とかなり大きめであるが、耳・目・鼻の表現と考えられる。口はヘラ状器具で切り込んでいるが幅0.4㎝程とこちらもかなり大きめである。尾は欠損するが直下に顔の刺突孔と同様の刺突孔がみられ尻穴と考えられる。25は全長6.1㎝と小型である。胴部は断面が隅丸の長方形を呈する。背には胴部粘土をつまみ出して鞍をつくり、短めの脚を貼付している。顔は胴部正面の粘土を円錐状につまみ出してつくり、左右両側に棒状器具による刺突孔が1対ある。21～24はＳＲ312Ｂ類に、25はＳＲ312Ｃ類に似る。20は首と



第93図　動物形製品実測図 1



第94図　動物形製品実測図2

頭を胴部とは別に明確につくり出していることはＳＲ312のＡ類と同じであるが顔の表現などやや雑である。26・27は宮川５区出土の資料である。26は棒状の粘土を胴部とし、背に鞍を帯状に貼付し長さ１㎝弱の短い脚を貼付しただけの簡単なつくりである。顔や尾には全く表現がみられない。27は後半身と四肢が欠損している。胴部は断面円形で角度をやや下方に変えながら頭部へと続いている。顔部はヘラ状器具による切り込みで表現された口と、口の真上に棒状器具による刺突孔が２孔みられる。また頭部背面には指でつまみ出した縦方向の突起がありたてがみの表現と考えられる。

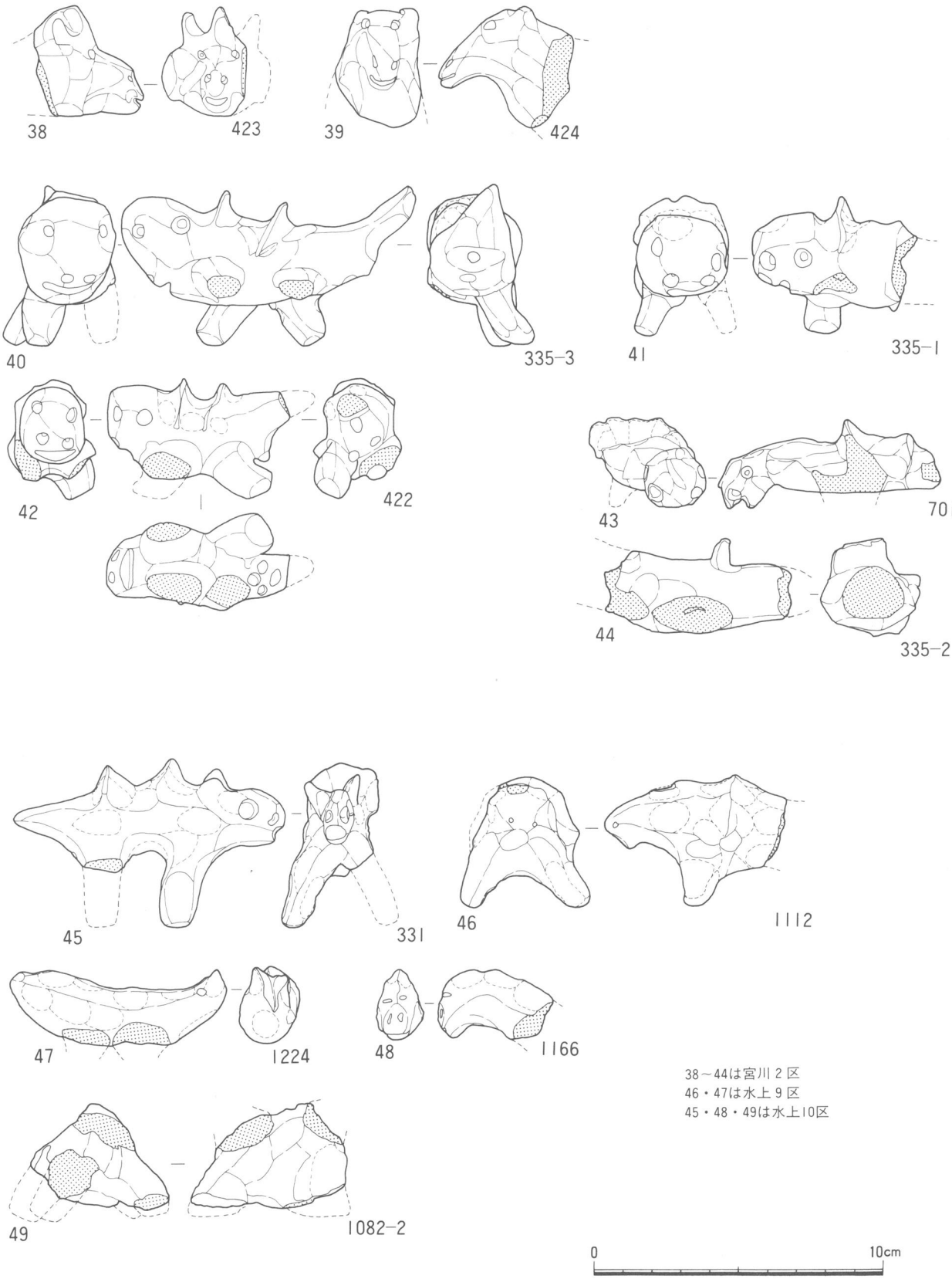
28～30は宮川３区の動物形土製品である。28はＳＸ478出土の馬形土製品である。前述のように伴出した須恵器は川江試案のⅢ期後葉に比定され６世紀末と考えられる。28の馬形土製品は伴出土器に従えば６世紀末ということになり、本遺跡出土の動物形土製品の中では最も古いということになる。尾の先端と３本の脚を欠くが、全長9.3㎝、高さ5.65㎝、幅2.9㎝である。全体に偏平で胴部にくらべ頭部がかなり大きく強調されているのが特徴である。他の動物形土製品が胴部に重点があり頭部が申し分け程度についているのとは対照的である。胴部は断面が縦長の長円形を呈し、背には鞍が帯状に貼付されている。顔は胴部から下方に角度を変えつくり出され、縦長の馬らしい形状となっている。口の先端は鋭く尖りヘラ状器具による深い切り込みがある。顔の側面には上下２対の棒状器具による刺突孔がみられる。目と鼻の表現と考えられる。さらに胴部と顔部の境の左側面に幅２㎝ほどの粘土が貼付されている。耳の表現と考えられ、右側は欠損している。尾は先端を欠くが胴部端の粘土を先細にしてつくり出されている。尾の直下には深さ1.5㎝ほどの棒状器具による刺突孔があり尻穴を表現している。脚は胴の幅にあわせるように偏平で左後脚のみが残存している。28の類例は宮川６区ＳＲ312Ａ類に求められるが、ＳＲ312の資料は残念ながら頭部片だけで全体の形状はわからない。しかしながら縦長の顔に偏平な胴という他の土製品には見られない共通点がある。28の馬形土製品が６世紀末と推定されることから、ＳＲ312Ａ類は同遺構の年代幅の中で古い要素とみてよいと考えられる。29は後半身を欠損する。胴部は断面円形で背に鞍が貼付され短い脚が付く。顔部はかなり大きく側面にほぼ水平に貼付された耳が特徴的である。棒状器具による刺突孔が４孔あり、目鼻の表現と考えられる。口はヘラ状器具で切り込んでいる。顔は牛のようにも見えるが、背に鞍を有することからやはり馬であると考えられる。30はやはり後半身を欠損する。棒状の胴がそのまま頭部となり背には縦方向に帯状の高まりがありたてがみと考えられる。顔には両側面に１対の棒状器具による刺突孔がある。脚は胴部粘土を大きく抉り貼付されている。

31～37は宮川４区旧大谷川内より出土した動物形土製品である。31～35は断面円形の棒状の胴に鞍と脚を貼付するタイプで宮川６区ＳＲ312Ｂ類の特徴を示す。このうち31は全長10.5㎝の完形品で大きめの鞍が背に貼付され胴部よりむしろ大きい顔に特徴がある。口はヘラ状器具で1.5㎝と深く切り込まれている。顔の両側面には２対の刺突孔があるが孔の形はハート形をしている。32は顔に特徴があり正面に４つの刺突孔があり目・鼻をあらわし、さらに側面に径0.6㎝ほどの大きい孔があり耳の表現と考えられる。口はヘラ状器具で十字に切っている。背には鞍が貼付された痕跡が認められる。35は後半身を欠く。頭部が上方に向いているのが特徴である。顔に目と考えられる刺突が２つあり、先端にも別に１孔あるが鼻の表現と考えられる。やはり鞍が貼付されている。33・34はともにＳＲ54出土の資料であ

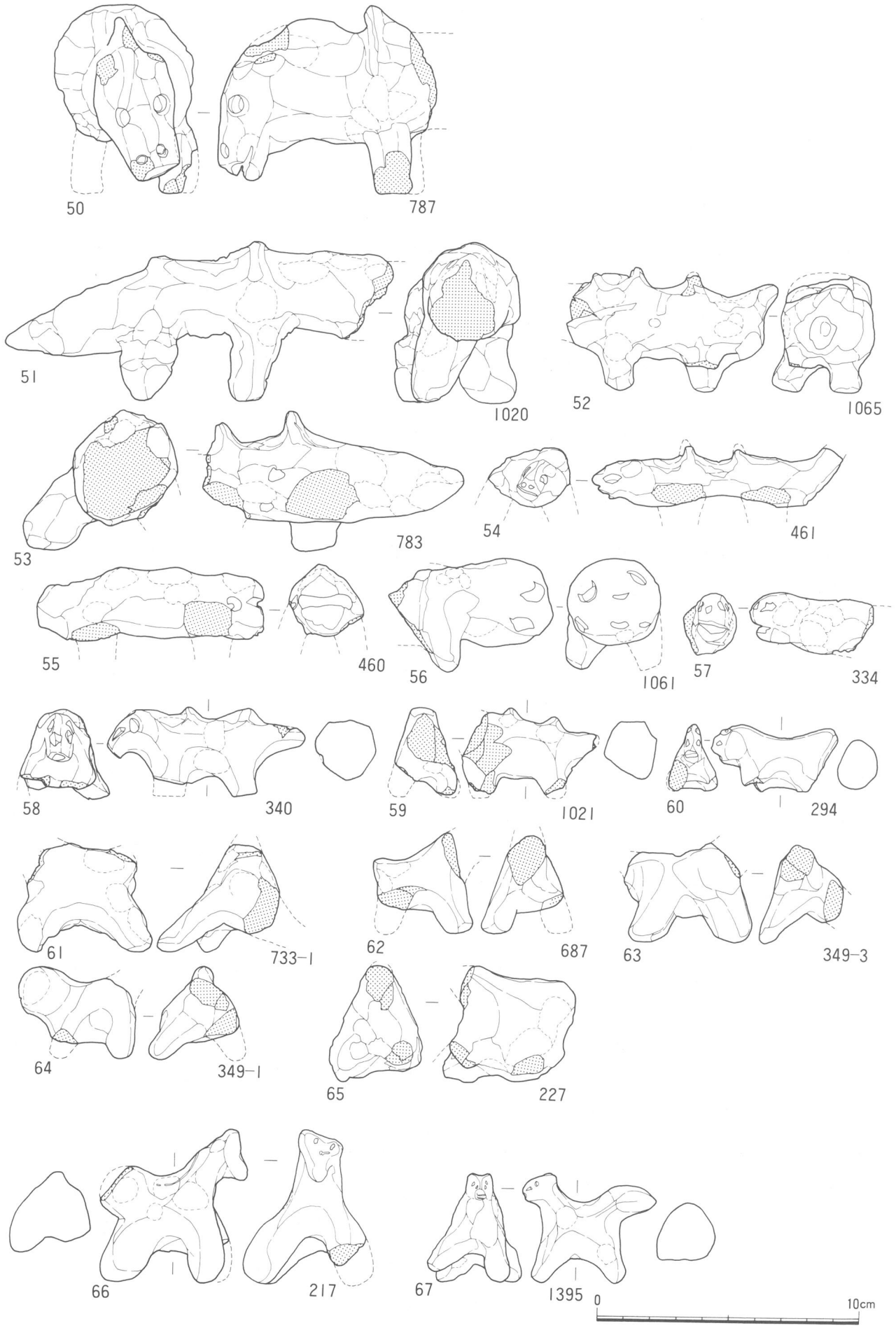
る。長さはそれぞれ6.3㎝、5.9㎝と小型である。2点ともほぼ同じ形態で棒状の胴に鞍・四肢を貼付し、顔は2孔で目を、ヘラ状器具により切り込みで口を表現している。36・37は鞍を有しない動物形土製品である。36は後半身を欠損するが、宮川6区SD322出土のものとほぼ同じである。断面三角形の胴に「ハ」の字状に開く脚が付き、顔は正面から指頭で押圧し表現している。37はやはり断面三角形の胴にやや内湾しながら開く脚、上方に伸びる尾を有する。竹管による刺突で目をあらわし、鼻は串の先端で軽く刺突した小さな孔で表現している。口は幅0.4㎝と狭い範囲をヘラ状器具で浅く切り込んでいる。また尾の下には棒状器具による刺突孔があり尻穴と考えられる。形状からは犬のようにもみえる。

38〜44は宮川2区の旧大谷川内より出土した資料である。38・39はともに頭部のみ残存していた。2点とも口が前方に突き出た形状をしているが、38は両耳の間に帯状に粘土が貼付されている。おそらくたてがみの表現と考えられる。耳は角のようにもみえ一見牛のようであるが、たてがみがあることから馬と考えてよいであろう。棒状器具により目・鼻を刺突してあらわし、口はヘラ状器具で切り込んでいる。39もほぼ38と同じであるがたてがみが存在しない。全体にはこちらの方が馬らしい形状を呈している。40〜41は同じ形態でともにI 100グリットから出土している。断面円形の棒状粘土を胴部とし背に帯状の粘土を2列貼付して鞍を表現し、脚は胴下部に粘土を抉り込んで四孔をつくりそこに埋め込むように貼付されている。頭部は胴部からそのまま連続して丸味を帯び、両側面に1対、正面から2対の孔が棒状器具により穿たれ、耳・目・鼻を表現している。口は鼻の孔の下にヘラ状器具で切り込まれている。尾は先細に調整され直下に尻穴と考えられる孔を有する。興味深いのは42で、尻穴の下方にさらに3孔がありこれに径0.5㎝ほどの球形の粘土をつめ込んでいるものが1つみられる。他の2孔は欠損しているがやはり球状粘土が貼付されていたものと考えられる。おそらく雄の性器をあらわしたものであろう。40にも尻穴の下に同じような窪みがあり、やはり球形粘土が貼付されたものと考えられる。44は胴の一部しか残存しないが40・41と同一地点から出土しており、同形態のものと推定される。43は後半身と四肢を欠損する。背に鞍を貼付し、胴端部の粘土を括れさせ先を頭部としている。40〜44はその形態上おおむね宮川6区SR312B類に似る。

45〜49は水上9・10区出土の資料である。いずれも旧大谷川からの出土ではなく微高地の遺構および客土層からの出土である。45〜47は客土中より出土した。45は断面縦長の長円形を呈する比較的偏平な胴に鞍と耳を背に貼付し、下面に比較的長めの脚を貼付している。顔面は指で両側から押圧することにより偏平につくり出され、両側面に2対棒状器具による刺突孔がある。目と鼻の表現であろう。口は顔の先端の下部をヘラ状器具で削ってあらわしている。尾の直下には尻穴もみられる。全体につくりはていねいである。46は後半身を欠く。断面円形の胴部がそのまま頭部につながり先細となっている。顔には径0.2㎝弱の串状器具による刺突孔がみられ目の表現と考えられる。背には粘土をつまみ鞍をつくり出している。短めの脚が「ハ」字状に貼付されている。47は四肢を欠損する。径2.4㎝ほどの棒状の胴は頭部で反り返り、尾は端部が丸くなっているだけである。頭端部は縦に割れ二又に分かれている。耳なのであろうか。頭部側面には1対の棒状器具による刺突孔がある。目の表現であろう。四肢が貼付された痕跡を明瞭に残す。48は水上10区の溝状遺構SD765出土の土製品である。頭部のみ残存していた。断面縦長の長円形の胴部から下方に方向を変えて頭部へと続いている。背は縦方向に稜を有する。おそ



第95図　動物形製品実測図 3



第96図　動物形製品実測図 4

らくたてがみを意識したものであろう。顔の正面には2対の刺突孔があり目鼻をあらわしている。口はヘラ状器具で浅く切り込んでいるが摩滅のためはっきりしない。ＳＤ765はこの他に形状がはっきりしない動物形土製品2点が出土している。伴出土器は下層で奈良時代の須恵器、上層で平安時代後期の灰釉陶器が出土している。49は水上10区の土坑ＳＰ759出土の資料である。欠損が激しく形状がわかりにくいため紹介するに足る資料ではないかもしれないが、土坑から土器を伴って出土しており、宮川6区ＳＲ312Ｅ類に似るため敢えて紹介した。胴部は三角柱状で底面に四肢が貼付された痕跡が明瞭に残り、あまり長くはならないようである。これらの特徴は宮川6区ＳＲ312Ｅ類の特徴と一致する。伴出した土師器坏は口径11.8㎝、器高3.65㎝で平底の底部からゆるやかに曲線をえがきながら体部に続き直線的に立ち上がる。これらの特徴から奈良時代と考えられる。これによれば宮川6区ＳＲ312Ｅ類も奈良時代以降と推定してよいかもしれない。

第94図の50～66は水上7区の旧大谷川から出土した資料である。50は後半身を欠くが本遺跡のうちでは最も写実的な馬形土製品である。胴部の断面は径3.7㎝ほどの円形を呈し、背には幅0.8㎝ほどの帯状の粘土が貼付され鞍としている。首部は幅3.1㎝ほどにくびれ、下方に向きを変え頭部へと続いている。首部から頭部の背面には幅0.8㎝ほどの帯状粘土が縦方向に貼付されたてがみが表現されている。頭部背面のたてがみの両側には径1.0㎝ほどの円形の粘土貼付痕が認められた。耳が貼付されていたものと考えられる。目は1.4㎝の間隔で径0.6㎝ほどの棒状器具による刺突孔が左右両側にあり表現されている。鼻は0.3㎝ほどの間隔で0.4㎝の刺突孔が2孔ある。口はヘラ状器具で深さ0.4㎝ほど切り込んでいる。脚は左前脚のみ残存しているが、断面は径1.5㎝ほどの円形で長さは2.3㎝ほどである。表面調整は脚や鞍の接合部分には指頭によるていねいな調整がみられる。その他の所は表面がなめらかでかなりていねいなナデ調整を行ったものと考えられる。写実的な形状及び大きさは他に例がなく、他の土製品とは使用目的等少し性格が異なるのかもしれない。51～54は棒状の胴部の背に鞍をつくり出し脚を別につくり貼付しているタイプで宮川6区ＳＲ312Ｂ類の特徴を示す。このうち51・53は形状・大きさとも類似する。胴部は径3.2㎝ほどの円形断面を有し、背に幅0.6㎝ほどの鞍をつくる。52は胴部断面が縦2.3㎝、横3.5㎝ほどの長方形を呈し、背には鞍とたてがみが貼付されている。脚は1.1㎝、長さ1.2㎝ほどの柱状を呈する。54は胴部が偏平で背に鞍をもつ。顔には棒状器具による刺突孔がみられ、口はその下にヘラ状器具で切り込んでいる。55は胴部のみ残存する。背には背ビレ状の突起があるがはっきりしない。顔面の正面中央にヘラ状器具による切り込みがみられる。56は後半身を欠損する。頭部は球形に丸くつくられ、幅0.8㎝ほどのヘラ状器具による刺突孔が6孔みられるが何をあらわしているかはっきりしない。57は頭部と胴の一部のみ残存する。顔は棒状器具による4刺突孔により目鼻をあらわし、口はヘラ状器具で切り込んでいる。58は胴部は断面円形で背に鞍を貼付し、頭部は胴部より下方に向きを変え長方形につくられている。脚は胴部側面と角度をほぼ同じにして「ハ」の字状に貼付されている。59は前半身を欠くが、58とほぼ同じ形態と考えられる。顔部では棒状器具による刺突の4孔で目鼻をあらわしていることは他の土製品と同じであるが、口は他のものと異なり棒状器具による刺突であらわしている。宮川6区ＳＲ312Ｃ類とＤ類の中間的な要素と考えられる。60は58から鞍をはずしたような形状をしている。背の中央は鋭角となり正面から見ると背を頂点に二等辺三角形状となっている。

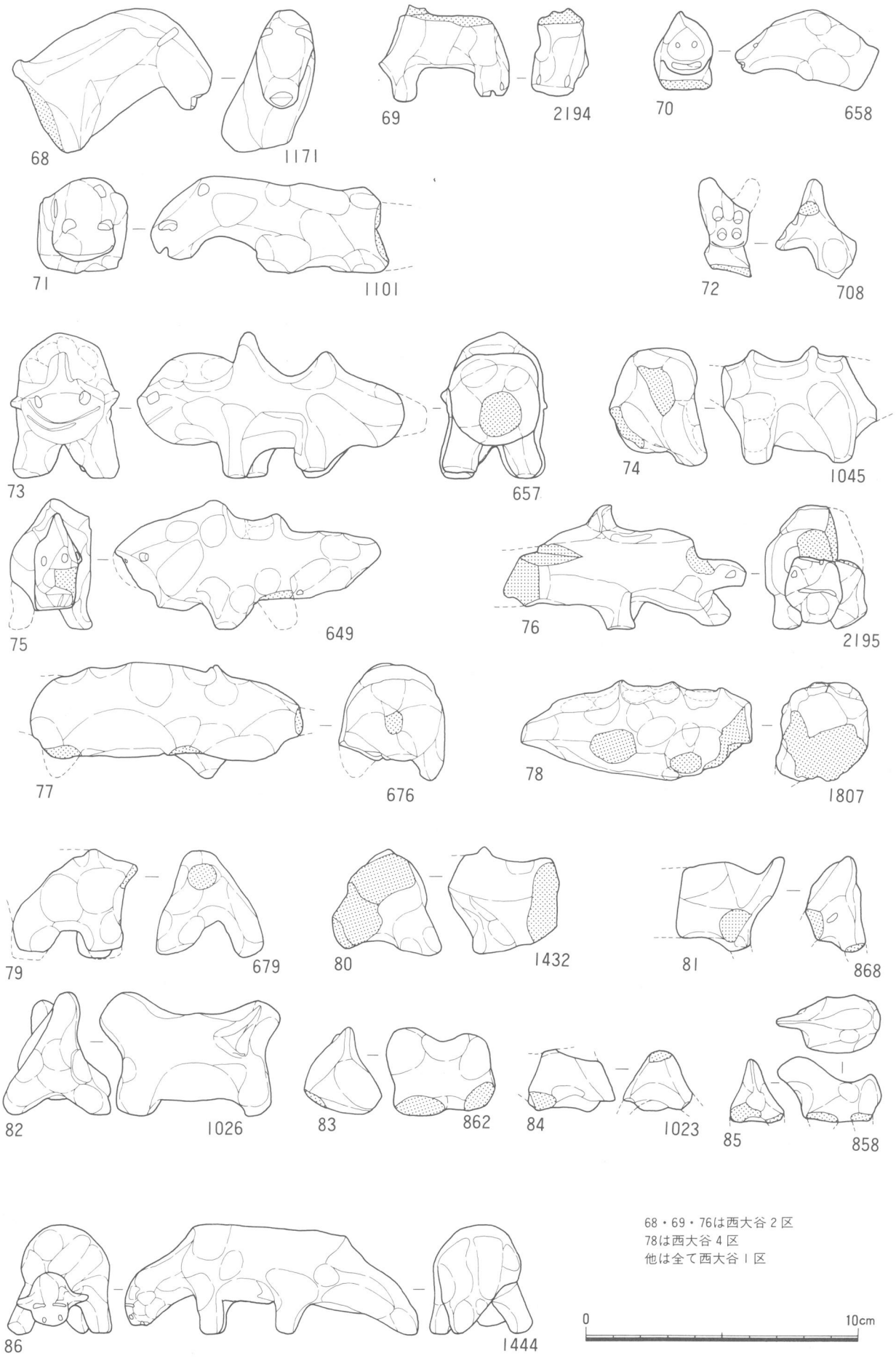
顔は細棒で刺突した4孔があり、その下にヘラ状器具で横方向に削って口をあらわしている。全長4.8㎝とかなり小型である。これらの特徴は宮川6区ＳＲ312Ｄ類のそれをあらわしている。61～64は頭部あるいは尾部を欠損するが、ほぼ同じ形態を示す。断面三角形を呈する胴部を基本に短めの脚が「ハ」の字状に貼付されている。背には鞍が存在しない。頭部・尾部の整形は欠損しているため明らかではないが、64は端部を指で押圧することにより偏平に仕上げている。これらは宮川6区ＳＲ312Ｄ類に比定されると考えられる。65は宮川6区ＳＲ312Ｅ類に比定される。三角柱状の胴部を基本とし、それぞれの角をわずかにつまみ出しただけの簡単なつくりである。66は胴部断面が逆ハート型を呈し、明確な首を有し頭部へと続いている。顔は細棒による刺突孔が4孔あり目と鼻の表現と考えられる。また頭部上端には耳状の突起もみられる。脚は別につくり貼付しているようで、尾は欠損するが指で両側から押圧してつくり出しているようである。いわゆる大和型土馬に若干似ており、宮川6区ＳＤ322出土の動物形土製品に通じる所がある。67は前述したように第89図25の人形土製品が共伴する。全長5.0㎝、幅3.6㎝高さ4.0㎝の完形品である。胴部の断面形は三角形に近くしっかりした四肢・頭部・尾部が貼付されている。顔は中央を頂点に両側面を面取りし、側面に串状の細棒による刺突孔が左右2対みられる。顔の先端には串状器具による細い線刻が2条あり口を表現している。頭部上端には左右1対の突起があり耳と考えられる。尾は全体の大きさに比し大きく、両側から指で押圧することにより整形されている。全体の印象は犬のようにも思えるがはっきりしない。前述したようにＳＲ813から出土しており古墳時代の土製品とは一線を画するようで、奈良時代～平安時代と考えてよいのかもしれない。水上7区では、この他に概に『大谷川Ⅱ』において報告済のＳＸ801出土の馬形土製品3点がある。おおむね宮川6区ＳＲ312Ｂ類に比定されるが、伴出土器より7世紀後半～末葉と推定され、年代を考える上では重要な資料である。

68～86は西大谷1.2区の旧大谷川内出土の動物形土製品である（78は西大谷4区）。68・69は比較的写実的なタイプで後半身を欠損する。68は頭部のみ残存する。首部背面の中央部を帯状につまみ出したてがみをつくり出し、欠損しているが端部には鞍状の突起もある。顔面は左右両面に幅0.4㎝、長さ1.0㎝ほどのヘラ状器具による溝状の削り込みがみられ、目の表現と考えられる。また顔面先端にも同じ削り込みがあり口を表現している。69は前半身のみの残存でありしかも左側1/3程度を欠く。顔は長方形を呈し、先端をヘラ状器具で切り込み口を表現している。口の上には棒状器具による刺突孔が左右1対あり鼻をあらわしていると考えられる。首部側面は直線的に仕上げられている。ヘラによる調整であろうか。脚は右前1本のみ残存する。径1.0㎝、長さ1.2㎝の棒状の短めの脚である。68・69とも胴部の方向軸とは異なる縦長の顔を有し全体のつくりもていねいである。これらの特徴は宮川6区ＳＲ312Ａ類と一致し、頭部付近しか残存していない点でも共通している。70も頭部片のみ残存する。68・69にくらべ頭部と胴部の角度がゆるやかで、背面にたてがみを有しヘラ状器具で切り込んだ口と棒状器具の刺突による鼻を表現した2孔がみられる。71は後部1/3ほどを欠損する。胴部は断面横長の隅丸長方形を呈し、首部はやや細めにつくり方向を変えて頭部へと続いている。顔部は先端にヘラ状器具による切り込みで口が表現され、口の上方に1対、上端の両側面に2孔の刺突孔がみられる。それぞれ鼻と目の表現と考えられるが、孔の断面がハート形をしている。首部の両側面に長方形の偏平な粘土が貼付され耳をあらわしてい

るものと考えられる。胴部背面には凹凸があり鞍が貼付されたような痕跡があるがはっきりしない。四肢は耳と同じように偏平な粘土を貼付しているだけで0.5㎝ほどの長さしかない。70・71ともに頭部を胴部の方向と変えて明確につくり出している点は68・69に似るがややつくりが雑である。72は頭部のみ残存する。顔面は横から見ると三日月状で中央に0.3～0.4㎝ほどの棒状器具による刺突孔が4箇所みられる。目と鼻の表現であろう。頭部上端は二又状に突起しており耳をあらわしているのであろう。下部先端には串状の細棒による線刻があり口をあらわしている。全体の形状はわからないが本遺跡出土の土製品の中では特異であると言えよう。73～78は棒状の胴がそのまま頭部へと連続するタイプで背に鞍を有する。宮川6区SR 312 B類におおむね比定される。73は尾部を若干欠くだけでほとんど完形品である。鞍とたてがみに特徴がありそれぞれかなり幅広い粘土を貼付している。顔は棒状器具による2つの刺突孔で目をあらわし、口は串状の器具による2条の線刻で表現している。顔部両側面に指の押圧によりつくり出された水平方向の突起があり耳の表現と考えられる。断面円形の短めの脚が貼付されている。74は頭部・尾部を欠損する。背の鞍はつまみ出してつくられている。75は縦長の偏平の頭部が特徴である。頭部背面は鋭角に尖りたてがみを意識しているものと考えられる。顔面は側面に左右1対の刺突孔がみられ目の表現と考えられるが、中央にある1孔は何を表現したものかはっきりしない。顔部下端はヘラ状器具で溝状に削り取ってあり口をあらわしているものと考えられる。鞍はつまみ出されているようで、四肢は別につくり貼付されている。胴部下面には尻穴と考えられる刺突孔もみられる。76は後半身と前半身の左側部分を欠損する。顔に特徴があり口は上下二股に分かれる。上部には左右1対径0.1㎝ほどの刺突孔があり目の表現と考えられる。上下に割れた口をもつ動物形土製品は宮川4区SR 56でも出土している（第39図）。SR56のものは背ビレのようなものだけで鞍がないのに対し76は明確な鞍を有する。74・77・78はそれぞれ頭部を欠損する。鞍はいずれも胴部粘土をつまみ出してつくっているようである。

79～85は顔や鞍の表現がほとんどみられないタイプで宮川6区SR 312 D～E類に比定される。82は全長6.6㎝の完形品である。胴部は断面三角形を呈し、これに四肢と頭・尾を貼付しているようである。頭部と尾部はどちらが頭なのかはっきりしないが、片方は幅広で偏平であり、もう一方は丸くつくられている。脚は棒状に断面円形につくられているものと断面三角形に近いものがある。83は断面三角形の胴部を基本に頭・尾を指で押圧して偏平につくり出し、四肢は少し粘土を貼付しているようである。84・85も83とほぼ同様の特徴を示すが、83より少さく85は尾がかなり長い。83～85は宮川6区SR 312 E類に比定される。79～81は欠損部分が多く全体の形状は明確でないが鞍などのはっきりした表現はないようである。82を含め79～82は宮川6区SR 312 D類のうち顔の表現のないものと一致するようである。

86はその形状から牛形土製品と考えられる。全長10.7㎝、高さ3.9㎝、幅3.8㎝で右後脚だけを欠損している。断面が径3㎝ほどの胴部は長さ5.5㎝で、両端に別につくった頭部と尾部を貼付している。脚は0.9㎝、長さ1.1㎝ほどであり、尾の先端と三本の脚は接地している。首部から頭部は斜め下方に伸び、頭部側面には水平に円すい状の突起が左右1対貼付されている。耳あるいは角の表現であろうか。目は串状器具で線刻し、鼻は細棒で刺突して2孔をもうけ、口はヘラ状器具で切り込んでいる。尾は胴部からそのまま連続しているため太くて長い印象を受ける。全体に調整がていねいで表面はきれいにナ



第97図　動物形製品実測図5

デられている。

ま と め

以上本遺跡出土の動物形土製品を紹介したが、その形態は多岐にわたり210点の土製品を有機的に論ずるのは困難である。最も多数を出土した宮川6区ＳＲ312の資料を形態分類し、他の地区出土の資料を比較することにより検討してきたがここで年代を推定するのに参考になる資料をまとめてみることにする。

宮川6区ＳＲ312Ａ類に比定されるもののうち土器の伴出関係が明確な資料に宮川3区ＳＸ478出土の馬形土製品（28）がある。伴出した須恵器から6世紀末葉と考えられる。本遺跡出土の土器が伴出した動物形土製品としては最も古いと考えられる。特徴としては他の形態の土製品にくらべ偏平で頭部は胴部と方向を変え下方に向いている。宮川6区ＳＲ312Ａ類の馬形土製品が頭部片しか残存していないため全体の形状はわからないが、下方に向いた偏平な頭部は宮川3区ＳＸ478の資料と共通する。宮川6区ＳＲ312Ａ類に代表される頭部が下方に向き縦長の顔を有する馬形土製品は西大谷2区にもみられ（68・69）、古い要素とみてよいのであろう。これらに近いものに宮川3区ＳＸ479出土の資料がある。ＳＸ479出土の馬形土製品は2形態に分かれる。第16図で1・2としたものは埴輪馬をほう佛させる形状であり頭部は胴部とは方向を変え明確につくり出されている。先述した宮川6区ＳＲ312Ａ類に通じる形態なのであろう。興味深いのは共伴した3・4の馬形土製品が似ても似つかないほど形態が異なる点である。頭部は胴部からそのまま続き端部は丸くつくられている。背に鞍がなければ外見上は馬とは到底考えられない。1・2の馬形が写実的なのとは対照的である。3・4の馬形土製品は宮川6区ＳＲ312のＢ類に似る。ＳＸ479出土の須恵器が7世紀前半と考えられることから、この時期には宮川6区ＳＲ312のＡ類のように写実的な馬形と、Ｂ類的な外見上馬とは考えられない雑なつくりの馬形が共存することになる。

宮川6区ＳＲ312Ｂ類に比定される馬形土製品に水上7区ＳＸ801出土の資料がある（『大谷川Ⅱ』）。ＳＸ801はH76グリッドの遺物集中部である。土師器坏31点と同甕1点、手捏土器1点に馬形土製品4点が伴出した。馬形土製品は断面円形の胴がそのまま頭部となり背に鞍が貼付されている。宮川6区ＳＲ312Ｂ類の特徴を示すが顔には目・鼻・耳などの表現はみられない。出土した土師器は7世紀後半～末葉と推定される。なお宮川6区ＳＲ312Ｂ類に比定される馬形土製品は宮川6区旧大谷川内出土の4点（21～24）、宮川5区出土の2点（26・27）、宮川3区出土の2点（29・30）、宮川4区出土の5点（31～35）、宮川2区出土の5点（40～44）、水上7区出土の6点（51～56）、西大谷地区出土の6点「73～78）などがある。これらのうち顔面に表現のあるものとないものがある。先述した宮川3区ＳＸ479出土のＢ類に近い顔の表現のある馬形土製品が7世紀前半代と考えられ、顔の表現のない水上7区ＳＸ801出土の馬形土製品は7世紀後半～末葉と推定されることから、表現がないものは新しい要素と考えてよいと思われる。これらのことから宮川6区Ｂ類に比定される馬形土製品は7世紀前半代にあらわれ、7世紀後半代に盛行するのではないかと考えられる。

宮川6区ＳＲ312Ｃ類に比定されるものは小数である。水上10区の45・46、宮川6区の25ぐらいがそ

の例であるが、Ｂ類にくらべやや小さめで背に鞍をもち頭部を明確につくり出すという特徴だけからすれば水上７区58・59なども含まれる。このうち前者（宮川６区ＳＲ312Ｃ類も含む）は手法的にはＢ類とほとんど差異はなく、後者は背に鞍があるという違いだけで宮川６区ＳＲ312Ｄ類に近い。

宮川６区ＳＲ312Ｄ類に比定されるものに宮川６区ＳＲ314の16・17、水上７区の60～64、西大谷地区出土の79～82がある。これらは顔の表現のあるもの（ＳＲ312の18・20・21・24、ＳＲ314の16・17、水上７区の60）とないものに分かれる。Ｄ類は正面から見ると背を頂点に二等辺三角形状を呈するのが特徴であるが、顔の表現がないものについては脚が長いだけでＥ類に似る。

Ｃ類・Ｄ類ともに土器の伴出関係が明確で年代が推定できる資料は残念ながら見あたらない。先述したようにＣ類にはＢ類に近いものとＤ類に近いものがあり、Ｄ類のうち顔の表現のないものはＥ類に似る。年代的な根拠はないがＣ類・Ｄ類はＢ類とＥ類の中間に位置するとしてよいのかもしれない。また、藤枝市郡遺跡出土の土馬がＣ・Ｄ類に類似しており奈良時代の須恵器を伴っているという。年代的な参考になると考えられる。(2)

宮川６区Ｅ類は一見三角柱の土の塊にしか見えない。類例は、宮川６区ＳＸ339の２～８、宮川６区ＳＲ314の18・19、水上10区ＳＰ759の49、水上７区の65、西大谷地区の83～85がある。このうち水上10区ＳＰ759は長径1.52㎝、短径1.34㎝の円形プランを有し、深さ0.38ｍを測る土坑で、土師器坏と須恵器片が共伴した。形状が認識できる土師器坏から８世紀代と推定された。土製品（49）は頭部・尾部を次くが、胴部は三角柱状でＥ類に近い。49が他のＥ類に比定されるものより大きめで少し長い脚がつく可能性があることを考えればＥ類を８世紀以降と考えてよいのではないかと思われる。

宮川６区ＳＲ312の各類に比定できない動物形土製品もみられる。宮川６区ＳＤ322の９～11は前述したように平城京右京八条西一坊々間大路西側溝ＳＤ920出土の第Ⅶ型式の土馬に似る。手法上では違いがあるが本遺跡では唯一の「大和型土馬」との接点である。同形態のものは宮川４区でも１点(36)出土している。また類似したものに水上７区の66がある。平城京第Ⅶ型式の土馬が９世紀前半代の土器を伴っていることから、ＳＤ322が灰釉陶器片を伴出していることも考え合わせ平安時代と考えられる。またこれらの動物形土製品に近い水上７区67や宮川４区37も新しい要素と考えてよいであろう。

その他では宮川２区38・39、西大谷地区の72のように頭部片だけで特殊な形をしたものもみられる。また最も大きく写実的な水上７区50などは特別な意味をもっているのかもしれない。

（１）奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984

（２）藤枝市教育委員会『静岡県藤枝市郡遺跡発掘調査概報Ⅲ』1986

動物形土製品一覧表

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	長さ・高さ・幅			調査・表現	備考	図番号
1	宮川6区	F 103	S R 312	3－57	(3.2)	(3.75)	3.8		頭、尾、脚2本欠	24
2	〃	〃	〃	3－61	(4.45)	(3.4)	(5.3)		2/3残存	
3	〃	〃	〃	3－108	(5.45)	4.25	4.1	口、顔2孔、尻穴	尾、脚2本欠	21
4	〃	〃	〃	3－112	(3.9)	(2.35)	(3.9)		頭、尾欠	32
5	〃	〃	〃	3－114	2.4	1.45	(2.0)		頭、脚1本欠	37
6	〃	G 103	〃	3－117	4.6	3.35	(2.9)		頭、脚2本欠	29
7	〃	〃	〃	3－116	4.3	2.95	(2.5)		脚3本欠	33
8	〃	F 103	〃	3－213	(3.8)	(2.75)	4.7		頭、尾欠	30
9	〃	〃	〃	3－214	(3.35)	(2.8)	(3.35)		頭、尾、脚2本欠	31
10	〃	〃	〃	3－217	(3.4)	2.8	3.25		頭、尾欠	34
11	〃	〃	〃	3－215	2.7	(2.5)	2.6		頭、尾、脚3本欠	35
12	〃	〃	〃	3－581	(2.9)	2.35	(1.5)		頭先端、尾先端、脚先端欠	36
13	〃	〃	〃	3－586	(3.9)	3.0	(2.4)	口、顔6孔	1/2残存	25
14	〃	〃	〃	3－591	(4.6)	(3.3)	(3.9)	尻穴	頭、尾、脚2本欠	27
15	〃	〃	〃	3－593	(5.95)	(4.3)	(4.1)	鞍、尻穴	頭、尾、脚1本欠	18
16	〃	〃	〃	3－595	7.15	(2.2)	(2.05)		脚4本欠	12
17	〃	〃	〃	3－596	7.7	2.25	2.6	鞍	完形	11
18	〃	〃	〃	3－644	(5.3)	(5.2)	(2.5)	口、顔6孔、耳	1/3残存	1
19	〃	〃	〃	3－646	(4.45)	(4.65)	(3.45)		頭、尾、脚2本欠	
20	〃	〃	〃	3－649	(3.0)	(1.5)	2.25		頭、尾、脚1本欠	
21	〃	〃	〃	3－652	(6.3)	(5.15)	4.55	口、顔4孔、鞍	1/3残存	7
22	〃	〃	〃	3－678	(4.7)	3.85	3.7	口、顔4孔、耳、鞍	1/3残存	16
23	〃	〃	〃	3－722－2	(2.1)	(2.6)	(1.3)	口カ、顔2孔	頭部のみ残存	
24	〃	〃	〃	3－725	(3.55)	4.1	(4.6)		1/3残存	
25	〃	〃	〃	3－726＋734	(11.4)	4.5	(4.2)	口、顔4孔、鞍	脚3本欠	4
26	〃	〃	〃	3－727	(6.1)	4.05	3.55	鞍、尻穴	頭、尾、鞍脚4本欠	
27	〃	〃	〃	3－735	8.3	(2.9)	(2.65)	口、顔4孔	脚4本欠	19
28	〃	〃	〃	3－749	(7.25)	4.0	(3.25)	口、顔2孔(顔が逆)、鞍	脚3本欠	10
29	〃	〃	〃	3－750			5	口、顔3孔、耳、鞍カ	2/3残存	8
30	〃	〃	〃	3－751	(9.35)	(4.0)	(4.85)		1/2残存	
31	〃	〃	〃	3－759	(4.65)	(2.45)	2.3	口、顔3孔	頭部のみ残存	
32	〃	〃	〃	3－767	(3.25)	(2.8)	(2.05)		頭、尾、脚1本欠	
33	〃	〃	〃	3－776	3.3	(1.8)	3.1	口カ、尻穴	頭先端、脚1本欠	26
34	〃	〃	〃	3－777	4.5	3.35	3.55		脚3本欠	
35	〃	〃	〃	3－820	4.35	3.7	(2.5)	尻穴	頭、脚3本欠	
36	〃	〃	〃	3－825	(4.3)	(2.95)	(2.55)	顔2孔	尾、脚3本欠	17
37	〃		〃	3－826	(5.3)	4.3	(3.55)		脚2本欠	
38	〃	〃	〃	3－827	(3.25)	2.5	2.9		頭、尾、脚1本欠	23
39	〃	〃	〃	3－906	4.25	3.0	3.1		頭、尾、脚2本欠	20
40	〃	〃	〃	3－908	(5.85)	(2.9)	(2.65)	鞍	頭、尾、脚2本欠	9
41	〃	〃	〃	3－910	(7.2)(7.5)	(4.4) 4.6	3.85 (3.45)	顔2孔、鞍	顔、脚3本欠、尾欠	13
42	〃	〃	〃	3－913				尻穴	頭、脚3本欠	
43	〃	〃	〃	3－994	(3.45)	(3.25)	(3.0)	尻穴	頭部先端欠	28
44	〃	〃	〃	3－998	4.5	(3.2)	3.05	口、顔4孔	1/3残存	3
45	〃	〃	〃	3－2003	(3.25)	(3.85)	(2.3)	鞍、尻穴カ	1/2残存	
46	〃	〃	〃	3－2006	(4.75)	2.95	(2.45)		頭、尾、脚1本欠	
47	〃	〃	〃	3－2007	3.85	(2.0)	3.6		頭カ、脚3本欠	

番号	地区	グリッド	遺跡・層位	遺物番号	長さ・高さ・幅			調査・表現	備考	図番号
48	宮川6区	F 103	S R 312	3－2011	(3.6)	(2.15)	(2.25)	口、頭2孔、耳	頭部のみ	
49	〃	〃	〃	3－2034	(2.5)	(2.1)	(2.3)		頭、尾、脚4本欠	
50	〃	〃	〃	3－2045	(4.15)	(3.7)	(1.65)	口、顔6孔、耳	頭部のみ	2
51	〃	〃	〃	3－2052	(3.45)	3.9	(2.85)		脚2本欠	
52	〃	〃	〃	3－2053	(8.6)	4.7	4.6	口、顔4孔、耳	尾、脚2本欠	6
53	〃	〃	〃	3－2054	(4.3)	(2.65)	(2.05)	顔1孔	顔右側、脚1本欠	22
54	〃	〃	〃	3－2387	(3.9)	(1.85)	(2.35)	鞍	⅓残存	
55	〃	〃	〃	3－2388	(3.15)	(2.8)	(2.3)	鞍、口、顔1孔	頭部のみ	
56	〃	〃	〃	3－2392	(6.65)	(2.55)	(2.45)	鞍	⅓残存	
57	〃	〃	〃	3－2399	(4.9)	(4.0)	4.2		尾または頭、脚1本欠	
58	〃	〃	〃	3－2401	(7.35)	(3.9)	(3.6)	鞍、口、顔2孔、耳	½残存	5
59	〃	〃	〃	3－2410	3.75	(2.15)	(3.65)		頭、尾、脚2本欠	
60	〃	〃	〃	サ－8	3.3	2.9	(2.3)		足3本欠	
61	〃	〃	〃	サ－9	(5.05)	4.9	(2.75)	鞍、顔4孔、耳	尾、脚3本欠	15
62	〃	〃	〃	サ－10	(3.85)	(2.55)	3.65		½残存	
63	〃	〃	〃	サ－11	(5.35)	(3.5)	(2.45)	鞍	頭、尾、鞍脚4本欠	
64	〃	〃	〃	サ－14	(4.15)	(2.6)	(2.4)	尻穴	頭、尾、脚4本欠	
65	〃	〃	〃	3－33－2	8.65	(4.1)	(3.4)	口、顔2孔	脚3本欠	14
66	〃	〃	〃	3－31－2	(3.85)	2.85	3.4		頭または尾脚2本欠	
67	〃	F 104	S X 339	3－58	4.25	3.8	4.75		脚1本欠	2
68	〃	〃	〃	3－402	(4.95)	(4.45)	(4.2)	鞍ヵ	⅓残存	
69	〃	〃	〃	3－403	(3.3)	(1.85)	2.4		頭、尾、脚3本欠	8
70	〃	〃	〃	3－404	(4.25)	(4.65)	(5.45)	鞍	⅓残存	
71	〃	〃	〃	3－406	(2.9)	(1.95)	(3.3)		½残存	
72	〃	〃	〃	3－408	(3.25)	(2.3)	(2.2)		頭、尾、脚2本欠	7
73	〃	〃	〃	3－414	(3.65	(2.8)	(3.1)		頭、尾、脚2本欠	4
74	〃	〃	〃	3－418	(4.1)	(2.5)	(2.9)		頭、尾、脚1本欠	5
75	〃	〃	〃	3－423	(4.15)	(2.8)	(3.6)		頭、尾、脚2本欠	3
76	〃	〃	〃	3－432	(3.3)	(2.3)	(2.0)		頭、尾、脚2本欠	6
77	〃	〃	〃	3－436	(9.45)	(5.4)	5.5		頭、脚2本欠	1
78	〃	〃	S D 322	3－345	7.1	(4.9)	5.55		後頭部欠	9
79	〃	〃	〃	3－350	6 2	4.05	(4.0)		脚1本先端欠	10
80	〃	〃	〃	3－337	4.15	2.7	(2.95)		脚2本欠	11
81	〃	〃	〃	3－348	(6.45)	(4.8)	(5.45)		½残存	12
82	〃	〃	〃	3－341	(2.8)	(1.85)	(2.35)		⅓残存	
83	〃	〃	〃	3－351	(3.15)	(2.05)	(2.85)		頭、脚3本欠	
84	〃	〃	S R 314	3－426	(3.45)	(2.7)	(2.95)		頭、尾、脚3本欠	19
85	〃	E 104	〃	3－2562	(7.5)	(3.9)	(3.75)	顔1孔、鞍	頭、脚4本欠	14
86	〃	E 105	〃	3 2526	(5.15)	(2.45)	(2.65)	口ヵ、顔2孔	½残存	
87	〃	E 104	〃	3－930	(5.45)	(4.05)	(4.3)	尻穴	頭、尾、脚3本欠	
88	〃	〃	〃	3－924	(4.8)	(2.85)	(2.65)	口、顔2孔	尾、脚4本欠	17
89	〃	〃	〃	3－2197	6.4	3.8	3.6	口ヵ、顔4孔	完形	16
90	〃	E 105	〃	3－2525	8.8	6.45	5.35	口、顔3孔	脚1本欠	15
91	〃	E 104	〃	3－2499	4.0	2.75	3.5		完形	18
92	〃	〃	〃	3－2188	(11.35)	(3.8)	(2.55)	口、顔4孔、耳、鞍、尻穴	尾、脚4本欠	13
93	〃	E 105	〃	3－2527	(3.4)	(5.1)	(3.75)	口、顔2孔	頭右半分残存	
94	〃	G 103	S R 313 上層	3－895	7.0	(3.7)	(3.45)	鞍	脚4本先端欠	
95	〃	〃	〃	3－2241	5.65	(3.4)	(2.65)	鞍ヵ	脚4本欠	
96	〃	D 106	S R 316	3－2418	15.75	(4.8)	(4.1)	口、耳、鞍	脚4本欠	21

番号	地　区	グリッド	遺物・遺構	遺物番号	長さ・高さ・幅			調査・表現	備　考	図番号
97	宮川6区	C 107	SR 316	3－947	12.4	(3.15)	(3.1)	口、顔2孔、鞍	鞍先端、尾先端、脚4本欠	23
98	〃	G 102	SR 311	3－514	(5.0)	4.1	4.1	口、耳	⅓残存	20
99	〃	〃	暗灰色砂層	3－2482	(13.0)	4.8	3.85	口、顔3孔、耳、鞍、尻穴	尾先端、脚2本欠	22
100	〃	F 104	緑灰色砂層	3－2115	6.1	4.25	(3.0)	顔2孔、鞍	脚3本欠	25
101	〃	F 103	〃	3－2260	(5.45)	(2.5)	(3.2)		½残存	
102	〃	E 105	暗灰色粘土層	3－181	(7.15)	(3.05)	(2.8)	鞍	½残存	
103	〃	G 103	緑灰色混砂粘土	3－233	(6.65)	4.45	(3.6)	口、顔6孔、鞍、尻穴	後輪、尾、脚3本欠	24
104	〃	F 103	暗緑灰色粘土	3－60	(3.4)	(2.8)	(2.8)		頭ヵ、脚4本欠	
105	〃	F 104	緑灰色粘土層	3－340	(3.8)	(2.6)	(2.35)		頭または尾、脚4本欠	
106	〃	F 102	〃	3－557－1	(3.25)	2.75	2.55		尾または頭、脚1本欠	
107	〃	F 104	暗緑灰色粘土	3－62－1	(5.4)	(4.0)	(3.5)	鞍	⅓残存	
108	〃	F 103	緑灰色砂層	3－354－2	(2.95)	(2.4)	(2.25)		尾、脚4本欠	
109	〃	〃	〃	3－354－3	(3.35)	2.5	(4.05)		頭、尾、脚3本欠	
110	〃	〃	〃	3－481－2	(3.45)	(2.0)	(1.5)		½残存	
111	〃	G 102	緑灰色粘土層	3－834－1	(8.6)	(3.65)	(4.0)	鞍	頭、尾、鞍、脚4本欠	
112	〃	E 104	緑灰色砂層	3－2086	(2.7)	(2.3)	(2.4)	尻穴	頭、脚2本欠	
113	〃	F 103	暗灰色砂層	3－2936－1	(3.45)	(5.1)	(3.8)		頭部のみ残存	
114	〃	G 103	?	3－2933－3	(4.4)	(4.3)	(3.3)	鞍	⅓残存	
115	宮川5区	B 108	暗灰色粘土層	3－45	(7.4)	(3.45)	(2.75)	口、顔2孔	½残存	27
116	〃	〃	SR 201	3－88	(7.6)	3.15	(2.75)	鞍	脚3本欠	26
117	〃	A 108	〃	3－258	(6.7)	(2.85)	(3.4)		½残存	
118	〃	B 107	褐色砂礫	3－587	(3.95)	(2.45)	(2.35)		½残存	
119	〃	C 102	SE 217	3－529	(4.8)	(2.95)	(2.8)	鞍	½残存	
120	宮川2区	I 100	灰色粘土	335－1	(5.65)	4.7	(3.3)	口、顔6孔、鞍	½残存	41
121	〃	〃	〃	422	(6.25)	4.1	(3.25)	口、顔6孔、鞍、尻穴	尾、脚3本欠	42
122	〃	〃	〃	335－3	10.1	5.3	(3.8)	口、顔6孔、鞍、尻穴	脚2本欠	40
123	〃	〃	〃	701	(7.7)	(3.0)	(4.1)	口、顔4孔、鞍	½残存	43
124	〃	G 102	〃	424	(4.65)	(4.1)	(2.95)	口、顔4孔、耳	頭部のみ残存	39
125	〃	I 100	〃	423	(3.8)	(3.8)	(2.85)	口、顔4孔、耳	頭部のみ残存	38
126	〃	〃	〃	335－2	(6.5)	(3.25)	3.4	鞍	½残存	44
127	宮川3区	H 96	SX 479	3－312	(4.8)	(3.6)	(3.2)	口、顔4孔、耳、鞍	⅓残存	3
128	〃	I 96	〃	3－352	(3.7)	(2.75)	(1.85)	口、顔4孔	顔のみ残存	
129	〃	H 96	〃	3－368	(6.85)	(2.6)	(3.9)	顔2孔、耳、鞍	⅓残存	4
130	〃	〃	〃	3－392	9.7	5.75	3.65)	口、顔4孔、耳、鞍尻穴	完形	1
131	〃	I 96	〃	3－1884	(4.5)	(6.15)	(3.5)	耳、鞍、顔2孔	⅓残存	
132	〃	〃	〃	3－2739	(5.3)	5.5	3.6	口、顔4孔、耳、鞍	½残存	2
133	〃	H 96	灰黄色粘土層	3－292	(5.8)	(2.55)	(3.65)	鞍、尻穴	¼残存	
134	〃	〃	〃	3－300	(7.1)	(4.85)	(4.2)	口、顔4孔、耳、鞍	½残存	29
135	〃	I 96	茶色粘土層	3－337	(7.0)	(3.4)	(2.9)	鞍、尻穴	⅓残存	
136	〃	H 96	SX 478	3－358	(9.3)	5.65	(2.9)	口、顔4孔、耳、鞍	尾、脚3本欠	28
137	〃	J 94	SR 486	3－441	(7.1)	(4.2)	(2.8)	顔2孔	½残存	30
138	宮川4区	M 94	SR 56	3－1157	(9.05)	4.1	3.8	口、顔2孔、尻穴	尾先端欠	5

番号	地　区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	長さ・	高さ・	幅	調査・表現	備　考	図番号
139	宮川4区	M 94	S R 56	3－1158	9.8	3.4	(4.1)	口、耳カ	脚2本、右耳カ欠	4
140	〃	M 95	〃	3－1160	(9.25)	3.7	3.85	口、顔2孔、耳カ	尾欠	2
141	〃	M 94	〃	3－2226 3 ＋1161	(6.85)	3.1	(2.4)	口、顔2孔	½残存	6
142	〃	〃	〃	3－1162	10.2	4.2	(4.25)	口、耳カ、尻穴	左耳カ、脚2本欠	
143	〃	M 95	〃	3－1170	(8.38)	3.5	(4.1)	口、顔2孔、耳カ	左耳カ、脚2本、尻欠	
144	〃	N 94	〃	3－640	(11.2)	5.9	(3.95)	鞍、尻穴	頭、脚3本欠	7
145	〃	O 94	S R 54	3－173	(5.95)	3.4	(3.0)	口、顔2孔、鞍	尾、脚2本欠	34
146	〃	〃	〃	3－194	6.3	3.3	3.75	口、顔2孔、鞍	ほぼ完形	33
147	〃	N 93	S R 55	3－1943	(2.65)	(3.25)	(3.25)		⅓残存	
148	〃	I 100	暗灰色粘土混砂礫	3－2807	(8.3)	(3.25)	(3.45)	口、顔4孔、耳、鞍、尻穴	尾、鞍、脚3本欠	32
149	〃	〃	〃	3－2808	(3.7)	4.1	(3.25)		½残存	36
150	〃	J 99	暗灰色粘土層	3－2730	5.8	4.2	(2.95)	口、顔4孔、耳、尻穴	脚3本欠	37
151	〃	〃	〃	3－2731	(4.6)	(2.3)	(2.9)	口、顔2孔、鞍	⅓残存	
152	〃	K 97	粘土混り砂礫	3－2465	10.5	5.0	4.6	口、顔4孔、鞍、尻穴	ほぼ完形	31 35
153	〃	J 99	暗灰色粘土	3－2985	(5.95)	(4.4)	(3.6)	口、顔4孔、鞍	½残存	
154	〃	I100～J100	粗砂粘土混砂礫	3－3130	(5.25)	(2 9)	(2.8)	口、顔2孔、鞍、耳	尾、脚4本欠	
155	水上10区	E 77	S P 759	3－1082	(5.0)	(3.7)	(4.2)		頭、尾、脚4本欠	49
156	〃	E 76	S D 765 下層	3－1168	(4.2)	(2.8)	(4.55)		頭、脚2本欠	
157	〃	〃	〃	3－1167	(8.3)	(3.1)	(2.45)	口、鞍カ、顔4孔カ	⅔残存	
158	〃	〃	〃	3－1166	(3.9)	(2.4)	(1.6	口カ、顔4孔	頭部のみ残存	48
159	〃	G 71	客土中	3－331	9.3	5.8	(3.3)	口、顔4孔、耳、鞍、尻穴	脚3本欠	45
160	〃	G72～73	〃	3－1112	(6.3)	(4.5))	(4.4)	顔2孔、耳カ、鞍	½残存	46
161	水上9区	B－90	〃	3－224	(7.4)	(2.55)	(2.1)	目、耳カ	尾、	47
162	〃	C－91	〃	3－225	(4.2)	(1.7)	(1.85)	顔2孔	頭部カのみ残存	
163	〃	B－90	〃	3－21	(7.5)	(2.2)	(2.95)	鞍、尻穴	頭、脚4本欠	
164	水上7区	H 76	S X 801	3－764	9.6	(3.95)	(3.3)	鞍	脚4本	
165	〃	〃	〃	3－773	10.55	(4.95)	(4.95)	鞍、天地逆カ（上下に突帯2つ	鞍、脚欠損	
166	〃	〃	〃	3－775－1	12.1	(4.7)	(4.25)	鞍	脚4本欠	
167	〃	〃	〃	3－775－2	4.95	(3.65)	(4.25)	口カ、顔6孔、鞍	½残存	
168	〃	J 70	旧大谷川砂礫層	3－1395	(5.6)	5.8	(4.6)	顔4孔	尾、脚2本欠	67
169	〃	〃	〃	3－217	5.05	4.05	3.6	口（2刻）、顔4孔、耳	完形	66
170	〃	J 71	〃	3－687	(3.8)	(3.75)	(3.1)		頭、脚3本欠	62
171	〃	I 71	〃	3－460	8.55	(2.75	(2.8)	口、顔2孔、鞍カ	脚4本欠	55
172	〃	〃	〃	3－461	(9.5)	(2.25)	(3.15)	口、顔4孔、鞍、尻穴	鞍、尾、脚4本欠	54
173	〃	I 72	〃	3－349－1	(4.5)	(3.05)	(3.4)		頭カ　脚3本欠	64
174	〃	〃	〃	3－349－3	(4.9)	(3.75	(3.2)		頭、尾、脚2本欠	63
175	〃	〃	〃	3－340	7.45	3.4	(3.4)	口、顔4孔、鞍	脚3本欠	58
176	〃	〃	〃	3－1021	(5.1)	(3.25)	(2.4)	鞍	頭、尾、脚4本欠	59
177	〃	〃	〃	3－1020	(14.7)	6.0	(4.7)	鞍	頭、脚1本欠	51
178		I 74	〃	3－1065	(8.0)	4.65	(3.85)	鞍、尻穴	頭、後輪、脚1本欠	52
179	〃	I 72	〃	3－1061	(6.25)	(4.25)	(3.6)	顔6孔、鞍カ	½残存	56

番号	地　区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	長さ・高さ・幅			調査・表現	備　考	図番号
180	水上7区	J 70	旧大谷川砂礫層	3－294	4.8	(2.5)	(1.9)	口、顔4孔	脚3本欠	60
181	〃	I 72	〃	3－227	(5.0)	4.4	(3.55)		頭、尾、脚2本欠	65
182	〃	〃	〃	3－733－1	(5.05)	(4.1)	(4.6)		頭、尾、脚2本欠	61
183	〃	H 76	〃	3－787	(8.3)	(7.1)	(5.4)	口、顔4孔、耳、鞍	½残存	50
184	〃	〃	〃	3－783	(9.9)	(5.25)	(5.85)	鞍、胴部に2孔	½残存	53
185	〃	J 71	〃	3－267	(5.15)	(4.1)	(4.05)		頭、尾、脚2本欠	
186	〃	〃	〃	3－259	(5.75)	(3.7)	(3.6)	口、耳、	½残存	
187	〃	I 72	〃	3－334	(4.75)	(2.3)	(2.0)	口、顔3孔	⅓残存	57
188	西大谷1区	D 41	〃	3572	(3.6)	(2.05)	(2.3)	口、顔2孔	頭部のみ残存	
189	〃	E 42	〃	657	(9.75)	5.25	3.95	口、顔2孔、鞍	尾欠損	73
190	〃	〃	〃	658	(5.25)	(2.9)	(2.2)	口、顔2孔	頭部のみ残存	70
191	〃	E 42	〃	649	9.65	4.65	(2.9)	口、顔3孔、鞍、尻穴	脚3本欠	75
192	〃	F 42	〃	676	(9.95)	(4.2)	3.85	鞍カ	頭、尾、脚3本欠	77
193	〃	〃	〃	679	(4.55)	(3.95)	3.9		頭、尾、脚3本欠	79
194	〃	〃	〃	708	(2.95)	(3.6)	(2.0)	口、顔4孔、耳カ	頭部のみ残存	72
195	〃	E 43	〃	858	3.85	(2.35)	(2.0)		脚4本欠	85
196	〃	〃	〃	862	(4.0)	(3.15)	(2.8)		脚4本欠	83
197	〃	〃	〃	868	(3.95)	(3.45)	(2.25)	尻穴	½残存	81
198	〃	E 43	〃	1023	(3.1)	(2.25)	(2.55)		頭、尾、脚4本欠	84
199	〃	E 43	〃	1026	6.6	4.5	4.05		完形	82
200	〃	F 43	〃	1045	(5.7)	4.15	(3.6)	鞍、尻穴	尾、脚2本欠	74
201	〃	F 43	〃	1101	(8.75)	3.45	3.3	口、顔4孔、鞍	尾欠	71
202	西大谷2区	D 44	〃	1171	(7.3)	(5.2)	(3.4)	口、顔2孔	頭部残存	68
203	〃	〃	〃	2194	(4.8)	(4.5)	(2.05)	口、顔2孔	¼残存	69
204	〃	〃	〃	2195	(8.9)	(4.55)	(3.75)	口、顔3孔、鞍	½残存	76
205	西大谷1区		第1トレンチ	1432	(4.05)	(3.9)	(4.0)	鞍	⅓残存	80
206	西大谷4区	R 21	粘土混り砂礫層	2－1807	8.45	(3.6)	(3.35)	鞍	頭、脚4本欠	78
207	〃	Q 23	黒色砂礫層	2－1571	(2.8)	(3.5)	(2.4)	口、顔4孔	¼残存	
208	西大谷地区		採集品	N－①	(5.35)	(3.0)	(2.75)	鞍	先端部欠損	
209	〃		〃	N－②	(5.6)	(3.15)	(5.0		頭カ、脚2本欠	
210	西大谷1区		第1トレンチ	1444	10.7	3.9	3.8		右後脚欠	86

◦ 計測値の( )は破片の現状での数値、単位はcm

3. 馬形木製品（第98図・第99回）

本遺跡では、総計34点を認定している。しかしこのほかにも可能性のあるものも多い。また逆に一応「馬形木製品」とはしたものの疑問の残るものも多い。今後の検討によって若干の数の移動は出るであろう。

1）形態

まずその形態であるが、一般的には、鞍を置いた飾馬（A類）と鞍を置かない裸馬（B類）とに分けられている。[1] 全国的には飾馬の類例は多く、現在集成している中でもほぼ半数あまりを占める。しかし、本遺跡においては飾馬はみられない。いずれも裸馬で、それも上部に背を表現したと思われるえぐり込みが一ケ所、下部に首および後ろ足を表現したと思われるえぐり込みが二か所認められるものが非常に多い。形態分類は全国的な視野に立って行なわなければならないが、とりあえず本遺跡の資料を紹介するにあたり、機械的に次のように形態分類してみた。

Ⅰ類　平行四辺形を基本形とする。

a　背のえぐりは大きく、一方の先端を垂直に切り落とし頭部を形つくっている。尾を大きく跳ね上げ頭部と尾部の区別は明瞭である。

b　平行四辺形のままで切り落としはないが、えぐりの位置および尾の跳ね上げにより頭部と尾部の区別は明瞭である。

c　全長に比べて高さのある平行四辺形である。厚さもなく、小型である。えぐり込みは上部に一か所、下部に二か所であるが、そのくり込みは小さい。

d　細長くえぐり込みはわずかに認められる程度である。頭部と尾部の区別は不明瞭である。

Ⅱ類　台形を基本形とする（逆台形の場合もある）

a　上部に一か所・下部に二か所のえぐり込みを持つ。えぐりの位置により頭部と尾部が意識されていたものと思われる。

b　上部に一か所・下部に二か所のえぐり込みを持つが、頭部と尾部は区別することは出来ず、意識されていたとはおもわれない。

c　上部に二か所・下部に二か所のえぐり込みを持つ。

d　全体に扁平になり、下部に二か所のえぐり込みを持つだけとなる。

e　下部に一か所のえぐり込みを持つ。

f　上部に一か所のえぐり込みを持つ。

g　逆台形となり上部に一か所のえぐり込みを持つ。

以上の様に、細かく11に細分したが、それぞれについて具体例をみながらその特徴を見てみよう。

Ⅰ－a　本遺跡の馬形の中では最も形の整ったもので、一方の先端を垂直に切り落とし明瞭に頭部を作り出している。10は頭部上部を若干欠失しているが、このタイプの典型である。下部は大きな二か所の切り込みの他に頭部を表現するための小さなくりこみが一か所認められ、本遺跡の馬形の中では最も形の整ったものの一つである。また12も頭部の表現は弱くなるがこのタイプに属するものであろう。

Ⅰ－b　変形の平行四辺形ともいうべきもので、尾部は若干丸みを帯びながら強く跳ね上がる。34は、下部のえぐり込みは一か所であるが明瞭に頭部をつくりだし、尾を大きく跳ね上げている。中央部が若干くぼんでいるが意図的なものかどうかは疑問が残る。

Ⅰ－c　14・25などがこの類に属する。えぐり込みは小さくなる。14では下辺に二か所上辺に一か所認められるが非常に小さい。上部のえぐり込みは中央ではなく若干片寄っており、頭部を意識しているものと思われる。25は欠損部分が大きいがほぼ平行四辺形である。上部の平坦面が若干傾斜しており、頭部を意識した可能性もある。

Ⅰ－d　細長いタイプのものである。頭部と尾部の区別は不明瞭である。17は棒を挿したと思われる穴があることから上下が判断される。上部のくり込みは片寄っており、これにより頭部を確定した。21は一応この類の中に入れたが、断面が丸みを帯びており、挿し込み穴も認められないので馬形でない可能性も残るものである。

Ⅱ－a　本遺跡では最も類例の多いもので、16・28などがその典型例である。上部に一か所、下部に二か所のえぐり込みを持つ。下部のえぐりはほぼ左右対象であるが、上部のえぐり込みは片寄っている。平坦面は小さい方を頭部、長い方を背から尾にかけてと考えるのが自然であろう。頭部を意識して製作したものと理解される。

Ⅱ－b　26・33などを典型例とするもので、頭部と尾部の区別を明瞭につけることはできない。26は全体に丸味を帯び、本遺跡では類例はない。33は挿し込み穴の位置が中央ではなく片寄っており、頭部・尾部が意識されていた可能性もある。なお１もこのタイプに属すると考えることもできるが、詳細に観察すると左右対称ではなく、一方の上部が平坦なのに対し他方は平坦ではなく三角となっている。またたてがみを表現したと思われる切り落としもあり、図の様に左側を頭部と認めている。なお、１は下部の切り込みに棒が挿さったまま出土したものである。

Ⅱ－c　９の様に上部に二か所、下部に一か所のえぐり込みを有するものである。しかし、このタイプのものは、他に類例もなく棒を挿す穴が確認されていないので、上下逆さになった逆台形を呈する可能性もある。

Ⅱ－d　24がその例で上部は一部欠失しているが、その状況からしてえぐりが入るとは考えられない。また、11は上部がわずかに凹みをなしていると観察されるが、不明瞭であるので一応この類に入れておいた。

Ⅱ－e　13のように、下部に一か所のえぐり込みを持つものである。13の場合、棒を挿すためのものと思われる切り込みが認められ、切り込みのある側を下部と理解したい。

Ⅱ－f　23のように上部に一か所のえぐり込みを持つものである。23の場合、挿し込みの穴は確認されていないが、台形を基本形とし上部のえぐりを背と理解した。３も下辺が不明瞭ではあるがこのタイプとしてよいであろう。

Ⅱ－g　Ⅱ－eの天地を逆にした形態を持つものである。15・19は明らかに棒を挿す穴が認められ、この辺を下部と理解せざるを得ない。この辺を下部と確定すれば逆台形となり、今まで見てきた中ではきわめて特異である。一応馬形の中に入れておくが、本当に馬を表現したものである

かどうかは疑問である。

2）出土状態

比較的まとまって出土しているのは、西大谷2区の旧大谷川（10点）、宮川4区のＳＲ55（5点）とＳＲ56（4点）、宮川6区のＳＲ312（3点）とＳＲ313（3点）である。いずれも、人形・刀形・斎串状木製品など他の祭祀遺物と共伴している。特にＳＲ313においては、流れの強い中央部分をはずれて左右の両岸寄りに木製品が集中し、人形・刀形・斎串状木製品などが折り重なって検出されている。

その組み合わせは、ＳＲ56（人形・馬形・刀形・斎串状木製品）、ＳＲ312（人形？・馬形・刀形？・舟形？・斎串状木製品）、ＳＲ313（人形・馬形・刀形・斎串状木製品）と基本的な組み合わせは変化がない。

3）用途

本遺跡の馬形木製品で最も注目されるのは、棒がささったまま検出されたことである。第　図の1がそれである。棒の長さは14.9㎝で下部より7.6㎝のところで折れ曲がっている。上部は挿し込み易いように、くさび形に削られている。山形県俵田遺跡において、その祭祀関係遺物の使用の状況が復元されているが、当遺跡の馬形もほぼこれに類した用いられかたをしたものと考えられる。すなわち、人面墨描土器（他の1例は須恵器小甕）の中に人形・斎串が立てられ、その周囲を人形および棒の挿さった馬形および斎串が押し立てられている。1に付属する棒が7.6㎝のところで折れ、また下端がささくれているのは地面に押し立てたことを推定させる。[(2)] また斎串の多くが、途中で折れ曲がっていたり、端部の破片のみであるのは、この推定を補強しよう。ただし、すべてが棒を挿して押し立てたのではなく、挿し込みのための穴ないしは切り込みの確認できないものも認められ、用法での変化が推定される。[(3)]

4）年代観

それぞれの遺構の年代観については、本報告において示した通りである。すなわち、ＳＲ56は6世紀中葉から7世紀中葉、ＳＲ312は6世紀後葉から10世紀ころまで、ＳＲ313は6世紀後葉から7世紀後葉までである。しかし、これをそのまま当てはめて、形態分類と組み合わせて、年代観を考えることは危険である。試みてはいるが、良い結果は得られていない。

本遺跡の場合、馬形木製品だけでなく、その他の祭祀関係の木製品を考える場合も同様であるが、次の2点が問題となる。第1は流路からの出土資料であることである。遺構として扱ってはいるが、旧の流路の中での遺物のまとまりであり、住居跡の一括資料とはそのありかたはおのずから異なる。これに伴って問題となるのは、材質が木であることである。「木は浮き移動する」との指摘についてはその反証を挙げることはなかなか難しい。

第2点目は類例に乏しいことである。金子裕之氏によれば、馬形の出現は7世紀後半天武・持統朝以降とされ、いわゆる律令祭祀の中で論じられている。[(4)] 県内の例では、浜松市伊場遺跡で11例が出土しているが、その年代観もほとんどが8世紀以降であり、わずかに2例に7世紀に遡る可能性があるという。[(5)] 形態の類似性が高いだけに、この年代観は無視できないものである。

以上のような問題の中であるので、今回は、性急な判断は避け、今少し検討を加えたうえで、他の祭祀関係の木製品と共に考えていきたい。

(1) 金子裕之 「古代の木製模造品」『研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報第38冊 1980

(2) 佐藤庄一他『俵田遺跡第2次発掘調査報告書』山形県教育委員会 1984

(3) 34例中20例に棒を挿し込むための穴ないしは切り込みが認められる。破片でいずれか確認不可能のものが2例あるので、認められないものが12例である。

ただし、これらの中にも、損耗が著るしく、当初あったものが現在の表面観察では確認できないものも若干は含まれる。しかし穴あるいは切り込みが認められないものがあることは確実である。

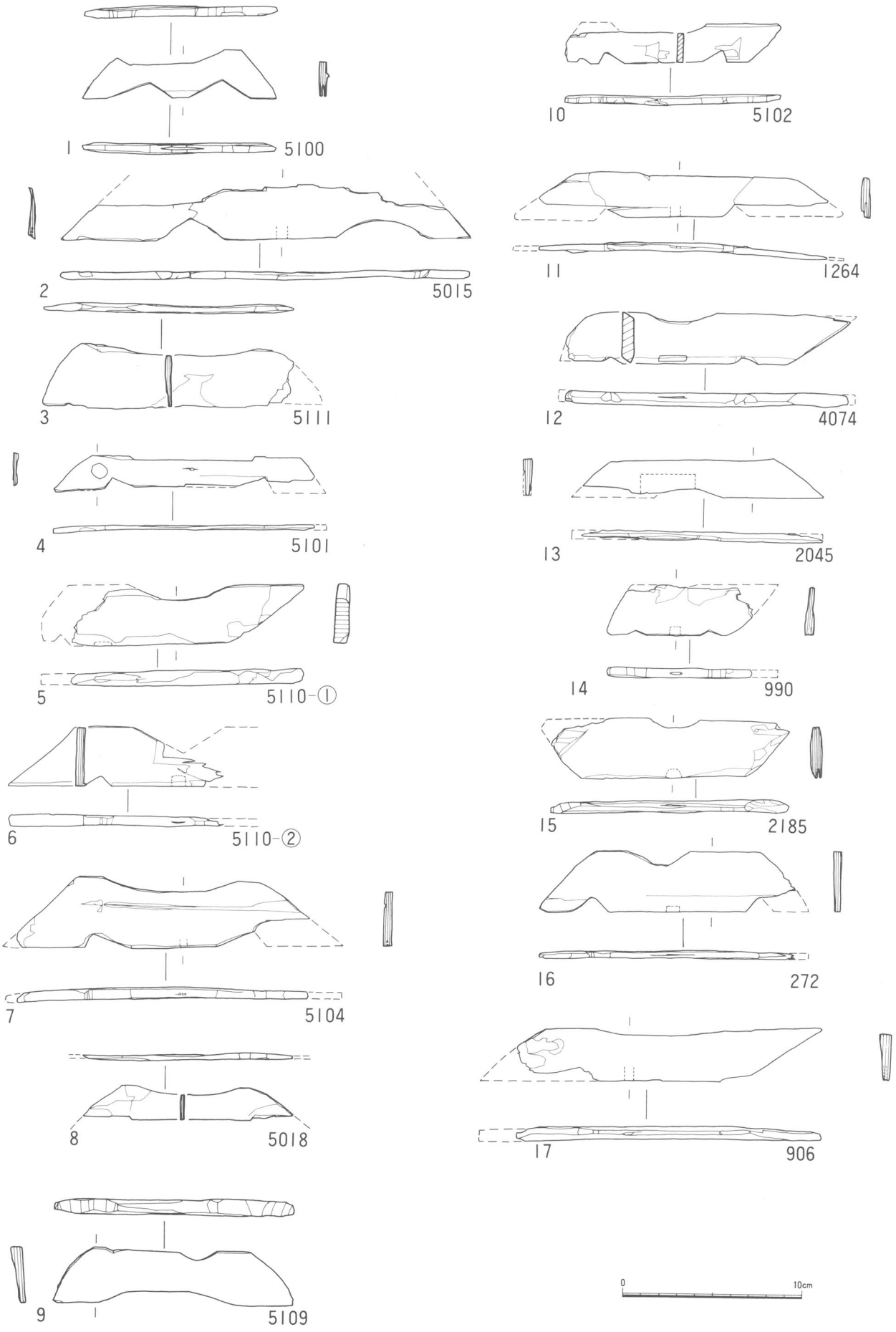
(4) (1)に同じ

(5) 浜松市立郷土博物館『伊場遺跡遺物編1』浜松市教育委員会 1978

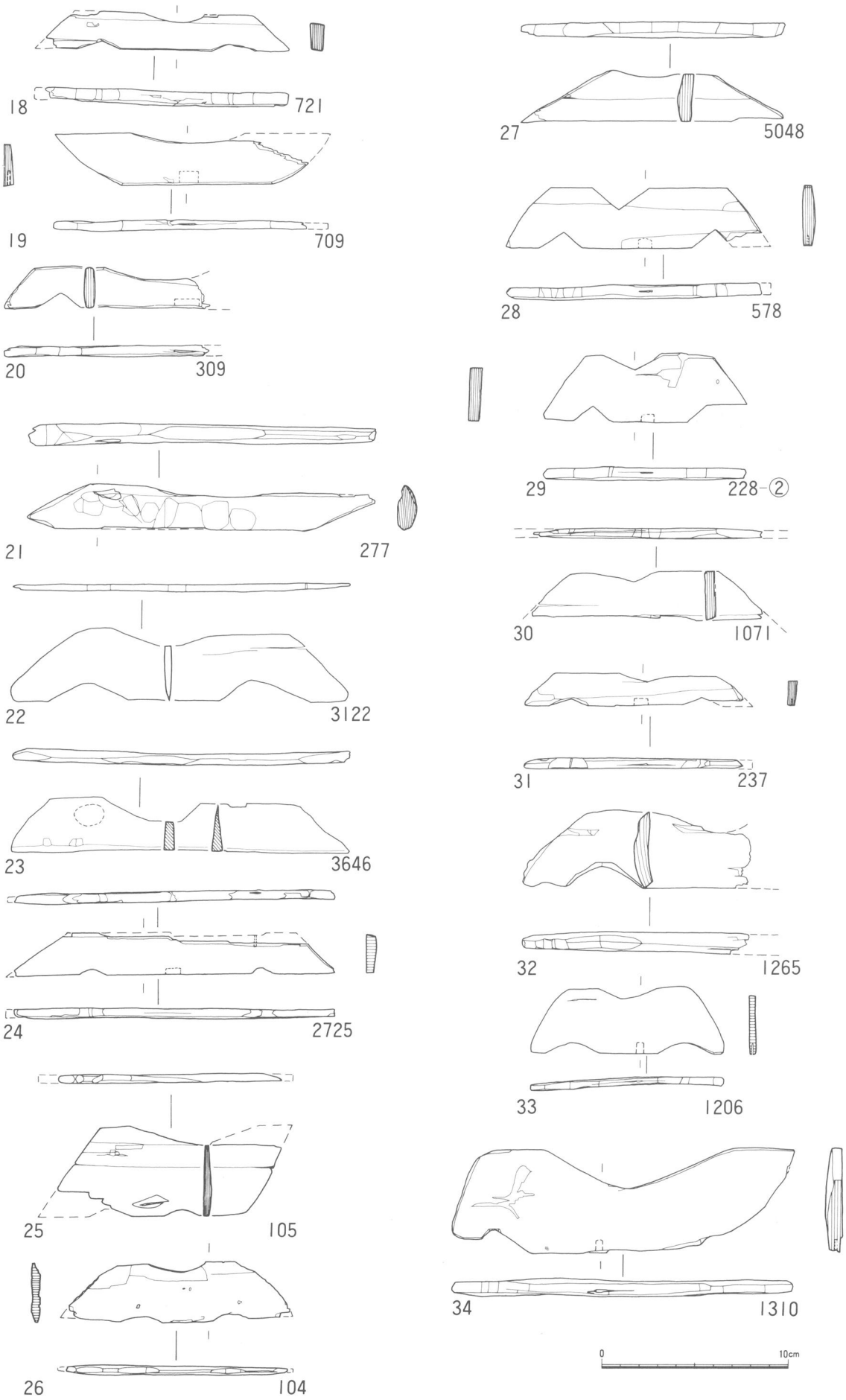
馬形木製品一覧表

番号	地　区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	長さ・高さ・厚さ				形態	備　考
1	西大谷2区	E 43		5100 a	10.7	2.6	0.5	切込み	Ⅱa	完形
				b	(14.9)	0.6	0.3			棒、aとセット
2	西大谷2区	D 45		5015	22.7	(3.0)	0.4	切込み	—	
3	西大谷2区	D 46	灰茶粘土	5111	(13.9)	3.6	0.5		Ⅱf	
4	西大谷2区	D 46	灰茶粘土	5101	(14.5)	2.0	0.2		Ⅱb	
5	西大谷2区	D 46	灰茶粘土	5110－1	(11.8)	3.1	0.8		—	½
6	西大谷2区	D 46	灰茶粘土	5110－2	(11.9)	3.3	0.5	穴	—	½
7	西大谷2区	D 46	灰茶粘土	5104	(16.1)	3.9	0.5	穴	Ⅱb	尾部欠損
8	西大谷2区	D 46	灰茶粘土	5018	(11.6)	1.9	0.2	—	—	
9	西大谷2区	D 46	灰茶粘土	5109	(13.4)	3.1	0.6		Ⅱc	
10	西大谷2区	D 46	灰色粘土	5102	12.0	2.1	0.4		Ⅰa	
11	宮川4区	N 94	暗灰色砂混粘土	3－1264	(16.0)	2.5	0.5	穴	Ⅱd	？
12	宮川4区	O 93	SR 55	3－4074	(15.7)	2.8	0.7	穴	Ⅰa	
13	宮川4区	O 93	SR 55	3－2045	(13.2)	2.2	0.5	切込み	Ⅱe	
14	宮川4区	O 93	粘土混じり砂礫	3－990	(8.1)	2.8	0.5	穴	Ⅰc	
15	宮川4区	O 94	SR 55	3－2185	(13.2)	3.4	0.6	穴	Ⅱg	
16	宮川4区	N 94	SR 55	3－272	(14.1)	3.4	0.5	穴	Ⅱa	
17	宮川4区	M 94	SR 56	3－906	(17.2)	2.9	0.7	穴	Ⅰd	
18	宮川4区	M 94	SR 56	3－721	(13.0)	2.1	0.7		Ⅱb	
19	宮川4区	N 94	SR 56	3－709	(13.4)	2.7	0.5	穴	Ⅱg	
20	宮川4区	N 94	SR 56	3－309	(10.8)	2.2	0.6	切込み	—	？
21	宮川4区	M 94	粘土下の砂礫	3－277	18.5	2.4	1.1		Ⅰd	
22	宮川4区	J 99	暗灰色粘土	3－3122	18.0	4.9	0.4		Ⅱa	完形
23	宮川4区	J 99	粘土混じり砂礫	3－3646	18.0	2.9	0.6		Ⅱf	
24	宮川4区	J 99	粘土混じり砂礫	3－2725	17.1	2.2	0.6	穴	Ⅱd	
25	宮川2区	G 102	灰茶粘土	632	(11.9)	4.8	0.4		Ⅰc	目？
26	宮川2区	G 102	灰茶粘土	104	(11.7)	3.2	0.5	切込み	Ⅱb	ほぼ完形
27	宮川2区	—	灰緑色粘土	5048	14.0	2.7	0.7		Ⅱf	
28	宮川6区	F 103	SR 312	3－578	(13.5)	3.2	0.5	穴	Ⅱa	尾部欠損
29	宮川6区	F 103	SR 312	3－228②	10.9	3.7	0.7	穴	Ⅱa	
30	宮川6区	F 103	SR 312	3－1071	(12.3)	(2.6)	0.5	—	—	下部欠失
31	宮川6区	F 103	—	3－237	(11.8)	1.8	0.5	切込み	Ⅱb	
32	宮川6区	G 103	SR 313	3－1265	(12.1)	4.1	0.7		—	½
33	宮川6区	G 102	SR 313	3－1206	10.3	3.5	0.4	切込み	Ⅱb	完形
34	宮川6区	G 103	SR 313	3－1310	18.2	4.7	0.8	穴	Ⅰb	完形

・計測値の（　）は、破片での現状の数値　単位はcm



第98図　馬形木製品実測図 1



第99図　馬形木製品実測図 2

第Ⅴ章　考　　察

第１節　神明原・元宮川遺跡出土の文字資料

1.　木簡の形態と記載内容

(1)　荷物の荷札・付札と思われるもの

荷物の荷札と付札との区別は明確にできないため一括して取扱った。４号・18号木簡は記載内容が不明であるものの上部の左右に切れこみが施してあり荷札・付札として利用されたものと思われる。

記載内容があきらかであるのは１号・５号木簡である。このうち、地名と関わるものと考えられるものは１号木簡の「他田里」は和名類聚抄にみえる有度郡七郷のうち「他田郷」に、「宇刀マ」の「宇刀」は「有度郡」の「有度」に関わるものと考えられる。５号木簡の「相星」は同郡「會星郷」に比定できるものと思われる。

形状においても１号木簡の下端は一部欠損がみられるとはいえ先を尖らしているものと考えられ、荷物に突き指して用いたものとみられる。５号木簡は下部に穿孔がうがかれ荷物に結びつけて用いたものとみることができる。

また、１号木簡の「戸主」、５号木簡の「五十戸」は律令制度に関わる用語として検討課題の一つに挙げられよう。

(2)　呪符ないし祭祀的なものと思われるもの

形状から大別すると

ａ、上端が圭頭状であるもの　　ｂ、上端が五輪形のもの

ｃ、上端が孤状に整形され、ａ・ｂと比べて幅広のもの

ａの形状をなすものは４点みられるが、２号・10号木簡は下端を頂部を水平にしながら尖らせている。17号木簡は下部が右から左にかけてそぎ落としてあり、６号木簡は下部が欠損しており、下端部の形状が不明であるが２号・10号と同様のものと考えられる。ｂの形状をなすものは４点である。15号がほぼ完形である他は下部が欠損したものばかりである。ａに比べて全体に厚目の板を用いている。12号木簡は上・下部ともに欠損しているがこのｂ形のものと思われる。ｃについてはａ・ｂに比べて板の幅が広く頂部・側面ともに孤状に調整しており、下部は尖らせている。

記載内容をみるとａには２号の「南無阿弥陀佛」、６・17号の「南無大日如來」とみられる名号が記されている。また、２・６・17号木簡ともに名号の上に「大日如來」を表すと見られる梵字が記されている。10号木簡の文字は不明瞭であるが２号あるいは６・17号木簡と同様の名号が記されていたと考えてよかろう。

ｂでは13・14・15号木簡は「南」の文字が確認される他は墨痕が不明瞭であるが、16号木簡に「南無

大日」とよむことができ「南無大日如來」の名号が記されていたものと考えられ、13・14・15号木簡にも同様の名号が記されていたと考えて差支えないと思われる。

ｃについてはａ・ｂとは異なる意味をもつ呪符木簡と思われる。「天罡」は北斗七星をあらわし、道教・密教において治病・消災・延生・度厄の功能があるとして尊敬されていたもので県内では伊場遺跡、他に大阪府国府遺跡・石川県漆町遺跡に「天罡呪符」が出土している。

「鬼鬼」についてはこの「天罡」と深いかかわりをもつもので(1)中世の鬼・鬼神の図形のまじない札が除災厄の功能を有しているという。しかも鬼・鬼神によって疫鬼を防ぐ呪札の誕生は中世に始まるという。また、新潟県馬場屋敷遺跡で発見された呪符木簡から疫鬼よ去れという意を「四従五横」「急々如律令」の２句で強調し、その下にかかれた「南無大日如來」「南無蘇民将来」の言葉は疫鬼をおいはらう（追込む）効能のあるものとして書かれているという。(2)

こうした見解に従えばａ・ｂ・ｃ共に中世において、除厄災あるいは招福を祈る木簡であったことが推定せられよう。駿府城三の丸遺跡においても「鬼」の文字の書かれた木簡が発見されており、なんらかのかかわりを持つものとも考えられる。

(3) その他

７・９・11号木簡は上部ないし下部が欠損しており、墨痕は認められるものの不明瞭である。７号木簡は上部が欠損しており、下端は串状に尖らせている。９号木簡は上部が欠損し下部は角形に整えられている。11号木簡は上部左に切れこみがみられるが右上部および下部が欠損している。８号木簡は削り屑とみられる。

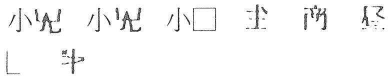
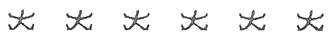
2. 神明原・元宮川遺跡出土の墨書土器について

神明原・元宮川遺跡出土の墨書土器は箆書土器を含めて110点を数える。このうち注目すべきは平安時代から中世初頭にいたる灰釉陶器・山茶碗が大半を占めることである。また、数少ない奈良時代の墨書土器も宮川６区ＳＲ312出土の「神」の墨書のように大量の祭祀遺物とともに出土していることなど、検討すべきものも多い。この「神」の墨書土器については祭祀遺物群との共伴関係が十分考えられるものの、確実な検証を得ることができなかったことから墨書内容と祭祀遺物群との関わりを考えることは早計すぎよう。ここでは本遺跡出土の墨書土器のうち、文字の記号化がすすむとみられる平安時代以降、ことに折戸53号窯式併行期以後の墨書土器について考えてみたい。

平安時代の墨書土器については『伊場遺跡遺物編２』において「平安時代の墨書土器は、祭祀用としてつかわれたものが主体を占めていると考えられ、奈良時代の墨書土器とは、基本的に違う点を強調したい」との指摘がある。これは平安時代の墨書土器が一字書きが多いことや、使用痕がないものが多いこと、意味不明の記号的な墨書が多いこと、吉祥句的な文字や呪語的な文字が多いとみられることなどから「広義の祭祀に使用された土器の一部であった」と考えられたものと思われる。本遺跡の墨書土器も、灰釉陶器に「 」「 」などの文字とも記号ともみられる墨書があり、「 」「」「 」など二文字を結合させたような文字もある。さらに、山茶碗になるとむしろ記号的墨書が大半を占めるにいたる。これらの点から本遺跡出土の平安時代の墨書土器のうち一括性が認められる水上１区ＳＥ192、宮川３

区ＳＲ486・宮川４区ＳＲ53・同ＳＲ54出土の墨書土器を中心にみることにする。

表１　ＳＲ486・ＳＲ53・ＳＲ54出土の墨書土器

	ＳＲ486	ＳＲ53	ＳＲ54
記号			
記号的文字			
戯書的文字			
文字	みやいめ　みやいめ　みやいめ	みやいめ	
	廿ｶ　十ｶ　十　下　将ｶ　大　大　吉ｶ　内□□　□		□　□　水　中万
木簡・他	仁王如□・南〔　〕・南〔　〕　南〔　〕・南無大日〔　〕　箸状斎串		４号〔　〕

1）字体・書体について

木簡・墨書土器の墨書内容について様々な検討がすすめられているが、神明原・元宮川遺跡の墨書内容を整理・検討するにあたり、字体・書体に関わる用語の整理をしておく必要があろう。

(1) 字体については、よく「異体字」の用語が使用されるが、これに対して「正体字」のことわりはない。文字研究の立場からは異論があるかもしれないが、ここでは通例用いられている文字を「正字体」とし、その他の同音同義語を「異体字」とする。たとえば「風」を正体字とし、「凬」「凮」を異体字とする。従って、異体字は正体字に対するものではなく同音同義語の代表的な文字を正体字と理解したい。

(2) 書体については「楷書」「行書」「草書」「隷書」「篆書」の五体とし、それ以外は別にあつかうものとする。隷書と楷書の中間に位置する隷楷体については特に取上げない。よく「書風」について「六朝風」「唐書風」などの記述がみられるが、書風の解釈について論議が分れようし、ここでは扱わないものとする。

(3) その他、２～３文字の点画を省略して１文字ないし２文字とする「抄物書」、同じく点画を結合させて造形化したものを「あわせ文字」として別にあつかう。「あわせ文字」については平城京跡、県内では梅橋北遺跡の「財生」などがこれにあたろう（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所「研究所報No.12」）。他に文字の点画の一部を省略したものを「略体文字」とし、本来の文字が確定できないほど造形化したと思われるものを「記号的文字」、文字を反転したポジ形の文字を「反転文字」と呼ぶことにする。

2）水上１区ＳＥ192出土の墨書土器

水上１区ＳＥ192より折戸53号窯式併行期とみられる３点の墨書土器と緑釉陶器１点が一括出土している。『大谷川Ⅱ』の見解によればＳＥ192は埋井の祭祀がおこなわれ、墨書土器をはじめとする遺物はこの祭祀の際に一括投棄されたものと推定している。

しかし、その後再検討を加えた結果これら墨書土器は緑釉陶器と同一層位で出土したとは考えにくいことがわかった。

再検討の結果[3]から緑釉陶器と3点の墨書土器の出土層位が異なり、3点の墨書土器は緑釉陶器の下層、(『大谷川Ⅱ』で湧水層と判断される層位)に出土しているものと判断することができ、SE 192が井戸として十分機能していた時期に投棄されたものと考える方がより妥当であると判断した。

『大谷川Ⅱ』の理解に従えば緑釉陶器と3点の墨書土器は湧水層と考えられる層位の上に一括して投棄されたものと判断することが可能であり、ひいては埋井祭祀との関わりがあることが考えられよう。しかし、こうした見解にたった上で3点の墨書土器の墨書内容について再検討する必要がうまれた。3点の墨書土器は、

A　609－1　灰釉陶器　椀(053)　夙　(外底部)

B　609－2　灰釉陶器　椀(053)　 　(外体部)

C　624－2　灰釉陶器　椀(053)　賀　(内底部)

とあり、いずれも異体字あるいは合わせ文字とみられるものである。

報告書『大谷川Ⅱ』ではAを「風」の異体字ヵ、Bを「生」と「米」の合わせ文字、Cを「賀」の異体字ヵとしている。

再検討にあたって、まず墨書部位その他から考えてみたい。墨書部位はAが外底部、Bは外胴部、Cは内底部とそれぞれ異なるが一定のまとまりを感じさせられる。また、内底部に墨書されたCは土器の摩耗が激しく墨痕が不明瞭である。したがって井戸への投棄にあたって改めて墨書されたとは考えにくい。Aはほぼ完形で出土しているが土器全体がすすぼけているため墨痕が見えにくい。赤外線テレビによる観察から墨痕が明瞭であることが知られた。また土器の摩耗も少ない。Bについては墨痕も鮮かであり、土器全体に摩耗が極めて少ない。これらのことから井戸内に投棄された際に墨書されたと考えられる墨書土器はAと推定され、あるいはこれにBを加えるということになろう。従って、投棄の時期はA・B・Cともに同一層位から出土していることから同じ時期に投棄されたと考えられるが、墨書された時期はそれぞれ少しく異なると考えてよかろう。

SE 192の上層より出土した土器はこの墨書土器の他に緑釉皿1点(約30㎝上層)がある。これも摩耗は比較的少ない。さらに、SE 192からはこれらの土器の破片が他に認められなかったという。従ってこれらの土器を井戸に投棄した際、いずれも欠損した状態で投棄されたということになる。

3点の墨書土器が一括投棄されたものである場合A～Cの墨書が何らかの意味をもつものであると考えること、それぞれの墨書に共通性があると考えることは早計であろうか。「(箆書瓦器、墨書土器など)は点画の増減、他の書体及び同一の書体の部分部分を結合させる、さらにこうして作った文字を行書的にくずす等、造形的に極めて幅がある」との指摘もあり、3点の墨書土器がそれぞれ異体文字・合わせ文字としたとき、どのような解読[4]が可能であるのか。

a、異体字とした場合、

A(夙)は「風」の異体字

B()は(解読が容易ではない)

b、合わせ文字である場合

「風」と「万」

「生」と「米」

C（架）は「賀」の異体字ヵ　　「加」と「大」

以上のように読むことができよう。従ってこれら3点の墨書土器からみちびきだされる文字は

1. 風・生・米・賀（A・Cが異体字、Bが合わせ文字）
2. 風・万・生・米・加・大（A～Cすべて合わせ文字）
3. 風・万・生・米・賀（A・Bが合わせ文字、Cが異体字）
4. 風・生・米・加・大（B・Cが合わせ文字、Aが異体字）

の4通りが考えられようと思う。

それぞれの墨書に共通性があると考え、3点の墨書土器が何らかの祭祀にかかわるものであるとした場合、「異体字」に特別の意味をもたせることはできまい。むしろ、「あわせ字」と考える方が妥当性が高いように思われる。したがって2の解読がゆるされようか。ただしCが墨書された時期が異なる可能性もあるのでA・BとCが異種の文字と考えることもでき、3の解読を妥当と考えることもできよう。

『大谷川Ⅱ』では「風」「生」「米」は稲作にかかわる文字,「賀」は吉祥句と考えている。Aを「風」「万」、Cを「加」「大」と読むにしても「万」「加」「大」を「賀」と同様に吉祥句的な文字と考えてよかろう。これに従えば2・3の解読から導き出された文字のうち、「風」「生」「米」が農業にかかわる文字、「万」「賀」（「加」「大」）が吉祥句的な文字と理解することができよう。「風」には「かぜ」「ありさま」「いきおい」「ならわし」などの他に「馬牛其風」「風馬牛不相及也」などの例から「牛や馬がさかりがついて雄・雌が互いに誘う」との意味がある。これらのことから、墨書土器3点はＳＥ192が井戸として機能していた時期に一括投棄であろうことと共に、墨書の内容から農業と何らかの関わりをもつ祭祀的な営み（例えば豊作祈願など）の中で投棄されたものと考えることができよう。

また、埋井祭祀との関わりについては出土遺物が緑釉陶器・曲物の2点、およびさらに上層の礫の投棄とによって考える必要が生じる。これを以て埋井祭祀とするには大きな疑問が残ろう。

3）宮川3区ＳＲ486出土の墨書土器

宮川3区ＳＲ486からは5点の木簡と箆書き1点を含む41点の墨書土器が出土している。また、このＳＲ486と連続しているとみられる宮川4区ＳＲ53・ＳＲ54からも計17点の墨書土器と1点の木簡が出土している。これら墨書土器は灰釉陶器折戸53号窯式併行期から山茶碗にいたるもので、山茶碗がその大半を占めている。木簡についてもＳＲ486出土の5点のうち4点に「南無大日如来」と書かれていた可能性がたかく、この名号は除災の効能があるとして中世において信じられていたという。ＳＲ486・ＳＲ53・ＳＲ54の墨書土器の墨書内容を整理すると表1のようにまとめられよう。(5)このうち注目すべきは記号・記号的な文字の多いことと、同一文字が書かれているものが4例あることである。

記号的な墨書のうち「 」の8点を筆の流れなど観察してみると、いくつかの類型にわけることができる。

A類　「」の部分が左を起筆として上から下へ、筆をかえして再び上に運んでいると思われるもの。　〔775（碗）　ＭＧ4－471（小碗）〕

B類　「」の部分が右を起筆として上から下へ、筆をかえして再び上に運んでいると思われるもの。　〔593・960・552（碗）　517・866（小碗）〕

C類　「 ㄴ 」の部分が右を起筆として上から下へ、筆をかえして再び上に運んでいると思われる点はBと同じであるが「 」の部分がBと比べて一画多いと思われるもの。

〔MG3－471（小碗）〕

A・B両類の起筆の差異は左から右に運ぶという一般的な運筆を考えあわせるとき何らかの意味を持つものとも考えられよう。また、意識的にA・Bを書き分けたとすればA類、B類はそれぞれ同一人物が書いた可能性が強いと思われる。こうした記号的な同一墨書を所属あるいは集団・使用者を表したものと考えることもできよう。

SR53・54、SR486の流路より出土した「大」の文字の書かれた墨書土器は10点を数える。これらのうち戯書的な「 」は7点である。（776・402を除く）それぞれa・b・d・eの部分を上向きにハネあげた形をしている。いずれも底部中央に筆の穂先を使ってかろやかなタッチで書かれている。通常「大」の筆順はa－b、c－d、－eの順であるが、433のようにc－e、－dと逆の筆順であるもの、433・453・459のようにどちらの筆順か判別が困難なものもある。また、通常筆をハラウのはeの部分であるが473・453のようにdの部分をハラっていると考えられるものがある。文字の大きさも470が若干小さめであるが、その他は碗・小碗にかかわらず大きさが一定している。これら字形、筆使い、文字の大きさなど共通の特色を存しており、これらの戯書的な「」は同一人物ないし同一集団によって書かれた可能性が高い。

582・757には「小」と書かれ、1970は「小□」と下の文字が不明瞭であるが土器は582と類似形であり同様の文字が書かれていたと思われる。「」が特異な文字であることからこれら3点の墨書が同一人物によって書かれた可能性があろう。

宮川3区SR486・宮川4区SR53の「みやいめ」の墨書土器は墨書内容は同じであるが、443は全体にぎこちない文字で右に「みやい」左に「め」と書き、462は筆の穂先を使ったかろやかな文字で外底部中央に「みやいめ」と書いている。558は高台に沿って「みやいめ」と記す。450は「い」の文字が不明瞭であるが462と似た筆使いで外底部中央に「みやいめ」と記している。いずれも同一人物の手になるとは考えにくい点がある。ただ、「みやいめ」という共通の用語を記していることから記された時期に大きな隔たりがあるとは思われない。

以上4種の墨書土器は同一人物の手になる可能性が高いか、あるいは同時期にかかれた可能性をもつものと考えることができよう。

記号ないし文字の記号的用法は8世紀に仏家の手ではじめられ「抄物書」がその代表的なものである。僧侶などの比較的上層階級が記号の造形に字形を積極的に利用するようになったため創られたものといわれる。（「遺跡出土の文字資料にみる8～10世紀の表記文化の特色――書道史の立場からの分析」）こうした性格をもつ記号的な文字として「花押」がある。東京大学史料編纂所編「花押かがみ一」（吉川弘文館）所収花押のうち最も時代が遡るものは承和12年のものである。以下文治元年までの花押のうち「 」や「 」と運筆の似ているものが何点か認められる。しかし、船渡遺跡出土の墨書土器に「向」「祥」「好」と書かれた灰釉陶器がある。(6) このうち「好」は左から起筆して、「女」「子」が結合した草書体であるが、先の「」墨書とよく似た運筆である。従って、これらの墨書を花押と考えるには早計すぎようし、ま

た、呪符記号的な意味を有することも考える必要があろう。

このように、文字の造形化という観点から墨書内容について検討してみよう。船渡遺跡出土の山茶碗に「小犬」と書かれた墨書土器が出土している。本遺跡出土の「小 」を「小大」と理解することも許されようと思われる。また、「大」の篆書が通例最初の一画を中央から左へ、同様に右へと二画で書き、次に「人」を書く4画の筆順をもってすること、「 」の一画目が左右別々に書かれた可能性があるもの（69・第86図）がみられることから「 」を「大」の篆書と考えることも許されるかもしれない。さらに「 」が「 」と筆順を同じくしていることから「大」から「 」「 」「 」へと文字の記号化(造形化）がすすめられたと考えることができないだろうか。この記号化を造形化とするなら年代差は必ずしも必要としないであろう。また、古い書体である篆書が用いられたとするならば、この記号化とともに特別の意味をもつことも考えられよう。

この他文字の点画の過不足やくずし形の変形ともみられる墨書がある。

(1)　「 」は生の反転文字のようであるし、「 」は「昼」に、「」は「乙」の隷書・篆書に似ている。また、「 」は「土」と「久」あるいは「文」の二文字が結合したようにも、「 (走)」のようにもみえる。「 」の「刀」の上にみえる点は何を意味するのか。「刃」にかかわるのか。いずれも断定しがたい記号的文字である。これらは折戸53号窯式併行期以後の灰釉陶器に書かれたものである。

(2)　同様に草書体と少しく異なる文字がみられる。「」は「商」の、「 」は「游」または「遊」の草書体に、「 」は平仮名の「あ」とも「安」の草書体に似ているが、該当する文字が見当たらない。

(3)　また、「 」「」についても何らかの意味を造形化したものであろう。(2)や(3)は山茶碗に書かれていることが多い。

「隷書体の書が11世紀ころに見られなくなるのは、８世紀の均一化した文字が以後次第に下層階級に広がって11世紀以後の資料では、民間に均一化した文字の系譜を引いた和様体と呼ばれる様式が支配的になっている」との書風の変化は墨書土器においても反映されてくるものと考えてよかろうと思う。また、前述のように(7)墨書土器の文字は造形的に極めて幅があるとの指摘もあることから、木遺跡出土の墨書土器が灰釉陶器から山茶碗の時期にかけて記号的な文字が増加傾向にあるとともに、記号化がすすむ傾向にあることが知られる。これら記号的な文字が本来の文字の表記と一線を画することによって本来の文字とは異なる特別の意味を持たせたのではなかろうか。文字として読むことのできるのは「中万」「吉ヵ」「十ヵ」「廿」「水」などである。吉祥句か数を表すのか、あるいはまた別の意味を有するのか判然としない。ただ一つの仮名文字の記された「みやいめ」は何を意味するのか。「宮居女」の文字をあてて考えることは早計にすぎるが他の墨書内容とあわせて、吉祥句あるいは呪語的な意味を感じさせる。

ここにあげた遺構以外の平安時代の墨書土器についても同様の傾向がみられるが、山茶碗の時期において何点か篆書とみられる墨書がある。「 」・「 」の他に「 」は「久」、「」は「九」、「 」は「乂」などがそれである。篆書は形象的な漢字の特色をよく表した古い形式の書体と言え、（中国では漢代以降も使用せられ、ことに呪符的な役割もあることも考えられている。）特別の意味をもたせたことも考えられよう。

4) まとめ

平安時代の墨書土器はそれ以前の墨書土器とは基本的に性格を異にし、祭祀とのかかわりをもつものが多いという指摘は本遺跡出土の墨書土器も同様の様相をみせている。本遺跡出土の墨書土器が灰釉陶器、なかでも折戸53号窯式併行期から山茶碗にいたるもので、その主体が山茶碗にあるので伊場遺跡出土の陶質墨書土器よりも少しく時代が下がると思われる。一方、墨書内容あるいは機能の変化を律令制度下の村落構造の変化と合せ考え、9世紀後半を墨書土器の様相の変化の時期とみようとする考えがあるが本遺跡出土の墨書土器は初期灰釉陶器が少ないこともあってか、様相の変化がみられるのは折戸53号窯式併行期(9)あたりからであり主として文字の記号化・造形化という面での変化がみられる。これが山茶碗にいたると顕著になるという傾向がみられる。これら墨書内容の変化は、若干の差異はあるもののおおむね従来指摘されている墨書土器の様相の時期にそっているものと考えられる。

祭祀的傾向については水上7区SE192出土の3点の墨書土器は井戸にかかわる祭祀と何らかのかかわりをもつものと考えられるが、宮川3区SR486出土の墨書土器については広義の祭祀とのかかわりを感じさせるものが多いものの、墨書内容そのものから検証することは困難であった。しかし、文字の記号化・造形化、点画の省略など本来の字体とは異なる字体でかかれているもの、古い書体である篆書とみられる書体がみられること。くわえて、同一層位から出土した「南無大日」と書かれた呪符木簡や箸状斎串の大量出土とともに祭祀的な役割を果たしたことを考えることは許されるかもしれない。これをもって平安時代の墨書土器が広義の祭祀に用いられたものと判断することは早計すぎようが、今後こうした視点から平安時代の墨書土器を再検討してみる必要があると思われる。

(1) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒　木簡一』1982

(2) 永野正好「招福・除災―その考古学―」『国立歴史民俗博物館研究報告第7集』1985

(3) 発掘調査経過やこれに添った写真記録によればSE192の調査にあたり、まず北側半分を調査している。この際Aの墨書土器が出土している。計測値は上端が5.098m、下端が4.631mである。しかし全体がすすぼけていたため墨書土器とは判断できなかったようで「墨書土器」との注記はない。

このAの墨書土器を取上げた後さらに井戸の検出作業をすすめている。北側半分の検出作業の後土層断面の調査をおこない、さらに南側半分の検出作業にはいっている。この南側の検出作業により緑釉陶器が出土している。さらに、この緑釉陶器の下層にB・Cの墨書土器が出土している。計測値はBは2分されており、B－1が4.64m・4.624m、B－2が4.65m・4.632m。Cは4.74m・4.687mである。従って緑釉陶器とB・Cの墨書土器の出土層位は約35cmほどの差異をもつ。

さて、墨書土器Aの計測値は上端か下端かはともかく、明らかに計測時の誤りであろうことは容易に推測できる。矢田勝調査員は『大谷川Ⅱ』においてこれを下端4.631mを誤りと判断し、かつB・Cの計測値も誤りであるとして緑釉陶器および3点の墨書土器を5m前後の同一位置にあったものと理解している。また、発掘調査の現場担当者の所見も同一層位であるという。しかし、Aの墨書土器、緑釉陶器、B・Cの墨書土器はそれぞれ時期を違えて計測していると理解すべきであり、Aの計測の誤りからB・Cの計測値すべてを誤りと理解することは問題があろう。Aの出土位置はSE192の平面図からほぼ5.038mから4.297mラインのうちにあり、Aの下端4.631mとの計測値と近似していること。また、A・B

・Ｃ３点の墨書内容が「あわせ字」あるいは「異体字」と思われる共通点があること。墨書部位もＡが外底部、Ｂが外体部、Ｃが内底部とまとまりが感じられることなどから、むしろＡの上端5.098ｍのみを誤りとし、Ａは4.641ｍ付近にあったと理解する方がむしろ自然ではないかとの判断からＡ・Ｂ・Ｃ３点の墨書土器が4.6～4.7ｍの同一層位にあり、緑釉陶器の下層にあったと理解した。

（４）　北島信一「遺跡出土の文字資料にみる８～10世紀の表記文化の特色―書道史の立場からの分析―」

（５）（２）に同じ

（６）（３）に同じ

（７）　浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編２』1980

（８）（３）に同じ

（９）　宮瀧交二「古代村落と墨書土器―八千代市村上遺跡の検討―」史苑44－２　1985

県内墨書土器一覧（文字・用語）

（『伊場遺跡遺物編２』「静岡県下墨書土器出土地地名表」以降に出土及び報告されたもの）

1. 坂尻遺跡第２次調査　　袋井市教育委員会『一般国道１号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報』1982

須恵器

「東家」「山科」「女子」「豊□」「日根」「嶋津」「主」「驛子」「小カ」「×女」「有主」「玉郷長」「千山」「第刀」「家」「□（石カ）田」「前×」「□（孫カ）×」「竹寸家」「子女」「西田」「□（真カ）」「前」「竹寸」「□（宅カ）主」「秋□」「足」「岡□」「譯」「□根女」「朽邊」「真」「宗」「新□」「新」「□（黄カ）美」「前玉」「大□」「　」「浄主」「□（　殿カ）」「後家」「×野厨」「佐野厨家」「竹寸殿」ほか

土師器「□（有カ　□」「千山」

中世小皿「○」

2. 坂尻遺跡第３次調査　　袋井市教育委員会『一般国道１号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報』1983

須恵器

「千山」「□女」「竹寸□（殿カ）」「□白」「後家」「子女」「□（宗カ）」「〕刀」「□(主カ)」「□(豊カ)」「日」「日根大」「嶋津」「東□（家カ）」「新家」「子女」「□（女カ）」「竹寸□（家カ）」「子」「□満」「四年」「十四」「山科」「日根」「嶋」「驛」「石田」「第」「人成」「甘」「津」「驛長」「驛富」「坂井」「市」「三年水鉢　驛」「日根◎家」「大日日請譯家」「佐野厨家」「新家」ほか

土師器「山」「王□」「□□（日根カ）」

灰釉陶器「日」「吉」「本」

3. 東笠子（ＨＫ）第27地点遺跡　　湖西市教育委員会『東笠子（ＨＫ）第27地点遺跡発掘調査報告書』1982

山茶碗　　「の」「メ」

4. 三新田遺跡　　富士市教育委員会『三新田遺跡発掘調査報告書』1983

土師器　　「廣足」「三枝□□」「三」「貞」ほか

5. 川久保遺跡　　細江町教育委員会『川久保遺跡ほか、発掘調査概報』1982

山茶碗　　「大」

6. 西立遺跡　　浅羽町教育委員会『青木遺跡・馬場第１遺跡・西立遺跡』1982

（灰釉陶器～山茶碗？　「王」ほか）

7. 見性寺遺跡　　磐田市教育委員会『見性寺遺跡発掘調査概報』1985

美濃瀬戸系小碗　　「漆岳○意上座餉器」

8. 見付端城　　磐田市教育委員会『見付端城発掘調査概報』1986

「□」ほか

9. 野際遺跡　　磐田市教育委員会『野際遺跡』1984

山茶碗　　「十」「天」「中」「ち」ほか

10. 遠江新居宿「御殿跡」遺跡　　新井町教育委員会『遠江新居宿「御殿跡」遺跡』

鉄釉碗　　「九」ほか

11. 都田川流域の遺跡　　細江町教育委員会『都田川流域の遺跡』1981

陶質土器（12C後葉）「寺」（森遺跡の対岸の三和排水機場建設工事の際採集）

12. 赤塚遺跡　　焼津市教育委員会『赤塚遺跡』1986

「〔　〕」

13. 小川城遺跡　　焼津市教育委員会『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報２』1982

中世陶器　　「七郎丸」（「千力」）ほか

14. 御殿・二之宮遺跡　　磐田市教育委員会『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』1981

須恵器

「花」「央」「万」「江」「工」「ヱ」「刃カ」「乇カ」「乇カ」「卅」「敢カ」「(人面)」「○」「♀」「×」

「豊カ」「太」「夫」「田」「山」「キ」「大」「　カ」「宗」「千万」「藤井」「綾生」「若カ佐」「神□」

「敢石部」「□石部」「□家」「豊毅」

土師器

「敢カ」「[illegible]カ」「本カ」「[illegible]」「○」「太」「キ」「大」「[illegible]カ」「宗」「若カ佐」「不」

灰釉陶器

「未カ」

15. 宮下遺跡　　静岡県埋蔵文化財調査研究所『宮下遺跡（遺構編）』1985

「春」、「家」、「若」、「専當」ほか60点ほど

16. 内荒遺跡　　静岡県埋蔵文化財調査研究所『内荒遺跡』（遺構編）1986

「主」「建」ほか70点ほど（なお川合遺跡でも２点出土しているという。）

17. 山廻遺跡　　藤枝市教育委員会『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―奈良時代～近世編―』1981

18. 土橋遺跡　　袋井市教育委員会『土橋遺跡』1985

須恵器

「國厨」「里人」「上人」「里當」「久」「×呂」「廣」「＋」「木□」ほか

土師器

「上人」

19. 玉越遺跡　　袋井市教育委員会『玉越遺跡』1986

灰釉陶器　　「大」ほか

20. 東平遺跡　　富士市教育委員会『東平―遺物・考察編』1981

土師器

「冬カ」「万」「文カ」「赤」「大（ヘラ）」「年」「孔カ」「道カ」「若富」「可カ」のち「月」

21. 居倉遺跡　　島田市教育委員会『居倉遺跡』1987

灰釉陶器

「尺」「尺（朱書）」「馬」「酒杯」「壬((朱書)」「二万」「田」「人」「巳」「寿」「大富」「珍」「定（朱書）」「常」「文」「岑」「財」「青」「豊加」「加」「勝部」「□石」「□」「富」「様」「在」「生」「東」「仙」「加万」「上」「休□」「川□（墨書・朱書・ヘラ書）」など

墨書土器関連発掘調査報告書等一覧

1.	伊場遺跡発掘調査報告書第4冊　伊場遺跡遺物編2	1980	浜松市
2.	静岡県浜名郡可美村　城山遺跡調査報告書	1981	可美村
3.	昭和56年度一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報板尻遺跡第2次調査	1982	
4.	昭和57年度一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報板尻遺跡第3次調査	1983	
5.	三新田遺跡発掘調査報告書	1983	富士市
6.	川久保遺跡ほか発掘調査概報　細江町都田川河川改修工事に伴う遺跡調査報告	1982	細江町
7.	青木遺跡・馬場第1遺跡・西立遺跡　県営田圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（昭和56年度分）	1982	浅羽町
8.	昭和59年度見性寺遺跡発掘調査概報	1985	磐田市
9.	昭和60年度見付城発掘調査概報	1986	磐田市
10.	野際遺跡2・3地点発掘調査概報	1984	磐田市
11.	調査概報遠江新居宿「御殿跡」遺跡		新居町
12.	都田川流域の遺跡　細江町都田川河川改修工事に伴う遺跡範囲確認調査	1981	細江町
13.	赤塚遺跡―焼津市立焼津南小学校屋内運動場改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―	1986	焼津市
14.	焼津市埋蔵文化財発掘調査概報2―昭和56年度―	1982	焼津市
15.	御殿・二之宮遺跡発掘調査報告1		磐田市
16.	昭和58年度静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査概報―川合遺跡第1次調査―	1984	
17.	宮下遺跡・内荒遺跡・川合遺跡静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査の概報	1985	
18.	永原追分遺跡		御殿場市
19.	日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書3―奈良・平安時代編―　志太郡衙跡（御子ケ谷遺跡・秋合遺跡）	1981	
20.	日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書4―奈良時代～近世編―　滝ケ谷古窯跡・内瀬戸火葬墓群・他	1981	
21.	一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書　土橋遺跡―基礎資料編―	1985	
22.	一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書　玉越遺跡	1986	
23.	西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　東平　―遺物考察編―	1981	
24.	長者平遺跡昭和54年度緊急発掘調査概報	1980	袋井市
25.	静岡県湖西市東笠子（ＨＫ）第27地点遺跡発掘調査報告書	1982	湖西市
26.	居倉遺跡発掘調査報告書	1987	島田市

第２節　人形土製品について

1. 人形土製品出土遺跡

前述したように人形土製品の出土を見た遺跡は比較的少ない。「古代の祭祀と信仰」（国立歴史民俗博物館研究報告第７集）より抜すいし、若干の資料を加えた人形土製品出土遺跡地名表を別表に示した。亀井正道氏によると、これに数遺跡が加わるが、いずれも採集品のようである。全体としても残念ながら採集品あるいは偶発的な発見が多い。(1)

出土地を概観すると関東地方で６例、東海地方（静岡・三重）で11例、近畿地方で６例、中国地方で４例、九州地方で10例を数える。（亀井氏によると他に近畿２例、中国２例、九州５例がある）。東海地方と九州地方が多いことが目につく。このうちまとまった資料としては埼玉県今泉遺跡、静岡県中津坂上遺跡、三重県草山遺跡、大阪府奈良井遺跡、鳥取県谷畑遺跡、広島県宇山遺跡、大分県浜遺跡等があげられる。このうち奈良井遺跡を除き、他の遺跡は人形土製品だけでなく、鏡・玉類・円板等それぞれ構成要素は違うものの他の土製品を伴っている。特に坂上遺跡では武具・紡織具・農耕具・什器類等種類は豊富である。また動物形土製品も注目され、浜遺跡を除き出土している。動物形土製品は坂上遺跡は犬とされ、草山遺跡でも犬としたものが１点出土している。また奈良井遺跡では鶏であるという。(2)さらに今泉遺跡では牛のようなものがあり、(3)宇山遺跡では馬形が１点出土しているという。(4)さらにこれらの遺跡の地形に注目すると、亀井氏が指摘しているように台地状あるいは峠状地形をしたところに多い。(5)(6)今泉遺跡・坂上遺跡・宇山遺跡がこれにあたり、土製品の種類等似ている点が多く、亀井氏は『肥前国風土記』などに見える道の神・境の神などの荒神への献供品である可能性を指摘している。また上記の例ではないが鹿児島県伊佐郡の三遺跡（大迫・岡野・津栗野）も平野をみおろす丘陵部の斜面に位置し、火葬墓の副葬品と考えられるが、荒神祭祀がおこなわれた可能性も指摘されている。この他では草山遺跡は周囲に円墳２基と方形周溝墓14基がならぶ丘陵尾根沿にある方形台状遺構と命名(7)された遺構内の北東部にその大半が出土した。特殊な遺構での出土で他の例とは異なるが、付近に古墳を有すること・丘陵尾根沿に位置すること等、(8)先にあげた諸遺跡との共通点もみられる。奈良井遺跡は生駒山地から派生する丘陵上に位置する。一辺約40ｍ、最大肩幅約５ｍ、深さ１～1.5ｍのＵ字形の溝状遺構＝方形周溝遺構が検出され、土師器・須恵器とともに土製模造品（人形・鶏形等）が出土している。(9)やはり丘陵上であり東方には円墳２基が存在するようで草山遺跡とは共通点を有す。これら２遺跡はその特異な出土状況もさることながら、土製品に伴出する土器から年代を確認しえたことの意義は特に大きい。草山遺跡で伴出した須恵器㮾は５世紀末～６世紀初頭で、奈良井遺跡は５世紀後半～６世紀中頃と考えられている。このことは同様に土製模造品を多量に出土した土器の伴出のない他の遺跡（今泉遺跡・坂上遺跡等）の年代を考える上で重要である（向坂氏は坂上遺跡の年代を６世紀前半としている）。大分県浜遺跡は別府湾に面する砂丘遺跡で南側に低丘陵があり、古墳群が存在するという。(10)偶発的な発見で出土状況の詳細は明確でないが、人形のほか、円坂・土製品・手づくね土器等が出土している。海人系の

集団につらなる人々の遺跡とされ、他の遺跡とは異なった性格を有しているようである。

さて、これまでふれた種々の模造品[11]を含む遺跡以外にも特徴的な遺跡がある。竪穴住居跡出土例としては千葉県北の台遺跡5号住居址、東京都多摩ニュータウンNo.855遺跡1号住居址、同No.144遺跡1号住居址があげられる。北の台遺跡では周辺の床面に土馬3点、人形1点が、No.855遺跡ではカマド内に人面形土製品2点と紡錘車状土製品[12]・有孔円板状土製品[13]が出土しているという。いずれも平安時代であり、住居跡のカマド近くという共通点もあり興味深い。

古窯跡からの出土も多く静岡県で4例、三重県・岡山県・福岡県でそれぞれ1例認められる。1～2点の単独出土で須恵質のものがほとんどであり、年代的には三重県例・岡山県例を除き奈良時代である。

出土地が多い九州では火葬墓に伴う例が多く、先述した鹿児島県伊佐郡の遺跡群のほか、熊本県蚕業試験場遺跡でも蔵骨器様の土器に土馬・土製人形が伴っており興味深い。年代は奈良～平安時代という。このほか、古墳出土例もあるが追葬も考えられ土馬資料とともに論義が分かれるところである。

以上概観したように人形土製品が他の土製模造品を多く伴い出土する遺跡は峠状・台地状あるいは丘陵上に存在する例が多く、この中には5世紀後半～6世紀と考えられる遺跡がある。また、奈良時代以降では住居跡・古窯跡・火葬墓等地域により特徴的な遺構から出土している。このようにして考えていくと、本遺跡のように低地の旧河道から大量に出土した例はなく、他の土製模造品も丸玉・鏡などごく小数あるものの人形・馬形にくらべ極端に少なく、人形土製品が大量出土した他の遺跡とは性格を異にしていると考えられる。

2. 構成要素

人形土製品に伴う祭祀関係遺物の構成要素であるが、本遺跡のものは残念ながらその全てが旧河道から出土しており他の遺跡のように、そのセット関係を明確には把握できない。ここでは〝まとまり〟としてとらえたものについてその状況を述べるが大きな河道内の遺物であり共伴関係を認定することはできない。

56点と最も多数を出土した宮川6区ＳＲ312は動物形土製品も66点出土している。他に馬形木製品3点・舟形木製品1点・刀形木製品かと考えられるもの3点・斎串状の木製品5点が出土している。玉類では勾玉7点・石製丸玉33点・土製丸玉5点・管玉2点があり、他に耳環3点、石製紡錘車2点・鈴1点なども出土している。人形土製品・動物形土製品の点数が似通っていることは注目されるが、伴出土器に大きな幅があり、他の遺物も含めて一括とは考えにくい。

宮川6区ＳＤ322は旧河道の中州状の地形にある溝状遺構で、人形土製品3点と動物形土製品6点が出土し、他の祭祀遺物はみられない。また水上7区ＳＸ802は人形土製品のみが集中しており、同遺構の北9ｍの同一面で馬形土製品と土師器群が出土している。同じ水上7区旧大谷川の人形土製品（第89図25）と動物形土製品（第94図67）は同一地点で出土し、付近に他の遺物はみられなかった。これらのことは人形土製品と動物形土製品がセットで使用された可能性を示しているが、旧河道内の限定区域のことであり、可能性があるという程度にすぎない。他の人形土製品は旧河道内の単品出土に近く、他の遺物との関係を論じることは不可能である。

3. まとめ

以上みてきたように本遺跡出土の人形土製品を全国の出土例を参考にその出土地・遺構・祭祀関係遺物の構成要素などを比較し考えてきたが、その特異な出土状況のみを際立たせる結果となり次の問題が残された。

(1) 多数を出土する遺跡には峠状・台地状あるいは丘陵上に存在するものが多く、本遺跡のように低地の旧河道からの大量出土は他に例がない。人形土製品を用いる祭祀の様相に一石を投じたことになるが、その様相を窺い知るような出土状況ではないので河川＝水と人形土製品の関係の解明は今後の課題となる。

(2) 人形土製品を用いる祭祀の構成要素は他遺跡のように明確には把握できない。動物形土製品が共に使用された可能性があるが断定できない。旧河道の大きな範囲では馬形・舟形などの木製模造品、勾玉・丸玉・管玉などの玉類などがあるが、他遺跡には例がなく、全てが一括とは考えにくい。

(3) 本遺跡の人形土製品は数形態に分類できるが、伴出土器に大きな幅があり年代は限定できない。この中には他の遺跡出土のものに類似するものがあるが本遺跡独自のものも多い。

大きな問題が未解決のまま残されたが、本遺跡出土の状況はこれらに答えられるようなものではない。仮に人形土製品が動物形（馬形）土製品とともに旧大谷川に投じられたものであるとすれば、亀井正道氏や水野正好氏が指摘しているように『肥前国風土記』の佐嘉郡の条にみえる道祖神・境神などの荒神を和める祭祀[14]の状況を本遺跡は示しているように思えるが、浅学ゆえに検証する力を持ち合わせていない。ここでは問題提起だけにとどめ、今後さらに明確な資料の増加と諸氏の研究成果に期待したい。

(1) 亀井正道「浜松市坂上遺跡の土製模造品」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985

(2) 向坊鋼二「浜松市都田町中津・坂上出土の祭祀遺物」『考古学雑誌』第50巻1号 1964

(3) 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報№6』 1983

(4) 四条畷市教育委員会『奈良井遺跡現地説明会』 1979

(5) 椙山林繼「関東」『神道考古学講座』第二巻 1972

(6) (1)に同じ

(7) 新東晃一「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」『古代文化』第30巻、第2号 1978

(8) (3)に同じ

(9) (4)に同じ

(10) 向坂前掲書によるが、亀井正道氏は「建鉾山―福島県表郷村古代祭祀遺跡の研究―」において6世紀後半としている。

(11) 大分県教育委員会『浜遺跡』大分県文化財調査報告第48輯 1980

(12) 千葉県企業庁『北の台遺跡』千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 1974

(13) 財東京都埋蔵文化財センター「多摩ニュータウン№855遺跡」『多摩ニュータウン遺跡―昭和55年度―』 1981

(14) 水野正好「馬・馬・馬―その語りの考古学」『文化財学報』第二集 1983

人形土製品出土遺跡地名表

番号	遺跡名	都府県	時代	共伴遺跡	点数	備考	文献
1	今泉遺跡	埼玉	古墳	石製模造品（有孔円板・勾玉・剣・臼玉・鏡等）動物形土製品 手づくね土製模造品（棒状具）	人形20点以上	A	文化財保護委員会『埋蔵文化財要覧』2 1959
2	北の台遺跡	千葉	平安	土馬3点・土師器	人形1点	B（竪穴住居）	「北の台遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財報告書』Ⅲ 1975
3	大道遺跡	千葉		採集品（同遺跡内に古墳～平安の住居址あり）	人形1点	H	（財）千葉文化財センター『千葉市大道遺跡 生実城跡発掘調査報告書』1983
4	館山市東長田谷	千葉	古墳終末期	土製模造品（円板・勾玉・丸玉）手づくね土器・土師器・須恵器	人形1点	A（麓の祭祀）	椙山林繼「関東」『神道考古学講座』第二巻 1962
5	多摩ニュータウンNo.855遺跡	東京	平安	土製模造品（紡錘車状・有孔円板状・土玉状）100点 手づくね土器	人形2点	B（堀込み）	東京文化財センター「No.855遺跡」『多摩ニュータウン遺跡―昭和55年度』第4分冊 1981
6	多摩ニュータウンNo.144遺跡	東京	平安	土製模造品（円板・玉状・スタンプ形・棒状・管状）手づくね土器	人形1点	B（カマド状の堀込み）	東京文化財センター「No.144遺跡」『多摩ニュータウン遺跡―昭和56年度』第1分冊 1982
7	郡遺跡	静岡		土馬・石製模造品（勾玉）土製品各1点	人形1点	H	磯部武男「藤枝市内出土の祭祀遺物について」『駿豆考古』12 1972
8	助宗古窯跡群	静岡	8・9C	須恵器	人形2点	C（須恵質）	
9	南原3号窯跡	静岡	奈良前期	須恵器・瓦・土錘	人形1点	C（須恵質）灰原出土	島田市教委『南原瓦窯跡』 1981
10	清ケ谷古窯跡	静岡	奈良		人形1点	C（須恵質）	袋井市役所『袋井市史』通史編 1983
11	水ケ谷奥窯跡	静岡	奈良	土馬（須恵質）	人形1点	C	大須賀町教委『清ケ谷古窯跡群白山窯跡―1978の調査―』 1979
12	坂尻遺跡	静岡	奈良	斎串・須恵器（坏）土師器（坏・皿・甕）	人形1点	D（須恵質）	袋井市教委『一般国道袋井バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』 1981
13	中津坂上遺跡	静岡	6C前	土製犬形 土製模造品（武具・機織具）手づくね土器			向坂鋼二「浜松市都田町中津・坂上出土の祭祀遺物」『考古学雑誌』第50巻1号 1964 亀井正道「浜松市坂上遺跡の土製模造品」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985

番号	遺跡名	都府県	時代	共伴遺物	点数	備考	文献
14	阿弥陀堂遺跡	静岡	奈良平安	土馬6点（土師質）・土師器須恵器・鉄器・砥石	人形4点	C（平窯）	樋口清之「静岡県浜松市阿弥陀遺跡」『日本考古学年報』5 1957
15	藤谷埴輪古窯	三重	古墳後	埴輪・須恵器	人形1点	C	村上安生「三重県形象埴輪出土地『形象埴輪の出土状況』第17回埋蔵文化財研究会資料 1985
16	草山遺跡	三重	古墳（5C）	有孔円板（1）土製品（犬・鏡・玉ほか）手づくね土器	人形28点	A	松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報』No.6、No.10 1983
17	小中遺跡	滋賀	古墳		人形2点		
18	市三宅東遺跡	滋賀	弥生（？）		人形1点		
19	長岡宮（111次）	京都	平安（8C末）	須恵器・土師器・宝珠硯・緑釉皿帯金具・漆器片	人形1点	G（包含層）	「長岡宮遺跡第111次(7AN 11D地区)」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集 1982
20	奈良井遺跡	大阪	5C後半～6C中	鶏形土製品・馬骨・馬歯・須恵器滑石製臼玉・男根状木製品手づくね土器・底板等の木製品	人形12点	A D	四條綴市教育委員会「奈良井遺跡現地説明会」 1979 大阪市立博物館「動物の考古学」 1987
21	河高上ノ池遺跡	兵庫	古墳中期	土製模造品（勾玉・鏡）手づくね土器	人形6点		
22	塚穴山古墳	奈良		土馬（1）	人形3点	E	「天理塚穴山古墳調査概要」『昭和40年度日本考古学協会研究発表要旨』1965
23	谷畑遺跡	鳥取	古墳後期	有孔円板（1）・土製品（イノシシ1・動物形4）・土製模造品（円板1）手づくね土器（18）・須恵器土師器・カマド	人形1点	A（集落）	倉吉市教育委員会『四天王寺地域遺跡群遺跡詳細分布調査報告書』1982
24	須恵窯跡	岡山		土馬（1）		C（須恵質）	大場磐雄「上代馬形遺物再考」 1970
25	宇山祭祀跡	広島	古墳後期	動物形土製品・土製模造品（円板・勾玉・丸玉・管玉・棒状土製品・有溝棒状土製品・柄杓・短甲・有溝板）・手づくね土器（鉢10・坩1）	人形2点	A	是光吉基「広島県世羅出土の祭祀遺物」『考古学ジャーナル』5号 1969
26	細田遺跡	広島	弥生後期	弥生土器	人形1点	G 包含層	『広島県安佐郡佐東町細田遺跡細迫遺跡調査概報』 1968
27	丸ケ谷遺跡	福岡	奈良	須恵器		C（古窯跡）	
28	太郎丸遺跡	福岡	古墳後期	土製品（犬）・土製模造品（勾玉）手づくね 各1点	人形1点		大場磐雄『祭祀遺蹟』 1970
29	御床遺跡	福岡	古墳後期		人形8点	G（包含層）	小田富士雄「九州」『神道考古学講座』2 1967

番号	遺跡名	都府県	時代	共伴遺物	点数	備考	文献
30	大塚古墳	福岡	古墳後期	土製品（板状）1	人形7点	E（古墳墳丘中）	「春日市下白水大塚古墳出土品」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第5集 1979
31	千原台遺跡	熊本	平安か	須恵器・土師器を入れ子式にし、その中に納入	人形1点	G（包含層）	熊本市教育委員会「千原台遺跡」『熊本市西山区文化財調査報告書』1969
32	蚕業試験場遺跡	熊本	奈良～平安	土馬4・須恵蔵骨器	人形8点	E	小田富士雄「古代形代馬考」『史淵』第105・106合輯 1971 大場磐雄『祭祀遺蹟』 1970
33	浜遺跡	大分	古墳後期か	土製模造品（円板6・突起付円板4・土製玉1）手づくね土器	人形7点	F（土拡？）	大分県教育委員会「浜遺跡」『大分県文化財調査報告』第48輯 1980
34	牧野遺跡	鹿児島	奈良平安	土馬		A（祭祀跡）	志布志町『志布志町誌』 1972
35	大迫遺跡	鹿児島	平安	墨書土器（坏形土器）土師器（壷・甕・坏）	人形3点	E（火葬墓）	新東晃一「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」『古代文化』第30巻 第2号 1987
36	岡野遺跡	鹿児島	奈良	土馬10・土製模造品（円板）10 土師器（甑のみ）	人形10点	E	〃
37	津栗野遺跡	鹿児島	奈良	土馬1・須恵器	人形1点	E（火葬墓）	〃
38	塞の神遺跡	鹿児島	奈良	土馬（多数）・須恵器	人形多数	E（火葬墓）	木村幹夫 寺師見國「鹿児島県伊佐郡の古墳」『考古学雑誌』第26巻 第6号 1936

※ A－祭祀跡・B－住居跡・C－古窯・D－溝・E－古墳・火葬墓・F－土拡・G－包含層・H－採集

付 載 1

放射性炭素年代測定について

1. はじめに

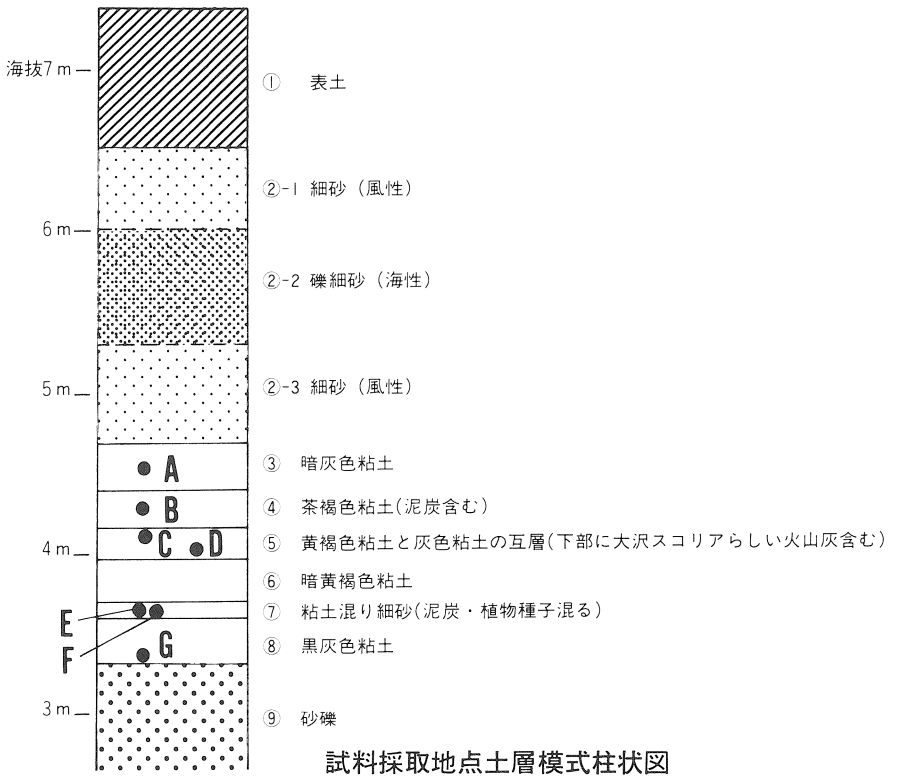
遺跡の形成された基盤層の推積年代及び出土遺物等の年代決定の手掛りを得るため、放射性炭素 ^{14}C による年代測定を学習院大学理学部年代測定室の木越邦彦氏に委託し実施したのでここにその結果を報告する。

2. 試　　料

大谷1・2区で検出された登呂遺跡南東に拡がる沖積低地の堆積物中の木片5点、丸木舟破片1点、植物遺存体（ヒシの実等）1点の計7点である。詳細は表および土層柱状図により示す。

試 料 一 覧 表

	名　　称	採取年月日	出土層位	備　　考
A	木　　片	1984. 5.18	③層　中位	弥生中期の遺物包含
B	〃	1984. 7.27	④層　中位	
C	〃	1984. 8. 7	⑤層　中位	
D	木片（丸木舟）	1984. 7.26	⑤層　下位	大沢スコリア(?)の上位
E	木　　片	1984. 8. 6	⑦層	縄文後期の遺物包含
F	植物種子（ヒシの実含む）	1984. 5.24	〃	〃
G	木　　片	1984. 8.11	⑧層　下位	



試料採取地点土層模式柱状図

3. 測 定 結 果

木越氏より得た測定結果は次の通りである。

Code No。	試　　料	B.P.年代（1950年よりの年数）
GaK-12268.	Wood from Shinmeibara Site。 Sample A。	3350 ± 110 1400 B.C.
GaK-12269.	Wood from Shinmeibara Site. Sample B.	2880 ± 100 930 B.C.
GaK-12260.	Wood from Shinmeibara Site. Sample C.	2820 ± 100 870 B.C.
GaK-12271.	Wood from Shinmeibara Site. Sample D.	2680 ± 100 730 B.C.
GaK-12272.	Wood from Shinmeibara Site. Sample E.	3550 ± 120 1600 B.C.
GaK-12273.	Wood from Shinmeibara Site. Sample F.	3380 ± 110 1430 B.C.
GaK-12274.	Wood from Shinmeibara Site. Sample G.	6520 ± 120 4570 B.C.

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用した。また付記した誤差はβ線計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差（one sigma）に相当する年代である。試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限とする年代値(B.P.)のみを表示した。また試料の、β線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、σ^{14}C‰を付記した。

付 載 2

花粉分析調査報告

（株）パリノ・サーヴェイ

1. 試　　料

試料は、神明原・元宮川遺跡における宮川１区より採取されたボーリングコアである。受領した試料は先に受領したNo.１・３・５・８・12・14・16・19・22・24・25・27・29・32・34・35・38・40・43・48・50・55の22点と後に受領したNo.２・４・７・９・10・17・23・30・36・42・44・53の12点、合計34点になる。全試料から宮川１区のボーリングによる地層柱状図と試料を検討し、分析試料を選択した。分析試料は花粉化石の少ない砂試料もあったので、それらを除きNo.１・２・３・４・５・７・８・17・22・23・24・25・27・29・30・32・34・35・36・38・40・42・48・50・53・55の26点を選択した。それらの位置・岩質については図１に示した。

2. 化石の抽出

花粉・胞子化石の抽出は、試料３～15ｇ（湿重）を秤量し、48％ＨＦ一重液分離($ZnBr_2$・比重2.15)―アセトリシス処理―10％ＫＯＨの順に、物理・化学処理を行なった。残渣をグリセリンゼリーで封入、検鏡した。

3. 分析結果及び考察

同定においては、プレパラート全面を走査した。その間に出現したすべての分類郡及びその個数を表１に示した。また、樹木花粉が 100 個体を越える試料については、花粉ダイアグラムに示した。出現率は、樹木花粉は樹木花粉総数、草本・胞子はそれらに樹木花粉を加えたものを基数として百分率で算出した。図表において複数の分類群をハイフォンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。

主要樹木花粉の出現傾向より３つの局地花粉群集帯を設定した。下位よりＳＭ―Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ帯とする。但し、検出個体数の少ないNo.４・５・７・８・17の試料については設定しなかった。

ＳＭ―Ⅰ帯（No.55～25）

スギ属が増加、優占することにより特徴づけられる。他にコナラ・アカガシ各亜属を比較的高率に伴なう。アカガシ亜属は、下部（No.50～53）でコナラ亜属より優性であるが、上部では逆になる。草本花粉は、下部では分類群数が少ないが、ガマ属・イネ・カヤツリグサ各科が比較的高率に出現、上部ではカヤツリグサ科が多産、分類群数も多い。一方、水生植物のガマ・オモダカ・コウホネ各属及びサンショウモが上部の下部で出現する。

ＳＭ―Ⅱ帯（No.24～22）

ＳＭ―Ⅰ帯に続きスギ属は優古するが、減少する。他にコナラ亜属が減少、逆にモミ・ツガ・ニレーケヤキ各属が増加、また、アカガシ亜属が比較的高率になる。草本花粉の出現率は低率である。

ＳＭ―Ⅲ帯（No.３～１）

ニヨウマツ亜属の比較的高率出現により特徴づけられる。スギ属は本帯においても優占する。一方、

コナラ亜属が上部で比較的高率になる。分類群数は、ＳＭ－Ⅰ・Ⅱ帯に比べ少ない。草本花粉では、イネ科が多産し、キカシグサ・ミズワラビ・オオアカウキクサ各属及びサンショウモなどの水生植物を伴なう。

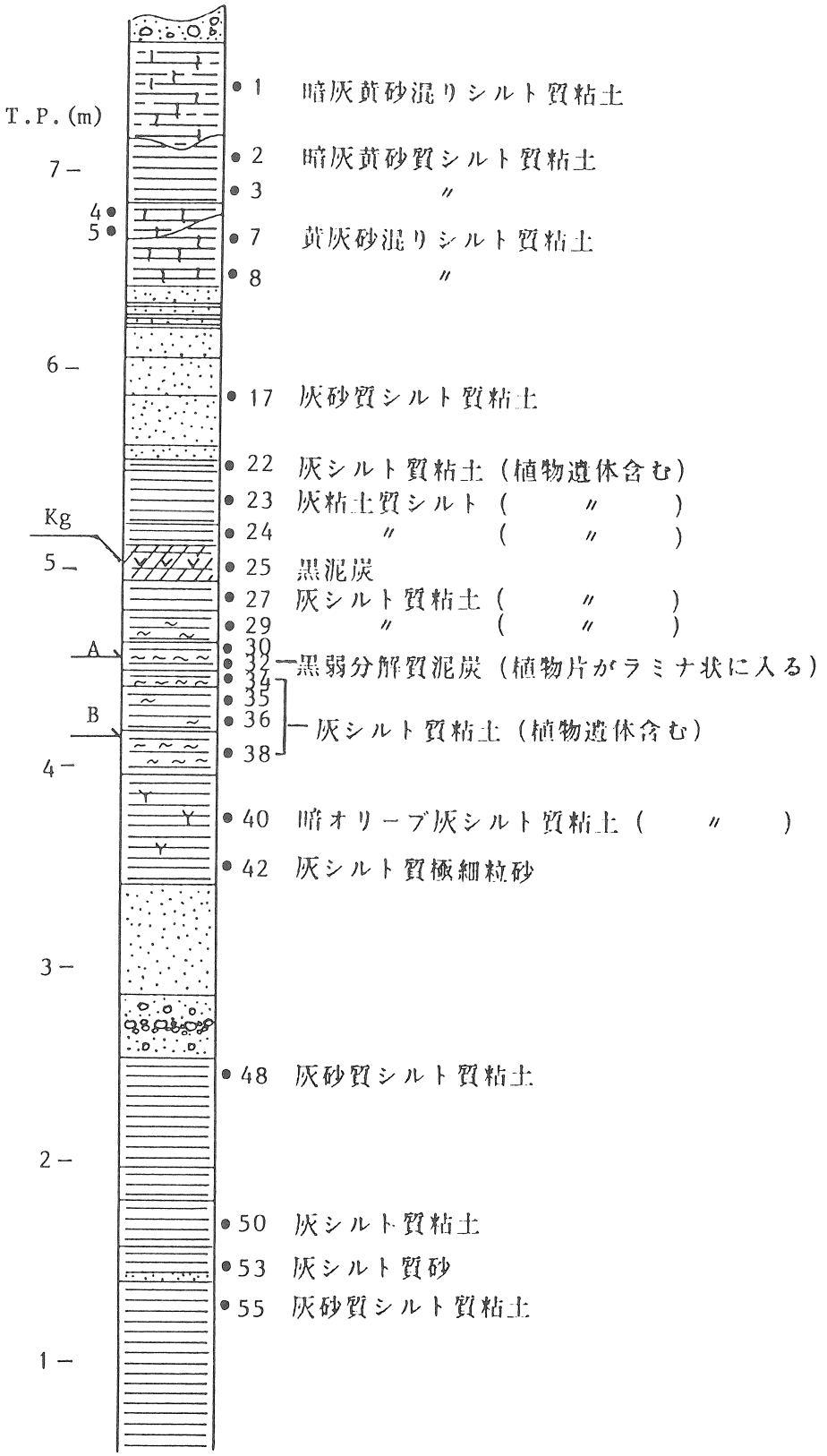
ＳＭ－Ⅰ～Ⅲ帯において、スギ属が優占、あるいは高率に出現する。スギ属の多産は、丹那盆地（橋屋・東郷、1983）・山木遺跡（辻、1977）においても認められる。丹那盆地では、スギ林の成立は約5250～6000年前と推定されている。ＳＭ－Ⅰ帯の下部については、アカガシ亜属及びスギ属がほぼ同頻度で出現、照葉樹林からスギ林への移行期の植生とも考えられる。そうであれば時代的には、約6000年前頃の堆積層の可能性がある。ＳＭ－Ⅰ帯下部では、照葉樹及びスギよりなる植生が展開していたものであろう。上部に向けスギが分布拡大してきたものと推定される。上部においては、アカガシ亜属よりコナラ亜属が多く、丹那盆地・山木遺跡とは異なる。これらが地理的条件の違い、あるいは生業活動に係っているのかは不明である。低地においては、下部ではガマ属・イネ・カヤツリグサ各科よりなる低湿地的環境にあったものと指定される。しかし、種構成が単調であり、安定した低湿地ではなかったであろう。上部の下部においては、コウホネ・オモダカ・ガマなどの抽出植物及び浮葉性のサンショウモが出現、比較的安定した水位のある低湿地であったと推定される。その上部においては、抽出植物が僅ど出現せず、カヤツリグサ科を主とした低湿地であったが、下部ほど水位はなかったであろう。ＳＭ－Ⅱ帯では、スギ属が減少、アカガシ亜属が比較的公立になる。同様の傾向は、山木遺跡においては、その変化は顕著であり、スギ林の人為的破壊を示唆される。ＳＭ－Ⅲ帯では、ニヨウマツ亜属が高率に出現する。関東地方におけるニヨウマツ亜属の多産は、宝永スコリア降灰以降である（辻、1985）。静岡においては、今だ十分検討がなされていないが、比較的新しい現象である可能性がある。これらニヨウマツ亜属の多産は、人類の生業活動に起因するものであろう。低地においては、イネ科が多産し、いわゆる水田雑草と言われる分類群のキカシグサ・ミズワラビ・オオアカウキクサ各属及びサンショウモを伴なうことから、水田耕作を行なっていた可能性は高い。これはNo.1～3の層順が田圃の土とされていることと一致する。一方、アブラナ科・ソバなどの畑作に由来する花粉も出現する。

引　用　文　献

橋屋光孝・東郷正美（1983）　丹那盆地における完新世後半の環境変遷―花粉分析をもとにして―、日本第四紀学会講演要旨集、13、P98～99。

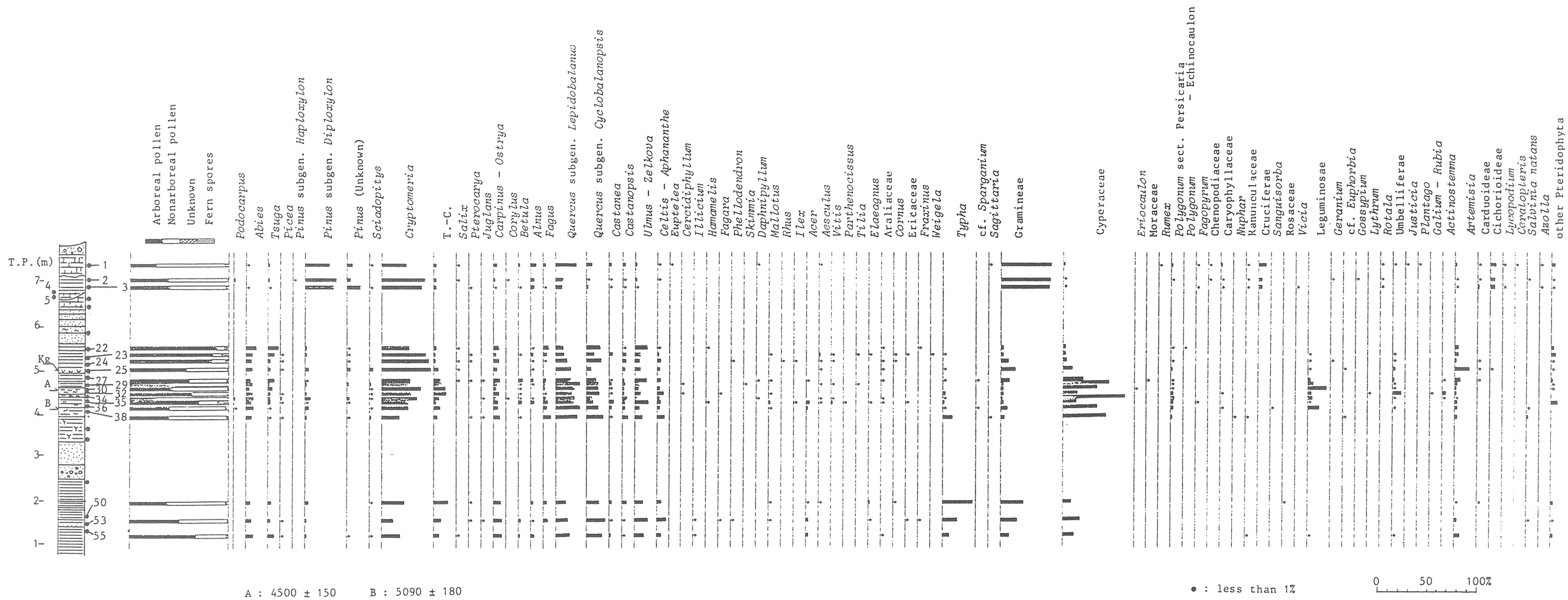
辻　誠一郎（1977）　山木遺跡における花粉分析的検討、韮山町教育委員会編「山木遺跡第4次調査報告書」P64～66。

辻　誠一郎（1985）　関東平野における弥生時代以降の植生史をめぐる諸問題、日本第四世紀学会講演要旨集、15、P128～129。



A : 4500 ± 150　　B : 5090 ± 180

図1　神明原・元宮川遺跡試料採取地点土層模式柱状図



Arboreal pollen
Nonarboreal pollen
Unknown
Fern spores
Podocarpus
Abies
Tsuga
Picea
Pinus subgen. Haploxylon
Pinus subgen. Diploxylon
Pinus (Unknown)
Sciadopitys
Cryptomeria
T.-C.
Salix
Pterocarya
Juglans
Carpinus - Ostrya
Corylus
Betula
Alnus
Fagus
Quercus subgen. Lepidobalanus
Quercus subgen. Cyclobalanopsis
Castanea
Castanopsis
Ulmus - Zelkova
Celtis - Aphananthe
Euptelea
Cercidiphyllum
Illicium
Hamamelis
Fagara
Phellodendron
Skimmia
Daphnipyllum
Mallotus
Rhus
Ilex
Acer
Aesculus
Vitis
Parthenocissus
Tilia
Elaeagnus
Araliaceae
Cornus
Ericaceae
Fraxinus
Weigela
Typha
cf. Sparganium
Sagittaria
Gramineae
Cyperaceae
Eriocaulon
Moraceae
Rumex
Polygonum sect. Persicaria
Polygonum - Echinocaulon
Fagopyrum
Chenopodiaceae
Caryophyllaceae
Nuphar
Ranunculaceae
Cruciferae
Sanguisorba
Rosaceae
Vicia
Leguminosae
Geranium
cf. Euphorbia
Gossypium
Lythrum
Rotala
Umbelliferae
Justicia
Plantago
Galium - Rubia
Actinostemma
Artemisia
Carduoideae
Cichorioideae
Lycopodium
Ceratopteris
Salvinia natans
Azolla
other Pteridophyta
T.P.(m)
7-
4
5
6-
Kg
5-
A
B
4-
3-
2-
1-
1
2
3
22
23
24
25
27
29
30
32
34
35
36
38
50
53
55
A : 4500 ± 150
B : 5090 ± 180
● : less than 1%
0
50
100%

図2　花粉ダイアグラム

表 1　神明原・元宮川遺跡試料花粉分析結果

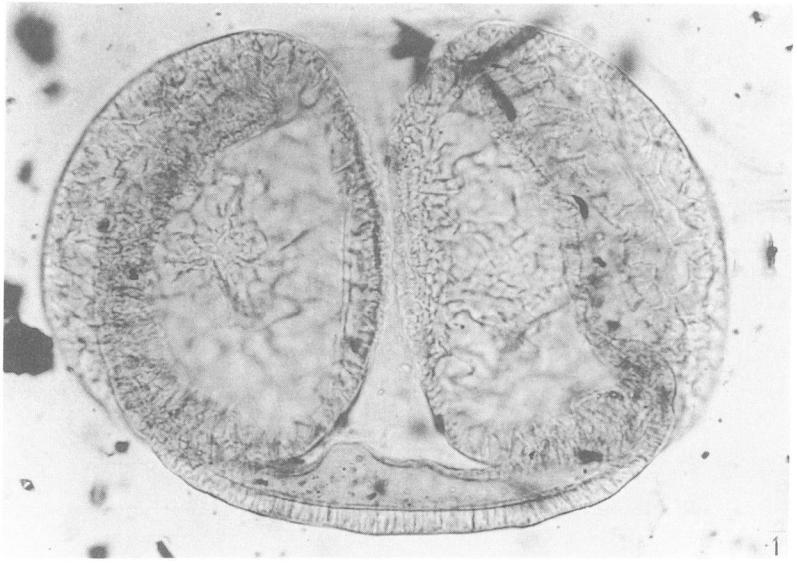
Sample No.	1	2	3	4	5	7	8	17	22	23	24	25	27	29	30	32	34	35	36	38	40	42	48	50	53	55
Podocarpus	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Abies	1	-	2	-	-	-	-	-	14	13	9	12	8	9	5	9	12	9	14	11	5	-	5	7	12	10
Tsuga	2	3	2	-	1	-	-	-	13	14	3	3	12	4	6	3	4	3	2	1	-	-	1	5	5	8
Picea	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	1	2	1	-	1	-	-	2	-	1	1
Pinus subgen. *Haploxylon*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinus subgen. *Diploxylon*	48	63	56	-	-	4	3	1	2	3	-	5	1	2	-	2	9	1	6	3	1	-	-	5	3	2
Pinus (Unknown)	9	7	27	-	1	1	3	-	1	1	1	5	-	2	-	-	3	1	-	1	-	-	-	-	-	1
Sciadopitys	1	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	5	-	2	1	1	1	-	2	3	-	-	-	1	-	1
Cryptomeria	47	86	82	-	2	5	6	-	37	101	93	97	60	45	58	44	59	51	54	39	6	5	8	44	27	25
T.- C.	4	5	4	-	-	-	-	-	3	3	2	8	12	12	16	19	9	3	13	8	1	-	3	27	17	7
Salix	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Pterocarya	-	-	1	-	-	-	1	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	2	-
Juglans	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	2	-
Carpinus - Ostrya	6	3	1	-	1	-	-	-	7	5	9	5	12	5	3	8	3	7	8	14	-	1	4	14	19	11
Corylus	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Betula	2	-	1	-	-	1	-	-	-	2	-	-	8	1	1	1	1	5	-	1	-	-	-	-	4	2
Alnus	9	6	6	-	-	1	-	-	1	4	1	1	4	1	-	-	1	6	-	-	-	-	1	4	1	4
Fagus	3	-	1	-	-	-	-	-	7	7	1	-	5	2	2	1	4	8	7	16	-	-	1	5	9	-
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	42	15	12	-	-	3	1	-	10	19	22	29	31	40	28	24	32	36	52	53	4	-	13	20	29	20
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	10	2	3	-	1	1	-	-	18	15	28	8	20	18	17	19	9	12	22	38	3	-	3	23	42	21
Castanea	3	1	2	-	-	-	-	-	-	7	-	-	1	3	1	1	-	7	4	1	-	1	-	4	1	2
Castanopsis	4	1	1	-	-	1	-	-	1	6	6	4	3	3	2	2	6	3	5	11	2	-	2	7	2	1
Ulmus - Zelkova	2	3	1	-	1	-	1	-	16	12	7	9	23	7	5	7	4	25	8	17	2	-	2	16	32	13
Celtis-Aphananthe	1	1	-	-	-	-	-	-	1	3	5	3	6	-	3	9	4	5	5	16	2	-	-	7	21	5
Eupteleа	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cercidiphyllum	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Illicium	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
Hamamelis	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Fagara	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Phellodendron	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-
Skimmia	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Daphniphyllum	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Mallotus	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	1	-	2	1	-	-	-	-	1	1	-
Rhus	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Ilex	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Acer	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	5	3	-	-	-	-	1	4	3
Aesculus	1	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	1	-	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-
Vitis	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-
Parthenocissus	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Tilia	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Elaeagnus	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	2	1	-
Araliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	1
Cornus	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Ericaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-
Fraxinus	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Weigela	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Typha	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	4	2	3	2	55	-	1	2	146	69	12
cf. *Sparganium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Sagittaria	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Gramineae	373	253	242	1	5	12	5	1	3	6	17	48	28	8	8	6	7	5	32	18	3	-	-	110	76	17
Cyperaceae	8	5	3	-	1	-	-	-	3	4	6	32	73	170	115	34	388	35	170	259	-	-	1	41	80	22
Eriocaulon	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Moraceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rumex	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Polygonum sect. Persicaria-Echino.	10	3	-	-	-	-	1	-	1	-	1	4	2	3	1	6	21	5	10	9	-	-	1	-	-	-
Polygonum	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fagopyrum	5	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Chenopodiaceae	2	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caryophyllaceae	10	2	4	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	5	-	-	-	-	-	-	-
Nuphar	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Thalictrum	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Ranunculaceae	6	4	1	-	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	1
Cruciferae	54	13	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sanguisorba	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Rosaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Vicia	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Leguminosae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	2	8	17	60	7	26	1	57	-	2	1	-	-	-	1
Geranium	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
cf. *Euphorbia*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Gossypium	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Lythrum	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Rotala	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Umbelliferae	1	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	8	5	2	2	19	6	-	5	-	-	-	-	-	-	1
Justicia	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Plantago	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Galium - Rubia	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Actinostemma	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	7	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Artemisia	9	3	2	5	9	4	1	4	4	9	3	48	18	8	4	3	6	5	11	13	2	2	3	4	10	10
Carduoideae	5	2	6	1	-	-	-	-	-	-	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Cichorioideae	34	23	19	2	1	3	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Unknown	4	2	4	-	-	-	1	-	3	7	5	5	5	6	4	3	4	16	13	5	2	-	2	7	1	-
Lycopodium	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ceratopteris	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Salvinia natans	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	8	-	-	-	-	1	-
Azolla	2	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
other Pteridophyta	19	2	5	18	23	15	19	9	3	11	2	1	5	1	1	-	-	15	-	-	1	-	-	10	2	5
Pseudoschizaea	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Arboreal pollen	198	202	203	0	7	17	15	2	135	228	197	198	213	161	148	154	171	199	207	236	28	8	46	196	240	140
Nonarboreal pollen	524	313	294	9	19	22	9	6	12	23	32	147	139	208	191	89	459	55	294	360	7	4	8	303	235	64
Unknown	4	2	4	0	0	0	1	0	3	7	5	5	5	6	4	3	4	16	13	5	2	0	2	7	1	0
Fern spores	23	3	8	18	23	16	19	9	3	11	2	1	5	1	1	0	0	15	1	8	1	0	0	10	3	5
TOTAL	749	520	509	27	49	55	44	17	153	269	236	351	362	376	344	246	634	285	515	609	38	12	56	516	479	209

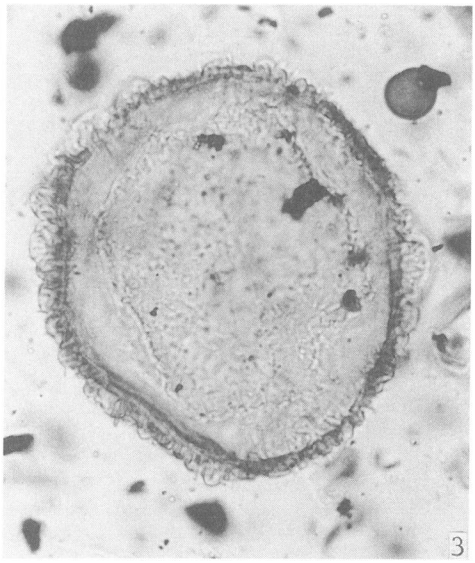
検出花粉・胞子化石名一覧表

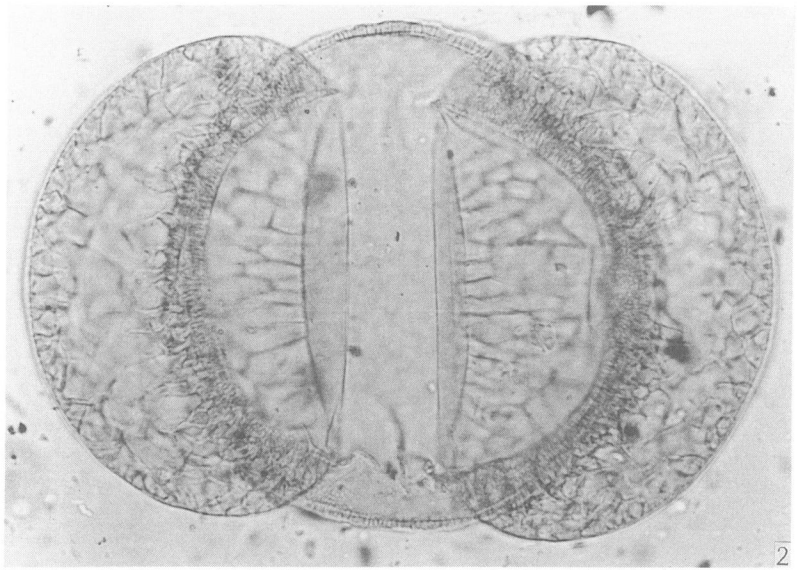
検出花粉・胞子化石名(学名)	和　名
ＡＰ－１　(針葉樹花粉)	
Ginkgo	イチョウ属
Podocarpus	マキ属
Abies	モミ属
Tsuga sieboldii	ツガ
Tsuga diversifolia	コメツガ
Tsuga	ツガ属
Picea	トウヒ属
Pseudotsuga	トガサワラ属
Pinaceae	マツ科
Pinus subgen. *Haploxylon*	マツ属単維管束亜属
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属
Pinus	マツ属
Sciadopitys	コウヤマキ属
Taxodiaceae	スギ科
Cryptomeria	スギ属
T.-C.	イチイ科－ヒノキ科－イヌガヤ科
Ephedra	マオウ属
Metasequoia	メタセコイア属
Sequoia	セコイア属
Dacrydium	リムノキ属
Larix	カラマツ属
ＡＰ－２　(広葉樹花粉)	
Myrica	ヤマモモ属
Juglans	クルミ属
Pterocarya	サワグルミ属
Platycarya	ノグルミ属
Carya	ペカン属
Salix	ヤナギ属
Alnus	ハンノキ属
Betula	カバノキ属
Carpinus - Ostrya	クマシデ属－アサダ属
Corylus	ハシバミ属
Castanea	クリ属
Castanopsis	シイノキ属
Fagus	ブナ属
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ亜属
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属
Aphananthe	ムクノキ属
Celtis	エノキ属
Onagraceae	アカバナ科
Epilobium	アカバナ属
Ulmaceae	ニレ科
Ulmus	ニレ属
Zelkova	ケヤキ属
Lysichiton	ミズバショウ属
Moraceae	クワ科
Viscum	ヤドリギ属
Magnoliaceae	モクレン科
Illicium	シキミ属
Euptelea	フサザクラ属
Nandina	ナンテン属
Akebia	アケビ属
Cercidiphyllum	カツラ属
Theaceae	ツバキ科
Cleyera	サカキ属
Eurya	ヒサカキ属
Hamamelidaceae	マンサク科
Hamanelis	マンサク属
Corylopsis	トサミズキ属
Saxifraga	ユキノシタ属
Rosaceae	バラ科
Prunus	サクラ属
Sorbus	ナナカマド属
Daphniphyllum	ユズリハ属
Ribes	スグリ属
Leguminosae	マメ科
Albizzia	ネムノキ属
Sapium	シラキ属
Mallotus	アカメガシワ属
Fagara	イヌサンショウ属
Phellodendron	キハダ属
Melia	センダン属
Orixa	コクサギ属
Skimmia	ミヤマシキミ属
Rhus	ウルシ属
Acer	カエデ属
Aesculus	トチノキ属
Ilex	モチノキ属
Euonymus	ニシキギ属
Euscaphis	ゴンズイ属
Buxus	ツゲ属
Vitis	ブドウ属
Ampelopsis	ノブドウ属
Parthenocissus	ツタ属
Rhamnaceae	クロウメモドキ科
Tilia	シナノキ属
Actinidia	マタタビ属
Stachyurus	キブシ属
Malvaceae	アオイ科

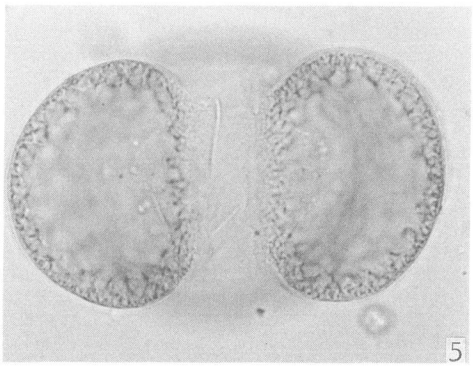
Elaeagnus	グミ属
Thymelaeaceae	ジンチョウゲ科
Lagerstroemia	サルスベリ属
Lythrum	ミソハギ属
Corunus	ミズキ属
Clethra	リョウブ属
Aucuba	アオキ属
Araliaceae	ウコギ科
Ericaceae	ツツジ科
Diospyros	カキ属
Styrax	エゴノキ属
Oleaceae	モクセイ科
Osmanthus	ヒイラギ属
Symplocos	ハイノキ属
Ligustrum	イボタノキ属
Fraxinus	トネリコ属
Trachelospermum	テイカカズラ属
Clerodendron	クサギ属
Lonicera	スイカズラ属
Sambucus	ニワトコ属
Viburnum	ガマズミ属
Weigela	タニウツギ属
Rutaceae	ミカン科
Abelia	ツクバネウツギ属
Liquidambar	フウ属
Illicium	シキミ属
Nyssa	ヌマミズキ属
Zanthoxylum	サンショウ属
Poncirus	カラタチ属
Adodendron	サカキカヅラ属
NAP （草本花粉）	
Humulus	カナムグラ属
Polygonum sect. Persicaria	サナエタデ節
Polygonum sect. Echinocaulon	ウナギツカミ節
Polygonum sect. Bistorta	イブキトラノオ節
Polygonum sect. Reynoutria	イタドリ節
Polygonum sect. Tovara	ミズヒキ節
Ploygonum	タデ属
Fagopyrum	ソバ属
Rumex	ギシギシ属
Parnassia	ウメバチソウ属
Portulaca	スベリヒユ属
Caryophyllaceae	ナデシコ科
Chenopodiaceae	アカザ科
Nelumbo	ハス属
Amaranthaceae	ヒユ科
Thalictrum	カラマツソウ属
Ranunculaceae	キンポウゲ科
Ranunculus	キンポウゲ属
Nymphaeaceae	スイレン科
Nymphaea	スイレン属
Aconitum	トリカブト属
Nuphar	コオホネ属
Euryale	オニバス属
Macleaya	タケニグサ属
Cruciferae	アブラナ科
Drosera	モウセンゴケ
Potentilla	キジムシロ属
Sanguisorba	ワレモコウ属
Rosaceae	バラ科
Leguminosae	マメ科
Acalypha	エノキグサ属
Azukia	アズキ属
Vicia	ソラマメ属
Dunbaria	ヒメクズ属
Geranium	フウロソウ属
Euphorbiaceae	トウダイグサ科
Euphorbia	トウダイグサ属
Polygala	ヒメハギ属
Impatiens	ツリフネソウ属
Corchoropsis	カラスノゴマ属
Malva	ゼニアオイ属
Actinostemma	ゴキヅル属
Campanula	ホタルブクロ属
Trapa	ヒシ属
Lythrum	ミソハギ属
Rotala	キカシグサ属
Epilobium	アカバナ属
Ludwigia	チョウジタデ属
Haloragis	アリノトウグサ属
Myriophullum	フサモ属
Umbelliferae	セリ科
Paederia	ヘクソカズラ属
Utricularia	タヌキモ属
Nymphoides	アサザ属
Galium	ヤエムグラ属
Gentiana	リンドウ属
Montropastrum	ギンリョウソウ属
Rubiaceae	アカネ科
Rubia	アカネ属
Calystegia	ヒルガオ属
Cuscuta	ネナシカズラ属
Labiatae	シソ科
Mosla	ヤマジソ属

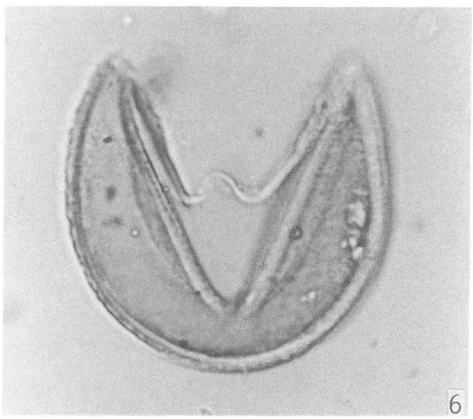
Solanaceae	ナス科
Solanum	ナス属
Justicia	キツネノマゴ属
Sesamum	ゴマ属
Utricularia	タヌキモ属
Plantago	オオバコ属
Ottelia	ミズオオバコ属
Patrinia	オミナエシ属
Scabiosa	マツムシソウ属
Campanulaceae	キキョウ科
Platycodon	キキョウ属
Campanula	ホタルブクロ属
Adenophora	ツリガネニンジン属
Codonopsis	ツルニンジン属
Carduoideae	キク亜科
Artemisia	ヨモギ属
Diaspananthus	クサヤツデ属
Cichorioideae	タンポポ亜科
Xanthium	オナモミ属
Sagittaria	オモダカ属
Caldesia	マルバオモダカ属
Hydrilla	クロモ属
Alisma	サジオモダカ属
Blyxa	スブタ属
Potamogeton	ヒルムシロ属
Liliaceae	ユリ科
Monochoria	ミズアオイ属
Urticaceae	イラクサ科
Iridaceae	アヤメ科
Aneilema	イボクサ属
Commelina	ツユクサ属
Eriocaulon	ホシクサ属
Gramineae	イネ科
Sparganium	ミクリ属
Typha	ガマ属
Cyperaceae	カヤツリグサ科
Zea	トウモロコシ属
Polygalaceae	ヒメハギ科
Polemoniaceae	ハナシノブ科
Menyanthes	ミツガシワ属
Phyllanthus	コミカンソウ属
Gossypium	ワタ属
FP （形態分類花粉）	
Inaperturate pollen	無口型花粉
Monoporate pollen	単孔型花粉
Trizonoporate pollen	三孔型花粉
Trizonocolpate pollen	三溝型花粉
Trizonocolporate pollen	三溝孔型花粉
Polypantoporate pollen	多散孔型花粉
Tetrazonoporate pollen	四孔型花粉
Tetrazonocolpate pollen	四溝型花粉
Tetrazonocolporate pollen	四溝孔型花粉
FS （羊歯類胞子・形態分類胞子）	
Lyclpodiaceae	ヒカゲノカズラ科
Lycopodium	ヒカゲノカズラ属
Selaginellaceae	イワヒバ科
Selaginella	イワヒバ属
Ophioglossum	ハナヤスリ属
Osmundaceae	ゼンマイ科
Osmunda	ゼンマイ属
Lygodium	カニクサ属
Hymenophyllaceae	コケシノブ科
Pteris	イノモトソウ属
Ceratopteris	ミズワラビ属
Polypodiaceae	ウラボシ科
Salvinia natans	サンショウモ
Isoetes	ミズニラ属
Marsilea	デンジソウ属
Azolla	アカウキクサ属
Monolete spore	単条溝型胞子
Trilete spore	三条溝型胞子
その他の微化石	
Pseudoschizaea	淡水生藻類
Botryococcus	緑藻類
Dinoflagellates	渦鞭藻類
Pediastrum	クンショウモ属

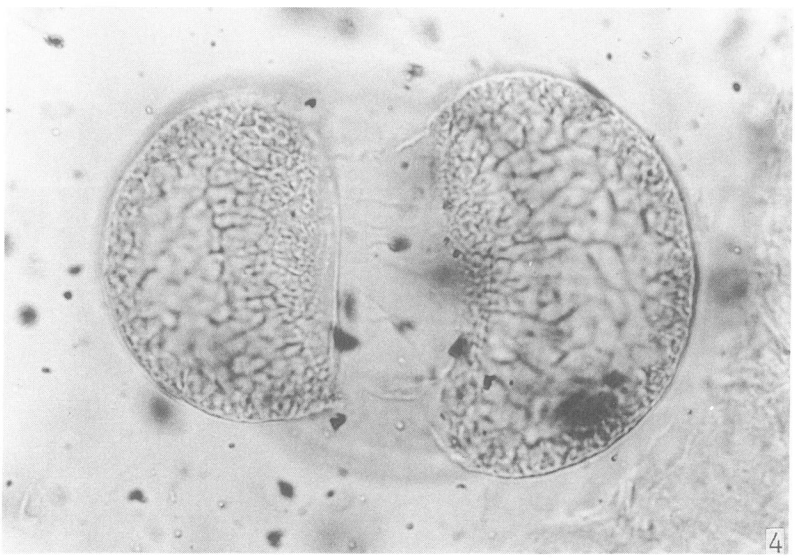

1

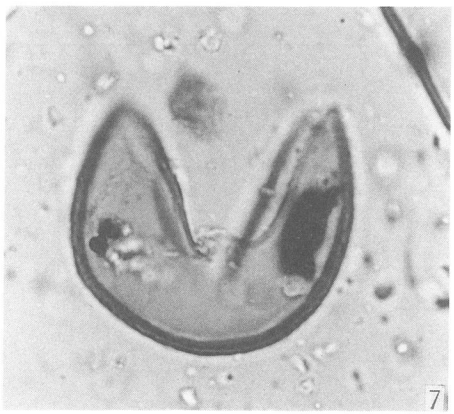

3


2

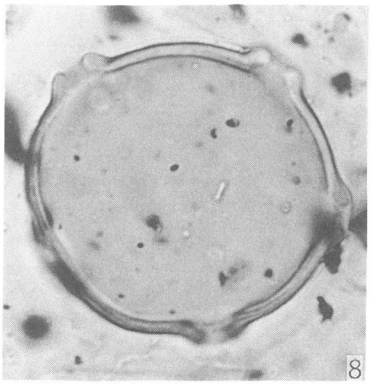

5

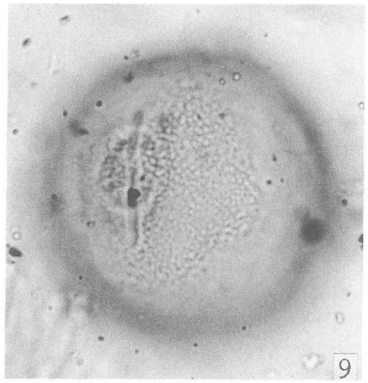

6

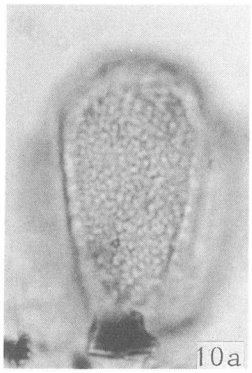

4

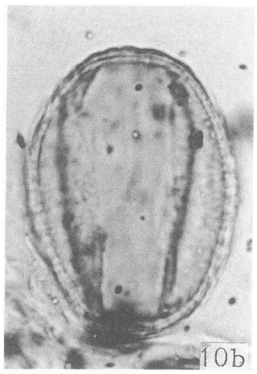

7

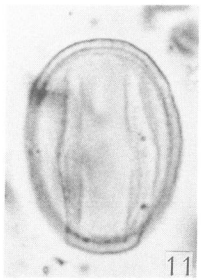
写真番号	花粉化石名	試料番号
1	*Abies*	55
2	*Abies*	53
3	*Tsuga*	50
4	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	50
5	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	2
6	*Cryptomeria*	2
7	*Cryptomeria*	53


8

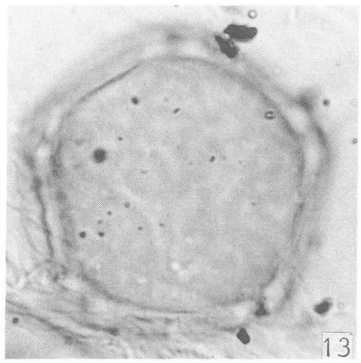

9

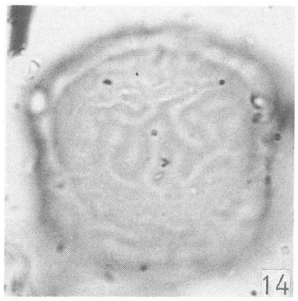

10a

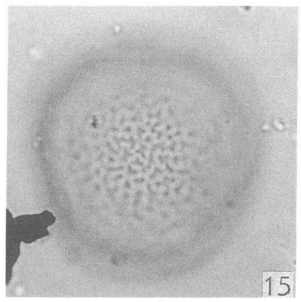

10b

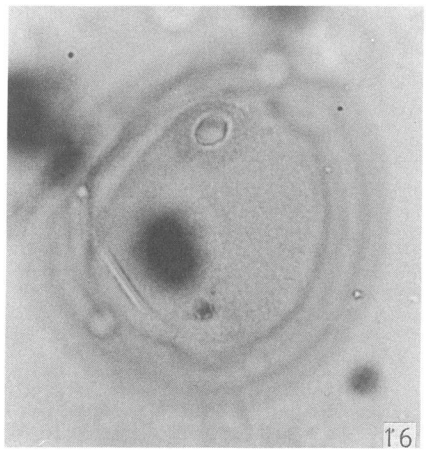

11

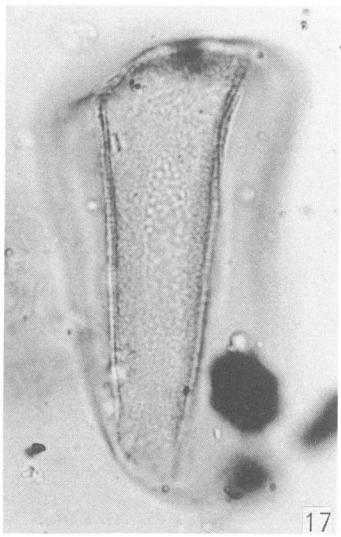
12

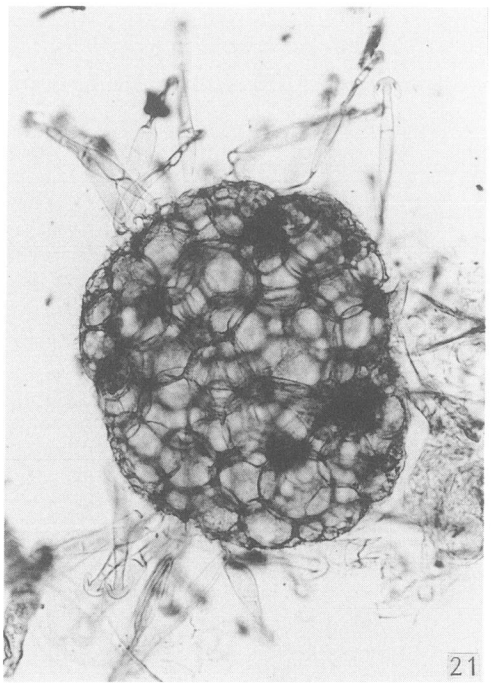

13

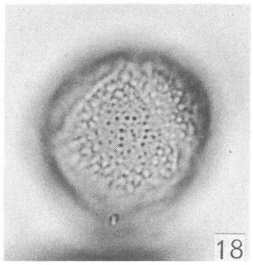

14

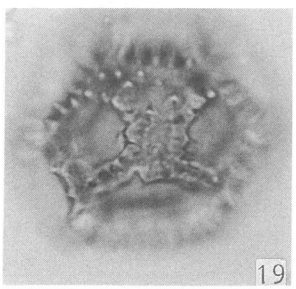

15

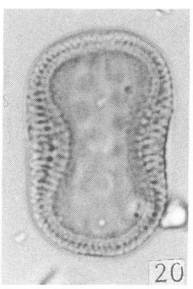

16


17


21


18


19


20

——— (No.21)
——— (No.1-3)
———(No.4-20)
(Mag. scale : ca. 50μm)

写真番号	花粉化石名	試料番号
8	*Carpinus*	36
9	*Fagus*	50
10a	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	50
10b	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	50
11	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	50
12	*Castanea*	23
13	*Zelkova*	50
14	*Zelkova*	53
15	*Typha*	53
16	Gramineae	1
17	Cyperaceae	53
18	Ranunculaceae	2
19	Cichorioideae	2
20	*Justicia*	1
21	*Azolla*	3

おわりに

大谷川（神明原・元宮川遺跡）出土の遺物のどのくらいが紹介できたであろうか。全体の量からすればわずか数パーセントに過ぎないであろう。しかし我々は、本遺跡の主体は祭祀遺物にあるとの認識に立ち、祭祀遺物の紹介とその組み合わせおよび時期の認定に努めてきた。その意味では、本遺跡の一端を示し得たのではないかと考える。

現地調査3年そして資料整理にはいり2年が経過した。その間に多くの方々がこの調査に係わってきた。そのごく一部分を分担した我々の責務は、「これらの方々の認識と判断を汲み取りいかに資料として示すか」ということであろう。我々は恣意的な資料操作を避けるため、資料操作の原点に帰り機械的とも思える操作をくりかえした。そのために膨大な資料のうちのごくわずかしか扱うことが出来ず、また今回資料として提示できたものはさらにその一部でしかない。しかしそれらの制約のなかではあるが、この遺跡の様相の一端を明らかにし得たと信ずる。とともに河の中からの出土という本遺跡の資料の持つ性格とその限界をもあきらかとなった。

さて、この報告書では、多量の祭祀関係遺物のあるものは古墳時代に遡る可能性が強いことをしめした。この当否については、様々な論議があるであろう。木製品と土器・土製品との性格の違いすなわち木は浮き動くということと遺物の一括性についての疑問は様々な人から指摘をうけた。現地調査の担当者は古墳時代に逆る可能性が高いという強い感触を持っているが、遺物整理を分担した我々はとりあえず図面とラベルに従って資料提示を行い、それ以上の検討は加えていない。形態分類と遺物の組み合わせの検討、出土状態の再検討など、それぞれが取り組まなければならない項目は沢山ある。これらの問題については、『大谷川Ⅳ』において改めて検討を加えて見たいと思う。

しかし、一言付言しておくとすれば、同じ浮く性質を持っている木製品同志の組み合わせでは、同じ条件下で浮き動いたものが集まってきていると考えるほうが、異なる時代のものが集まってきたと考えるよりも自然ではないだろうか。木製品の組み合せの中に切り込む余地があるように思える。

今回は遺物の紹介に終始してしまったが、遺物の検討の中で様々な問題が提起された。次年度にはこれらの問題を解決し、本遺跡の様相を解明するよう努力したい。そのために調査に係わった各調査員がそれぞれの視点からテーマを絞り取り組んでいる。その成果がどの位しめせるかまだ未知数ではあるが、さらに努力を続けていきたい。

参　考　文　献

1. 泉　　武　　1982：「人形祭祀の基礎的考察」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷第8冊』奈良県立橿原考古学研究所
2. 小笠原好彦　　1975：「土馬考」『物質文化』25
3. 金子裕之　　1980：「古代の木製模造品」研究論文VI『奈良国立化財研究所学報』38 奈良国立文化財研究所
4. 亀井正道　　1983：「河神信仰の考古学的考察」『坂本太郎博士頌寿記念日本史論集』上巻
5. 〃　　1971：「祭祀遺物―模造品の変遷―」『古代の日本2―風土と生活』
6. 黒崎　直　　1976：「斎串考」『古代研究』10
7. 土肥　考　　1983：「日本古代における犠牲馬」『文化財論叢』
8. 浜松市教育委員会　　1971：『伊場第四次調査月報』4・6
9. 〃　　1977：『伊場遺跡遺構編』
10. 〃　　1978：『伊場遺跡遺物編1』
11. 〃　　1980：『伊場遺跡遺物編2』
12. 〃　　1982：『伊場遺跡遺物編3』
13. 〃　　1987：『伊場遺跡遺物編4』
14. 水野正好　　1983：「馬・馬・馬―その語りの考古学」『奈良大学文化財学報』第2集
15. 向坂鋼二　　1985：「考古資料にみる水辺のまつり」『生活文化史』生活文化史学会
16. 望月董弘　　1973：「神明原遺跡出土の土器」『土師式土器成本編』3
17. 大参義一　　1968：「弥生式土器から土師器へ―東海地方西部の場合―」『名古屋大学文学部研究論集』
18. 安達厚三・木下正史　　1974：「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌60―2』

大 谷 川 Ⅲ

遺構編

巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文
化財発掘調査報告書（神明原・元宮川遺跡）3

昭和63年 3 月30日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印 刷 所　株式会社　三　　創
静岡市中村町166番地の1
ＴＥＬ　（0542）82－4031